第３節　石器・石製品

１　資料の概要

(1)　整理方法

ア　観察表の作成について

すべての定型的な石器・石製品について出土地点・寸法・重量・石材・細分類・破損状況などを一覧表に登載する。実測は遺構出土品を主とし完形または全形をうかがえるもの、特殊なものを中心に実施した。

石器の種類毎に形態・調整・素材等で分類し、図化できない多くの石器についても基礎的なデータを一覧表に提示する。

石器の分類は基本的には多量の石器が出土した中部高地（特に長野県）の縄文時代遺跡の調査報告書［長野県教育委員会 1982］で使用されている分類方法を援用する。なお、本報告書独自の分類基準も併用する。石材鑑定は、［益富寿之助 1965］を参考にし、ルーペを用い肉眼鑑定を行った。また、パリノ・サーヴェイ（株）が実測・トレースしたものについては、石材鑑定も同時に実施した。

イ　計測の方法と目的

（ア）　法量の基本的計測

各個体の基礎データとして、最大長・最大幅・最大厚（15.5㎝未満は 0.1㎜、15.5㎝以上は 1㎜単位）、重量（1200g 未満は 0.1g 単位、1200g 以上 5㎏未満は 10g 単位、5㎏以上は 100g 単位）を計測した。欠損品については残存値を計測し、（　）で記す。計測方法は、［町田勝則 1995・1996］を参考にした。

（イ）　機能部位の計測

機能部値（刃幅・刃角・凹部法量など）、使用痕（微細剥離痕・擦痕・摩耗痕など）を計測した。

(2)　資料の性格

ア　出土状況

遺構出土の遺物は、調査時にプランが検出された遺構に伴うもので、その出土量は全体の 1 割程度であった。グリッド出土の遺物は、谷状低地を利用した廃棄場等の遺物包含層に含まれていたもので、設定さた各グリッド単位で一括に取り上げられている。また、グリッド出土遺物は、調査時に捉えきれなかった遺構に伴うと考えられる遺物や、整理段階で判明し新しく設定した遺構に帰属する遺物も含まれている。

イ　時期

石器の所属時期については、現状では石器自体（形態的・技法的特徴）による時期決定が困難であることから、共伴する土器の時期に帰属するものと考える。

(3)　分類と名称

大分類として製作技法別に押圧剥離による調整痕がみられる小形打製石器、直接打撃のみで調整された大形打製石器、研磨や敲打により調整された磨製石器、研磨痕や敲打痕が観察される礫石器、石製品、その他に区分し、それぞれを細分する。各細分類の名称と定義は下記のとおりである。

ア　小形打製石器

（ア）打製石鏃：矢の先端に装着される鏃と想定されるもの。部分磨製石鏃もここに含む。製品に形状が近く、押圧剥離痕が極度に少ないものを、未成品とした。

（イ）石錐：一部あるいは全体を棒状に加工し、穿孔作業に用いたものと想定できるもの。

（ウ）小形刃器類（スクレーパー類）：剥片の側縁に、側縁の長さの 1/2 以上に連続的な調整があり、定型的な刃部を有するもの。小形石器（石鏃・石錐等）と同石材が用いられる。主に石材により大形刃器類と差別化した。

① 掻器：刃角が急斜度（60 度以上）のもの。

a 先刃形掻器：縦長剥片を素材とし一端部または両端部に外湾刃を有するもの。

b 円形掻器：全周縁に背面から調整が行われたもの。

c 拇指形掻器 / 短形掻器：縦長剥片の両端部に刃部をもち、器長が 3㎝以下のもの。

② 削器：刃角が緩斜度（60 度未満）のもの。

③ 抉入石器：側縁の 1 カ所または数カ所に細部調整によって抉りの刃部が設けられたもの。

（エ）楔形石器：向かい合う 2 つの端部に、打撃によると思われる剥離またはつぶれが認められるもの。剥片素材と石核素材の両方を含む。

（オ）二次加工ある剥片（RF）：細部調整が行われた剥片で、定型的な刃部をもたず、刃部の長さが縁辺の長さの概ね 1/2 未満のもの。

（カ）微細剥離ある剥片（UF・MF）：剥片の鋭利な縁辺を刃部として使用したものと推測されるもので、剥片の縁辺部に擦痕・摩耗痕・微細剥離痕が観察されるもの。

イ　大形打製石器

（ア）打製石斧：大形の打製石器で、主に掘削等の作業が想定できるもの。

（イ）大形刃器類：大形の剥片を素材とし、一辺または複数辺に刃部を形成しているもののうち、他の定型石器に入れ難いもの。大形石器（打製石斧・石匙等）と同石材が用いられる。主に石材により小形刃器類と差別化した。

① 横刃型石器：素材は本来的に一辺の薄いものを用い、その辺に刃部を成している。

② 粗大石匙：靴形石器などと呼ばれるもの。打製石斧の撥型・急角度斜刃に類似する。

③ 尖頭石器：剥離によって尖頭部が形成される。

（ウ）石匙：全体を加工により変形させ、つまみ状の作り出しを持つ精製の剥片石器。

（エ）チョッパー（片面礫器）：自然礫に片面のみ簡単な加工がされ、鋭利な刃部が作成されたもの。石核との区別が困難である。

ウ　磨製石器

（ア）磨製石鏃：矢の先端に装着される鏃と想定され、研磨により整形がなされているもの。

（イ）磨製石斧：伐採・切断の作業が想定できる資料で、研磨により整形が成されているもの。

エ　礫石器

（ア）磨石類：磨る・敲くなどの作業が想定できるもの。凹石・磨石・敲石（または複合）の総称として使う。該当器種の中で磨面が観察されるものが最も多いことから磨石類とした。凹みは最大長 1㎝以上で、最大深さ 2㎜以上のものとし、それより小さいものは敲打痕とした。

（イ）砥石：研ぐ作業が想定できるもの。玉砥石や矢柄研磨器などが含まれる。

（ウ）研磨礫：小形の自然礫の表面に研磨による線条痕がみられるもの。海浜部で採集できるような水磨の進んだ楕円礫も含む。

（エ）石錘：打ち欠きや磨り切りなどによる網掛けが予想される部位を有し、錘としての用途が想定できるもの。
（オ）軽石製品：浮岩（軽石）の内、研磨痕跡や穿孔など、使用ないし加工痕跡が認められるもの。
（カ）石皿：板状の大礫を素材にし、その平坦部分ないし凹部に磨面が認められるもので、擂る・敲く等の作業が想定でき、置かれて使用されていたもの。

オ　石製品
（ア）石棒：一端もしくは両端にふくらみ、または装飾が施され、断面が円形ないし楕円形のもの。
（イ）石剣：一端にふくらみ、または装飾が施され、断面が凸レンズ状ないし菱形のもの。
（ウ）石刀：一端にふくらみ、または装飾が施され、断面が卵型ないし楔形のもの。
（エ）垂飾類:実用的な機能･用途の推定は難しいが、全面を研磨し穿孔を伴う所謂装身具と呼ばれるもの。
（オ）石冠：上面が盛り上がった直方体上に球頭形・斧形・山形などを呈する上部がついた形状のもの。

カ　その他
（ア）異形石器・その他石製品：器種不明のもの。
（イ）石核：剥片の剥離生産を主目的とし、少なくとも 1 回以上の通常剥離による剥離作業が実施されたもの。
（ウ）剥片・砕片：剥片剥離作業において使用を目的として産出されたものを剥片とし、これが剥離される過程において産出された剥片石器類の製作に不適なものを砕片とする。明確な区別は難しいが、便宜上概ね 1㎝以上のものを剥片、それ未満のものを砕片にした。
（エ）原石：剥片剥離に供される原材で、一度も剥離作業が実施されなかったもの、または概ね 1㎝未満の剥離のみ認められるもの。

2　資料の解説

エリ穴遺跡からは 87,543 点の広義の石器・石製品が出土した。内訳は表 1 を参照されたい。

表 1　石器・石製品の出土点数

	大分類	分類	細分類	点数	備考
狭義の石器	小形打製石器 7,657 点	打製石鏃		5,520	有茎鏃 2,064 点、無茎鏃 2,755 点、基部不明 634 点、未成品 67 点
		石錐		278	
		小形刃器類	掻器	281	先刃形 13 点、円形 1 点、拇指形 48 点
			削器	916	
			抉入石器	3	
		楔形石器		25	剥片素材 15 点、石核素材 10 点
		二次加工ある剥片		554	
		微細剥離ある剥片		80	
	大形打製石器 870 点	打製石斧		583	分銅形 34 点、短冊形 179 点、撥形 158 点、その他 36 点、不明 176 点
		大形刃器類	横刃形石器	240	
			粗大石匙	14	
			尖頭石器	6	
			その他	5	
		石匙		21	横型 12 点、斜型 1 点、縦型 5 点、不明 3 点
		チョッパー		1	
	磨製石器 247 点	磨製石鏃		1	弥生時代
		磨製石斧		246	定角式 126 点、乳棒形 85 点、その他 22 点、不明 13 点
	礫石器 991 点	磨石類		655	
		砥石		252	うち玉砥石 35 点
		研磨礫		45	
		石錘		2	
		軽石製品		10	
		石皿		27	
石製品		石棒類	石棒	90	大形 10 点、中形 8 点、小形 71 点、不明 1 点
			石剣・刀	111	石剣 39 点、石刀 65 点、不明 7 点
		垂飾類		28	
		石冠		5	Ⅰ類 0 点、Ⅱ類 1 点、Ⅲ類 3 点、Ⅳ類 1 点
広義の石器	その他	異形石器		18	
		石核		442	
		原石		166	
		剥片・砕片		76,918	
石臼				1	中世
			合計	87,543	

(1)　小形打製石器

ア　打製石鏃（表 2・3、図 105 ～ 119）

5,520 点出土している。これは狭義の石器全 9,765 点の約 57% を占める。直接打撃により石鏃の形を作り出しただけで、押圧剥離が全く行われていないものや十分に行われていないものを未成品とし、67 点を

表 2　石鏃の細分類と点数

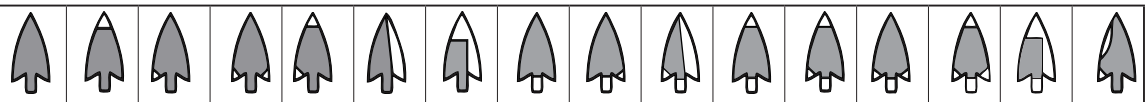
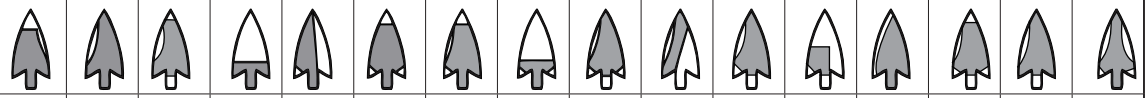
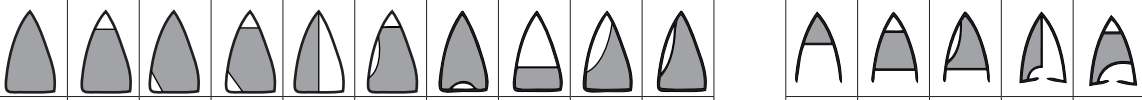
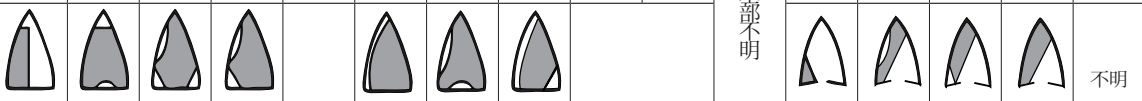
茎形			基部				A 側辺下部			側辺上部		先端		長さ / 幅	
A 有茎	1 鋭い	340 点	有茎	A 凹基（抉りが非常に深い）	1 逆刺が鋭い	A1 42 点	A 鋸歯なし	1 凸部有（五角形）	A1 296点 B1 12点	A	143 点	A 鋭い	739 点		
						A2 42 点									
						A3 11 点									
				B 凹基（抉りが深い）		B1 130 点		2 直線（三角形）	A2 1,313点 B2 107点	B	78 点				
					2 逆刺が鈍い	B2 277 点						B 普通	1,004 点		
						B3 110 点									
	2 円 or 平ら	807 点				C1 139 点		3 内湾	A3 825点 B3 66点	C	16 点				
				C 平基		C2 295 点									
					3 逆刺が円い	C3 168 点									
				D 凸基		D1 123 点		外湾 4 最大幅下端	A4 1,246点 B4 65点	D	41 点				
						D2 222 点									
	不明	917 点				D3 273 点									
B 無茎		2,755 点	無茎	E 凹基（抉りが非常に深い）	1 逆刺が鋭い	E1 1 点	B 鋸歯あり	5 最大幅下方	A5 546点 B5 16点	E	85 点	C 抉り有	113 点	A 1.75 以上 非常に縦長	310 点
						E2 26 点									
						E3 11 点									
				F 凹基（抉りが深い）	2 逆刺が鈍い	F1 49 点		6 最大幅上方	A6 23点 B6 0点	F	21 点	D 鈍い	955 点	B 1.01 ～ 1.74 縦長	977 点
						F2 102 点									
						F3 52 点									
				G 凹基（抉りが浅い）	3 逆刺が円い	G1 313 点		7 極端に外湾	A7 18点 B7 1点	G	169 点				
						G2 747 点									
						G3 490 点									
				H 平基		293 点		8 上部内湾 下部外湾	A8 47点 B8 0点	H	4 点	E 円い	262 点	C 0.86 ～ 1.00 中間	195 点
				I 凸基	1 円基	225 点									
					2 尖基	64 点								D 0.85 以下 正三角形状	24 点
C 未成品		67 点	未成品	有茎	凹基	1 点		9 片側直線 / 外湾 もう片側内湾	A9 136点 B9 7点	I	3 点				
					平基	2 点								E 不明 ＋ 未成品	4,014 点
					凸基	8 点		C 複合	14 点	無 ＋ 未成品	4,960 点	F 平ら	88 点		
				無茎	凹基	16 点									
					平基	19 点									
					凸基	21 点		D 不明 ＋ 未成品	782 点			G 不明 ＋ 未成品	2,359 点		
D 不明		634 点	複合			18 点									
			不明			1,230 点									

数える。概ね 8 割が黒曜石製であり、次いでチャート製、下呂石製が多く見られる。細分類については表 2・3 を参照されたい。

形状分類から、有茎鏃と無茎鏃の点数の比率は 3：4 程度である。基部をみると、有茎鏃と無茎鏃ともに抉りが非常に深い凹基の点数は少ないのが特徴としてあげられる。無茎鏃では、抉りの浅い凹基が大部分を占める。未成品に関しては、8 割以上が無茎鏃の形で作られている。また、尖頭部先端の形状についての観察では、先端が平らになっている F 類が 88 点確認できた。その多くが、意図的に平らにしたものではなく、No.42 や No.61、No.121、No.288、No.470 などのように基部からの加撃で先端部まで大きく剥離し、その後に尖頭部の調整を行っていないものである。石鏃が狩猟具であるとすると、これらは鏃としての機能を果たせていないと考えられ、失敗品とも言うべきものであろうか。同じように片側縁からの加撃で大きく剥離し反対側の逆刺が消滅しているもの（No.474 や No.530 など）も少なからず見られる。

石鏃の破損状況を細かく分類し、表 3 にまとめた。全体の 1/4 程度は完形品であった。破損状況では、

表 3　石鏃破損状態の分類と点数　（※白抜き部分が欠損）

有茎	破損個所																
	分類記号	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	A10	A11	A12	A13	A14	A15	A16
	点数	489	252	116	25	106	10	18	206	131	2	231	136	49	65	24	22
	破損個所																
	分類記号	A17	A18	A19	A20	A21	A22	A23	A24	A25	A26	A27	A28	A29	A30	A31	A32
	点数	17	4	8	90	6	18	2	15	3	0	6	5	1	2	4	1
無茎凹基	破損個所																
	分類記号	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8	B9	B10	B11	B12	B13	B14	B15	B16
	点数	679	291	402	133	290	13	5	12	11	136	14	21	118	11	2	12
	破損個所																
	分類記号	B17	B18	B19	B20	B21											
	点数	23	3	2	18	4											
無茎平基・凸基	破損個所											茎・基部不明					
	分類記号	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10		D1	D2	D3	D4	D5
	点数	310	91	59	14	10	1	4	33	8	5		360	150	5	5	17
	破損個所																不明
	分類記号	C11	C12	C13	C14	C15	C16	C17	C18				D6	D7	D8	D9	
	点数	7	4	1	4	5	6	1	1				33	0	9	41	5

尖頭部先端を含む欠けが特に多く見られるが、逆刺部や茎部など小さい欠けが特に目立つ。破損は使用によるものが想定できるが、特に身の薄い部分であり、廃棄から出土に至るまでに破損した可能性も考えられる。概して、使用による破損なのか製作時の破損なのか、意図的な割れなのか判別が困難であった。

部分磨製石鏃は 2 点出土している。No443 と No.584 は、どちらも黒曜石製の無茎鏃で片面の最大厚部分にのみ研磨痕が観察できる。同じような類例が縄文時代後期後葉から晩期前葉の宮田村田中下遺跡で多く確認できる［川添和暁 2008］。No.443 の出土グリッドは S0W9 で、廃棄場 E1 に位置する。最大厚部分や先端部側を中心に付着物を伴うものが 5 点出土している。No.113 と No.165、No.475 の付着物はアスファルトまたはタールと考えられる。また、縄文晩期に特有の形態である飛行機鏃や五角形鏃なども数多く出土している。

遺構からの出土は全体の 1 割ほどで、532 点を数える。住居跡を中心とした遺構別分布やグリッド別分布状況は本節の 3 で詳しく述べる。遺構については、佐野 1a ～ 2 式を主体とする 13 号住居や 21 号住居、土坑 200 等が特に目立つ。グリッド出土では、廃棄場 E1 と E2 からの出土が多く、N3W12 と S0W18 のグリッドからは 150 点以上の出土が確認できる。

イ　石錐（表 4、図 120・121）

合計 278 点出土した。石鏃とは異なりチャート製のものが全体の 6 割程度を占める。黒曜石製のものは 2 割ほど見られるが、錐という機能上折れにくく硬い石材が選択されたものと考えられる。また、チャートと黒曜石の他に珪質頁岩も比較的多く使われている。

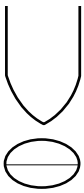
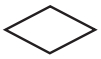
平面形状で分類したところ、つまみ部が明瞭なもの（A 類）が 116 点と最も多く見られる。錐部断面形では、菱形（C 類）と柳葉形（A 類）が多くあるのは、錐部が両面加工で作出されていることが多いためと考えられる。

形状観察とともに錐部の使用痕についても観察を実施した。微細剥離や摩滅等の使用痕が観察されるものが全体の 4 割近くある。また、使用痕が見られないものの中に、錐部が欠損しているものが 66 点あり、出土している製品の多くが使用されていたものと推定される。錐部のサイズをみると、その長さは 3.0㎜から 47.6㎜まであり平均値は 16.2㎜、その幅、つまり穿孔の口径は 3.7㎜から 45.0㎜で平均値は 8.2㎜である。

特殊品として、錐部を複数持つ平面形 E・F 類が 4 点出土しており、総じて丁寧に押圧剥離で仕上げ加工がなされている。No.633 はその典型である。平面形 A 類のうちつまみ部が十字状を呈しているもの（No.595・No.596、No.639）も見られ、E・F 類と同様に丁寧な仕上げ加工が観察される。また、棒状の平面形を呈し、全面磨製によって仕上げられているものが含まれている（No.635）。

遺構出土の石錐は 39 点ある。土坑 268 で 3 点、次いで 13 号住居と 19 号住居、21 号住居、土坑 308、土坑 390、土坑 609 でそれぞれ 2 点が出土している。グリッドで取り上げたものの中では、廃棄場 E が多く、S0W12 ～ S0W18 の密度が濃い傾向にある。

表 4　石錐の細分類と点数

平面形			錐部断面形			錐部先端形			加工の種類と部位				使用痕		破損状況	
A つまみ部を有する		116点	A 柳葉形		69点	A 稜線を有する		142点	A 両面加工	1 錐部のみ	A 56点		A 錐部先端および稜線に刃こぼれ痕（微細剥離痕）	45点	A 完形	126点
											A 1 9点					
											A 2 83点		B 錐部に磨滅痕および錐部に対して直角方向の線条痕	34点	B 錐部の先端	51点
										2 錐部とわずかに基部	A 3 112点					
B つまみ部は無し、平面形が逆三角形状		32点	B 円形		11点				B 片面加工		B 2点		C 錐部に磨滅痕（線条痕は確認できない）	8点	C つまみの一部	15点
C つまみ部は無し、平面形が棒状		50点	C 四角形		98点						B 1 5点					
D 平面形が棒状で、中央に張り出し有り		24点	D 三角形		48点	B 点状		37点			B 2 6点		D 基部に（不定方向）の擦痕	11点	D 錐部全体または大きく	31点
E 錐部が 2 ～ 3 つあり、T 字状		1点	E 台形		8点					3 全周	B 3 2点		E 不明確もしくは無し	91点	E つまみ部全体または大きく	38点
F 錐部が 2 つあり、L 字状		3点							C 不明			3点	F 複合	6点	F 複合	17点
G 不明		52点	F 複合		7点	F 複合		7点					E 不明	83点		
			G 不明		37点	G 不明		92点								

ウ　小形刃器類（表 5、図 122 ～ 125）

合計 1,200 点出土した。出土点数としては、石鏃に次いで多いことになる。刃部の形態によって削器、掻器、抉入石器に分類し、それぞれ 916 点、281 点、3 点がある。使用石材は、黒曜石が最も多く 7 割以上を占め、次いでチャートが多い。頁岩や砂岩など大形打製石器に使用される石材の中で、完形のサイズが小形であり、他の小形刃器類と形状が似ているものも、この器種に含めて扱った。

削器は、小形刃器類の大部分を占める。9 割近くが両面加工で、そのほとんどが 2 縁辺以上に刃部を有する。刃部の平面形は、外湾するものや直刃のものなど複合するケースが多く、特に決まった傾向は見られない。また、刃部の長さは 8.3㎜から 97.9㎜まであり、その平均値は 26.8㎜である。

掻器は、さらに刃部の加工や素材の形態により先刃形掻器が 13 点と円形掻器が 1 点、拇指形掻器が 48 点含まれる。素材は縦長剥片と横長剥片で出土点数に大きな差は見られない。刃部の加工方法については、削器と似たような傾向である。また、刃部の長さは 11.7㎜から 68.2㎜まであり、その平均値は 26.6㎜でサイズ的には削器とほぼ変わらないが、幅は小さくなる。破損状況をみると完形品が 239 点あり、掻器の中では 8 割以上占め、完形品が 5 割ほどしかない削器との差が表れた。

抉入石器は、黒曜石製が 2 点とチャート製が 1 点ある。いずれも縦長剥片を素材としており、うち 2 点は背面からの片面加工であった。

出土遺構では、縄文中期中葉を主体とする 15 号住居や、後期中葉を主体とする 18 号・19 号住居、晩期前葉を主体とする 13 号住居で比較的多く出土しており、時期による出土数に差は見られない。19 号住居は最多で 12 点の出土があり、うち 10 点は削器であった。グリッド出土別にみると、全体の 1/4 以上が廃棄場から出土している。特に、N3W9、N3W12、S6W27 で 30 点前後と突出して多く出土している。

表 5　小形刃器類の細分類と点数

素材		加工面		加工部位		刃部形態		刃部の抉り		刃角		破損状況		
縦長剥片	418 点	片面加工 - 腹面から	102 点	1 側縁	53 点	直刃	60 点	無し	1,185 点	60° 未満	918 点	A	完形	906 点
												B	片側	34 点
横長剥片	273 点			2 側縁	119 点	外湾刃	309 点	1 箇所	14 点			C	上半	41 点
		片面加工 - 背面から	52 点	末端	9 点							D	下半	23 点
不定形	224 点			打面部	17 点	内湾刃	25 点	2 箇所	1 点	60° 以上	282 点	E	1 側縁	49 点
				末端・打面部	58 点							F	2 側縁	2 点
不明	285 点	両面加工	1,046 点	複合	593 点	複合	806 点					G	末端	32 点
				全周	351 点							H	打面部	13 点
												I	不明	100 点

エ　楔形石器（表 6、図 126）

合計 25 点出土し、すべて黒曜石製である。剥片素材 10 点と核素材 15 点がある。上下端にのみ剥離痕・ツブレが見られるものが大半を占めるが、上下から軸を 90°変えて、作業した個体（No.726、No.731、No.733、No.749）も 5 点確認できる。

表 6　楔形石器の細分類と点数

素材		剥離方向		つぶれ位置		平面形		横断面		破損状況		
剥片	10 点	上下端	17 点	上縁	3 点	方形	13 点	塊状	6 点	A	上縁	0 点
		上下端と 1 側辺	3 点	下縁	10 点	台形	10 点	平状	15 点	B	下縁	0 点
核	15 点	上下端と 2 側辺	5 点	上下縁	7 点	円形	2 点	角状	2 点	C	1 側縁	0 点
				上下縁と側縁	5 点					D	2 側縁	0 点
										E	完形	25 点

オ　二次加工ある剥片（ＲＦ）（表 7）

合計 554 点出土した。全体的な傾向としては、両面加工で 2 縁辺以上に加工が見られるものが特に目立つ。また、黒曜石製が 425 点（約 77％）ある。破損しているものは少なく、8 割以上が完形品である。出土地点をみると特に廃棄場である谷状低地から多く出土している。

表 7　二次加工ある剥片の細分類と点数

素材		加工面		加工部位		破損状況	
縦長剥片	200 点	片面加工 - 腹面から	107 点	1 側縁	118 点	A　完形	439 点
				2 側縁	119 点	B　片側	12 点
横長剥片	150 点			末端縁	22 点	C　上半	16 点
		片面加工 - 背面から	62 点	打面縁	23 点	D　下半	16 点
不定形	114 点			複合	253 点	E　1 側縁	30 点
				全周	19 点	F　2 側縁	5 点
不明	90 点	両面加工	385 点			G　末端	11 点
						H　打面部	2 点
						複合	23 点

カ　微細剥離ある剥片（BF・UF）（表 8）

合計 80 点が出土している。微細剥離痕は使用痕であると考えられる。廃棄時または出土後の保管段階でできた微細剥離痕も少なからず含まれていると考えられる。整理時に、新しい微細剥離と解ったものについては剥片としてカウントした。

黒曜石製のものが全体の 7 割以上を占める。縦長剥片を素材としているものが半数以上あり、単縁辺より複数縁辺に微細剥離痕を有するものが多く確認できる。また、大多数は完形の状態で出土し、破損品または破損が不明瞭のものはわずか 10 点のみである。出土地点で一番多いのは谷状低地からで、全体の約 1/4 である。

表 8　微細剥離ある剥片の細分類と点数

<table>
<tr><th colspan="2">素材</th><th colspan="2">微細剥離痕位置</th><th colspan="3">自然面</th><th colspan="3">破損状況</th></tr>
<tr><td rowspan="2">縦長剥片</td><td rowspan="2">47 点</td><td>打面縁</td><td>2 点</td><td rowspan="2">大</td><td rowspan="2">片面 1/2 以上</td><td rowspan="2">13 点</td><td>A</td><td>完形</td><td>71 点</td></tr>
<tr><td>末端縁</td><td>8 点</td><td>B</td><td>片側欠</td><td>1 点</td></tr>
<tr><td rowspan="2">横長剥片</td><td rowspan="2">16 点</td><td>側縁</td><td>23 点</td><td rowspan="2">小</td><td rowspan="2">片面 1/2 未満</td><td rowspan="2">5 点</td><td>C</td><td>上半欠</td><td>4 点</td></tr>
<tr><td>全辺</td><td>2 点</td><td>D</td><td>下半欠</td><td>—</td></tr>
<tr><td rowspan="2">不定</td><td rowspan="2">15 点</td><td>複合</td><td>45 点</td><td rowspan="2">無</td><td rowspan="2">無し</td><td rowspan="2">62 点</td><td>E</td><td>1 側縁欠</td><td>2 点</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2"></td><td>F</td><td>2 側縁欠</td><td>—</td></tr>
<tr><td rowspan="2">不明</td><td rowspan="2">2 点</td><td colspan="3" rowspan="2"></td><td>G</td><td>末端欠</td><td>2 点</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td></tr>
</table>

(2)　大形打製石器

ア　打製石斧（表 9、図 127 ～ 134）

合計 583 点が出土している。側縁形状による分類の中では、短冊形と撥形が特に多く見られ、それぞれ 179 点、158 点が出土している。分銅形の出土点数は少なく、34 点である。

使用石材はホルンフェルスと頁岩が圧倒的に多く、合わせて全体の 3/4 を占める。ホルンフェルスは砂岩等の堆積岩由来の変成岩である。本遺跡の東側に位置する高ボッチ周辺や、松本盆地南部の山麓沿いに砂岩や頁岩などの堆積岩が広く分布しており、在地の石材を使用していると考えられる。側縁形の違いにより使用される石材に大きな違いは見られないが、A 類の分銅形に関しては使用される石材の種類が短冊形と撥形より少なく、粘板岩や緑色岩、緑色片岩などは使用されていない。

自然面が確認できる個体は 521 点あり、全体の 9 割近くにのぼる。表裏面に自然面が残るものは 19 点と少なく、礫塊より大形剥片を素材にしているものが多いためである。

側縁形別に長さ・幅・重量を比較してみた。完形のもののみを対象として平均値を計算した。A 類の平均値は、長さ 105.8㎜、幅 56.5㎜、重量 150.8g である。B 類は、長さ 106.4㎜、幅 50.6㎜、重量 126.9g で

表９　打製石斧の細分類と点数

刃部			側縁形					反り			自然面残存場所		使用痕		破損状況		
A 直刃		36点	A 分銅形	1	抉り深い（最大幅 / 最小幅≧ 1.5）		6点	A 無		427点	A1 a 主面 1/3 以上	160点	A 擦痕・線条痕	1 刃面 2 刃縁 3 胴部 4 側縁 5 基面 6 頭部 7 片刃縁端 8 両刃縁端	A 完形		273点
				2	抉り浅い		22点	B 全体が反る		35点	A2 a 主面 1/3 未満	63点			B 刃部一部		13点
B1 円刃（緩い）		75点		3	長さと幅が上下不均等		6点	C 刃部のみ反る		4点	B b 主面	5点	B 微細剥離痕		C 刃部		44点
			B 短冊形	1	胴膨れ状の側縁		33点	D S 字状に反る		2点	C 両主面	19点			D 基部一部		5点
B2 円刃（急）		134点		2	側縁の両方が平行		146点	E 不明		115点	D 頭部	42点	C 摩滅痕		E 基部		37点
			C 撥形	1	最大と最小幅が小		107点	a 主面 b 主面			E 側面	18点			F 刃部と基部		32点
C1 斜刃（緩い）		86点		2	最大と最小幅が大		51点				F 複合	13点	A1 6点 A2 1点 A3 3点 A4 1点 A5 1点 A8 1点 B2 15点 B4 2点 B7 1点 B8 1点 C1 2点 C2 54点 C4 24点 C5 1点 C7 46点 C8 29点 複合 30点 不明 365点		上半		65点
			D その他	1	棒状		15点				G 無	201点			H 下半		100点
C2 斜刃（急）		44点		2	円盤状		14点				H 不明	62点			I 片側辺		3点
				3	箆状		7点								J 刃部と片側辺		3点
D 尖刃		16点	E 不明				176点								K 基部と片側辺		5点
															L		2点
E 不明		192点													M 不明		1点

ある。Ｃ類は、長さ 101.4㎜、幅 58.0㎜、重量 126.3g である。Ｃ類は他２つより長さが短めで、Ｂ類は幅が短めという傾向はあるが、三者とも大きな違いは見られなかった。当初、側縁形の違いで素材となる石材のサイズに違いが表れると予想したが、違いは見られなかった。重量に関しては、Ａ類が他Ｂ・Ｃ類より概ね２割増しであることがわかった。

使用痕が観察されるものは、全体の約４割ある。そのうち刃部（刃面と刃縁）に使用痕が見られるものは 162 点、柄に固定する際に生じたと考えられる使用痕が見られるものは 39 点ある。使用痕は線条痕や刃こぼれによる微細剥離が観察されるものは少なく、多くが摩滅し丸みを帯びている。

破損状況の分類では、半数程が破損した状況で出土している。上半または下半が欠損しているもの（G・H 類）が特に多く目立つ。

出土量の比較的多い遺構は、9 点出土した２号住居、6 点出土した４号住居、5 点出土した 13 号住居である。２号住居と４号住居は共伴土器から中期に帰属するものが多いと判断する。13 号住居は、共伴土器から晩期初頭から中葉と考えられ、短冊形が３点と形状不明のものが２点出土している。分銅形については中期

が主体となる遺構に出土が集中している。

廃棄場での打製石斧の出土状況をみると、E1 で 60 点、E2 で 27 点、M1 で 8 点、M2 で 22 点、Wで 8 点の出土が見られる。さらに、側縁形別では、分銅形は廃棄場 E1 でしか出土が見られない。廃棄場 E とM では短冊形の出土量が撥形より優勢になるが、廃棄場Wでは逆転する。共伴した土器類の出土状況から分銅形は晩期前葉には消滅したが、一方、短冊形と撥形はエリ穴遺跡の存続した時期を通して使われ続けた可能性が高い。

イ　大形刃器類（表 10、図 135 ～ 137）

合計 265 点が出土している。第 3 節 1（3）でも説明したとおり、大形打製石器で用いられている石材を使い、直接打撃により刃部が形成されているもので、打製石斧と石匙以外をまとめて大形刃器類とした。刃部の位置や平面形状からさらに横刃形石器と粗大石匙、尖頭石器、その他に細分類でき、それぞれ 240 点、14 点、6 点、5 点が出土している。

剥片の素材別では、縦長剥片と横長剥片はそれぞれ 81 点と 100 点でそれほど差はないため、剥片産出方法に特定の意図はなかったと考えられる。自然面を有するものが 7 割以上と打製石斧と同様に多く見られる。剥片刃部の加工について、片面加工と両面加工がおおよそ半々で出土し、9 割近くが 60°未満の刃角であった。

石材については、打製石斧と同じような傾向である。ホルンフェルスが主体で、頁岩や砂岩などの堆積岩が多く使われる。

出土遺構をみると、中期中葉を主体とする 16 号住居と 2 号住居からそれぞれ 6 点と 5 点でまとまって出土していることがわかる。廃棄場での出土は、廃棄場 E と廃棄場M・Wでそれぞれ 21 点ずつの出土で、その量に差は見られなかった。

表 10　大形打製刃器類の細分類と点数

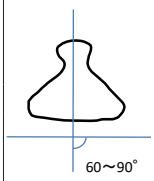
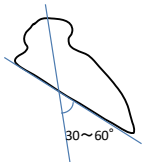
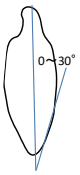
素材		加工面		平面形		刃数		刃角		横刃形 背縁形		横刃形 刃縁形		自然面の有無		使用痕		破損状況	
縦長剥片	81点	片面加工	128点	A 長方形	39点	1	210点	0～29°	65点	A 直線	56点	A 直線	65点	有	201点	A 線条痕	2点	A 完形	217点
横長剥片	100点			B 方形	2点					B 緩やかに外湾	99点								
不定形	44点			C 台形・三角形	55点	2	49点	30～59°	169点			B 外湾	182点			B 微細剥離痕	4点	B 1/3 以下	38点
石核	6点	両面加工	137点	D 円形・楕円形	45点					C 急に外湾（三角形状）	69点	C 内湾	15点	無	62点	C 磨滅痕	19点		
原石	1点			E 半円形	14点	3	5点	60～90°	31点			D 複合	1点			D 複合	1点	C 1/2 程度	7点
不明	33点			F 不定形	78点					D 内湾	26点								
				G 不明	32点	4	1点			E 不明	15点	E 不明	2点	不明	2点	E 無し・不明	239点	D 2/3 以上	3点

ウ　石匙（表 11、図 138 ～ 140）

合計 21 点が出土している。出土量は多くはないが、細分類をした結果、本遺跡の傾向が表れた。平面形が横型で、打面部に明瞭なつまみ部を有し、刃部平面形が直刃または外湾するものが主流である。

石材は、ホルンフェルス製が最も多く、次いでチャート、頁岩がある。チャートは松本盆地南西部の梓川河岸段丘上の広範囲に多く見られる。

表 11　石匙の細分類と点数

平面形			刃部形状		刃部の加工		刃部数			つまみ部形状		つまみ部の位置		使用痕			破損状況	
横型 刃線が茎の主軸に対してほぼ直行するもの（交差角＜ 90°）		12 点	直刃	6 点	両面加工	14 点	1 辺	14 点		A 身部の肩からなだらかなカーブで突き出す、いわゆるつまみらしいつまみ	14 点	末端部	1 点	A 刃部	1 微細剥離痕	A1 1 点	A 完形	10 点
			外湾（急）	5 点			2 辺	5 点				打面部	9 点			A2 6 点	B 刃部	2 点
斜型 刃線が茎の主軸に対して斜めのもの（交差角＜ 60°）		1 点	外湾（緩）	7 点						B 左右にピッチングによる抉り込みを入れただけのしっかりした太いつまみ	3 点			B 胴部	2 摩耗痕	C2 2 点	C 刃部の一部	6 点
			内湾（急）	0 点	片面加工	5 点	不明	2 点				側面	4 点			C2・C3 1 点	D つまみ部	0 点
縦型 刃線が茎の主軸に対してほぼ平行するもの（交差角＜ 30°）		5 点	内湾（緩）	0 点						C 丸く小さなつまみ	3 点			C つまみ部	3 線条痕		E 茎部の一部	0 点
																	F 片側半分	2 点
不明		3 点	不明	3 点	不明	2 点				D 不明	1 点	不明	7 点			不明 11 点	C・D	1 点

エ　チョッパー

自然礫を素材とし、簡単な片面加工を施しており、刃部を形成している意図がうかがえるものをチョッパーとし、1 点出土している。帰属時期は不明である。紙面の都合上、表のみの掲載にとどめた。

(3)　磨製石器

ア　磨製石鏃（弥生時代）（図 140）

1 点出土した。弥生時代に帰属するものと考えられる。分類方法は打製石鏃に倣う。No.917 は、粘板岩性の無茎凹基で、穿孔が中央下寄りにあり、中部高地でよく見られる形態である［関沢 聡 1990］。出土地点は N12W9 である。

イ　磨製石斧（表 12、図 93、141 ～ 143）

合計 246 点が出土している。遺構から出土したものを中心に 40 点を図示した。胴部断面形による分類では、長方形を呈するいわゆる定角式（A･B 類）は 126 点が出土し、85 点出土した断面が円形の乳棒形（C 類）より多く見られた。また、断面が柳葉形（D 類）も 17 点含まれている。これらは、No.928、No.939、

No.953 のように二次加工が残り、局部のみに研磨されているものが多く見られる。

遺存状態が比較的よく平面形が把握できるものは 166 点あり、うち最大幅が下方または下端にある形状のものが大半を占め、6 割以上にのぼる。刃部断面形では、片刃 40 点、両刃が 76 点と両刃のものが数では優勢となる。さらに、両刃のうちほとんどが両凸刃の形状である。

完形の状態で出土したものは 2 割程度しかなく、大部分は破損している。破損の状況をみると、刃部全体が欠損しているもの（C・F・H・J 類）が 113 点と破損品の半分以上を数える。

遺構からの出土品は 43 点あり、後期中葉を主体とする 19 号住居と 18 号住居からそれぞれ 4 点と 3 点が出土している。また、グリッド出土では、廃棄場が多く、廃棄場ＥからＷまで万遍なく認められる。

表 12　磨製石斧の細分類と点数

胴部断面形		胴部平面形		刃部断面形		刃部平面形		基部平面形		自然面残存箇所		研磨箇所		研磨の強弱		使用痕		破損状況	
A 長方形（扁平）幅 / 厚≧ 2.0	76 点	A 対称	1 最大幅上端	A 片刃	1 凹凸	A 直刃	12 点	A 平基	47 点	A 片主面胴部	6 点	A 全面	104 点	強	142 点	A 擦痕・線条痕	1 刃面	A 完形	55 点
			2 最大幅中央		2 長平短平					B 両主面胴部	4 点	B 下半	5 点				2 刃縁	B 刃部一部	4 点
			3 最大幅下方		3 弱平強平	B1 円刃（緩い）	43 点	B 円基	89 点	C 頭部	0 点	C 刃部	7 点	弱	88 点	B 微細剥離痕	3 胴部	C 刃部	41 点
B 長方形 幅 / 厚 <2.0	50 点	B 非対称	4 最大幅下端		4 弱平強凸					D 側面	2 点	D 基部以外	7 点				4 側縁	D 基部一部	2 点
			5 両側辺平行		5 弱凸強凸	B2 円刃（急）	27 点	C 尖基	25 点	E 刃部	1 点	E 頭部以外	42 点	不明	16 点	C 摩滅痕	5 基面	E 基部	16 点
			6 中央に抉りあり		6 弱凸強平					F 無	153 点	F その他	2 点				6 頭部	F 刃部と基部	15 点
C 円形（乳棒状）	85 点	C 不明			7 片平刃	C1 斜刃（緩い）	23 点	D 不明	85 点	G 不明	80 点	G 不明	79 点			A1 3 点 A3 1 点 B1 1 点 B2 25 点 C2 12 点 複合 4 点 不明 200 点		G 上半	32 点
		A 100 点 A1 1 点 A2 8 点 A3 31 点 A4 67 点 A5 16 点 B 5 点 B1 1 点 B2 2 点 B3 4 点 B4 5 点 B6 1 点 不明 5 点			8 片凹刃													H 下半	55 点
				B 両刃	1 両凸刃	C2 斜刃（急）	5 点											I 片側辺	1 点
D 柳葉形	17 点				2 両平刃													J 刃部と片側辺	2 点
				A 1 点 A1 2 点 A2 1 点 A3 4 点 A4 8 点 A5 19 点 A6 4 点 A7 1 点 A8 1 点 B 1 点 B1 72 点 B2 4 点 不明 128 点		D 尖刃	0 点											K 基部と片側辺	1 点
																		L 片側面のみ残	4 点
E その他	5 点					E 不明	136 点											M 刃部の一部のみ残	4 点
																		N 表面の一部残	8 点
F 不明	13 点																	O 複合	6 点

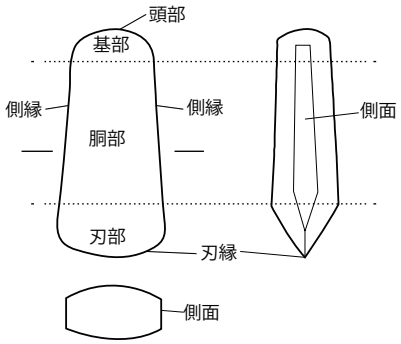
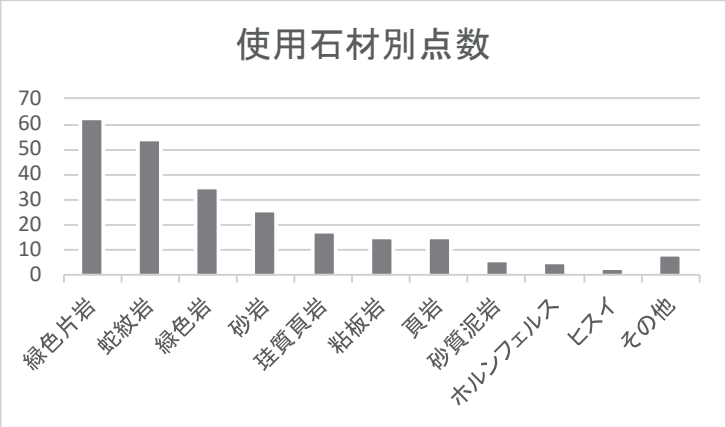


図 93　磨製石斧の石材別点数のグラフ



（4）　礫石器（自然礫素材）

ア　　磨石類（表 13、図 144 ～ 147）

合計 655 点が出土している。このうち、磨面のみ有するものは 352 点、敲部のみ有するものは 15 点、凹部のみ有するものは 14 点あり、さらに機能が複合しているものは 274 点ある。石材は砂岩と安山岩がそれぞれ 346 点と 240 点あり、この 2 種類で全体の 9 割近くを占める。自然礫をそのまま使用しているこ

表 13　磨石類の細分類と点数

素材		平面形		断面形		敲部（凹部）										破損状況	
						部位		形状		サイズ				数			
A 使用・整形加工より素材の形状がさほど変化が見られない	549 点	円形	89 点	円形	62 点	表面	74 点	円形	14 点	大 φ 2cm以上	87 点	深 3cm以上	0 点	1	59 点	A 完形	290 点
														2	44 点		
						側面	1 点	楕円形	42 点					3	32 点		
														4	23 点		
		楕円形	177 点	楕円形	259 点	裏面	18 点	不整形	31 点	小 φ 1 ～ 1.99cm	89 点	浅 0.2cm～ 2.99cm	172 点	5	10 点	B 表面剥離大	4 点
														6	4 点		
				方形 長方形	45 点	複合	83 点	複合	80 点					7	2 点		
		方形 長方形	32 点			無	478 点	不明	9 点	敲打痕 φ 1cm未満	0 点	敲打痕 0.2cm未満	4 点	8	1 点		
								無	478 点					16	1 点	C 表面剥離小	9 点
		台形	3 点	扁平	124 点	磨・擦面				敲打							
						部位		面数		部位		面数					
B 使用・整形加工より素材の形状が大きく変形	68 点			台形	14 点	表面	83 点	1 面	100 点	表面	24 点	1 面	101 点			D 1/3 以下欠	57 点
				三角形	33 点			2 面	289 点	裏面	30 点	2 面	68 点				
		棒状	68 点			側面	6 点	3 面	84 点	上端部	54 点	3 面	27 点				
				半円	1 点			4 面	76 点	側面	15 点	4 面	9 点			E 1/2 程度欠	162 点
						裏面	13 点	5 面	28 点	下端部	2 点	5 面	2 点				
				不定形	37 点			6 面	42 点	複合	83 点	6 面	0 点				
不明	37 点	不定形	30 点	不明	79 点	上端	1 点			無	446 点	8	1 点			F 2/3 以上欠	132 点
						複合	516 点										
		不明	255 点			無	35 点					無	446 点				

とから、本遺跡周辺で容易に採取できる川原石を使っていると考えられる。

凹部を持つものについては、凹部の大きさと深さをサイズ別に３つに分類して観察を実施した。平面の大きさは大と小がそれぞれ同程度見られたが、深さは 176 点中 170 点が２～ 10㎜に収まっていた。また、凹部の数は１～４つが大半を占め、凹部の数が増えるごとに点数は減る。中には凹部を 16 カ所もつものもある。また１面だけに凹部が観察される場合と複数の面に見られる場合に大差はない。

磨面を持つものは石皿等とともに使用が想定できるものである。８割以上が２面以上に磨面を持ち、全面に磨面を持つ個体も 42 点ある。素材全体の長さに対する磨面の比率をみると、その平均が８割以上あることから、多くの個体がかなりの使用回数を経ていることがわかる。また、部分的に磨面を持つものは少ない。

敲部は、石器製作時の直接打撃等に使用されると想定できるものである。敲部単体のみが確認できるものは少なく、そのほとんどが磨面ないし凹部を有する。

遺構出土品は 104 点と比較的多く、特に 17 号、19 号、28 号の住居でそれぞれ４点、８点、６点が出土している。

イ　砥石（表 14、図 148 ～ 152）

合計 252 点が出土している。砥面が明瞭に観察できるものを中心に 50 点を図示した。

250 点は自然礫を素材とし、整形加工は施されていない。このため平面形状には規則性は見られない。断面形状に扁平なものが多いのは、節理の発達した砂岩製の素材が多いためと考えられる。出土品に似た扁平の砂岩が女鳥羽川流域で多く見られるため、多くは在地のものであると考えられる。砥面が１面ないし２面のものが多数を占めるのは、上記のように扁平な砥石が多いことに由来する。

溝状研磨痕を有し玉砥石と考えられるものが 35 点出土している。No.1050・No.1051 は、10 本以上の溝状研磨痕を有する。

古環境研究所試作の粒度表を参考に、砥石の細別分類を行った。金属製刃物用砥石の分類に倣い、泥岩～細粒砂岩を仕上げ砥、細粒～粗粒砂岩を中砥、粗粒～極粗粒砂岩を荒砥と分類した。粗粒の砂岩が多く使われていることから、荒砥石がほとんどを占める。砂岩製は 233 点出土しており、砥石全体の９割以上にのぼる。また、石剣・石刀に多く使われる頁岩と緑色片岩製の緻密な石材を用いた砥石も７点出土した。

完形品は 26 点と全体の 10％程度しか出土しておらず、意図的に割って廃棄された可能性も考えられる。

表 14　砥石の細分類と点数

整形加工の有無			平面形状			断面形状			線状研磨痕		砥面数		溝状研磨痕断面形		粒度		破損状況		
有	素材の形状が大きく変化	1 点	A	円形	0 点	A	円形	1 点	有	42 点	1	104 点	U 字形断面	23 点	仕上砥 泥岩～細粒砂岩	2 点	A	完形	26 点
			B	楕円形	16 点	B	楕円形	40 点			2	123 点					B	表面剥離大	0 点
			C	長楕円形	41 点	C	扁平な楕円形	75 点			3	14 点	V 字形断面	3 点	中砥 細粒～粗粒砂岩	57 点	C	表面剥離小	5 点
無	素材形状に大きな変化が見られない	250 点	D	方形	3 点	D	方形	2 点			4	8 点					D	1/3 以下破損	67 点
			E	長方形	42 点	E	長方形	17 点	無	210 点	5	3 点	不定形	9 点	荒砥 粗粒～極粗粒砂岩	193 点	E	1/2 程度破損	57 点
			F	不定形	35 点	F	扁平な長方形	47 点			6	0 点					F	2/3 以上破損	97 点
不明		1 点	G	不明	115 点	G	不定形	21 点					無し	217 点					
						H	不明	49 点											

ウ　研磨礫（表 15）

合計 45 点が出土している。チャート製や泥質チャート製が多く、全体の半分ほどを占める。蛇紋岩製等の搬入礫も見られ、石材とそのサイズだけでは垂飾類との区別が困難なものも含まれるが、研磨痕の位置や強度から整形を意図していないと考えられるものを研磨礫として扱った。

表 15　研磨礫の細分類と点数

素材		有無・強弱		向き		研磨痕の面積		破損状況	
円形	9 点	強	12 点	一定	10 点	全周	12 点	完形	38 点
球状	1 点	弱	16 点	不規則	16 点	3/4 程度	4 点	1/4 程度欠	2 点
楕円形	15 点	無	17 点	不明	19 点	2/3 程度	1 点	1/2 程度欠	1 点
						1/2 程度	4 点		
棒状	3 点					1/4 程度	7 点	2/3 程度欠	1 点
						不明	17 点		
不定	17 点							3/4 程度欠	3 点

エ　石錘（表 16、図 153）

合計 2 点が出土した。いずれも扁平な楕円形礫を素材とし、長軸方向に紐掛け用の切り目が作られている。

No.1058 は、切り目が端部だけではなく、正面と裏面の中央部付近までのびている。切り目の切れている中央部には擦痕が確認できるが、使用によるものかは判然としない。No.1059 は、端部の切り目付近に紐掛け時にできたと考えられる剥離痕が観察される。

表 16　石錘の細分類と点数

平面形		断面形		機能部				研磨		素材		破損状況	
				紐掛け位置		製作技術							
楕円形	2 点	偏平	2 点	長軸	2 点	切り目（端部のみ）	1 点	弱	2 点	円礫	2 点	完形	1 点
						有溝（全周切り目）	1 点					1/4 程度欠	1 点

オ　軽石製品（表 17）

合計 10 点が出土した。いずれも平面形状や断面形状に規則性は見られない。サイズは最大で 83.3㎜で、重量は最大で 59.8g である。穿孔が確認できるものが 2 点に 2 カ所あるが、貫通しているものは 1 カ所のみであった。

表 17　軽石製品の細分類と点数

平面形		断面形		穿孔の有無		破損状況	
円形	1 点	楕円形	2 点	有	2 点	完形	7 点
楕円形	2 点	長方形	1 点				
方形	1 点	扁平	5 点			1/2 程度欠	2 点
棒状	1 点	方形	1 点	無	8 点		
不定形	3 点	湾曲	1 点			3/4 程度欠	1 点
不明	2 点						

カ　　石皿（表 18、図 153・154）

合計 26 点が出土している。完形品はなく、ほとんどが 1/2 以上が欠損している。転石や割り石などの自然礫を素材としており、平面形が円形ないし楕円形を呈しているものが多い。

全てが破損品であるが、No.1070 は短軸で 2 つに割れているものの、唯一全形のわかる資料である。全形が推定できるものをみると、すべて吐き出し口を有し、高台または脚部が付いていないことがわかった。横断面形は、A ～ D 類までそれぞれ確認でき、特に B 類が比較的多い。特徴的なものについては、No.1062 のように側面に整形のためと考えられる敲打痕が見られるものや、No.1065 のように被熱により煤けているものがある。

表 18　石皿の細分類と点数

素材		平面形		断面形		吐き出し口の有無		高台 / 脚部の有無		破損状況		
A 転石を利用	18 点	円形	3 点	A 平盤状または全体に浅く凹む	5 点	有	7 点	有	0 点	使用可	完形	0 点
		楕円形	8 点								2 つに割れる	1 点
B 割り石を利用	7 点	（隅丸）方形	1 点	B 縁を残して中央が弓状に凹む	11 点						一部欠損	2 点
		（隅丸）長方形	1 点							使用不可	縦軸に 2 分	1 点
C 細かい整形	1 点	（隅丸）多角形	0 点	C 明瞭な縁があり、広くて平坦な凹み部がある	6 点	不明	19 点	無	26 点		横軸に 2 分	3 点
		不明	13 点								3/4 欠損	17 点
				D 幅広い縁を残し、中央が溝状に凹む	4 点						2 端欠損	2 点
											一部のみ残存	0 点

(5)　石製品（装飾品・宗教具）

ア　石棒（表 19、図 155 ～ 157）

合計 90 点が出土している。胴部断面の最大幅の数値により、小型、中型、大型に分類した結果、小型の比率が圧倒的に多いことがわかった。胴部断面形は円形または楕円形が多いが、扁平楕円形や方形を呈するものも少なからず見られる。

出土品の半数程度は先端部分が残っており、その中で 4 割ほどが先端部と胴部の区分が明瞭な有頭形であった。有頭形のものは 19 点あり、その内訳は小型が 10 点、中型が 6 点、大型が 3 点であった。有頭の形状をみると 10 種類に分けられ、有 A 類と有 B 類が比較的多く見られる。また、先端部と胴部の区分が不明瞭なものは 27 点出土しており、1 点を除き他は小型のものであった。No.1128 のように両端が有頭のものもある。

完形品は 10 点のみに限られ、さらに狭義の石棒ということになると長さ 10cm 未満の 3 点の小型石棒に絞られる。また、破損品の半数以上は 3/4 以上が欠損しており、全体像を把握できなかった。

小型石棒の出土状況については、第 3 節 3 で詳しく述べる。中・大型石棒の出土地点は、そのほとんどがグリッドからで、まとまった出土は見られなかった。25 号住居と土坑 380 でもそれぞれ 1 点出土したが、共伴する土器の状況から混入したものと考える。

イ　石剣・刀（表 20、図 158 ～ 160）

合計 111 点が出土している。身の断面形により石剣と石刀に分けられ、石剣は 44 点、石刀は 52 点が出土している。身の形状が判別したものは 69 点あり、3/4 程が直刀であった。柄頭は平面形によって 7 種類あることがわかり、そ

表 19　石棒の細分類と点数

加工具合		形状		平面最大幅		胴部断面形			先端形状 1				先端形状 2			破損状況	
A 狭義の石棒（全面加工・研磨）	62 点	小形 太さ 5cm未満	71 点	上 上端部または上端近く	7 点	円形		22 点	有頭	有 A 円筒形		5 点	有頭	有 A 円筒形	0 点	A 完形	10 点
										有 B 笠形		4 点		有 B 笠形	0 点	B 頭部欠	0 点
				中上 中央と上端の間	1 点					有 C 二段笠形		1 点		有 C 二段笠形	0 点	C 下部欠	3 点
B 類石棒（部分的な加工のみの石棒）	10 点	中形 太さ 5cm以上、10cm未満	8 点			楕円形		31 点		有 D 三角形		0 点		有 D 三角形	0 点	D 上半欠	7 点
				中 中央付近	5 点					有 E 亀頭状		3 点		有 E 亀頭状	0 点	E 下半欠	10 点
										有 F 円形で下部が括れる		1 点		有 F 円形で下部が括れる	0 点	F 頭部と下部欠	12 点
C 棒状礫（加工の無い棒状の自然礫）	5 点	大形 太さ 10cm以上	10 点	中下 中央と下端の間	0 点	扁平楕円形		7 点		有 G 台形		2 点		有 G 台形	1 点	G 3/4 以上欠	45 点
										有 H 円筒形で下部が括れる		2 点		有 H 円筒形で下部が括れる	0 点	H 1/2 以上欠	1 点
				下 下端部または下端近く	1 点					有 I 亀頭状で抉りが見られる		1 点				I 表面の一部残	2 点
D 不明	13 点	不明	1 点			方形		9 点									
				棒状	5 点				無頭	無 A 円端		18 点	無頭	無 A 円端	5 点		
										無 B 平端		9 点		無 B 平端	4 点		
				不明	71 点	不明		21 点	不明			44 点	不明		80 点		

の中でも長方形を呈するA類と円形を呈するE類がそれぞれ4点と5点で比較的多くある。また、柄頭に文様が施されている個体も10点確認できた。柄頭・身の形態から以下のように特徴的な型式に分類されるものがある［後藤信祐1986］。縄文晩期前半の北陸から近畿地方にかけて濃密に見られる橿原型石刀が2点（No.1220、No.1223）、晩期前半を主体とし北陸、飛騨地方、長野県西部、東海地方と中部地方西半に分布する小谷型石刀が1点（No.1214）、晩期前葉の関東地方から中部地方太平洋側を中心に分布するなすな原型石剣が2点（No.1212、No.1216）、晩期前・中葉の関東地方を中心に分布する東北原型石剣が1点（No.1211）ある。

石棒同様に完形品が少なく、9割以上が破損している。3/4以上が欠損して全体像がつかめないようなものも半数近くある。

出土状況については、小型石棒とまとめて第3節3で詳しく述べる。

ウ　垂飾類（表21、図161・162）

合計28点が出土している。頁岩や粘板岩等在地の石材とヒスイや蛇紋岩等搬入されたものが同程度の割合である。搬入礫に多くの未成品が含まれている点は注目される。平面形は、様々な形状があり、突出して多い形状は見られない。孔があるものが17点確認あり、そのうち2点は自然に作られた孔の可能性がある。穿孔の内径は、4.0㎜から6.8㎜で、その平均値は5.4㎜であった。石錐の錐部の幅の平均値が8.4㎜であるので、本遺跡で製作される穿孔の中で

表20　石剣・刀の細分類と点数

身の形状		刃関		身の断面				背の溝		柄頭平面形			柄部と柄頭		柄部と刃部		柄頭の文様		破損状況	
直刀	52点	A 明瞭	3点	刀状	楔形		31点	有	4点	A 長方形		4点	分化	7点	分化	4点	沈線	8点	A 完形	4点
					卵形		21点			B 方形		2点					沈線＋切り目	1点	B 頭部欠	7点
内反り刀	7点	B やや明瞭	1点	剣状	菱形		4点			C 台形		3点					背に切り目	1点	C 下部欠	2点
					凸レンズ状		16点	無	88点	D 亀頭状		1点	未分化	10点	未分化	14点	無	9点	D 上半欠	11点
外反り刀	5点	C 不明瞭	13点		扁平楕円形		22点			E 円形		5点					不明	92点	E 下半欠	4点
				不明			17点			F 逆台形		1点							F 頭部と下部欠	29点
不明	47点	D 不明	94点					不明	19点	G 円形＋溝		1点	不明	94点	不明	93点			G 3/4以上欠	51点
										H 不明		94点							H 1/2以上欠	3点

は小さい部類が垂飾類に多く用いられたと言える。

7点ある遺構出土品のうち、5点が19号住居からまとまって出土している。そのうち4点はヒスイ製ないし蛇紋岩製の未成品で、残りの1点は蛇紋岩製の完成品である。この19号住居は石製品の製作にかかわる遺構の可能性が高いが、加工具である砥石の出土は認められなかった。

エ　石冠（表22、図94、163）

合計5点が出土した。細分類については、［中島栄一1995］の型式分類を踏襲した。Ⅰ類の出土はなく、Ⅱ類が1点、Ⅲ類が3点、Ⅳ類が1点がある。No.1249は、唯一文様が確認できる個体であり、両側面下部に、平面長方形の沈線が彫り込まれている。

破損状況をみると、完形品が3点あり、石棒等の他の祭祀具に比べ遺存率が高い傾向が見られる。使用されている石材は、砂岩や頁岩、輝石安山岩といった礫石器にも使用されるもので、在地の材料が用いられている。

表 21　垂飾類の細分類と点数

平面形		穿孔の有無		切り目の有無		断面形		破損状況	
円形	2 点	有	17 点	有	6 点	楕円形	3 点	完形	21 点
楕円形	4 点					やや扁平	5 点	1/4 未満欠	3 点
楕円形で、片側が内側にやや内湾	—					扁平	16 点	1/3 程度欠	—
細身の楕円形	3 点					円形	1 点	1/2 程度欠	1 点
棒状	4 点					方形	1 点	3/4 以上欠	3 点
勾玉状	5 点	無	11 点	無	22 点	柳葉状	1 点		
三角形 or 逆三角形	2 点					不明	1 点		
石斧形	2 点								
その他	6 点								

No.1250 の帰属遺構は土坑 631 で、唯一の遺構出土である。No.1248、No.1250・No.1251 はいずれもグリッド出土で、No.1248 は、遺物出土の特に多い廃棄場 E1 と E2 の境付近である N3W12 の出土品である。

(6)　その他（器種分類不可または自然礫との区分困難）

ア異形石器

いずれの器種にも分類が困難なものが 18 点出土している。黒曜石製が最も多く 8 点がある。砂岩製や安山岩製のものはいずれも研磨痕が確認できる。

イ石核・原石（表 23、図 164 ～ 167）

石核が合計 442 点、原石が合計 166 点出土している。石核は、9 割以上が黒曜石製で、大形打製石器に使用される石材はわずか 12 点しか確認できなかった。石核の観察から剥離技術に多少の傾向がうかがえた。推定打面数が 2

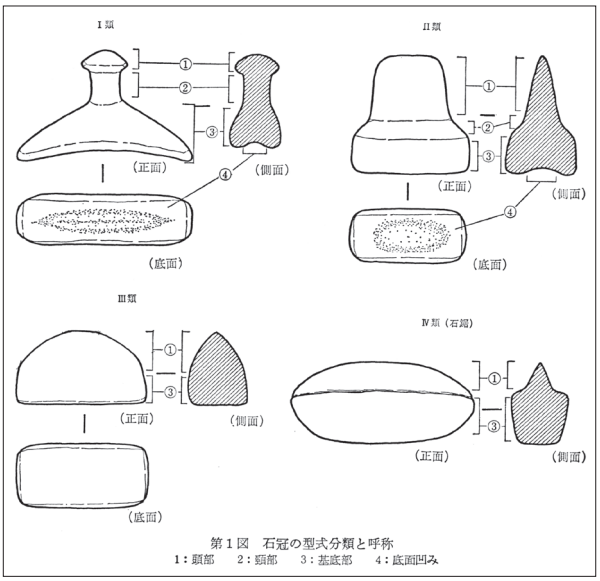


図 94　石冠の型式模式図
［中島栄一 1995 から引用］

表 22　石冠の細分類と点数

<table>
<tr><th colspan="2">平面形</th><th colspan="2">頭部
断面形</th><th colspan="2">基底部
平面形</th><th colspan="2">基底部
断面形</th><th colspan="2">底部
平面形</th><th colspan="2">破損状況</th></tr>
<tr><td>Ⅰ類
頭部・頸部・基底部の区分が明瞭</td><td>—</td><td rowspan="2">笠状</td><td rowspan="2">—</td><td>直線</td><td>2 点</td><td>直線</td><td>2 点</td><td>長方形</td><td>3 点</td><td>完形</td><td>3 点</td></tr>
<tr><td>Ⅱ類
頸部は判然とせず、基底部は明瞭</td><td>1 点</td><td>内湾曲</td><td>1 点</td><td>内湾曲</td><td>1 点</td><td>楕円形</td><td>1 点</td><td>1/4 欠</td><td>1 点</td></tr>
<tr><td>Ⅲ類
頭部～基底部が一体化、
側面は屈曲が少ない三角形状</td><td>3 点</td><td rowspan="2">斧状</td><td rowspan="2">5 点</td><td>外湾曲</td><td>2 点</td><td>外湾曲</td><td>2 点</td><td>長三角形</td><td>1 点</td><td>2/3 欠</td><td>1 点</td></tr>
<tr><td>Ⅳ類
頭部と基底部は区分できるが、
頭部は突出する、側面は三角形状で、
頭部は小さく、基底部はかまぼこ状</td><td>1 点</td><td colspan="10"></td></tr>
</table>

つと 3 つのものがそれぞれ 158 点と 150 点で、合わせると全体の 7 割近くと多く見られる。打面調整がない、もしくは残っていないものが 385 点にのぼる。打面調整されたとしても 1 面のみの場合がほとんどである。産出される剥片の形態については不明なことが多い。縦長剥片と横長剥片の産出数は同程度の点数であった。

出土状況をみると、同グリッド内で複数個体が出土していることが多い。25 号・26 号、28 号の住居付近の出土が特に多く 10 点以上の出土があるグリッドがまとまっている。土坑 339 と土坑 340 が含まれる S27W12 では 17 点が出土しているが、このグリッド近辺では他に石核はあまり出土していない。石核の保管または廃棄するのに特定の場所を設けている可能性が考えられる。

原石は、主に黒曜石と石英、鉄石英の 3 種類がある。いずれも搬入礫であり、ストックしていたものと考えられるが、鉄石英を使った石器が本遺跡では確認できないことから、わざわざ持ち込んだ意図が判然としない。また、鉄石英は平均重量が 20.8g と黒曜石や石英に比べると小さく、石器の素材となりうるかどうかも疑問である。

石英の中には、透明度が高く水晶の範疇に含めてもいいものも少なくない。大きい塊も見られ、最大重量は 517g である。合計で 68 点が確認でき、総重量は 2,855.1g であった。黒曜石も同数量見られるが、平均重量が石英より重いこともあり、総重量は 4,130.0g を測る。

100g 以上の大形の原石については、廃棄場 E での出土や、38 号住居に関するグリッド S27W18、39 号住居に関連するグリッド S18W18 で密度が濃く出土している。

なお、第 2 分冊の第Ⅳ章第 3 節 5（3）で、黒曜石の集中出土地点 S30W36 から原石がまとまって出土したと報告したが、その後の観察の結果から、原石ではなく石核と判断する。

ウ　剥片・砕片（表 24）

剥片・砕片は総数 76,918 点、総重量 271,608.1g と大量に出土し、その大部分を黒曜石が占める。特に点数が多いものについては、表 24 を参照されたい。

表 23　石核の細分類と点数

素材		打面																作業面				産出剥片の形態		自然面		破損状況	
		残存数		推定数		状態		調整				転移						数		状態							
								有無		数		有無		数		角度											
核素材	438点	1	139点	1	58点	自然面	61点	有	76点	1	58点	有	383点	1	154点	90°	89点	1	47点	自然面	13点	縦形剥片	29点	有	90点	完形	435点
		2	210点	2	158点									2	155点	180°	67点	2	138点	節理面	7点						
		3	69点	3	150点	節理面	96点	無	365点	2	17点			3	61点	複合	225点	3	147点	剥離面	318点	横形剥片	35点				
剥片素材	4点	4	21点	4	63点							無	59点	4	10点	不明	2点	4	82点	複合	102点			無	352点	1面折れ	7点
		5	2点	5	11点	剥離面	285点	不明	1点	3	1点			5	3点			5	24点	不明	2点	不明	378点				
		6	1点	6	2点													6	4点								

表 24　石材別剥片・砕片の点数

石材	点数	重量（g）
黒曜石	71,142 点	204,506.5
チャート	3,335 点	18,538.5
下呂石	289 点	―
その他	2,152 点	48,563.1(下呂石含む)
合計	76,918 点	271,608.1

（7）　石臼（中世）

中世に帰属すると考えられる石臼が 1 点出土している。安山岩製の下臼の完形品で、外径は 29.4㎝で高さは 10.4㎝を測る。臼面は六分画であった。側面と臼面の一部に被熱が観察される。

3　考察・分析

（1）　組成

狭義の石器だけで１万点を超える資料があることから、本遺跡の特徴を見つけ出すため、下記のような様々な視点から石器組成の分析を行った。また、広義の石器である剥片・砕片についてはその出土量が７万点を超え、各組成の結果に顕著な影響を与えるため、グラフ化した組成については省略した。

ア　器種組成

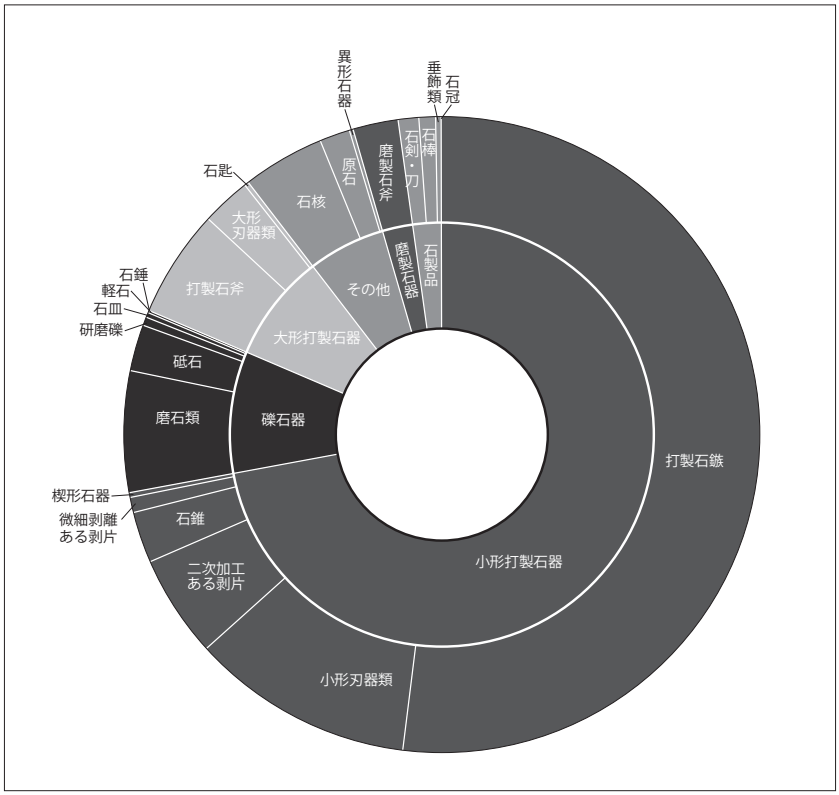


図 95
系列別器種組成

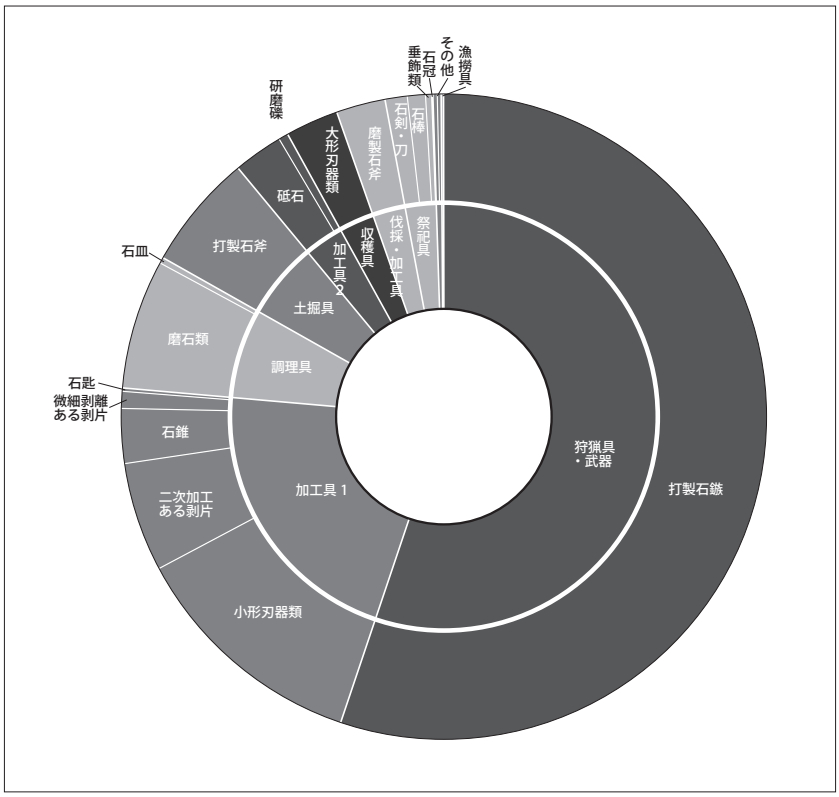


図 96
機能別器種組成

器種組成は、3 通りの方法を用いた。製作技法による系列別と［大工原豊 2008］を参考に機能別、さらに住居跡を中心に遺構別の組成グラフないし表を作成し、載せた。

系列別組成は、図 95 のように製作技法による器種分類に則って作成した。打製石鏃の量が圧倒的に多いこともあり 3/4 近くを小形打製石器が占める。礫石器と大形打製石器は、それぞれ全体の 1 割程度の割合で出土している。石棒類も計 201 点と少なくないが、ほとんどが小破片である。

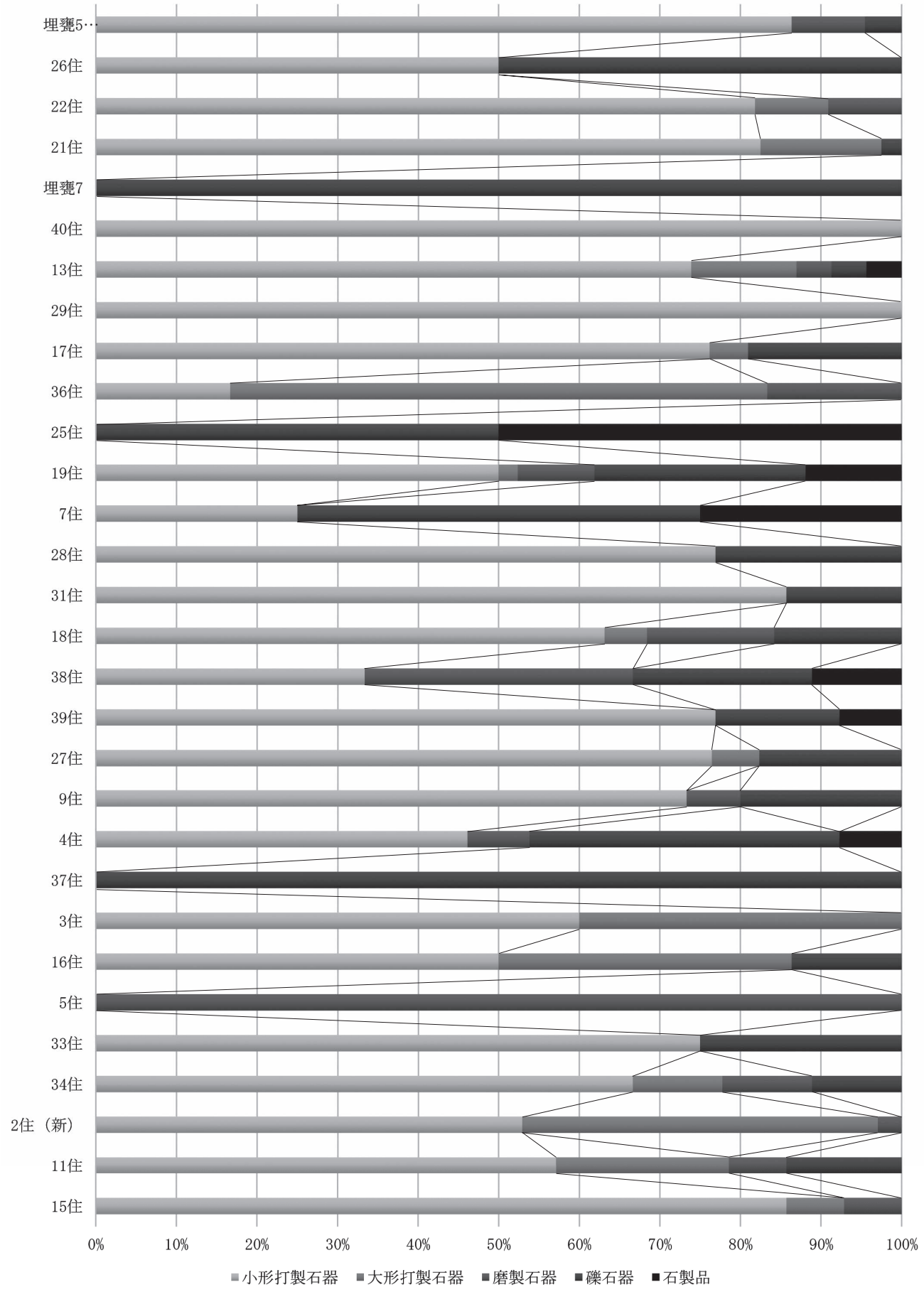
図 96 は、機能別に各機種を振り分けした組成である。必ずしもその機能が当てはまるとは限らないが一つの基準として作成した。小形打製石器の点数がここでも目立っており、狩猟具や加工具 1 が全体の 3/4 を占める。次いで、調理具、土掘具が続く。少数派ではあるが、石錘や軽石製品といった漁撈具の出土もある。土製耳飾や土偶などの祭祀具は多量の出土が目立つが、石製祭祀具に関しては全体の 2% 程しか出土していない。

表 25・図 97 は、遺構別にみる器種組成である。土坑・ピット等のすべての遺構を含めると、膨大な量になり煩雑となるため、住居跡と炉跡や埋甕等の住居に関連する遺構をピックアップし、表とグラフにまと

表 25　遺構別器種組成 1

器種 / 遺構	小形打製石器						大形打製石器			磨製石器	礫石器						石製品		その他				計	主体となる時期
	打製石鏃	石錐	小形刃器類	楔形石器	二次加工ある剥片	微細剥離ある剥片	打製石斧	石匙	大形刃器類	磨製石斧	磨石類	砥石	石錘	石皿	研磨礫	軽石製品	石棒類	垂飾類	異形石器	石核	剥片・砕片	原石		
2 住（旧）																					12		2	中期中葉Ⅲ期以前
15 住	2		7		2	1	1			1										1	158	1	174	中期中葉Ⅱ～Ⅳ期～Ⅲ期
11 住	1	1	2	1	3		2	1		1	1			1							37		51	中期中葉Ⅱ～Ⅳ期
2 住（新）	12		4		2		9	1	5	1											358		392	中期中葉Ⅲ期
34 住		1	3		2		1			1	1										87	1	97	中期中葉Ⅲ期
35 住																					5		5	中期中葉Ⅲ期
33 住	4	1	1		3						3										85	1	98	中期中葉
5 住										1											1		2	中期中葉前後
16 住	6	1	4				1		7		2			1							102		124	中期中葉Ⅲ期～後葉Ⅱ期
3 住	2		1					2													35		40	中期中葉Ⅴ～Ⅵ期
37 住											1												1	中期後半～後期前葉
4 住			2	1	3					1	1	2		2			1			4	47		64	中期後葉Ⅰ～Ⅱ期
9 住	7	1	1		2					1	2	1							1	1	55		72	中期後葉Ⅱ期
27 住	4		3		6			1			3										62		79	堀ノ内 1 ～ 2 式
39 住	6		2	1	1						1			1			1				57		70	堀ノ内 2 式前半
38 住	2					1				3	1	1					1			2	7		18	堀ノ内 2 式後半
18 住	6		6				1			3	2	1								1	82		102	堀ノ内 2 式～加曽利 B1 式前半
31 住	3	1	1			1					1										31		38	加曽利 B1 ～ B2 式
28 住	13	1	3		3						6										145	2	173	加曽利 B2 式前半～後半
7 住	1										2						1			2	23		29	加曾利 B2 式後半（堀ノ内 1 式後半？）
19 住	5	2	12	1		1	1			4	8	2			1			5		1	207		250	加曽利 B2 式後半（堀ノ内 2 式）
25 住												1					1				3		5	加曽利 B2 式後半
埋甕 3																					3		3	後期中葉
36 住				1			3		1	1											12		18	上ノ段 3 式
17 住	11		3		2		1				4										277		298	上ノ段 2 ～ 3 式
29 住	14		3																		178		195	晩期初頭～佐野 1a 式
13 住	21	2	7		3	1	5		1	2	1				1		1	1			375		421	佐野 1a ～ 1b 式
40 住	1	1																			15		17	佐野 1b ～ 1a 式
埋甕 7												1									1		2	佐野 1b 式？
21 住	25	2	3	1	2		4		2			1							1	2	268	2	313	佐野 2 式
22 住	6		3						1	1										2	9	1	23	佐野 2 式
26 住	1											1									18		20	佐野 1 式後半～ 2 式
埋甕 5 S21W21	15		3		1					2	1										170	1	193	佐野式
炉 1																					2		2	佐野式以降
埋甕 2																					3		3	晩期前葉

図 97　遺構別器種組成 2



めた。図 97 は、石器が出土していない遺構は省略した。掲載は、遺構編 1 第 1 分冊に掲載されている各遺構の主体となる時期別とした。遺構編 1 第 1 分冊にも記したが、帰属時期を確定できる遺構は少なく、石器にも混入品が含まれる可能性を考慮する必要があるが、特徴のある遺構や石器組成に過渡期があること等が見えてきた。

中期の遺構に関しては、小形打製石器と大形打製石器の出土量や種類が中葉から後葉になると少なくなる傾向にある。中葉の中でも 2 号住居(新)は特に石器の出土量が際立って多く、大形打製石器が充実している。剥片・砕片の出土が 358 点と顕著である。中期後葉Ⅰ～Ⅱ期を主体とする 4 号住居は、石鏃や打製石斧等の打製石器類が極めて少なく、礫石器や磨製石器が散見できる。石核が 4 点と他遺構より多く出土しているのに比して剥片・砕片の出土量は乏しい。また、石刀が 1 点みられるが、後・晩期に帰属すると考えられるので混入品の可能性がある。

堀ノ内式以降の後・晩期に入ると、石鏃を保有する遺構の数や出土量が増える。出土量についていえば、佐野 1 ～ 2 式にピークを迎え、13 号住居と 21 号住居ではそれぞれ 21 点と 25 点が出土している。石匙は、堀ノ内 1 ～ 2 式の 27 号住居で 1 点あるが、それ以降の遺構では一切出土していない。一方で、砥石の出現が中期後葉以降であると読み取れる。また、石棒類や垂飾類といったいわゆる祭祀具は堀ノ内式以降から散見される。19 号住居では、垂飾類が 5 点とまとまって出土している。石製品以外にも土偶が出土しており、祭祀的な要素を感じ取れる。磨石類は普遍的に出土しているが、加曽利 B2 式を主体とする 19 号住居と 28 号住居でそれぞれ 6 点、8 点と出土しており、磨石類の出土量が急に多くなる時期がある。

打製石器主体であるのは中期から晩期まで一貫して変わらないが、堀ノ内式から上ノ段式までの後期では、磨製石器と礫石器、石製品の占める割合が高い傾向が見られた。

イ　石材別の組成

小形打製石器では、石錐以外は黒曜石が 7 割以上の比率を占め、次いでチャートや下呂石、珪質頁岩の順で使用されている。チャートは梓川河岸段丘上の広域に産出され、梓川水系域でも安易に採集できる在地の石材であるが、黒曜石や下呂石などの搬入品が目立つ。これらの多くは、石核の量が少ないことから、剥片状態でも搬入され本遺跡で整形加工を施したものが多いと考えられる。

大形打製石器では、ホルンフェルスがいずれも最も多く使われ、頁岩や砂岩も比較的多く用いられる。頁岩と砂岩は松本盆地の南部の山麓沿いに岩脈があり手に入りやすい素材である。ホルンフェルスは砂岩に熱変成が加えられたものであり、砂岩が産出する地域で見られる。そのため、他の縄文・弥生遺跡でも大形打製石器によく使用される在地の石材である。

磨製石器では、緑色片岩や緑色岩、蛇紋岩など遺跡周辺には産出しない石材が多く認められる。また、これらの石材の剥片がほとんど見られないことから、製品の状態で搬入された考えられる。砂岩や頁岩、粘板岩といった在地産の石材も 3 割程度ある。

礫石器については、研磨礫以外は砂岩と安山岩などほぼ在地の石材でまかなわれている。加工が不要なことや性質上日常利器であるため、簡単に入手できる石材を使用していると考えられる。研磨礫は、仕上げの研磨に使用されたものと推測され、在地の石材では機能が不十分であるため、石英塊や蛇紋岩、ヒスイといった石材を多く取り寄せている。

表 26　器種別石材組成

石材		小形打製石器						大形打製石器			磨製石器		礫石器						石製品			その他			
		打製石鏃	石錐	小形刃器類	楔形石器	二次加工ある剥片	微細剥離ある剥片	打製石斧	石匙	大形刃器類	磨製石鏃	磨製石斧	凹・磨・敲石	砥石	石錘	石皿	研磨礫	軽石製品	石棒類	石冠	垂飾類	異形石器	石核	原石	計
火成岩	黒曜石	4,262	58	895	25	425	59															8	413	68	6,213
	下呂石	155	7	10		34	1		1	3															211
	凝灰岩	2						14		3			1												20
	石英			1													4					1	2	68	76
	鉄石英			21		12	6														1		6		0
	安山岩	2	1	1		1	1					1	232	6		23			2			3	1	1	275
	閃緑岩												2												2
	花崗岩												5			1			1						7
	花崗斑岩												10						2						12
	輝緑岩（緑色岩）		1			2		6				35	1				2		8		1				56
	流紋岩											2	2	1					1						6
	デイサイト																		2						2
	輝石安山岩							1					8						6	1				1	17
	蛇紋岩											54					8				5				67
	軽石																	10							10
堆積岩	チャート	990	166	249		82	6		6	1			1				19		1				15	1	1,537
	泥質チャート	6	1			1						1					4							1	14
	砂岩	2						57		39		26	347	233		3	2		20	3		6		3	703
	緑色凝灰岩									1			3				1								6
	砂質泥岩									2		6							4						10
	泥質頁岩																		1						1
	硬砂岩	2					2	14		9			6	5	2		1		2						43
	頁岩	34	10	10		13	5	148	3	61		15	15	6			1		39	1	7		1	3	372
	礫岩												1												1
	泥岩		1					5		1		1	4												12
	石灰岩	1	1																						2
変成岩	珪質頁岩	60	32	4		4		15	1	3		17							2						138
	結晶片岩																								0
	粘板岩	1		2				19	1	3	1	15	3						54		3				102
	ホルンフェルス		1	1		8		293	9	133		5	8						4		1		4	1	468
	緑色片岩					1		4				62	1				2		41		4				115
	珪化頁岩												1						1						2
	千枚岩					1		3											9						13
	ヒスイ											3					1				3				7
	メノウ																				1				1
	滑石																1								1
不明								4		6		3	5				1		1		2				22

(2)　石鏃について

石鏃は、剥片・砕片を除く全石器点数の半分以上を占め、本遺跡を特徴づける一つの要素である。縄文晩期（特に中葉以降）の中部・関東地方西部・東海地方を中心に、各地で爆発的に出土量が増えることがわかっている［鈴木道之助 1995］。愛知県田原市の保美遺跡や稲荷山貝塚では 5,000 点以上、岐阜県飛騨市北裏遺跡では 8,000 点以上など、出土数が 1,000 点を超える遺跡が知られている。

図 98 は、住居跡を中心とする遺構とグリッドの石鏃の出土点数の分布図である。遺構からの出土状況を

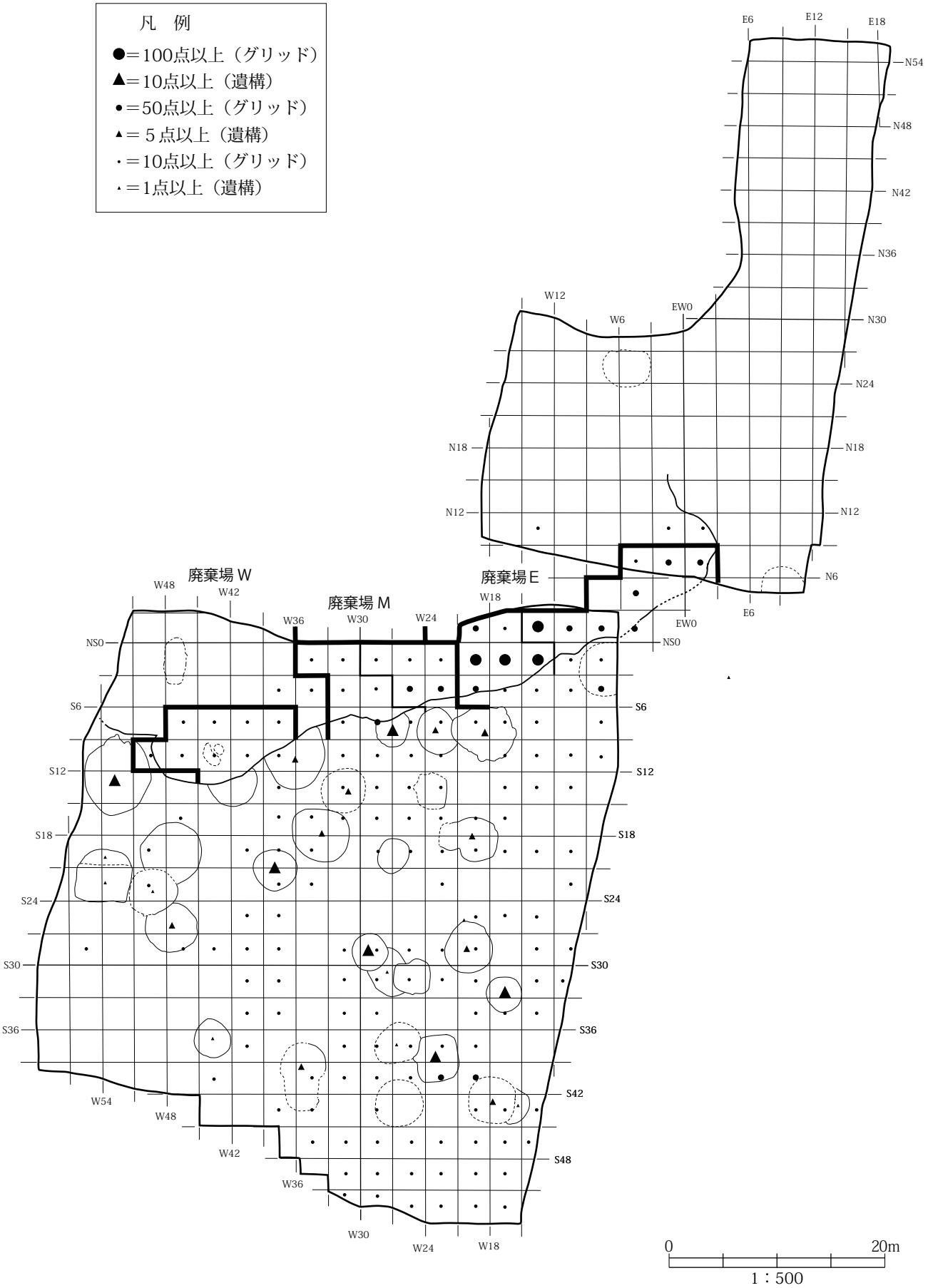


図98　石鏃出土点量分布図

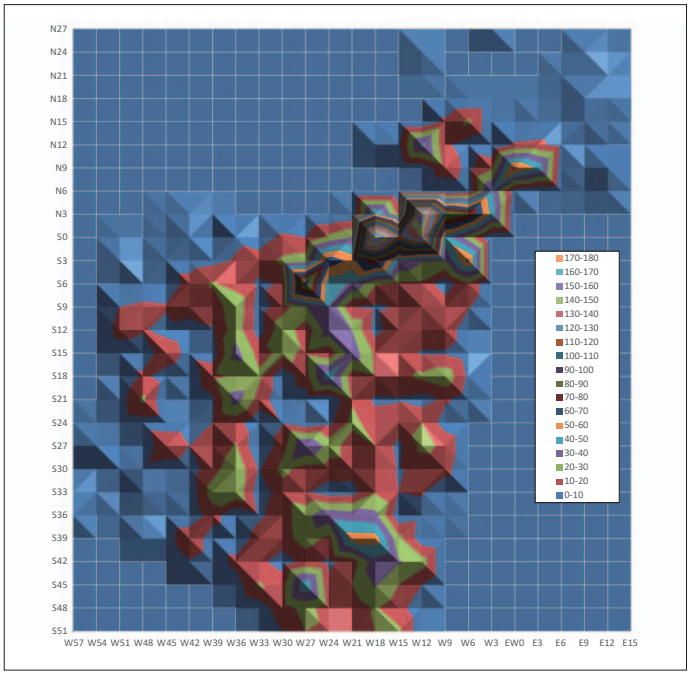


図 99
石鏃出土量の分布図

図 100　有茎鏃出土量の分布図

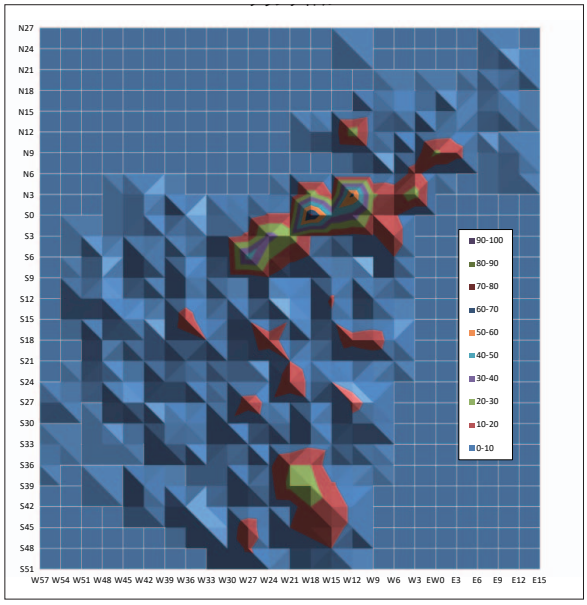
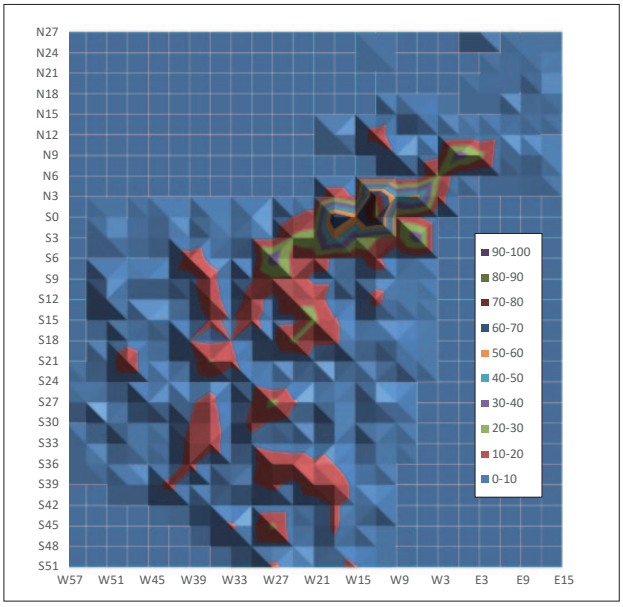


図 101　無茎鏃出土量の分布図



見てみると、10 点以上出土している遺構は 6 基（2 号、13 号、17 号、21 号、28 号・29 号住居）あり、中期中葉を主体とする 2 号住居を除くと、加曽利 B2 式から佐野 2 式を主体とする遺構である。グリッド別で見ると、廃棄場 E2 を中心として集中的に見られる。N3W12、S0W12 ～ S0W18 の 4 つのグリッドからはそれぞれ 100 点以上出土している。また、廃棄場 E1 と M1 でも 50 点以上石鏃が出土しているグリッドが目立つ。廃棄場以外では後期中葉から後葉を主体とする 17 号住居や 28 号住居に関連するグリッドからも 50 点以上出土している。

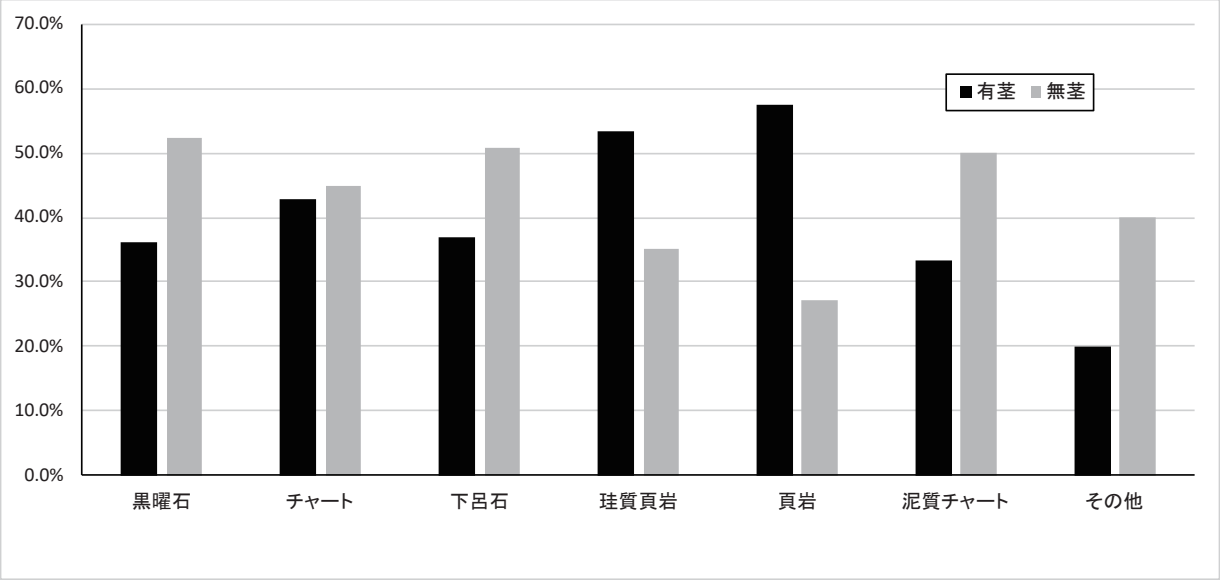
図 99 ～ 101 は、グリッド別の出土量をグラフ化したもので、全石鏃の他に有茎鏃と無茎鏃の出土量の分布を表したものである。全石鏃を対象とした場合、廃棄場と W18 ～ W27 の南北ラインを中心に出土量のピークが見られ、東西幅広く分布している。有茎鏃のみをピックアップしてグラフ化したところ、出土量のピークが廃棄場と 28 号住居付近のグリッドに 2 極化している。無茎鏃のグラフでは、廃棄場での出土量が相変わらず目立つが、それ以外で特徴的なグリッドは見られなくなり、10 ～ 20 点程度の出土量のグリッ

ドが各所にある。廃棄場だけで見ると、無茎鏃は E1 に分布のピークがあり、その広がりも大きい。一方、有茎鏃ではピークがやや南西に寄り、E2 に分布のピークがある。また、分布の広がりも無茎鏃ほどは広がらない傾向にある。有茎鏃の出現が縄文後期以降で晩期にそのピークを迎えるとすると、廃棄場の空間的利用が時期により南西に移動していることと合致する。

図 102 は、有茎鏃と無茎鏃で使用される石材の割合を示したグラフである。グラフを見ると、黒曜石や下呂石など搬入された石材については無茎鏃で使用される割合が大きく、有茎鏃の 1.3 ～ 1.4 倍ほどある。在地の石材ということになると、チャートのように有茎鏃と無茎鏃で同程度の割合か、頁岩や珪質頁岩のように有茎鏃が 1.5 ～ 2 倍も優勢になる。この差が、製作技術に起因するものなのか、石材の入手方法に起因するのかはよくわからないが、晩期以降に急激に増える有茎鏃の生産に合わせるためにも在地の石材をより多く使用したとも考えられる。

縄文後期以降に出現し、晩期にピークを迎える有茎鏃と、縄文時代を通して作られる無茎鏃で出土状況や使用石材の観点から比較分析を行い、上記のように両者間に差が見られるという結果が得られた。これらの結果を他遺跡との比較や黒曜石の流通など広い視点からも分析する必要があり、今後の課題でもある。

図 102　石材別石鏃出土量



(3)　後晩期の石製品からみえること

小型石棒や石剣・刀は縄文後期～晩期にかけて盛行する石製品と考えられている。これらの出土状況等から祭祀的な要素が強い後・晩期の本遺跡での特色を見ていく。

遺構からの出土はかなり限定的であり、2 点以上のまとまった出土は皆無であった。しかし、遺構とその遺構に関連するグッリドからの出土品を合わせると、13 号住居と関連グリッドから合計 4 点出土し、その内訳は石材はいずれも粘板岩性で石刀が 2 点、石棒が 1 点、石剣もしくは石刀が 1 点である。39 号住居と関連グリッドからは合計 5 点の出土が見られ、その内訳は粘板岩性の石棒が 2 点、頁岩製の石棒が 1 点、緑色片岩製の石棒が 1 点、珪質頁岩製の石剣が 1 点であった。13 号住居は、表 25 のとおり石鏃や剥片・砕片の量が特に多い住居跡であり、各種石器が認められる。39 号住居は小形打製石器の比重が高く、全体的に石器出土量はあまり多くない。

グリッド取り上げの遺物を見ると、廃棄場での出土が特に多いことがわかるが、集中箇所がわかれてお

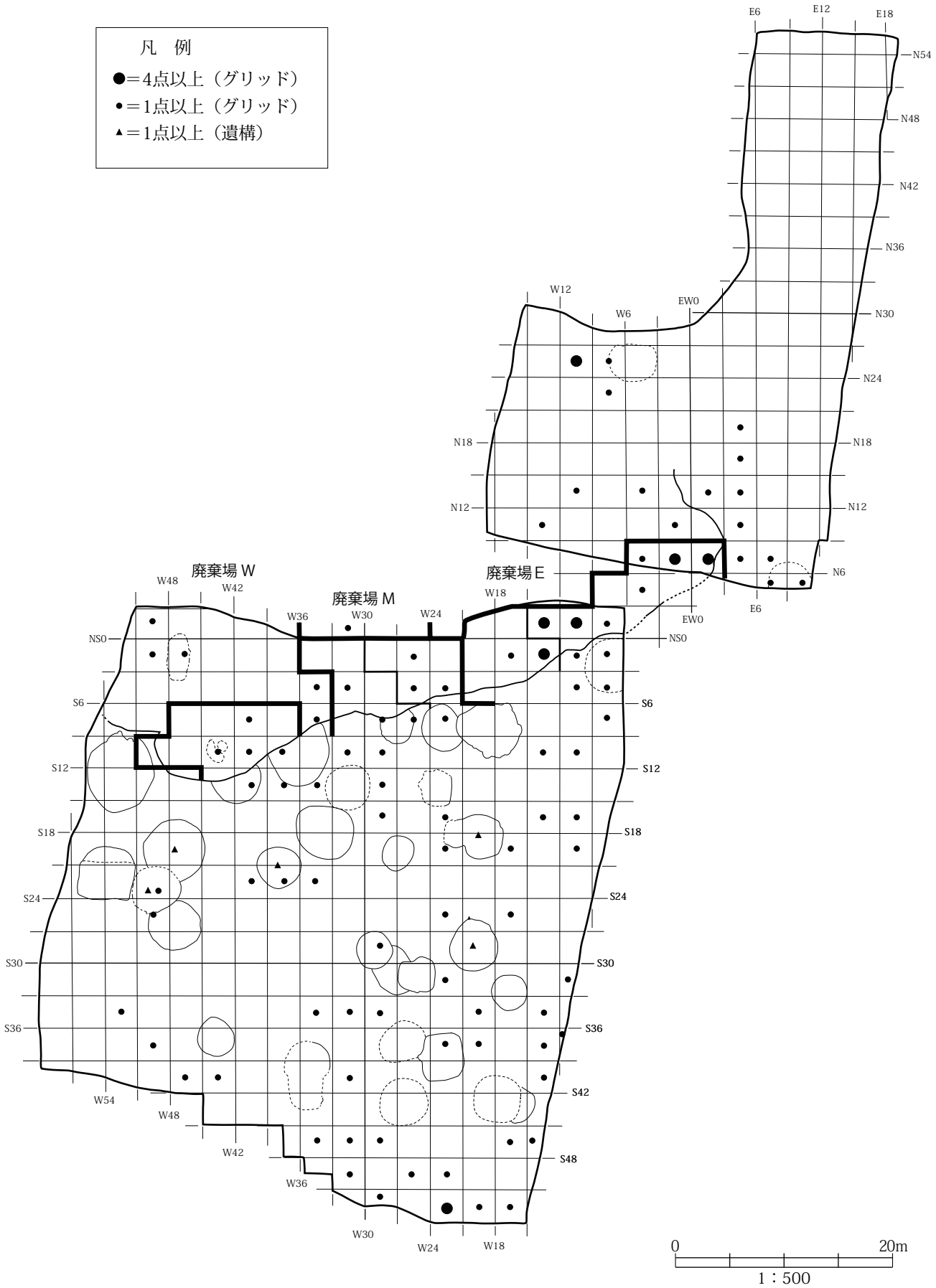


図103　小型石棒、石剣・刀、石冠出土量分布図

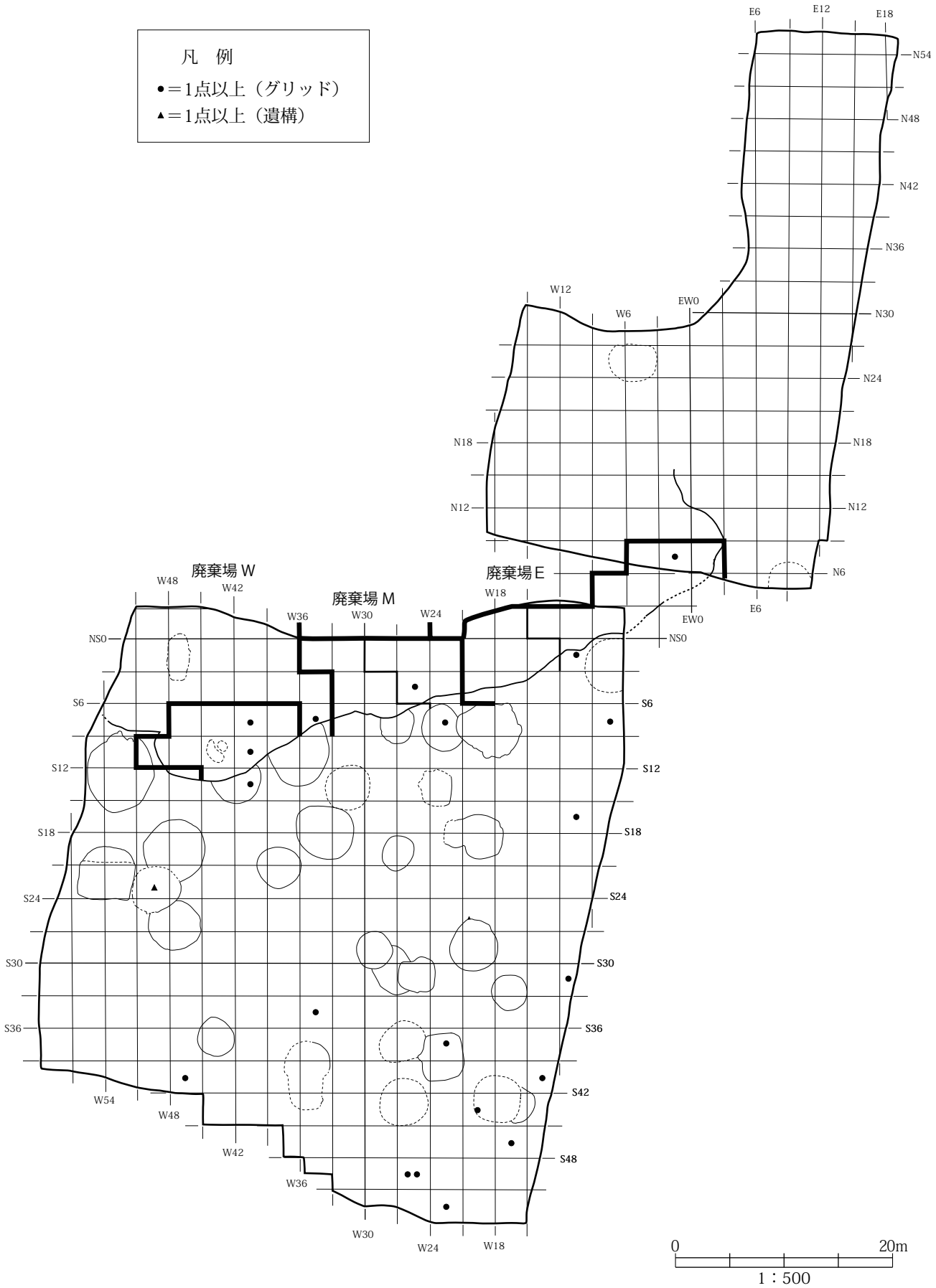


図104　残存率1/2以上の小型石棒、石剣・刀出土分布図

り、E1 の東端と、E1 と E2 の境付近、M1 の南半の 3 カ所で 5 点以上出土している。土器の分布で見ると晩期前葉の口縁部重量分布図と似た傾向が読み取れる。廃棄場以外で 5 点以上出土しているグリッドは N27W9 と S51W21 の 2 地点のみである。集落の中心部から離れた場所であり、遺構・遺物の過疎地から小型石棒類がまとまって出土した。N27W9 からは遺存状態がきわめて悪い石剣と石刀の破片のみであったが、S51W21 出土のものは残存率概ね 50％以上であった。出土状況を見ても、前者は廃棄されたものと推測できるが、後者は廃棄されたとも言い難い。S51W21 は、他の祭祀遺物の出土量は多くなく、小型石棒類の使用に特化した場所であった可能性が考えられる。また、晩期中葉の遺物が出土する比率の極めて高い 22 号住居と関連グリッドや S21W21 からは、小型石棒類の出土が全く見られなかった。

型式の判明する石剣・刀の分布状況を見てみると、晩期前葉に帰属すると考えられるなすな原型石刀の No.1212 は N9W0 で廃棄場 E1 から、No.1216 は S39W12 から出土している。小谷型石刀の No.1214 は廃棄場 M2 のすぐ北側である N3W30 から、東北原型石剣の No.1211 は廃棄場 E1 東端である N9E3 からそれぞれ出土している。

(4)　製作技術・技法

本遺跡の剥離技術を考える上では接合作業の必要性があるが、剥片・砕片の出土量が 7 万点を超えることから、剥片の大半を占める小形打製石器に用いられる黒曜石などの石材での接合は断念した。出土点数が限られている大形打製石器に用いられる石材を中心に接合を実施した。その結果、11 点の接合に留まり、製作技法等は明らかにならなかった。

剥片の量に対し石核はわずか 442 点の出土と少ないことも特筆すべきである。

(5)　まとめと課題

石器・石製品の各組成や出土分布を見ることによって、縄文後・晩期においての本遺跡の性格や特徴を明らかにしようと試みた。遺構の帰属時期が明瞭でないことが多かったが、遺構別器種組成からは、おおよそ縄文中期、後期、晩期にそれぞれ画期が見られた。

本遺跡の最大の特徴としては、小形打製石器の出土量の多さで、特に石鏃は全体の 5 割以上もある。縄文後期以降に見られる有茎鏃の分布状況は、無茎鏃と若干の違いが表れた。廃棄場の中で考えると、有形鏃出土量のピークが、無茎鏃より時期が新しくなる。

縄文後・晩期に特有の小型石棒類や石冠といった祭祀具については、廃棄場での出土傾向や、縄文晩期中葉の一括性の高いグリッドでの出土量の少なさから、祭祀具の出土量のピークは晩期前葉にあると考えられる。

各器種の出土量と特定の器種の分布状況を中心に考察したが､混入品が多数含まれるケースがほとんどで、帰属時期の決定が困難であったため、今回行った考察にも限界がある。出土状況以外だけでなく、黒曜石等の搬入礫の産地同定や科学的な分析など遺物自体にフォーカスした分析の必要性も強く感じる。また、中部高地の中での本遺跡出土の石器・石製品の特徴など、解明できなかった点がある。

［石鏃］

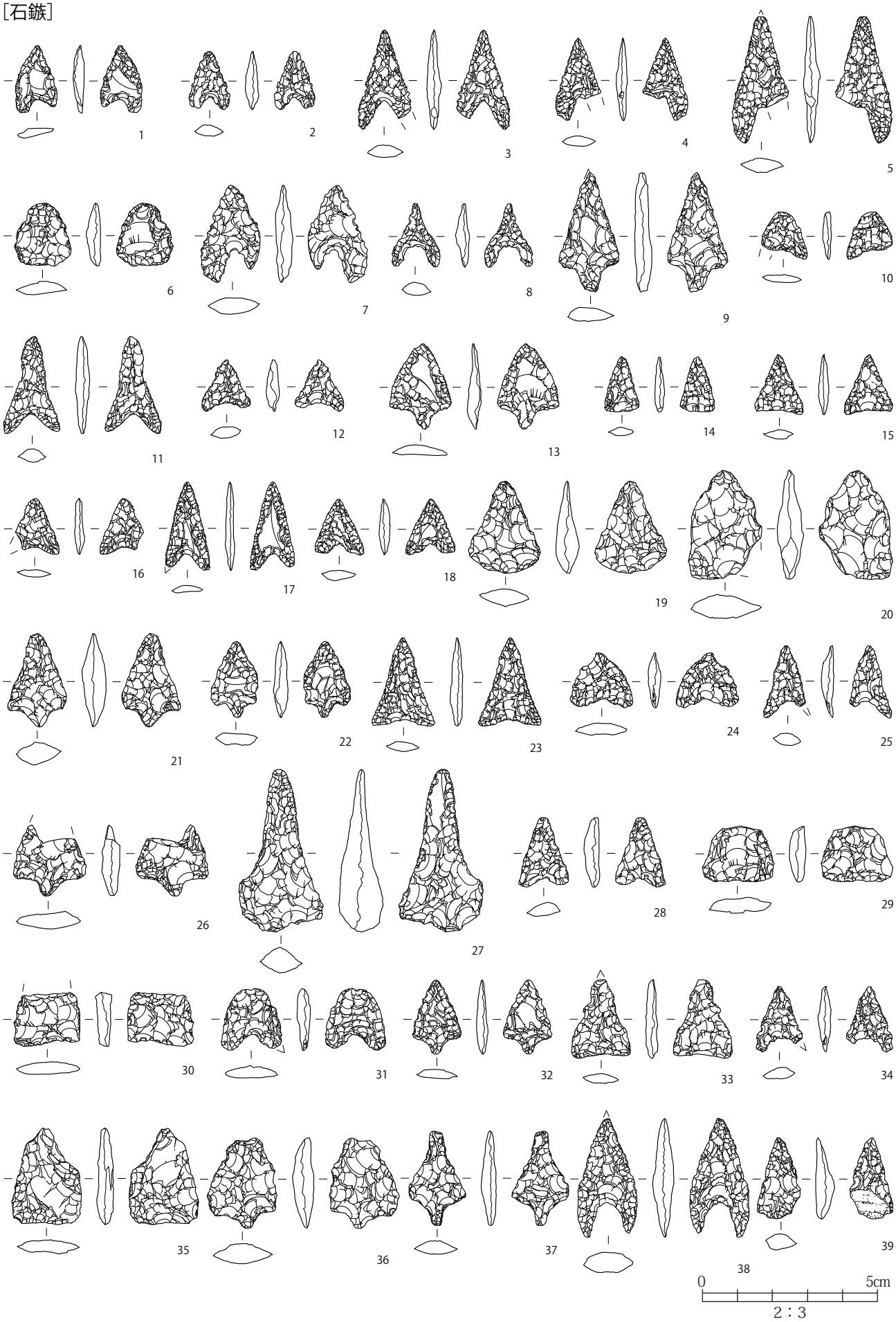


図 105　石器・石製品実測図 (1)

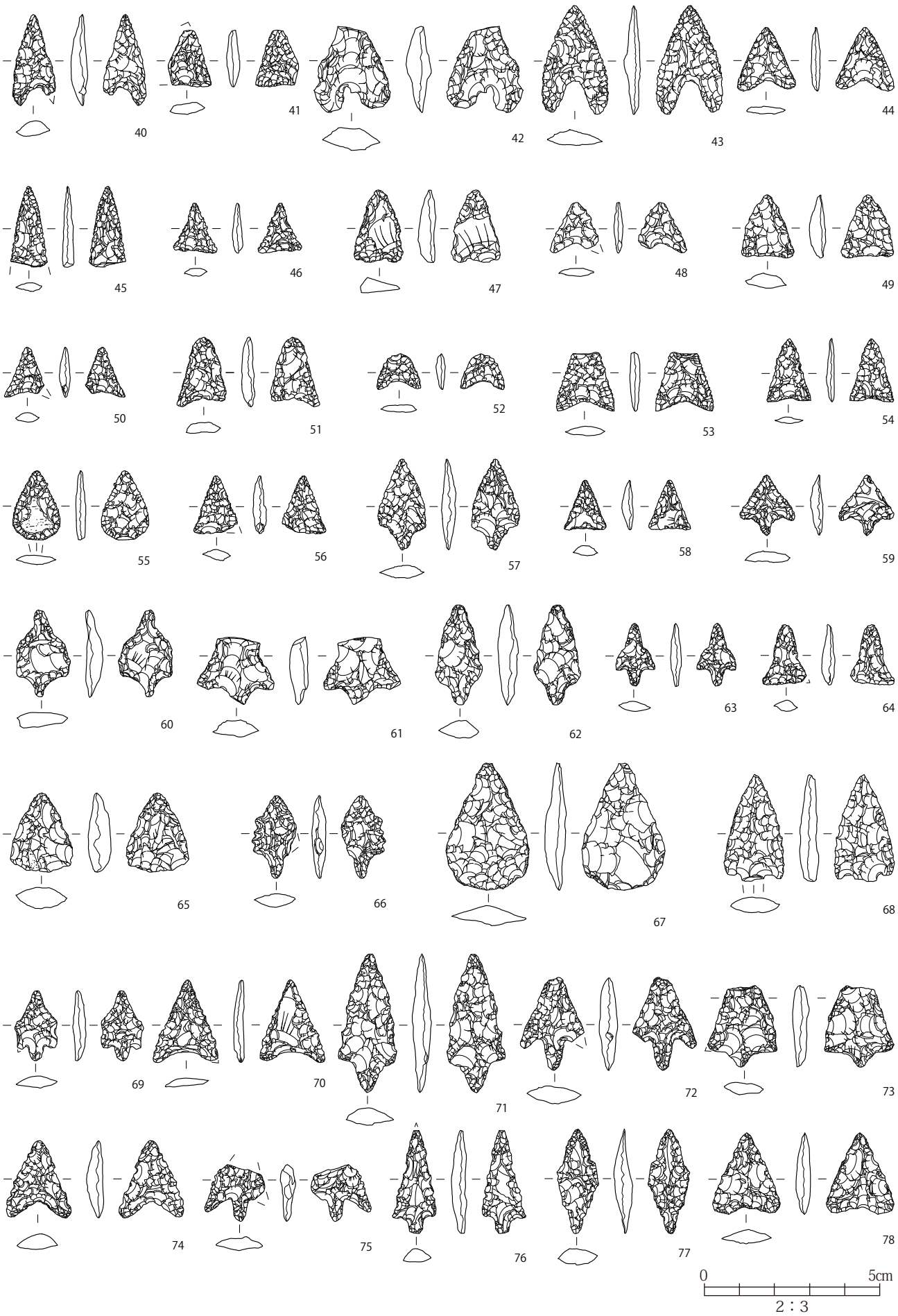


図 106　石器・石製品実測図 (2)

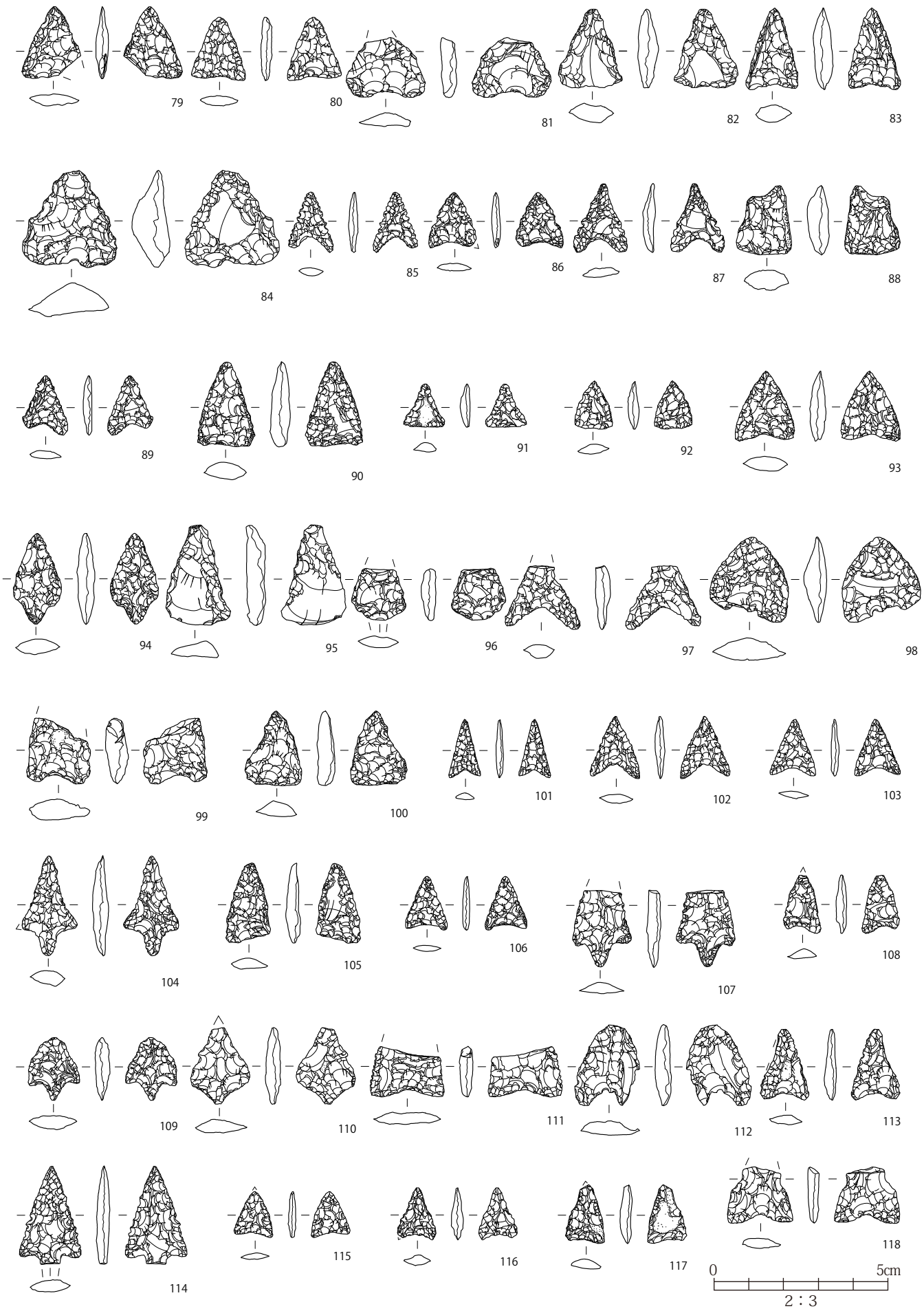


図 107　石器・石製品実測図 (3)

図 108　石器・石製品実測図 (4)

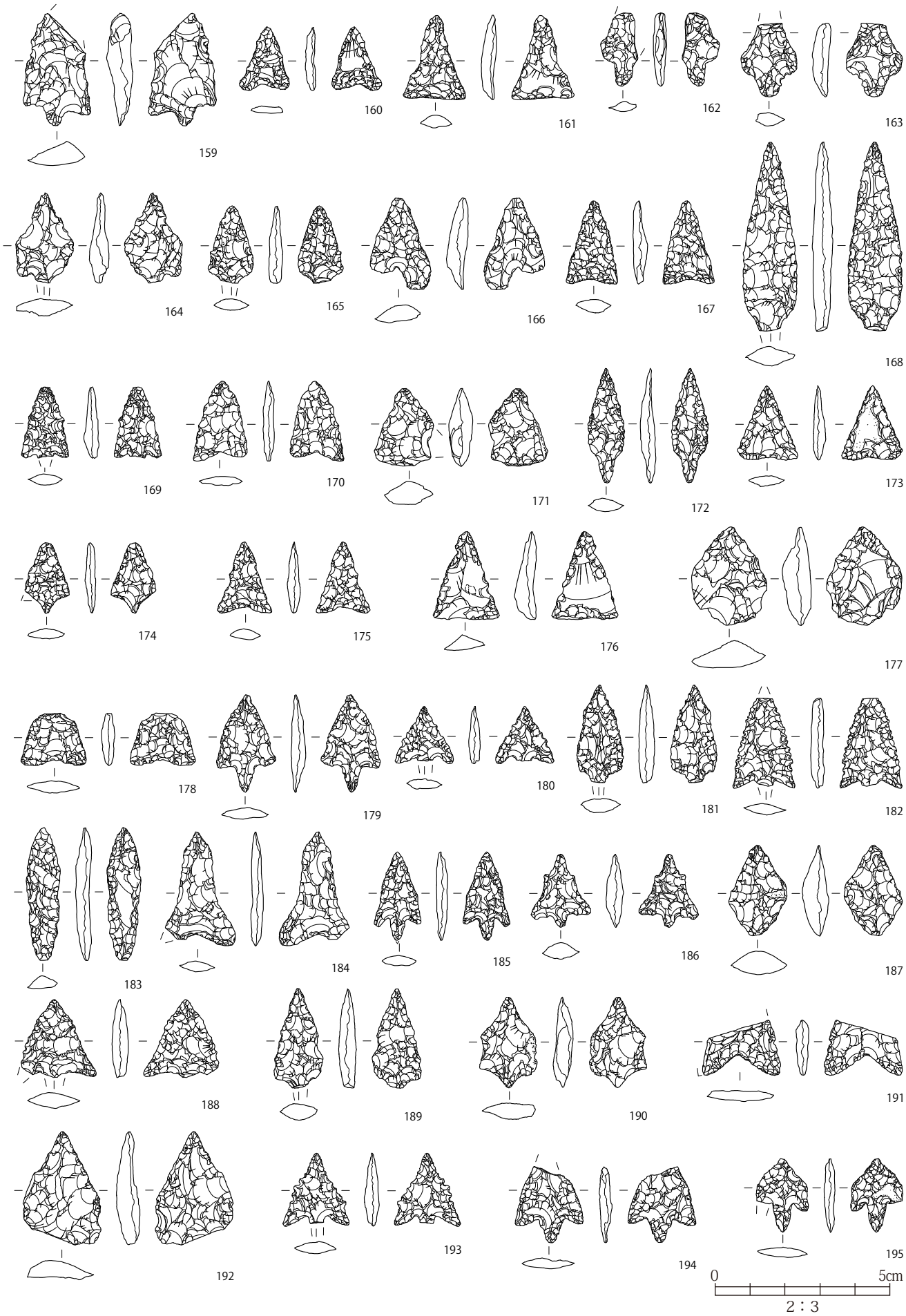


図 109　石器・石製品実測図 (5)

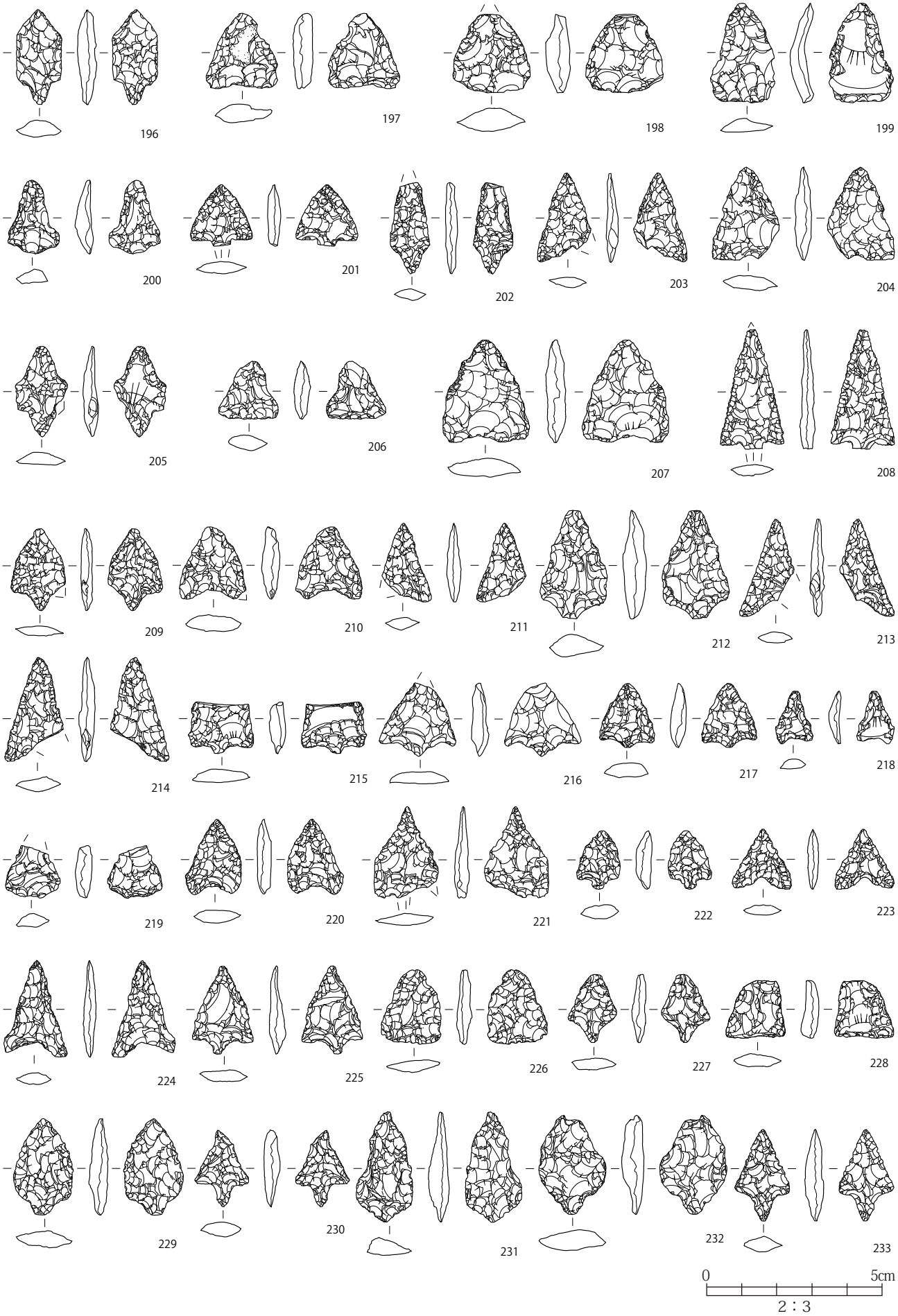


図 110　石器・石製品実測図 (6)

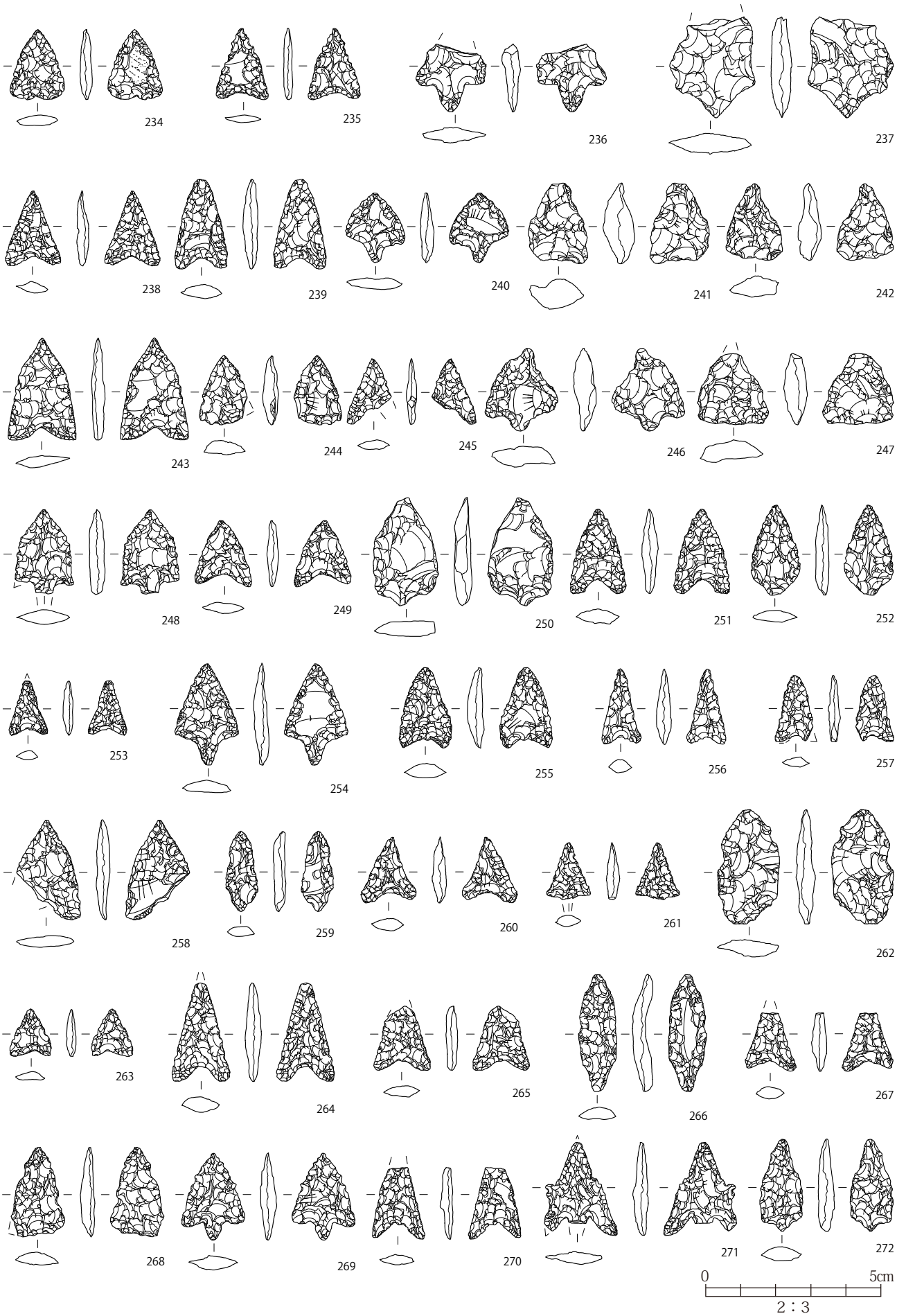


図 111　石器・石製品実測図 (7)

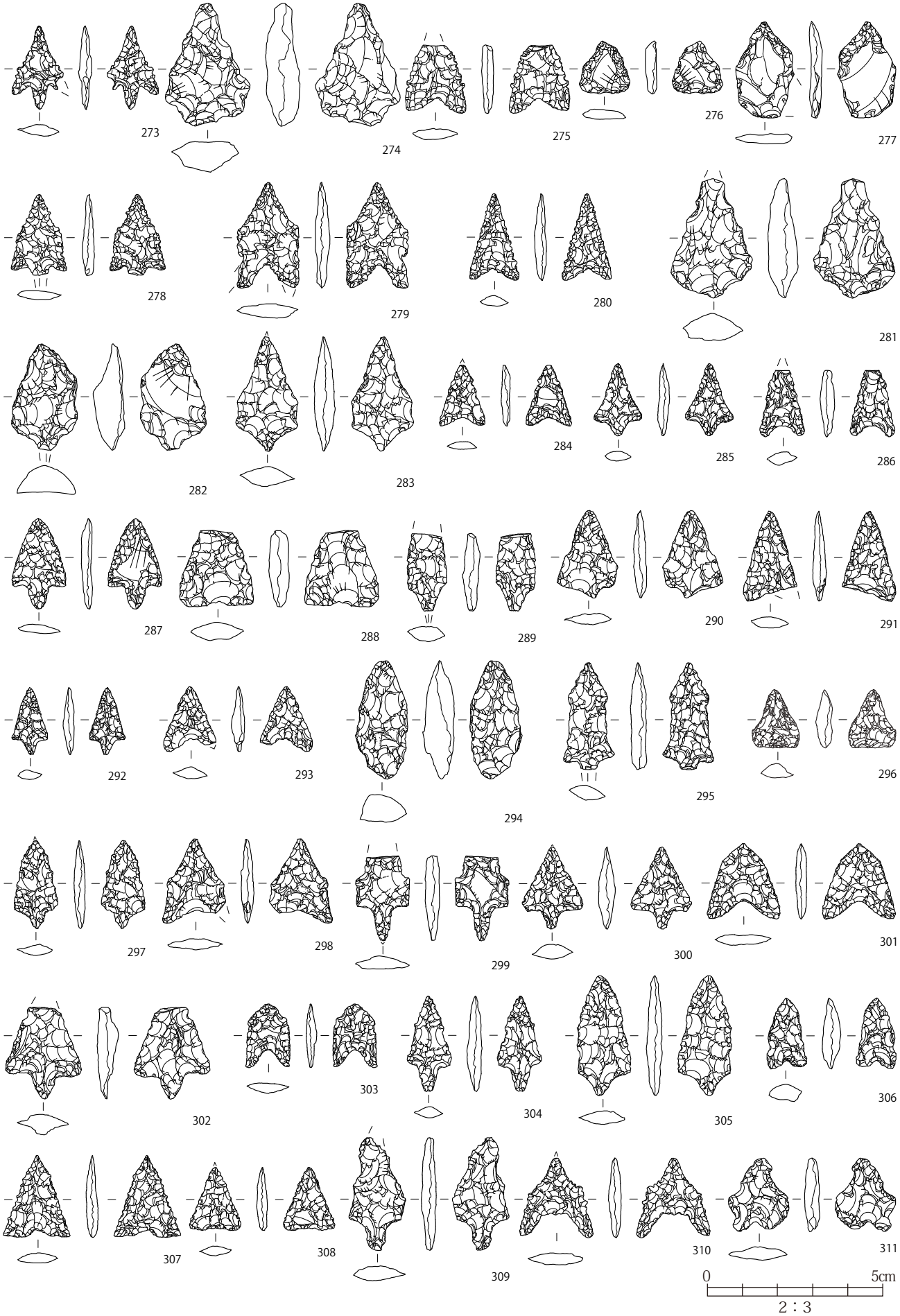


図 112　石器・石製品実測図 (8)

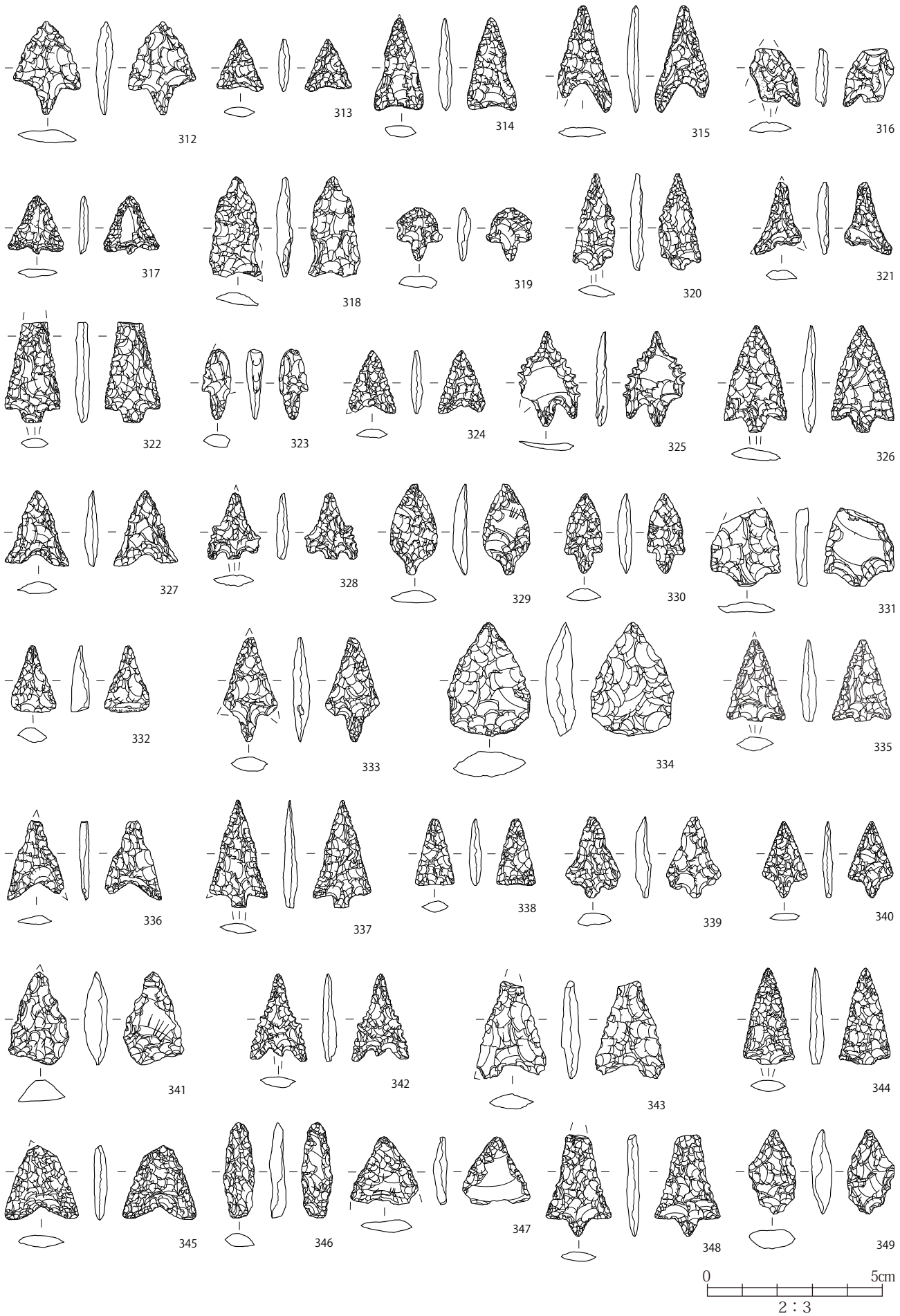


図 113　石器・石製品実測図 (9)

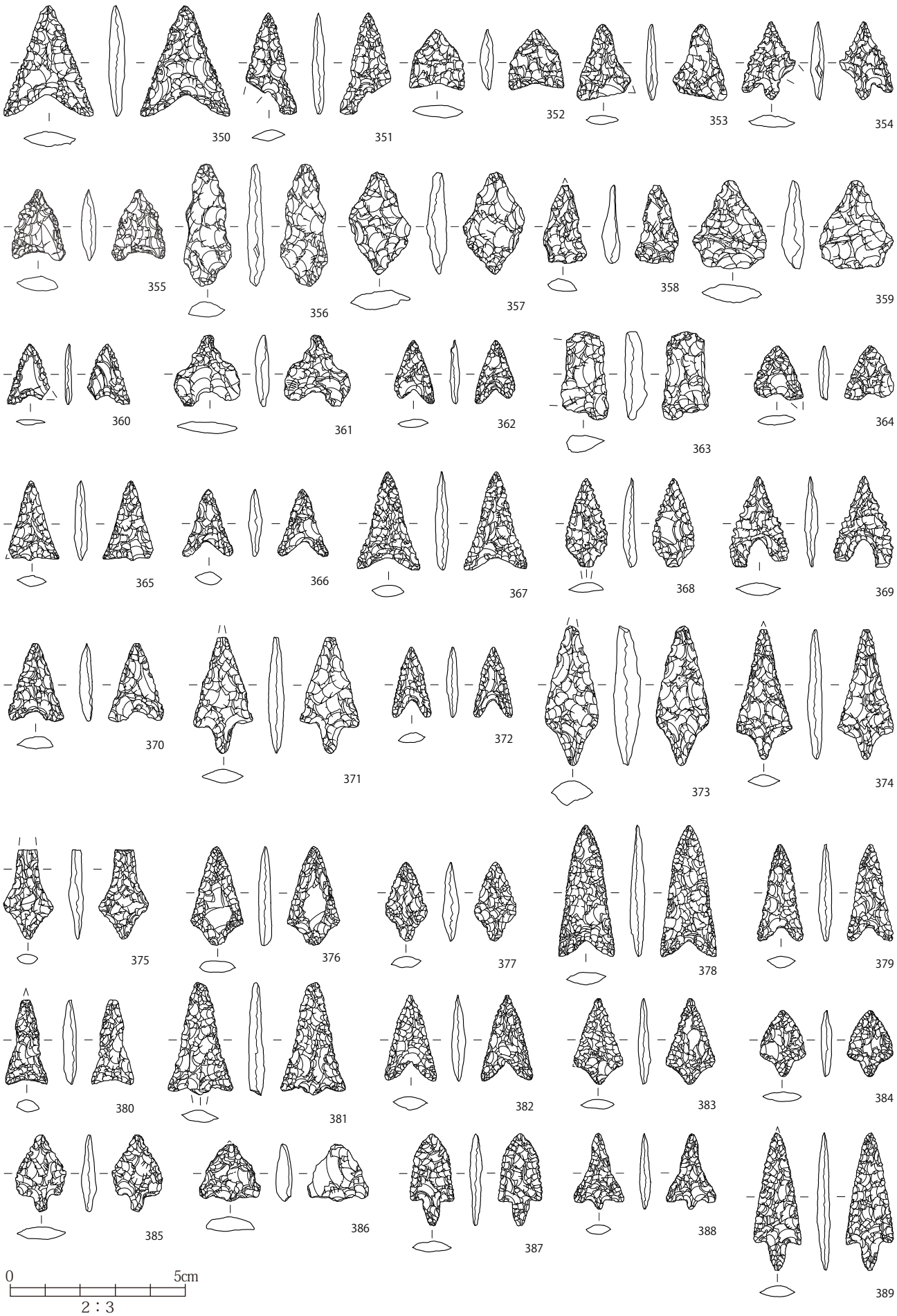


図 114　石器・石製品実測図 (10)

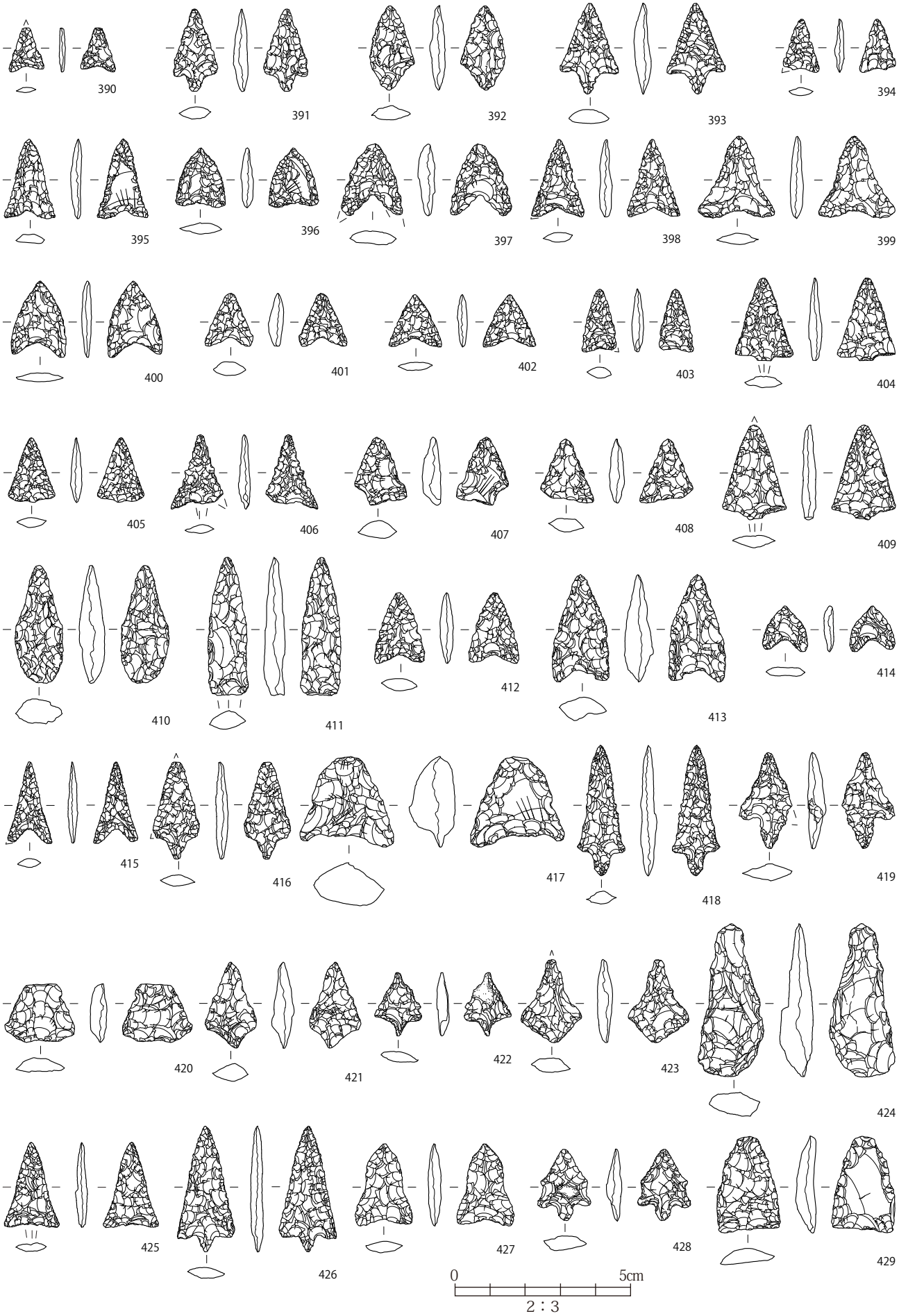


図 115　石器・石製品実測図 (11)

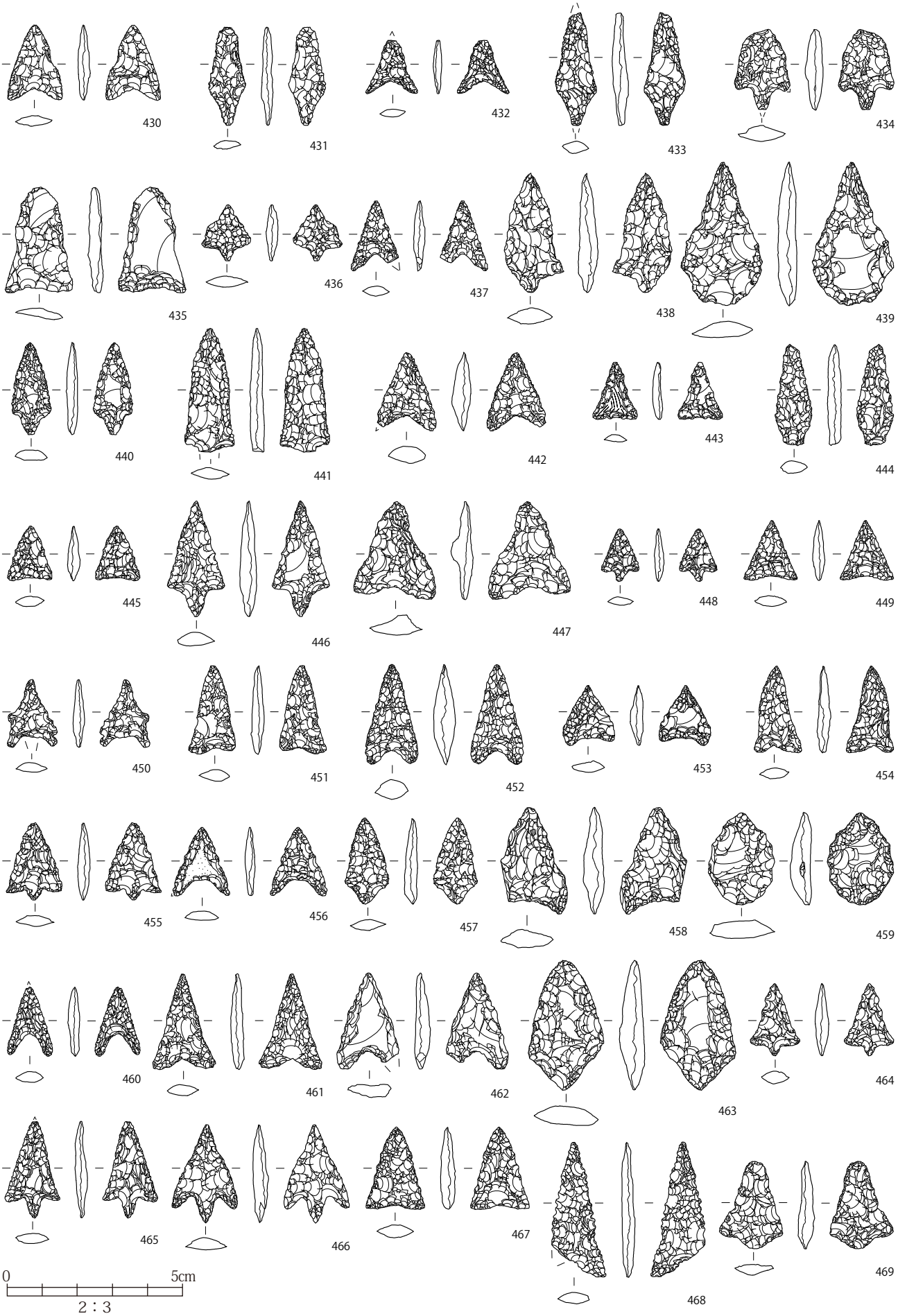


図 116　石器・石製品実測図 (12)

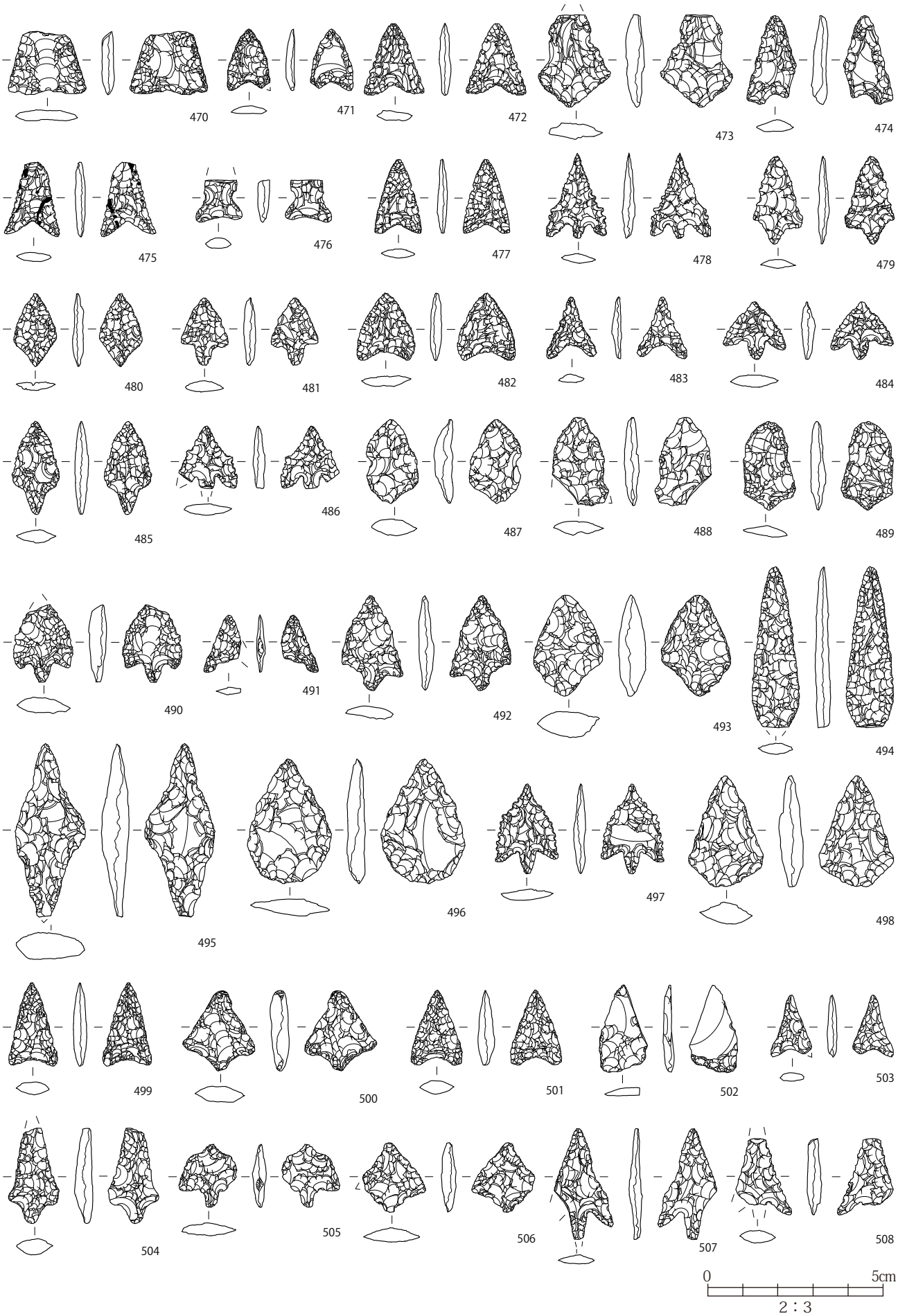


図 117　石器・石製品実測図 (13)

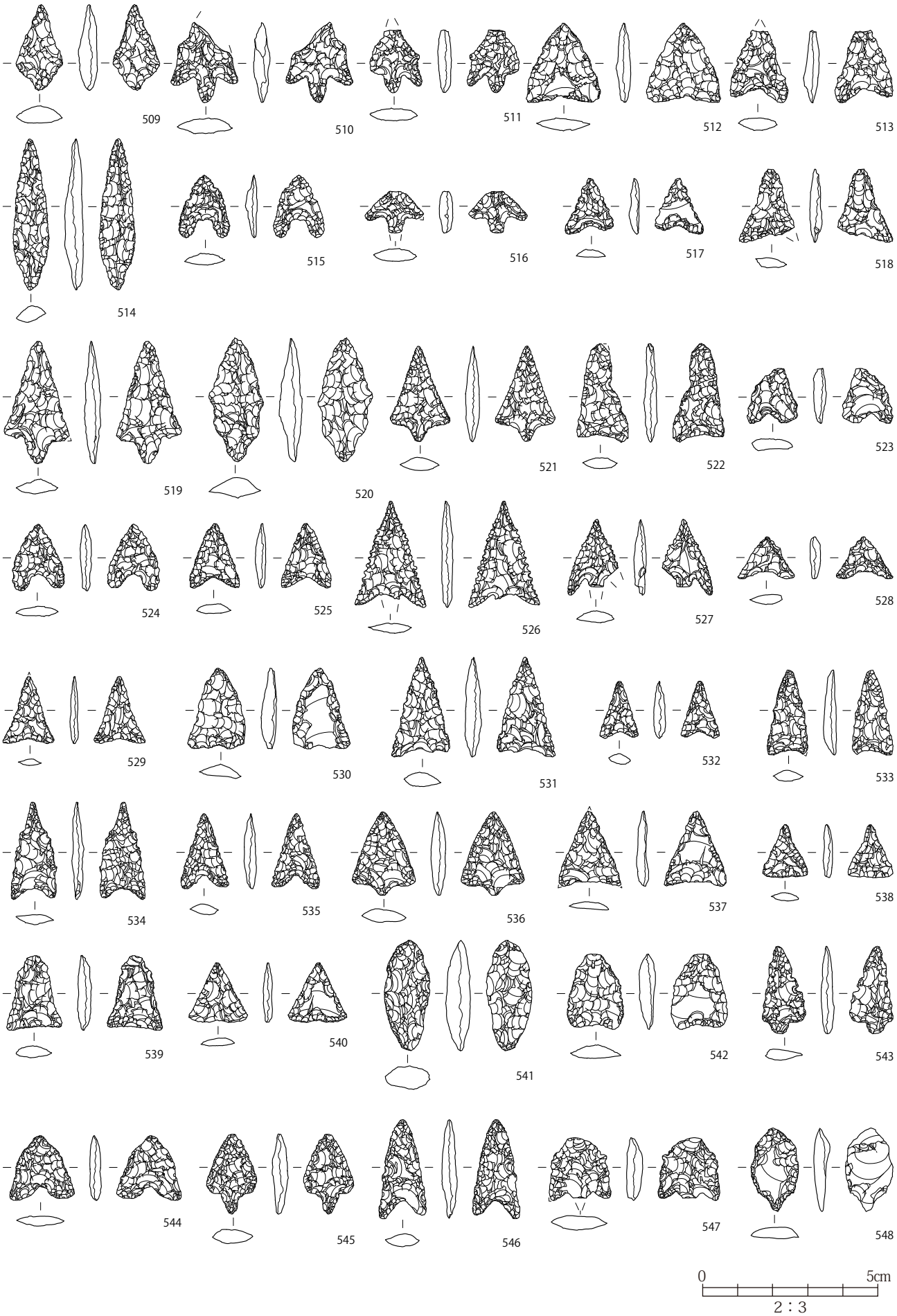


図 118　石器・石製品実測図 (14)

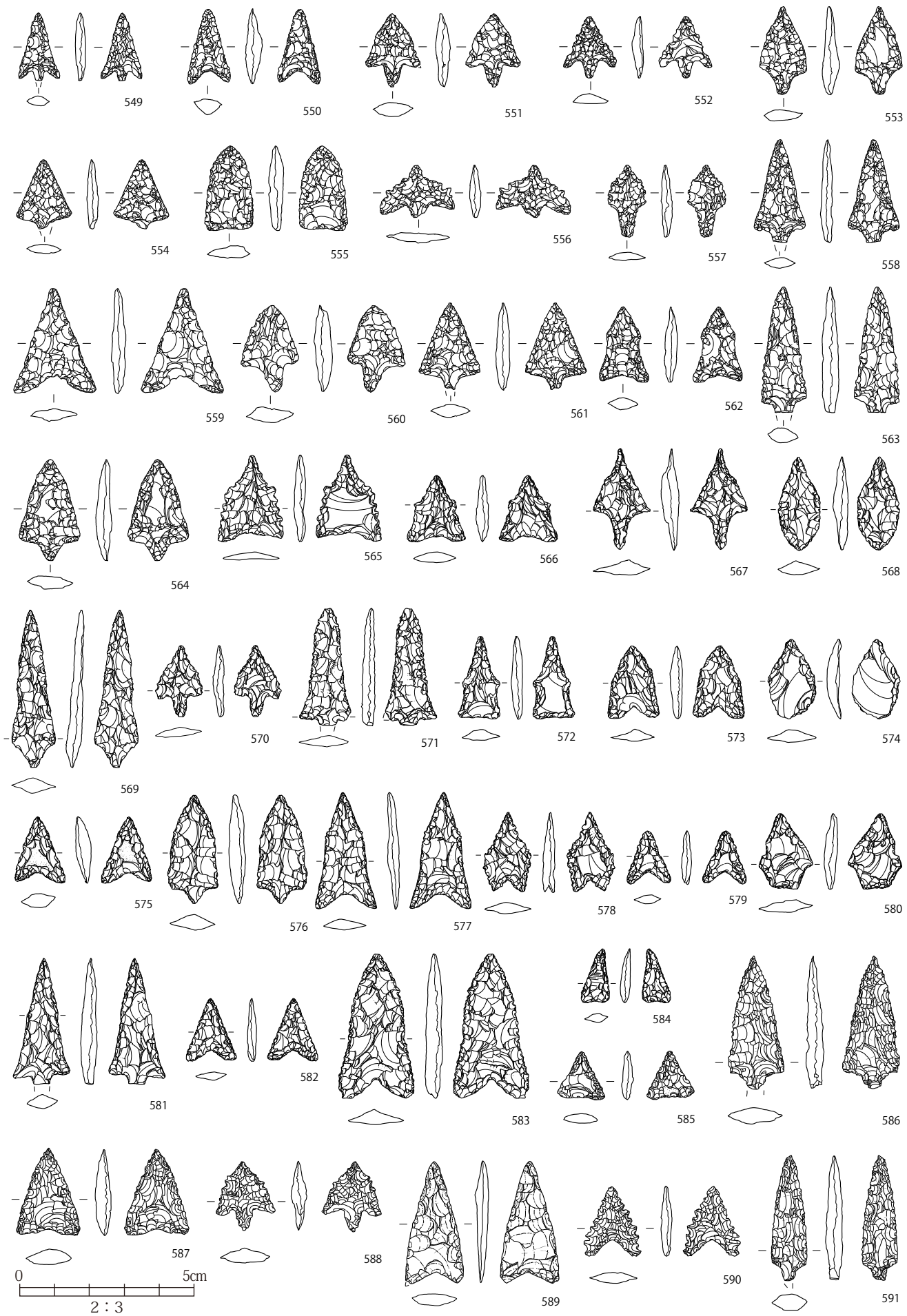


図 119　石器・石製品実測図 (15)

［石錐］

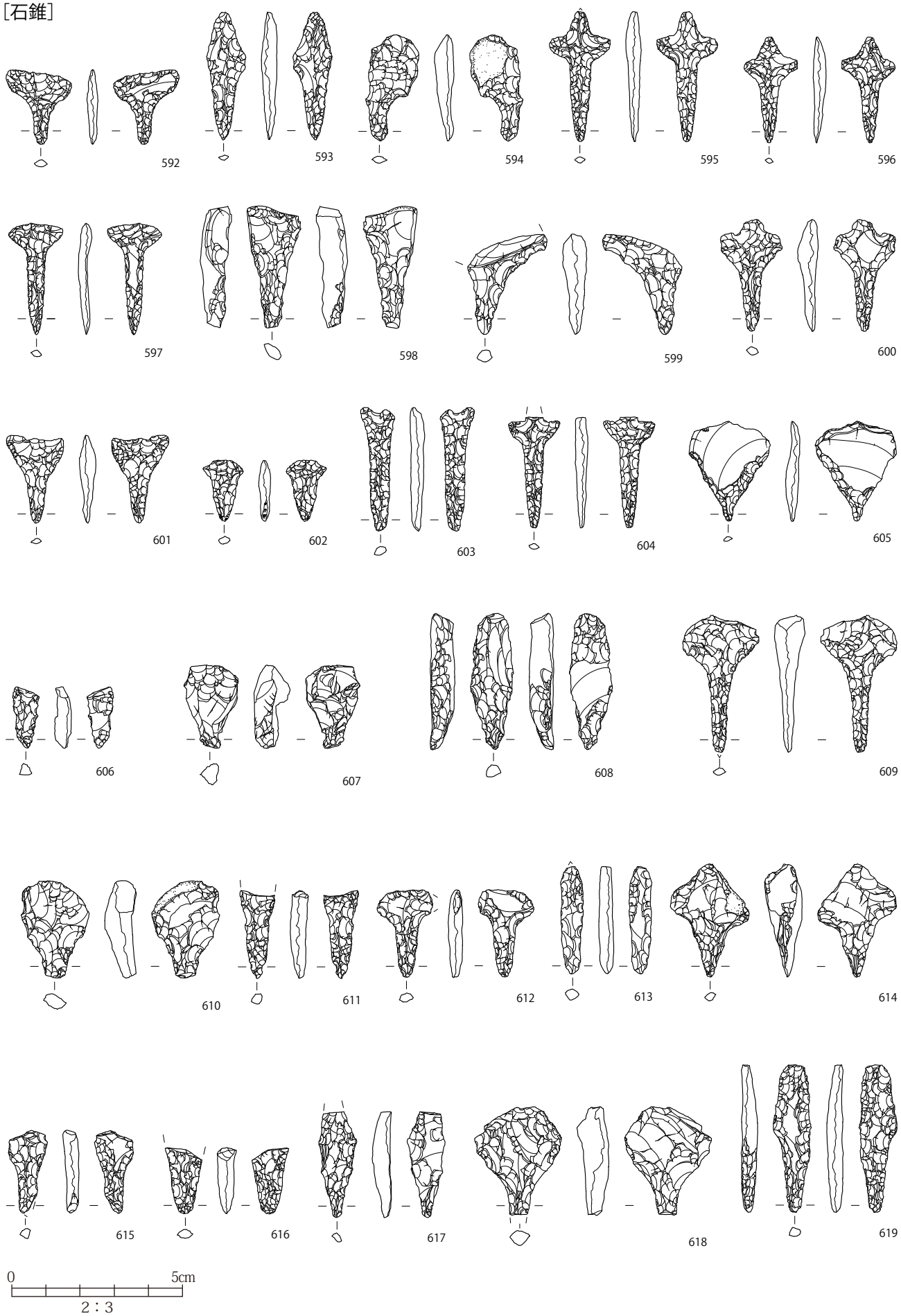


図 120　石器・石製品実測図 (16)

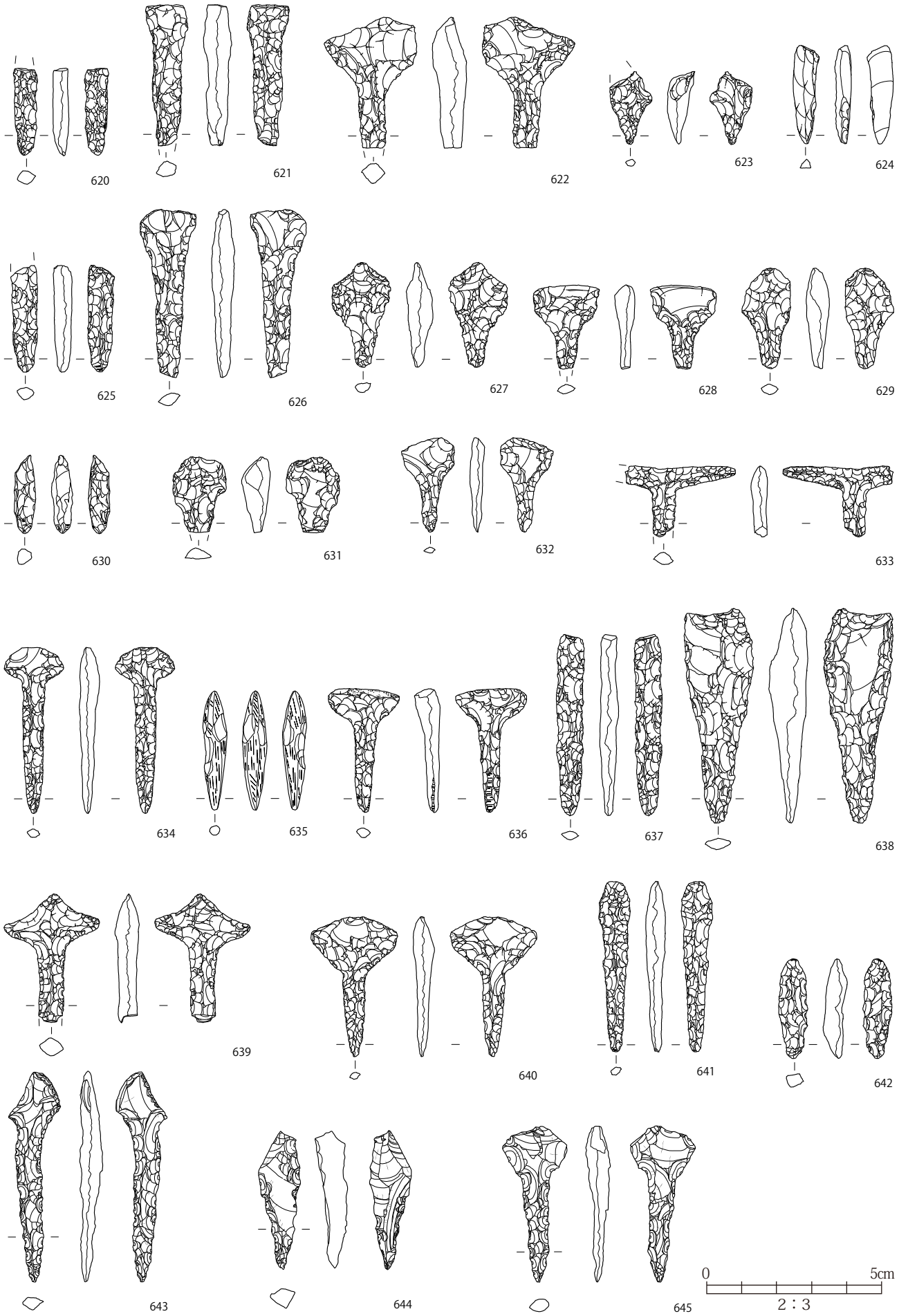


図 121　石器・石製品実測図 (17)

［小形刃器類］

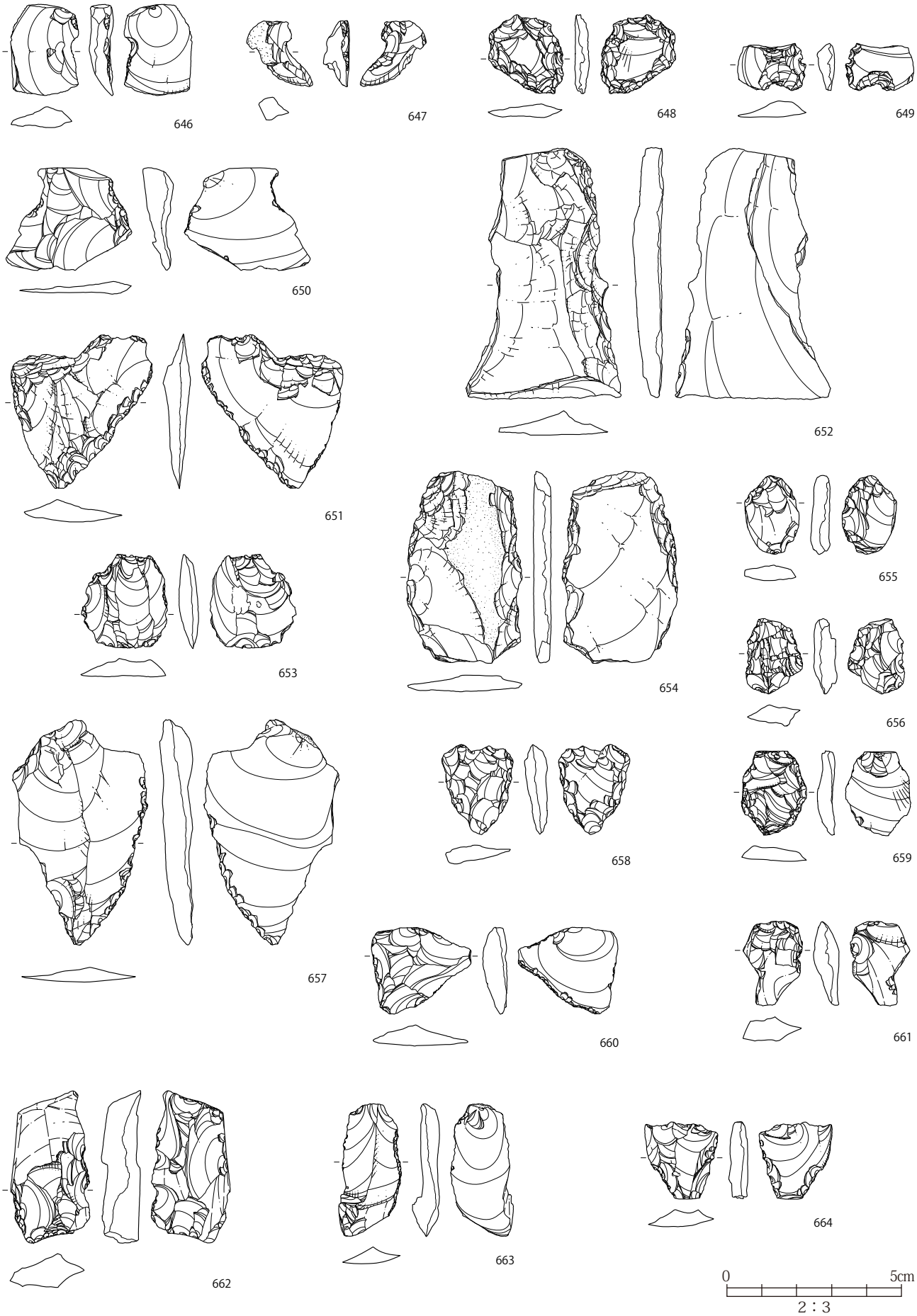


図 122　石器・石製品実測図 (18)

図 123　石器・石製品実測図 (19)

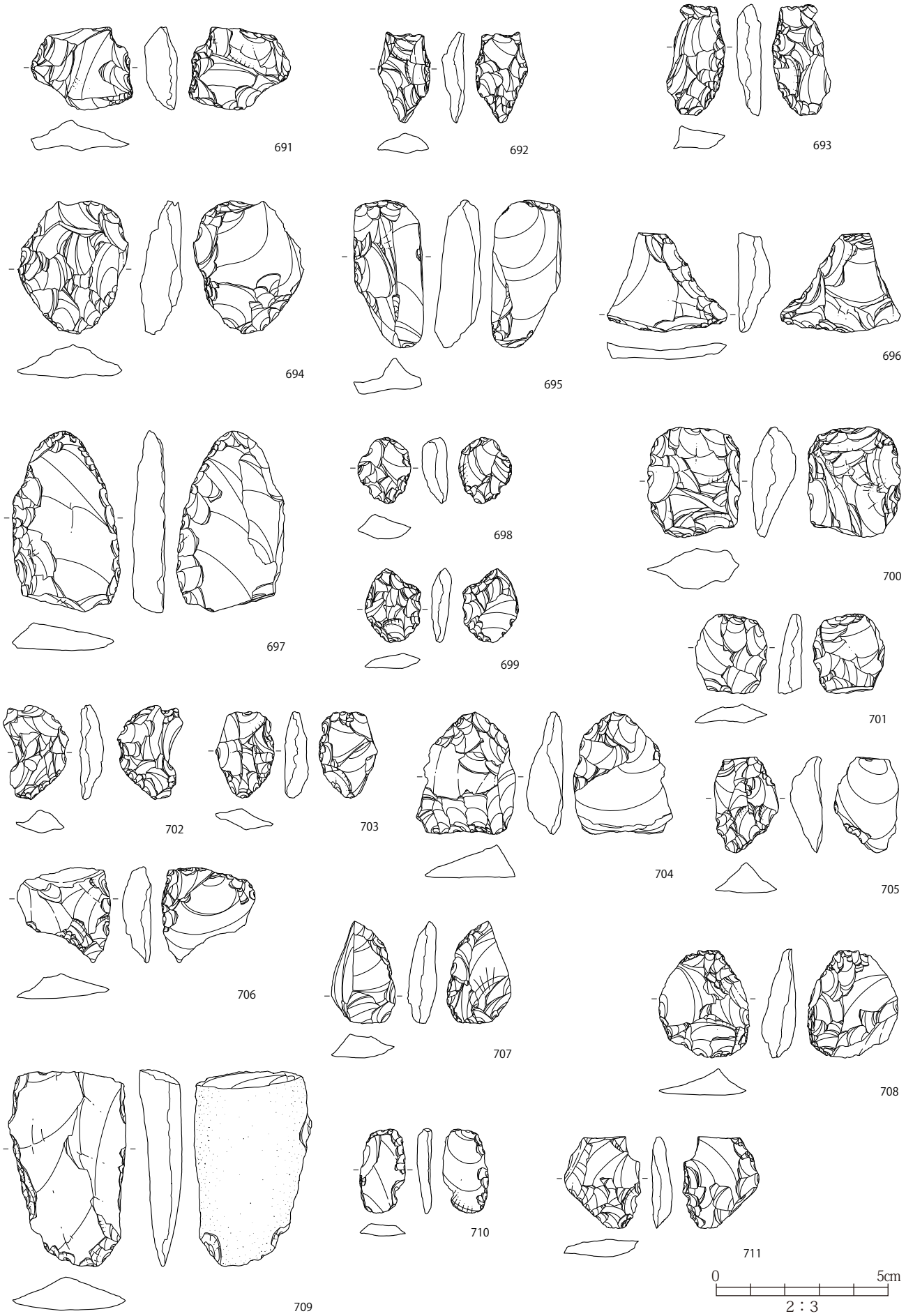


図 124　石器・石製品実測図 (20)

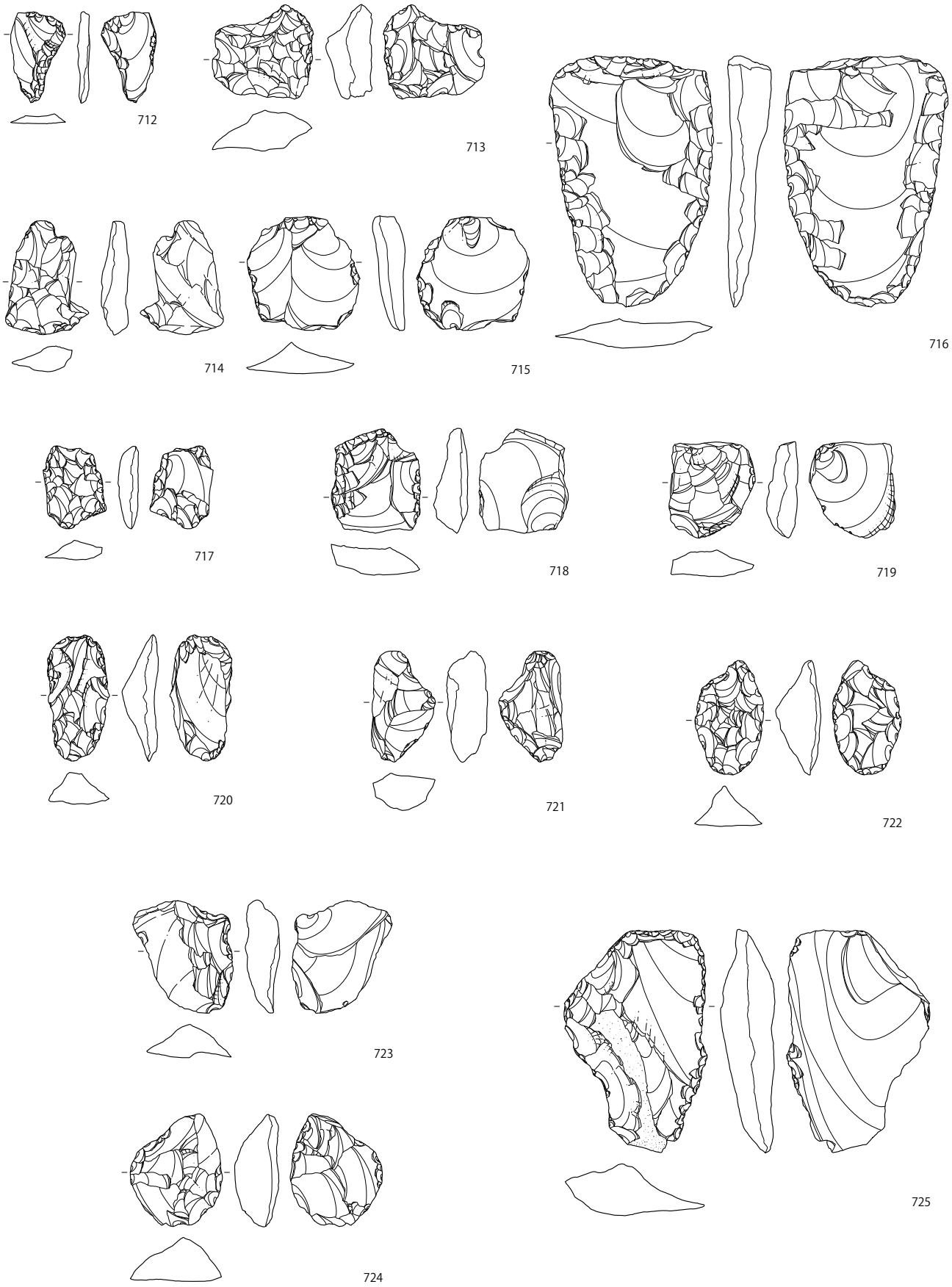


図 125　石器・石製品実測図 (21)

［楔形石器］

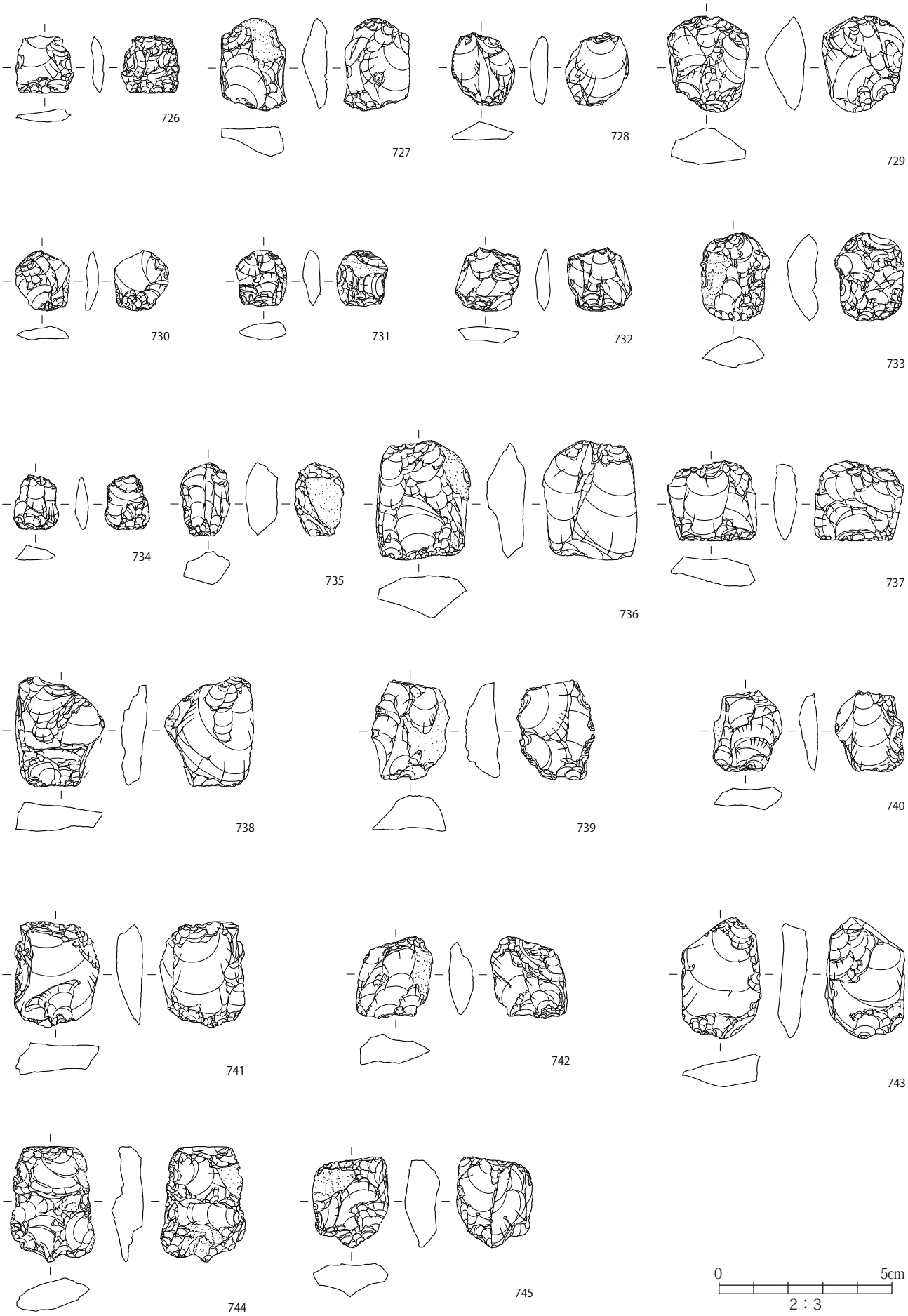


図 126　石器・石製品実測図 (22)

［打製石斧］

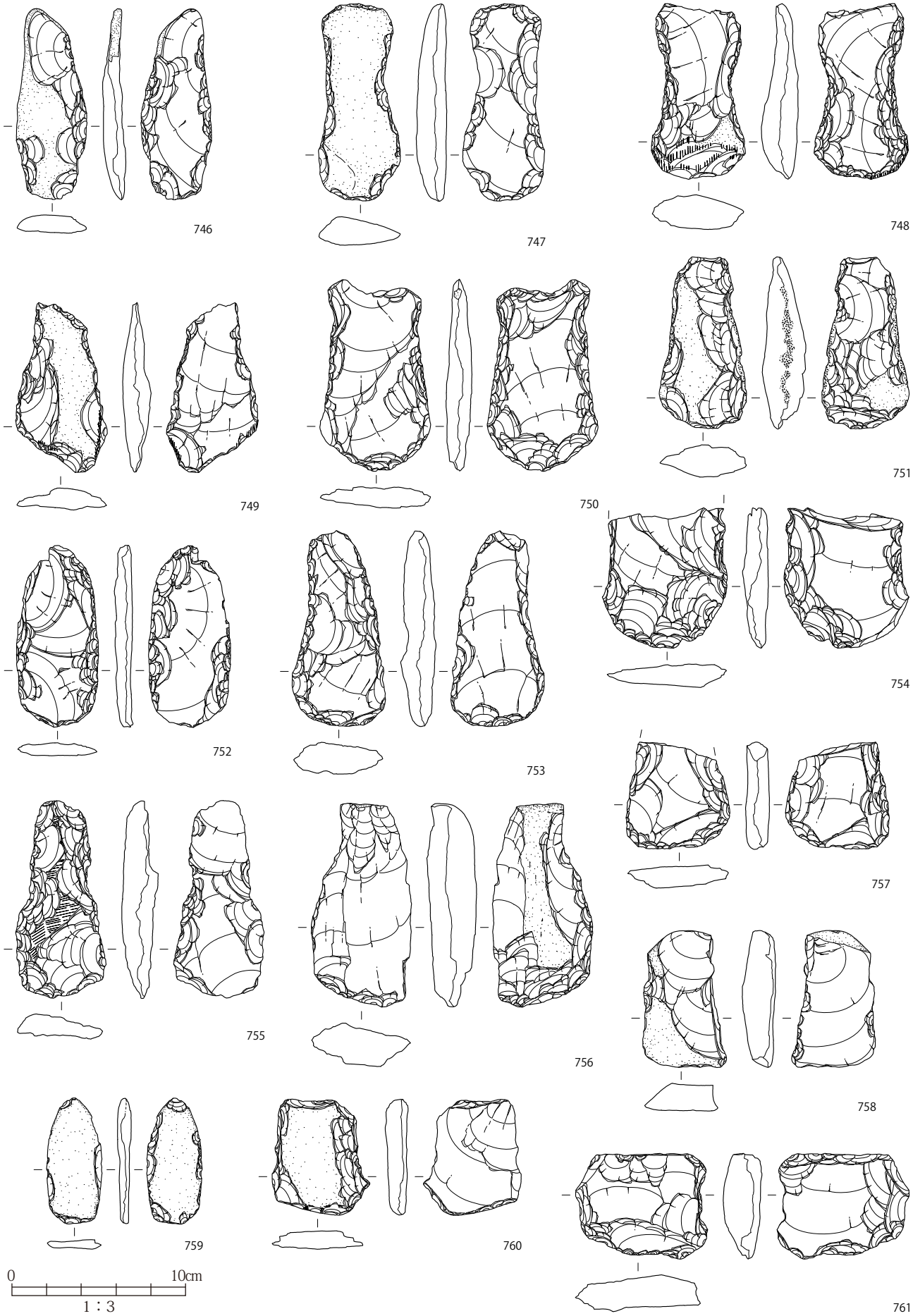


図 127　石器・石製品実測図 (23)

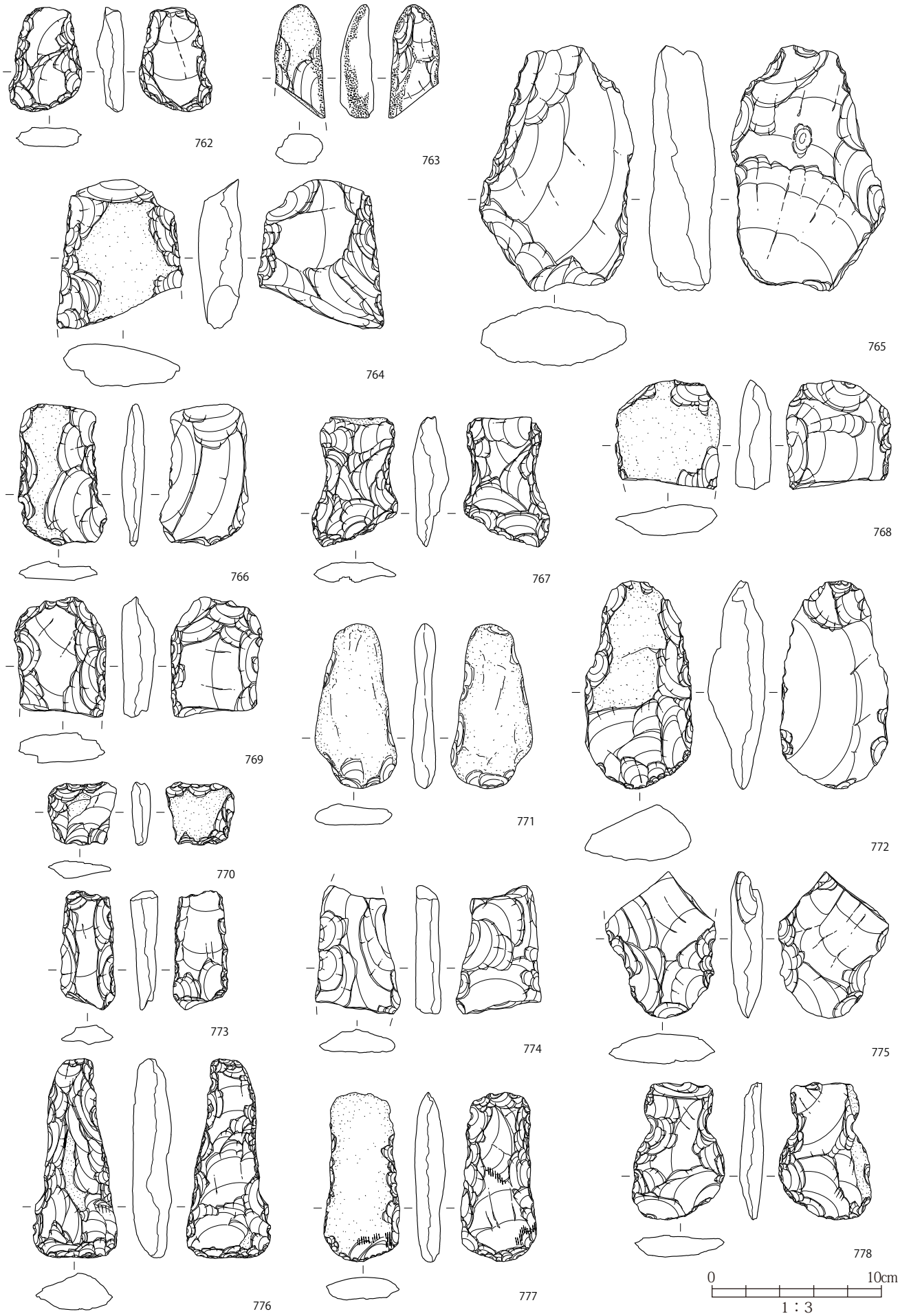


図 128　石器・石製品実測図 (24)

図 129　石器・石製品実測図 (25)

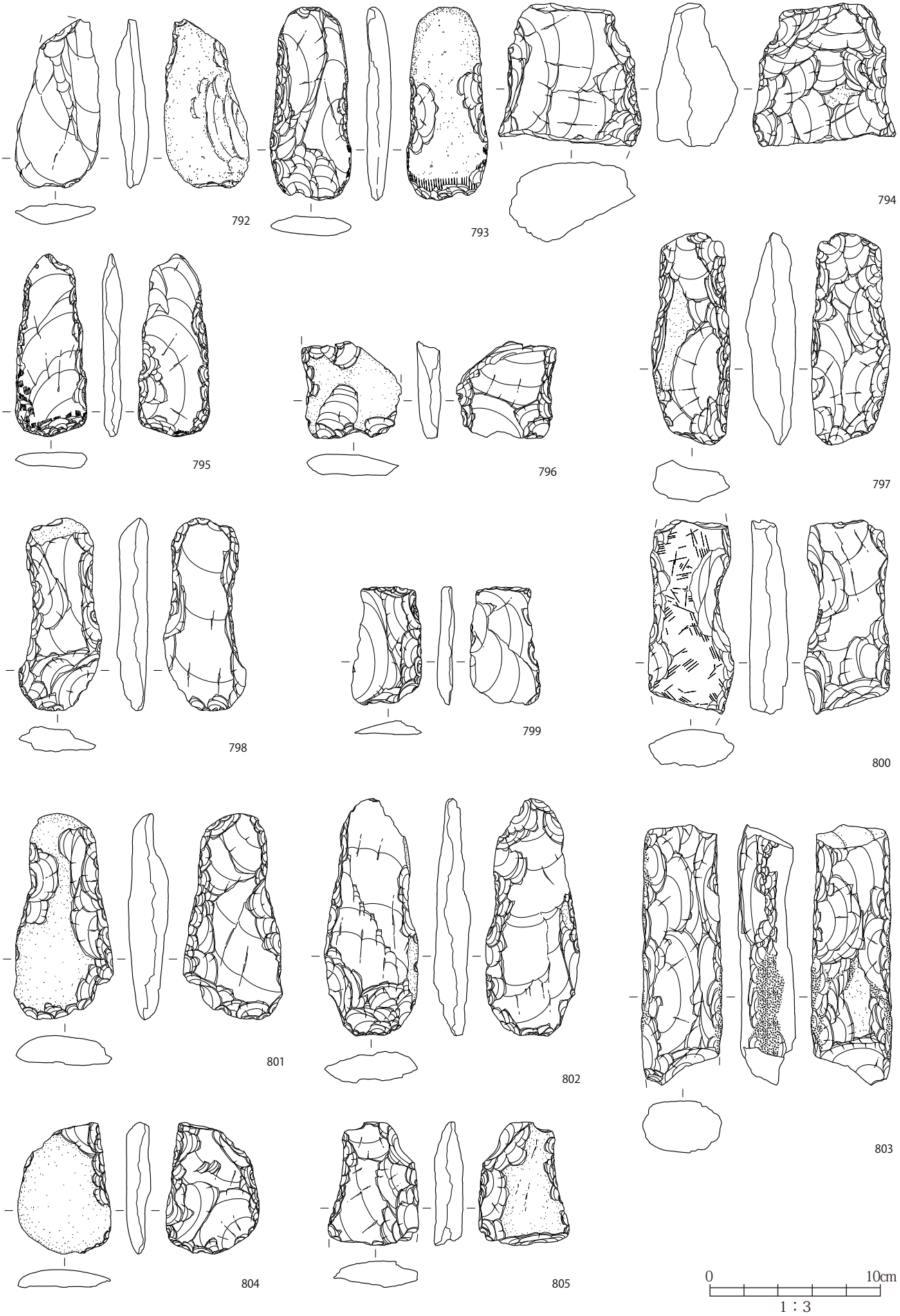


図 130　石器・石製品実測図 (26)

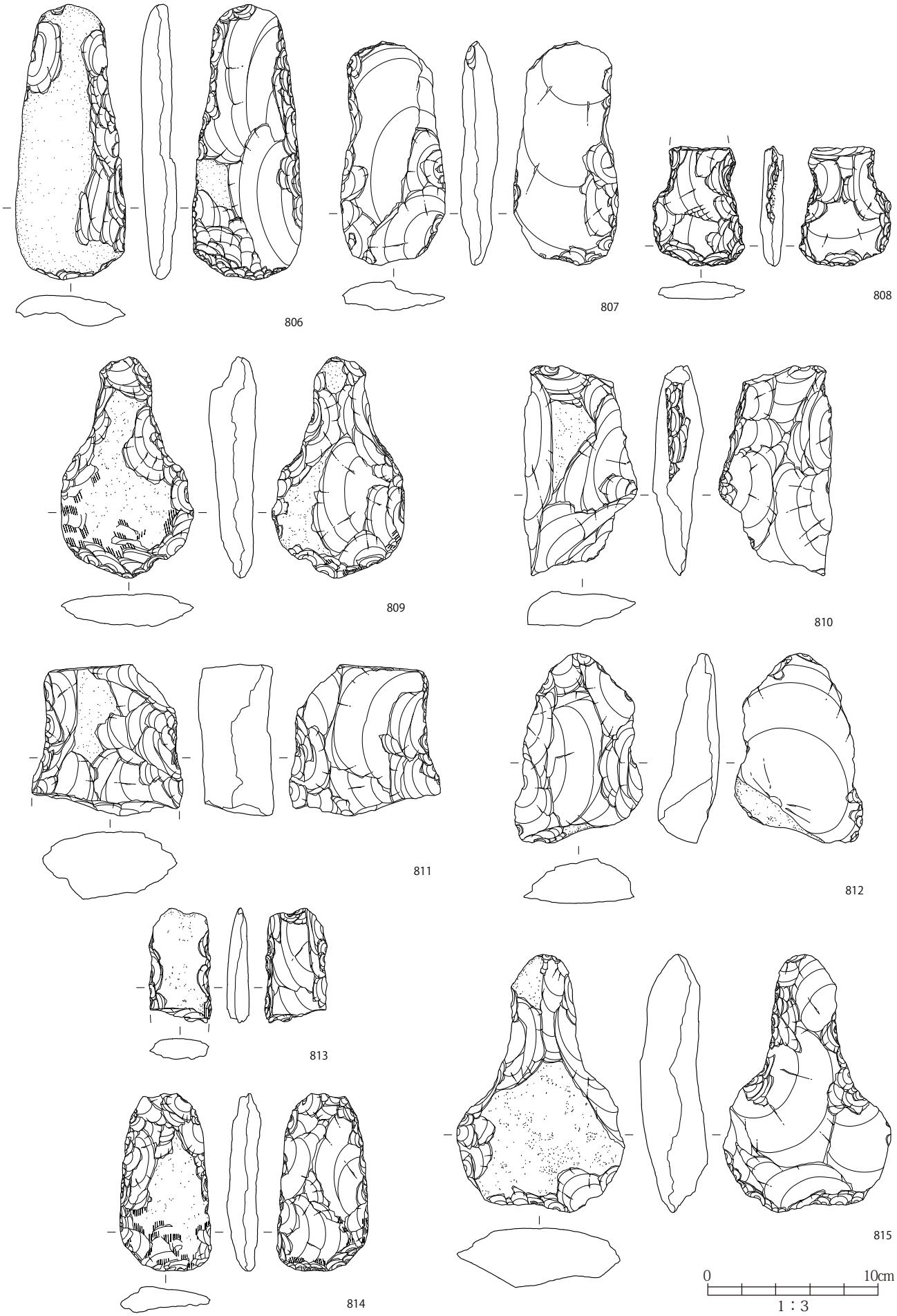


図 131　石器・石製品実測図 (27)

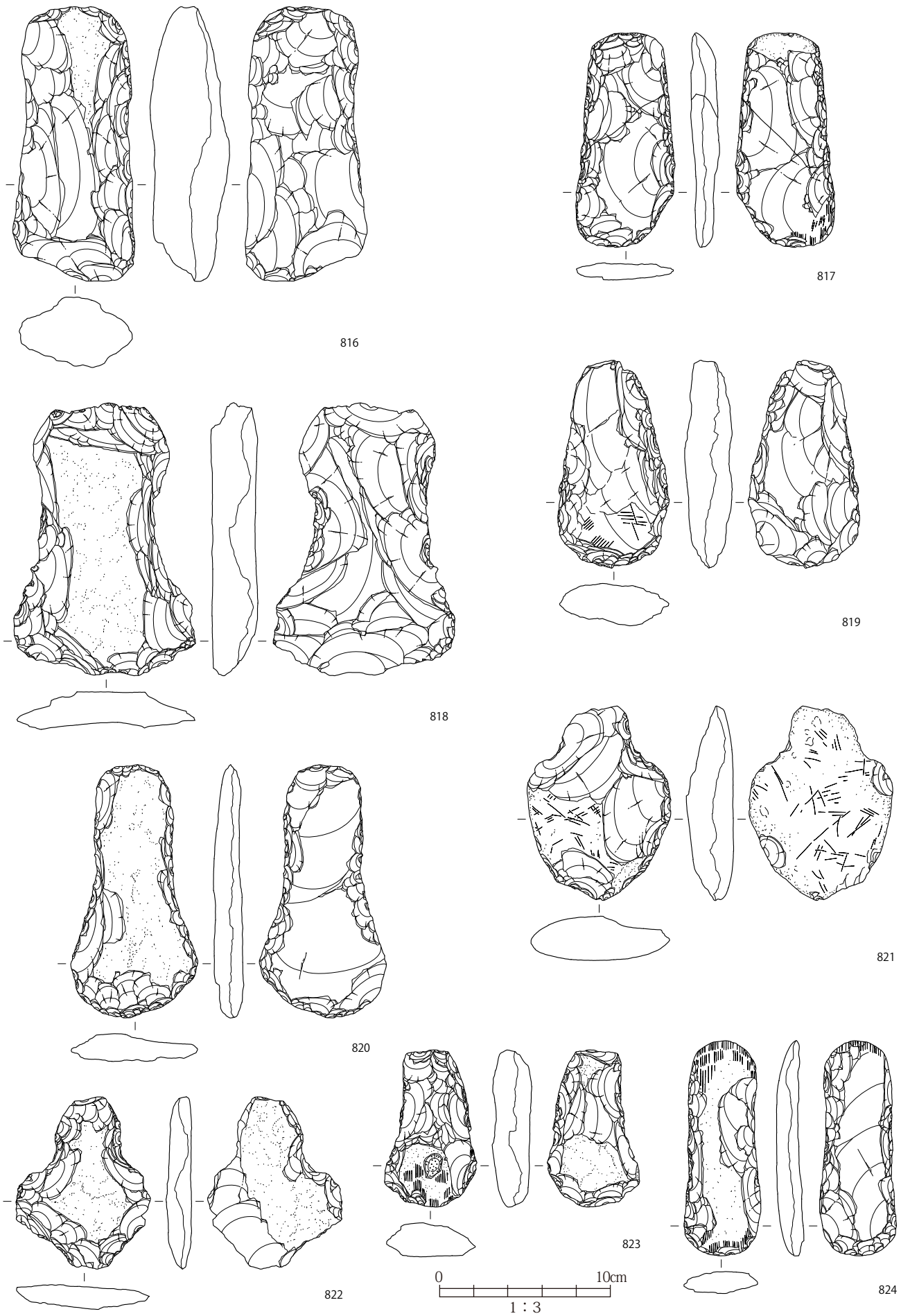


図 132　石器・石製品実測図 (28)

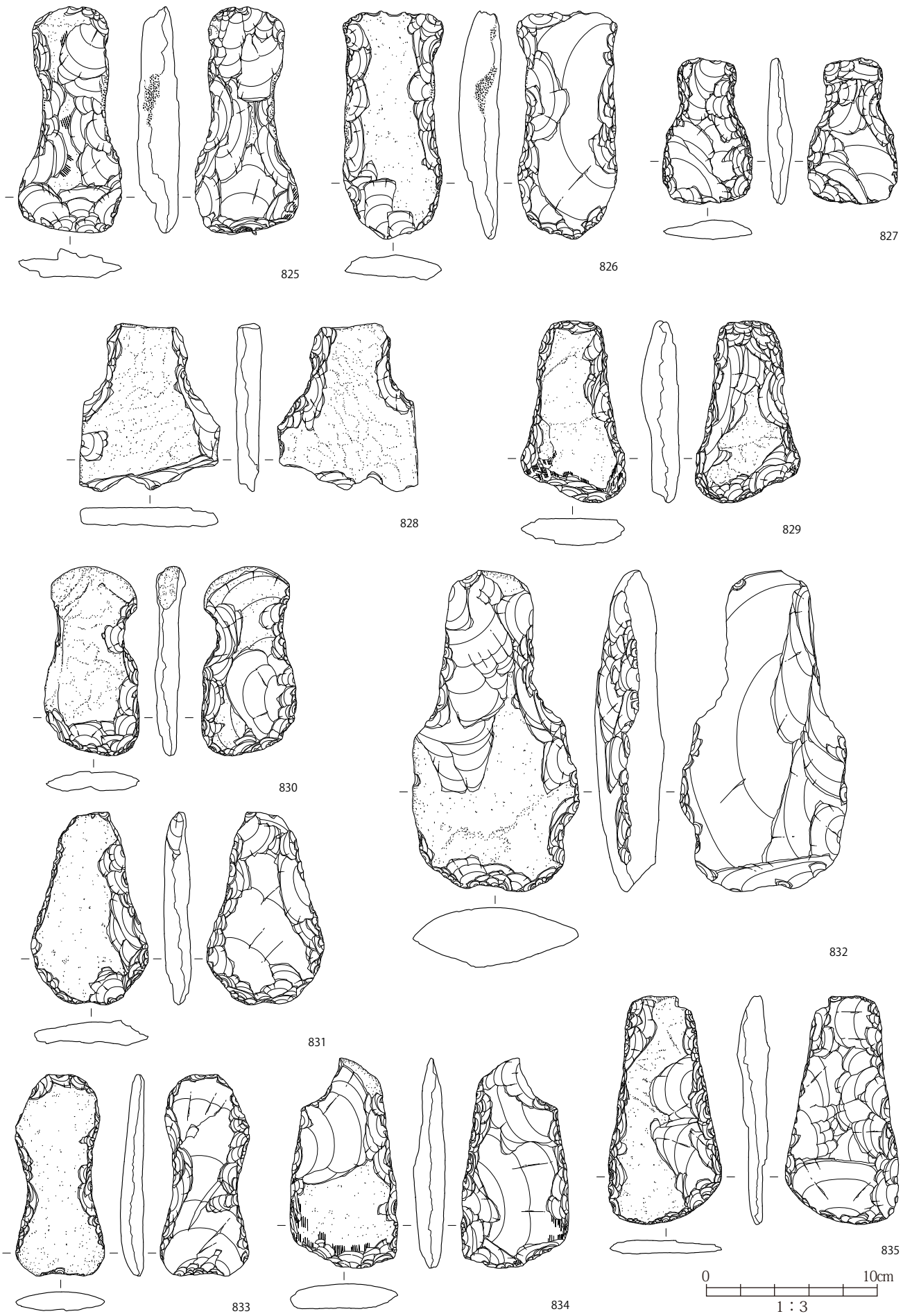


図 133　石器・石製品実測図 (29)

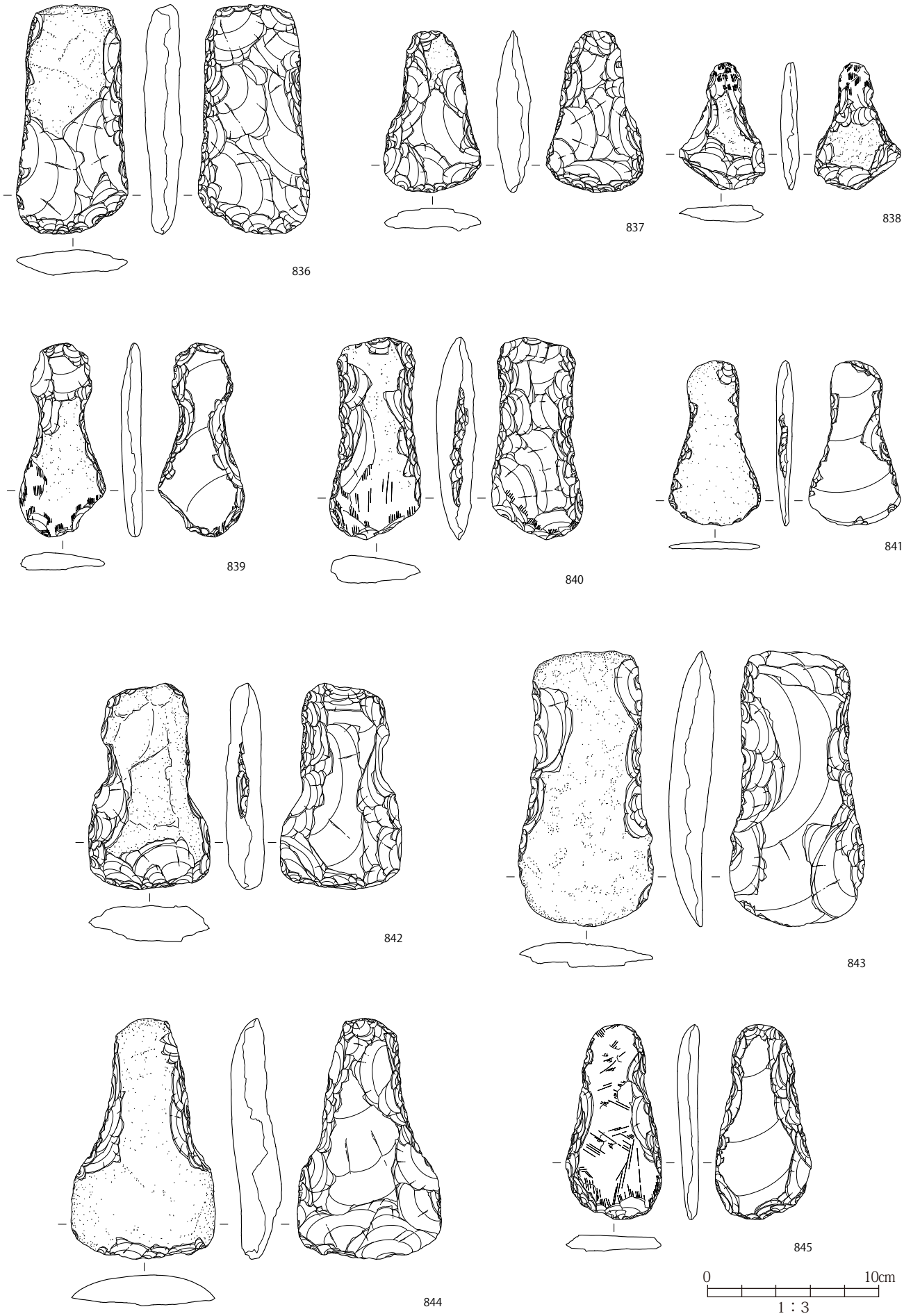


図 134　石器・石製品実測図 (30)

［大形刃器類］

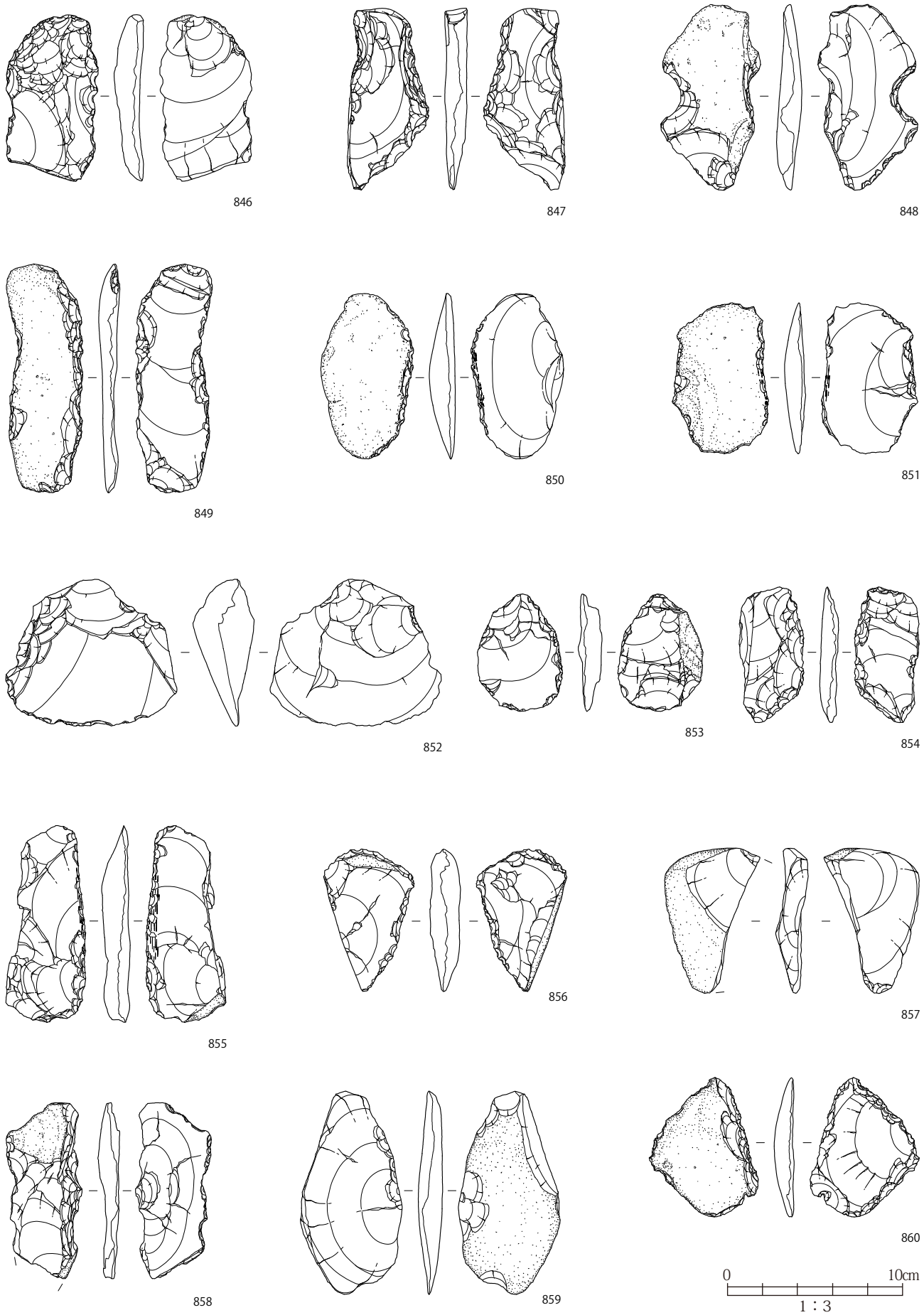


図 135　石器・石製品実測図 (31)

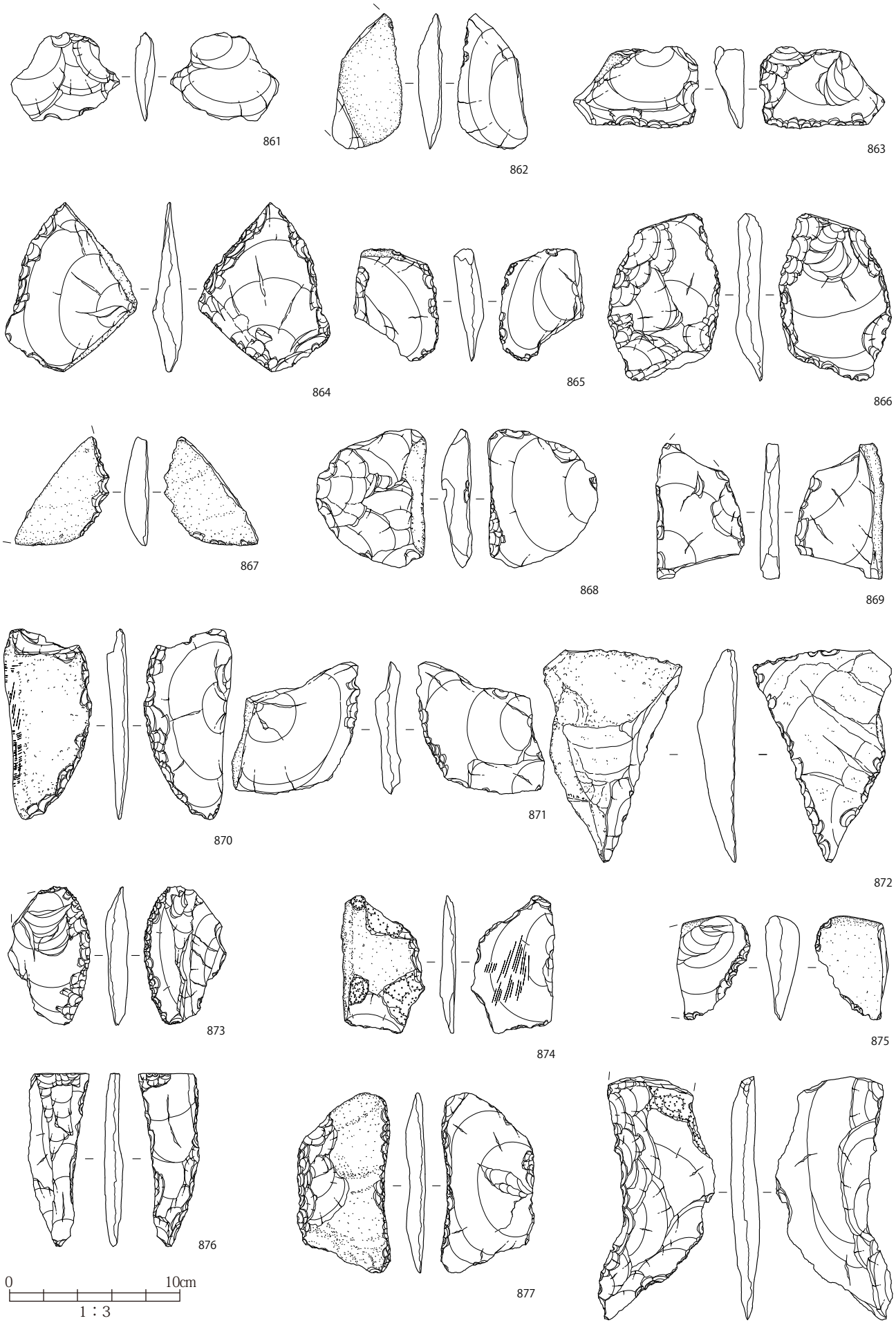


図 136　石器・石製品実測図 (32)

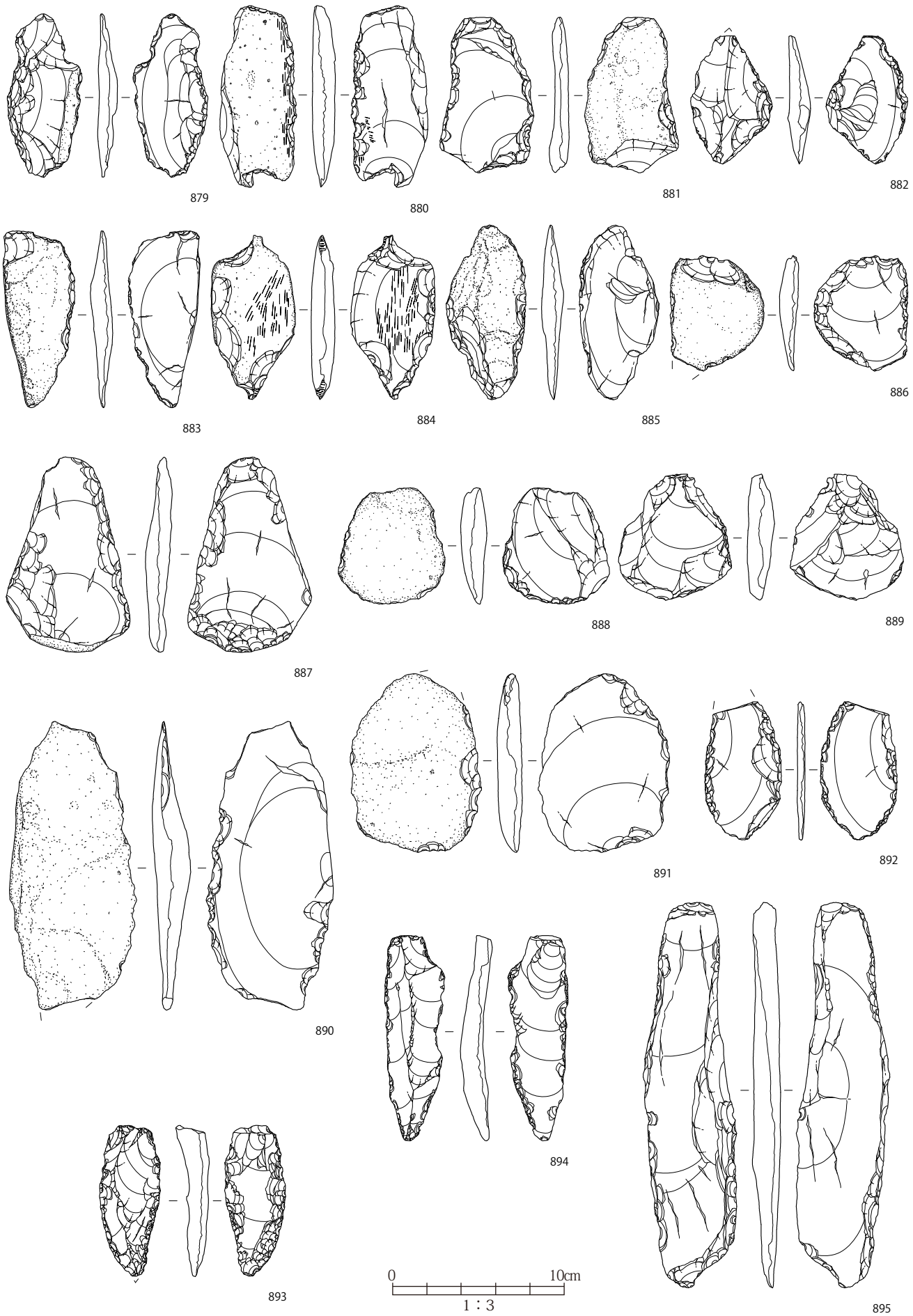


図 137　石器・石製品実測図 (33)

［石匙］

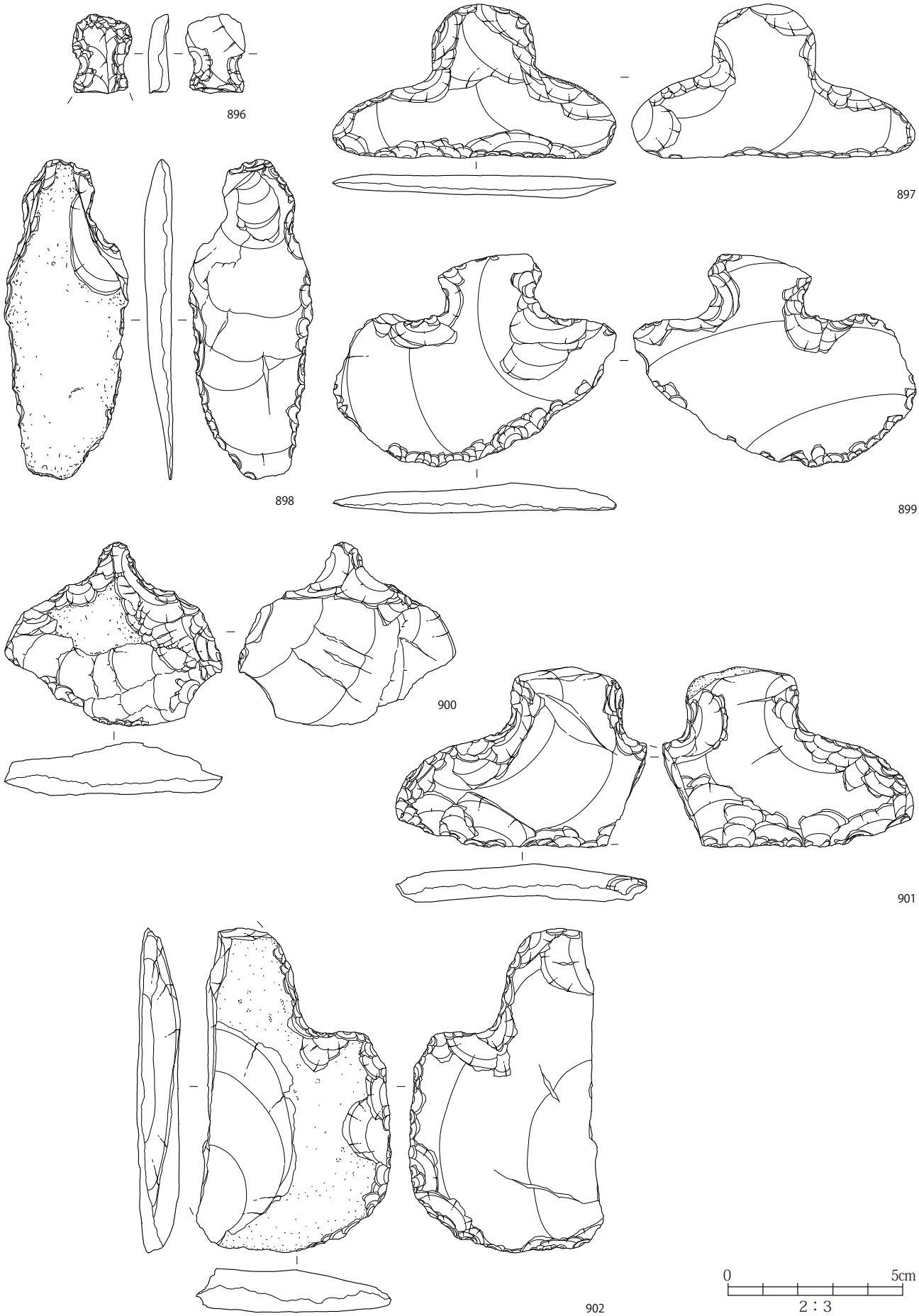


図 138　石器・石製品実測図 (34)

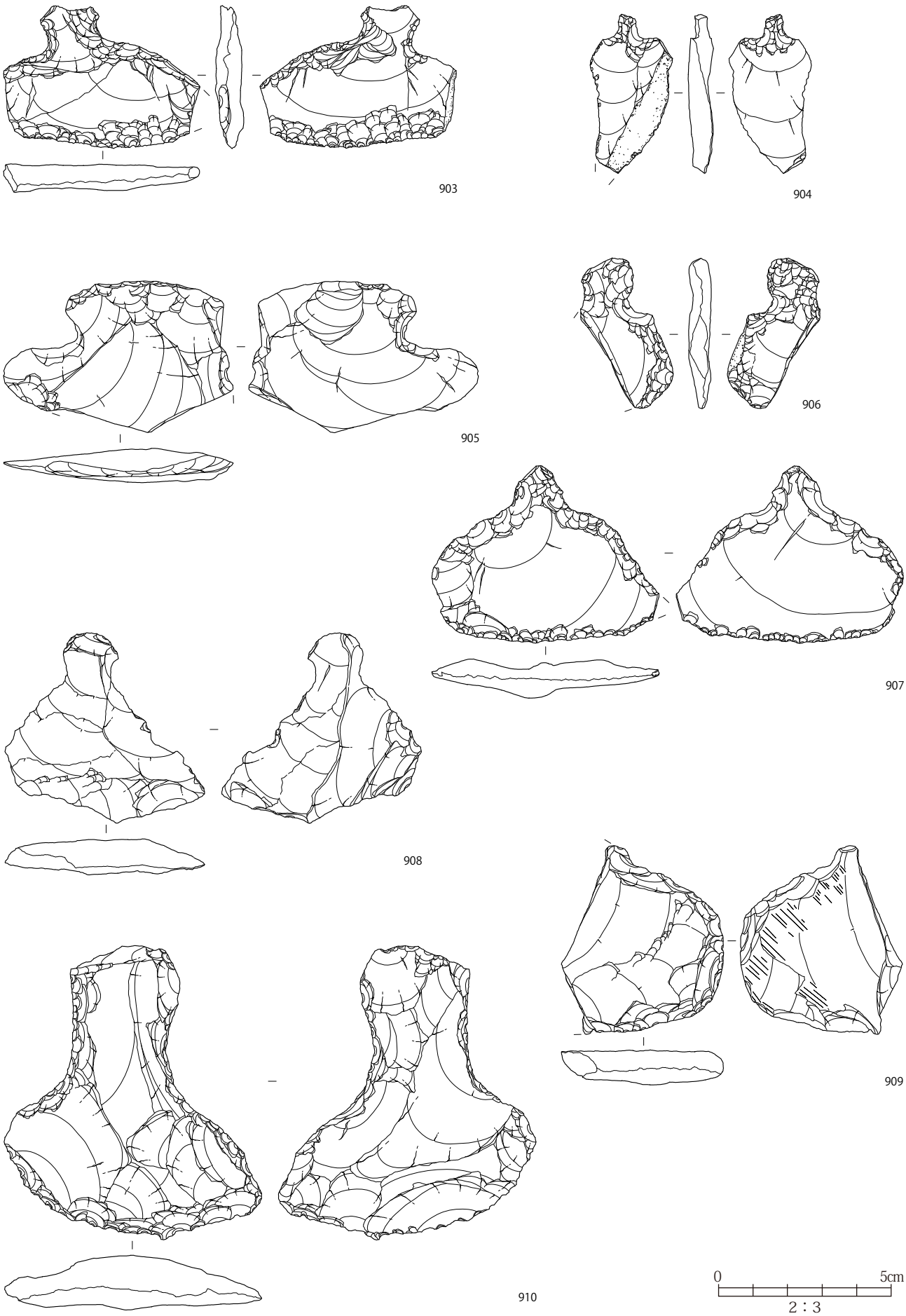


図 139　石器・石製品実測図 (35)

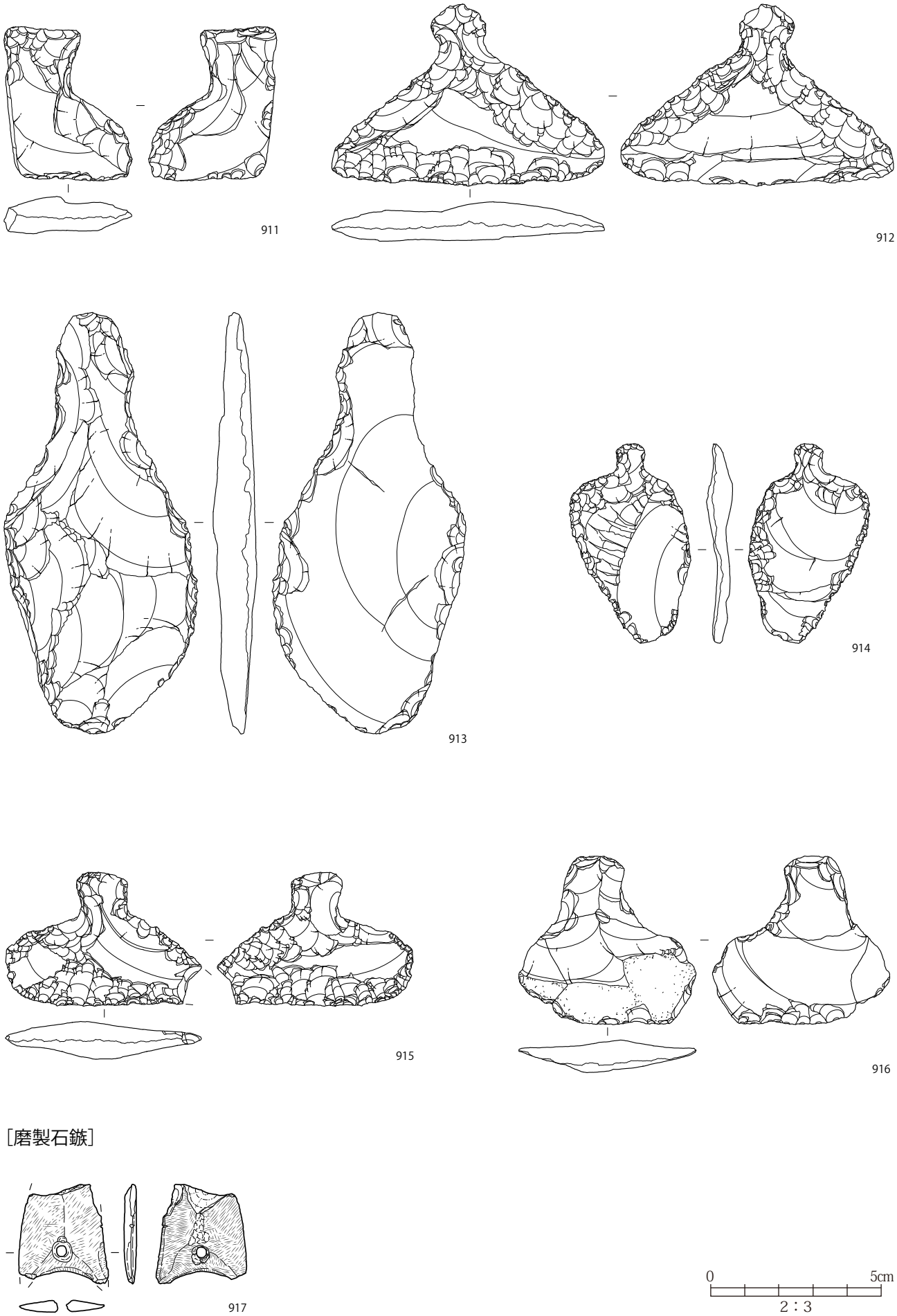


図 140　石器・石製品実測図 (36)

［磨製石斧］

図 141　石器・石製品実測図 (37)

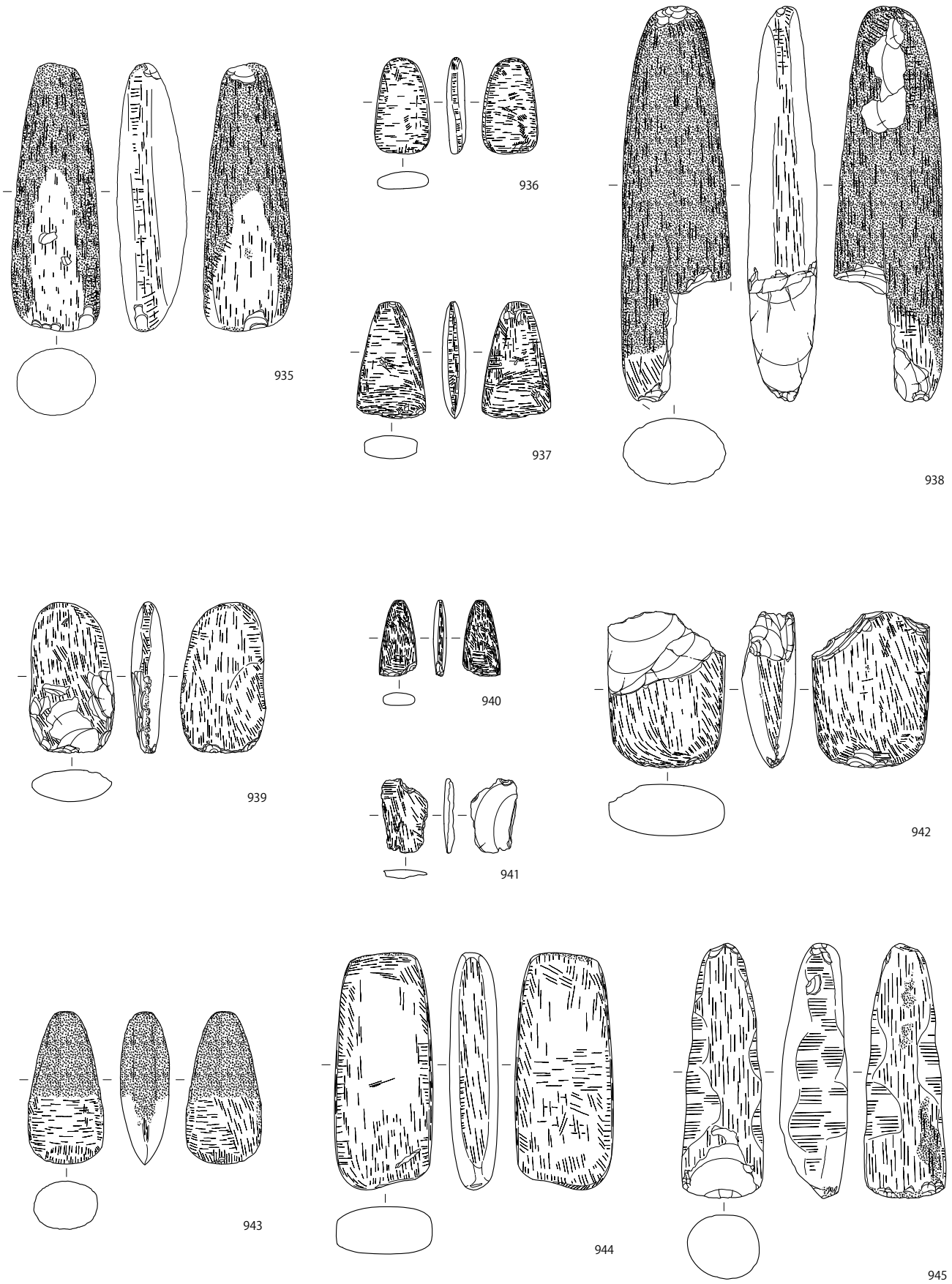


図 142　石器・石製品実測図 (38)

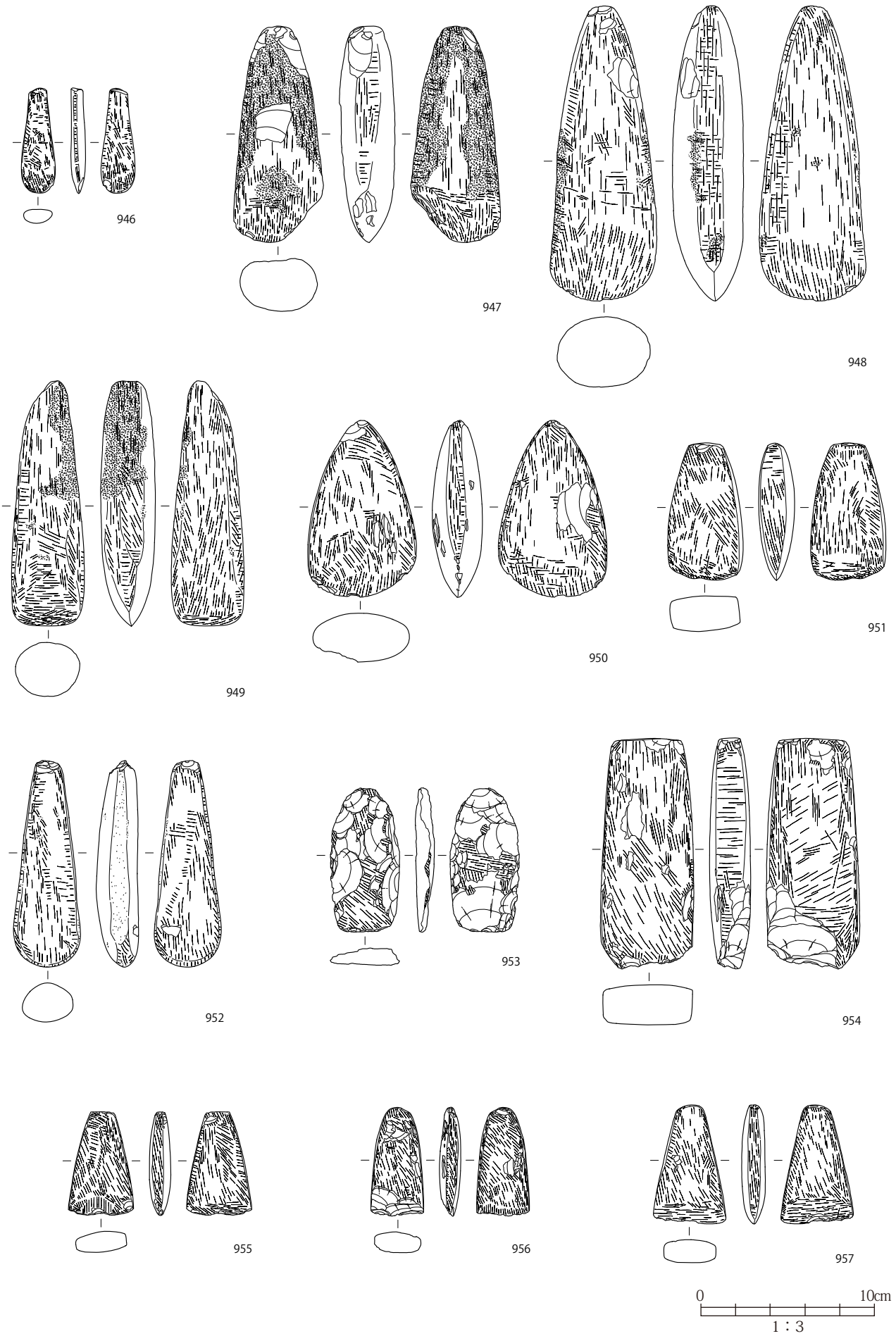


図 143　石器・石製品実測図 (39)

［凹石類］

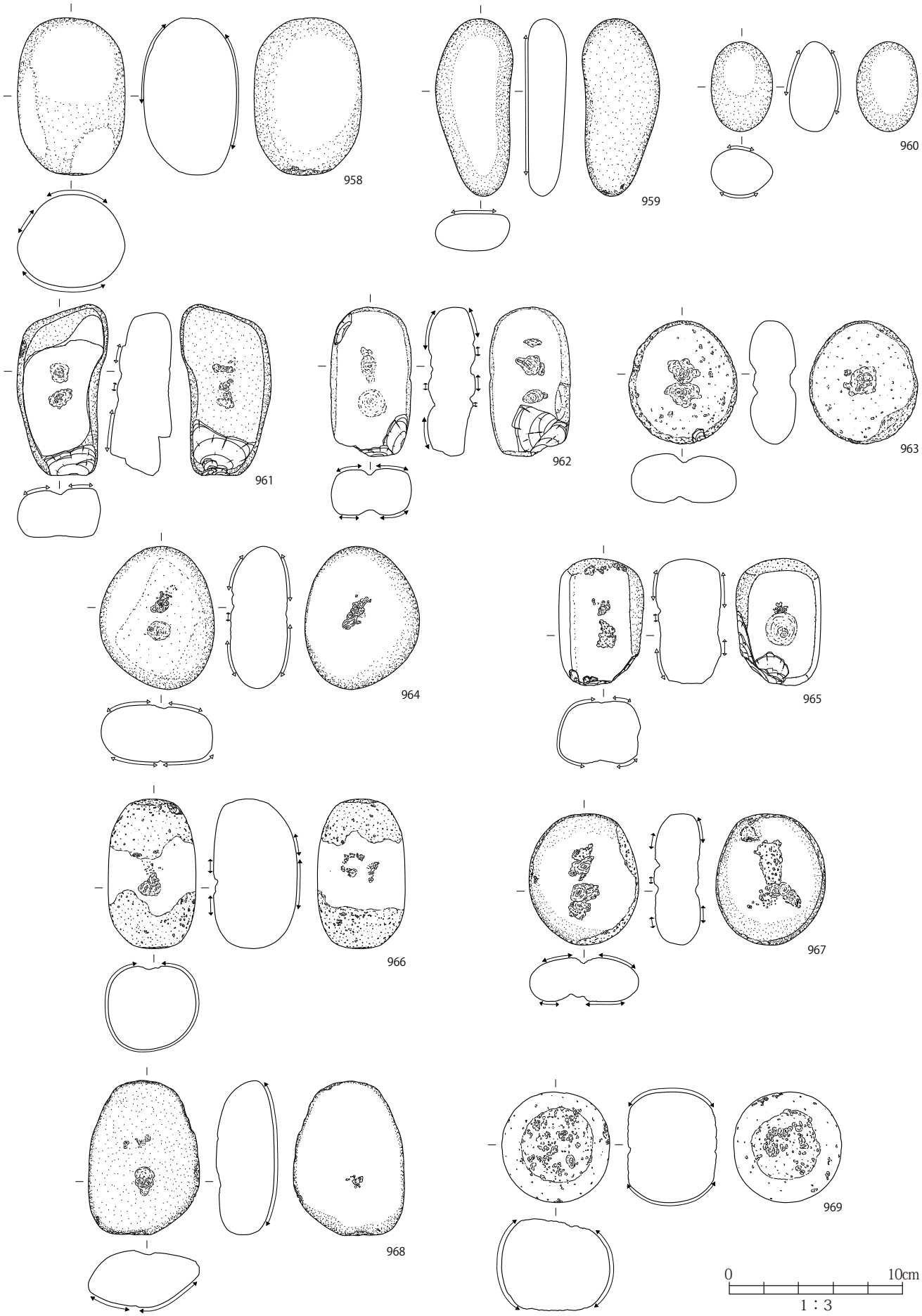


図 144　石器・石製品実測図 (40)

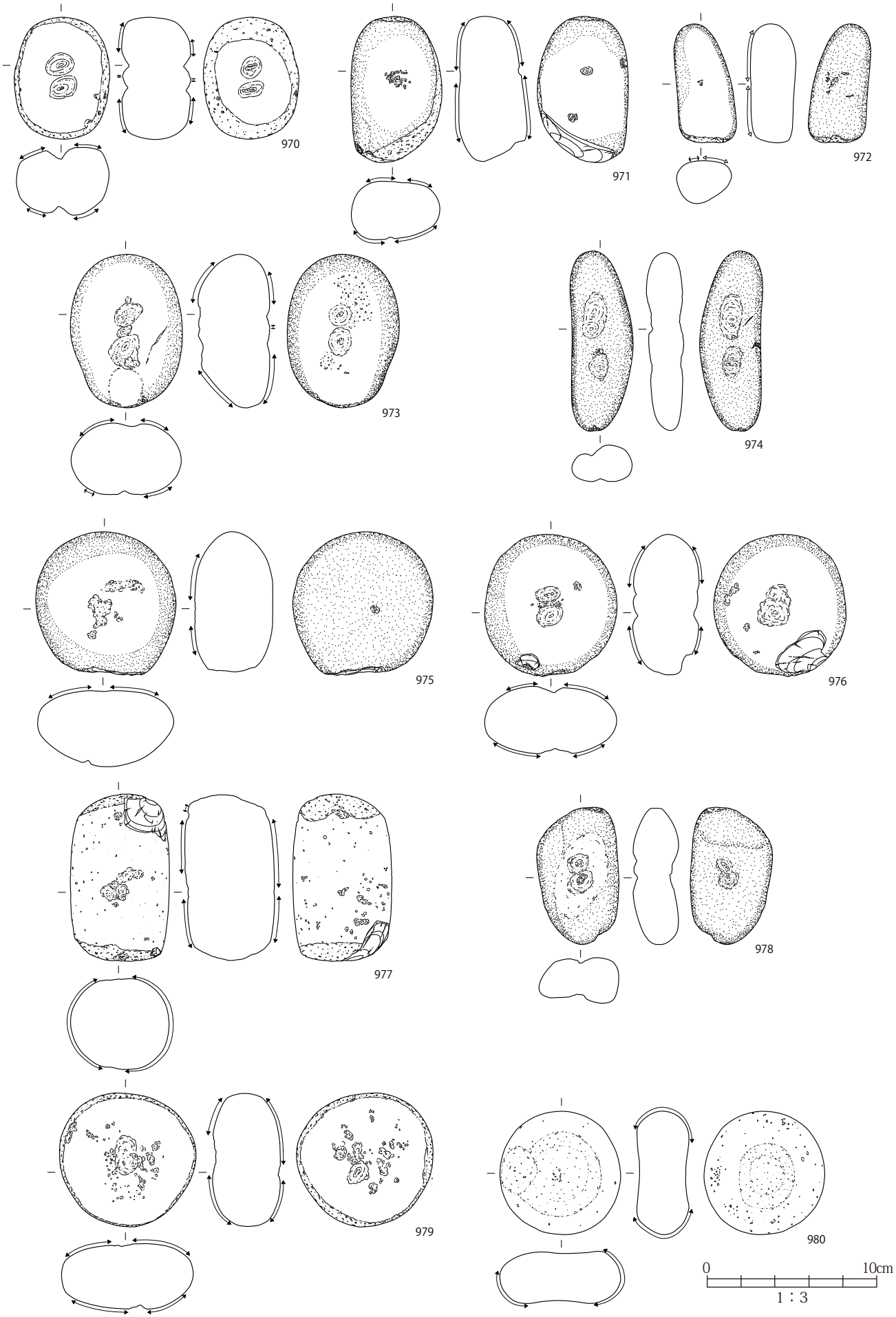


図 145　石器・石製品実測図 (41)

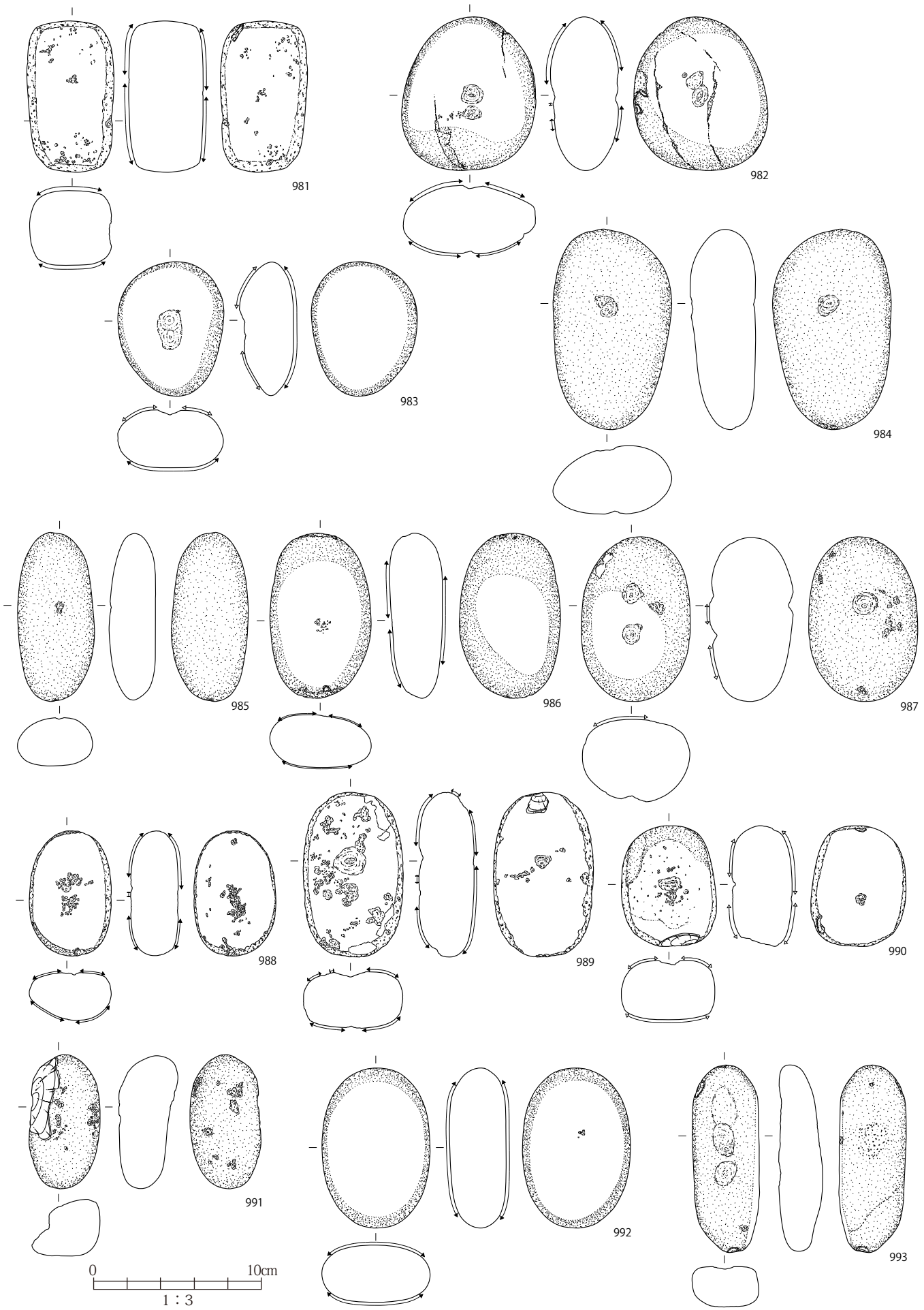


図 146　石器・石製品実測図 (42)

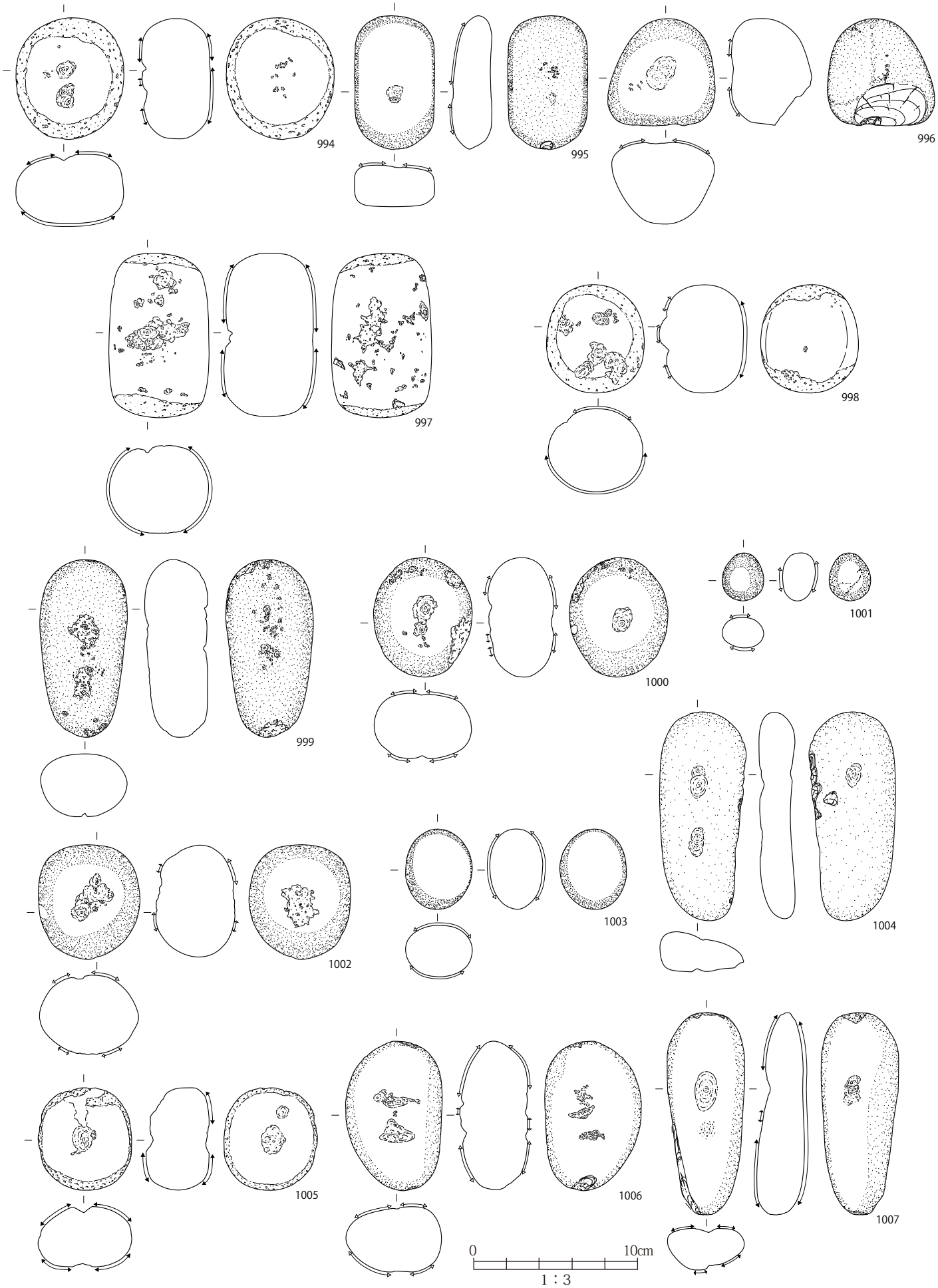


図 147　石器・石製品実測図 (43)

図 148　石器・石製品実測図 (44)

図 149　石器・石製品実測図 (45)

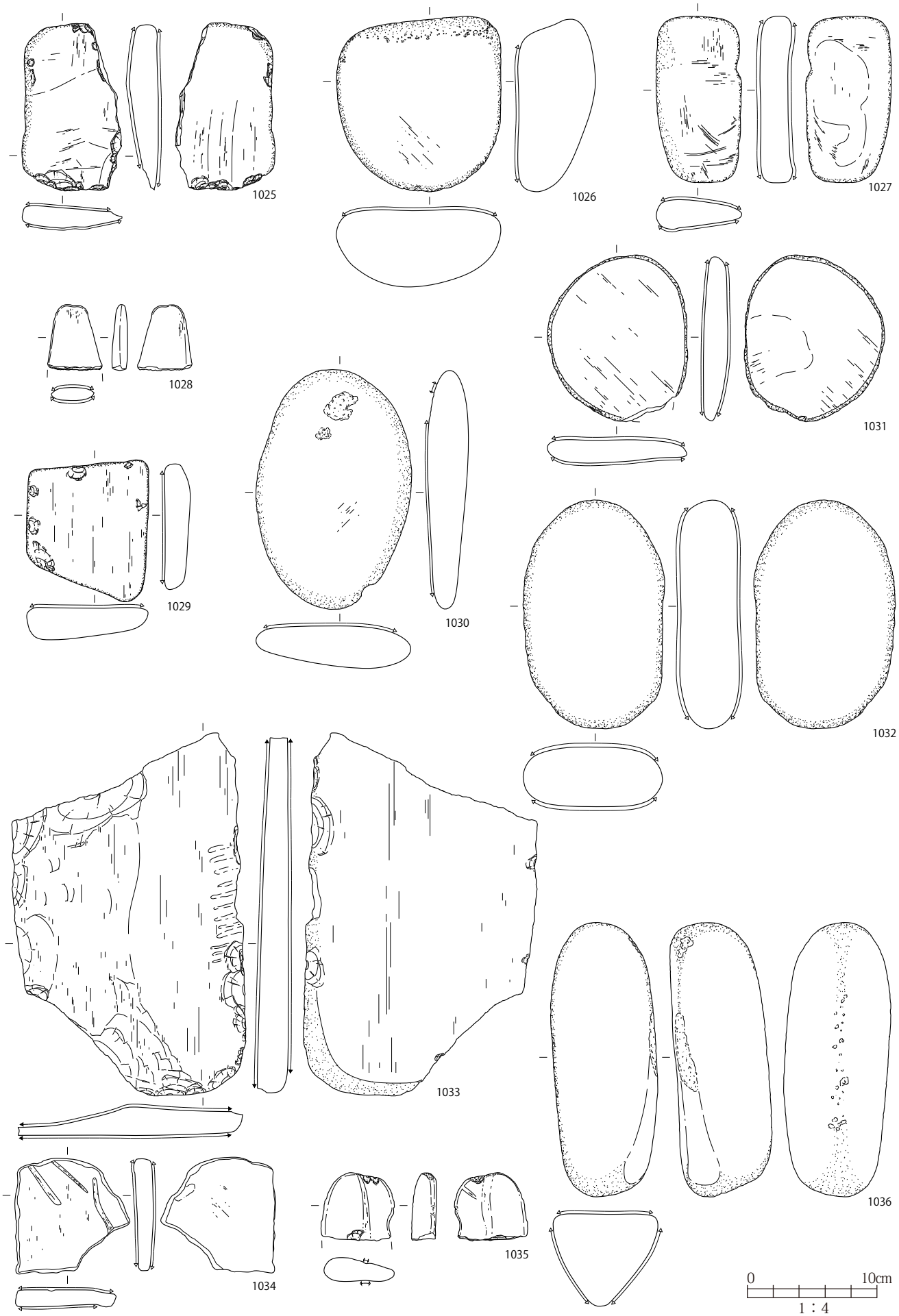


図 150　石器・石製品実測図 (46)

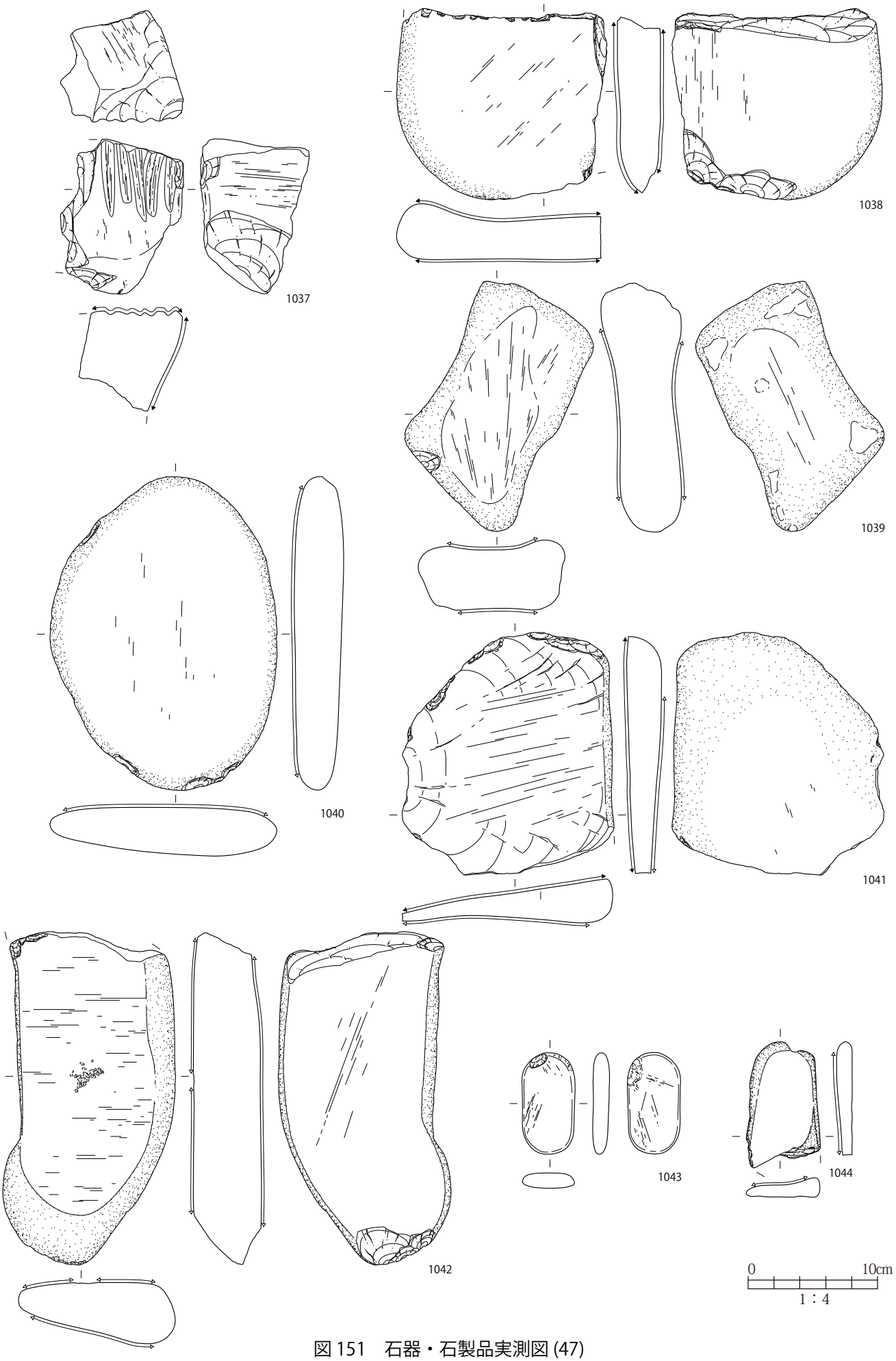
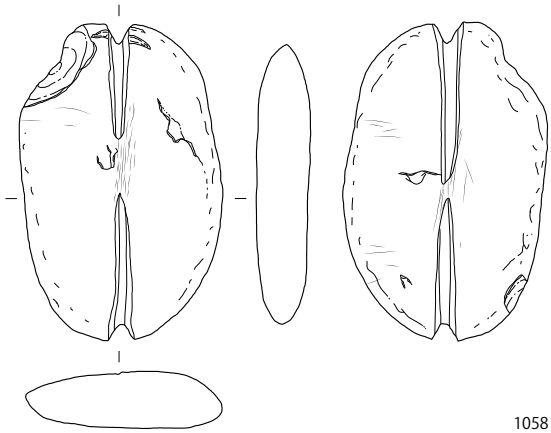
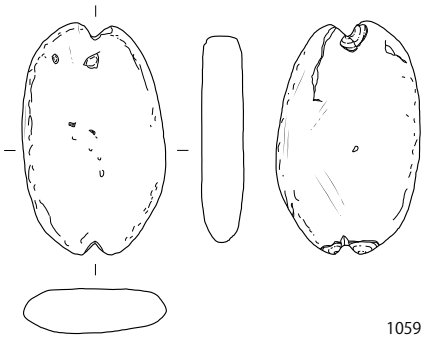


図 151　石器・石製品実測図 (47)

図 152　石器・石製品実測図 (48)

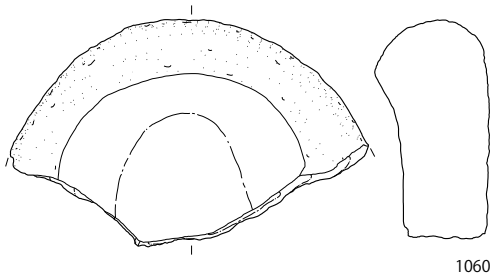
［石錘］

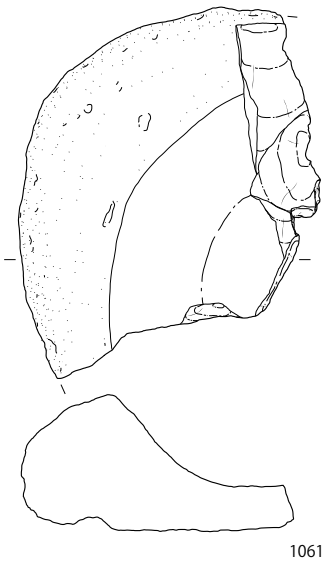


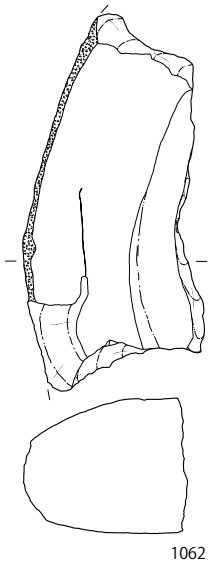


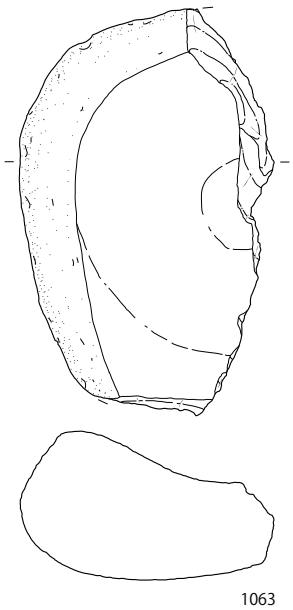
0　5cm
2：3

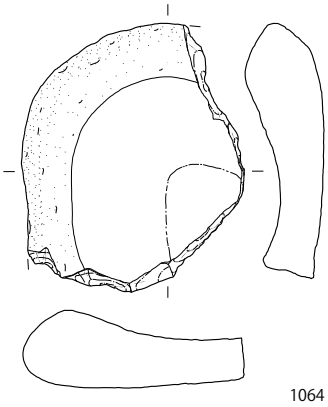
［石皿］

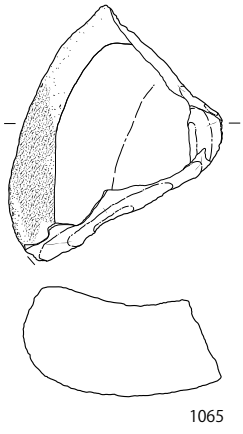












0　10cm
1：5

図 153　石器・石製品実測図 (49)

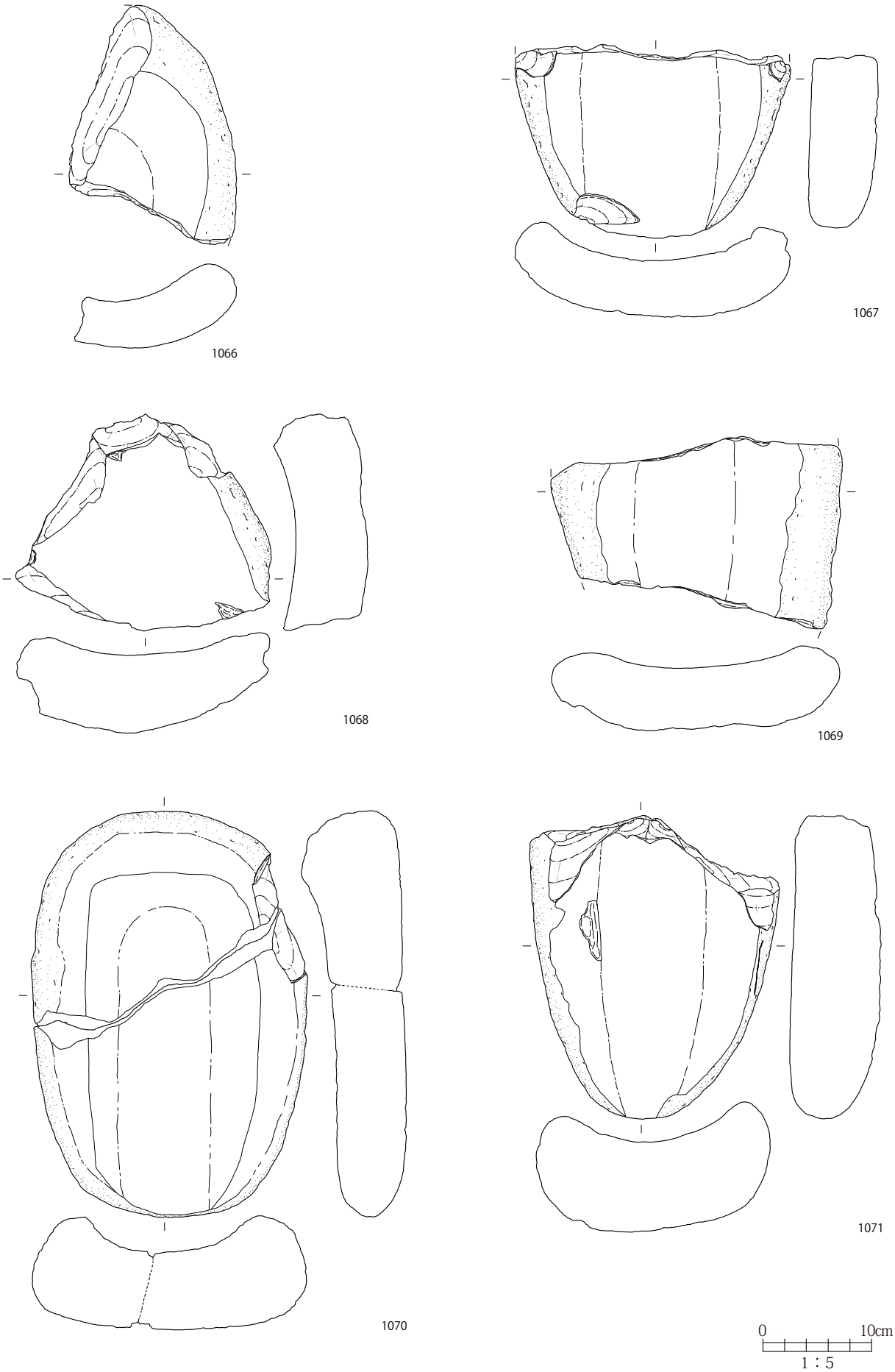


図 154　石器・石製品実測図 (50)

［石棒］

図 155　石器・石製品実測図 (51)

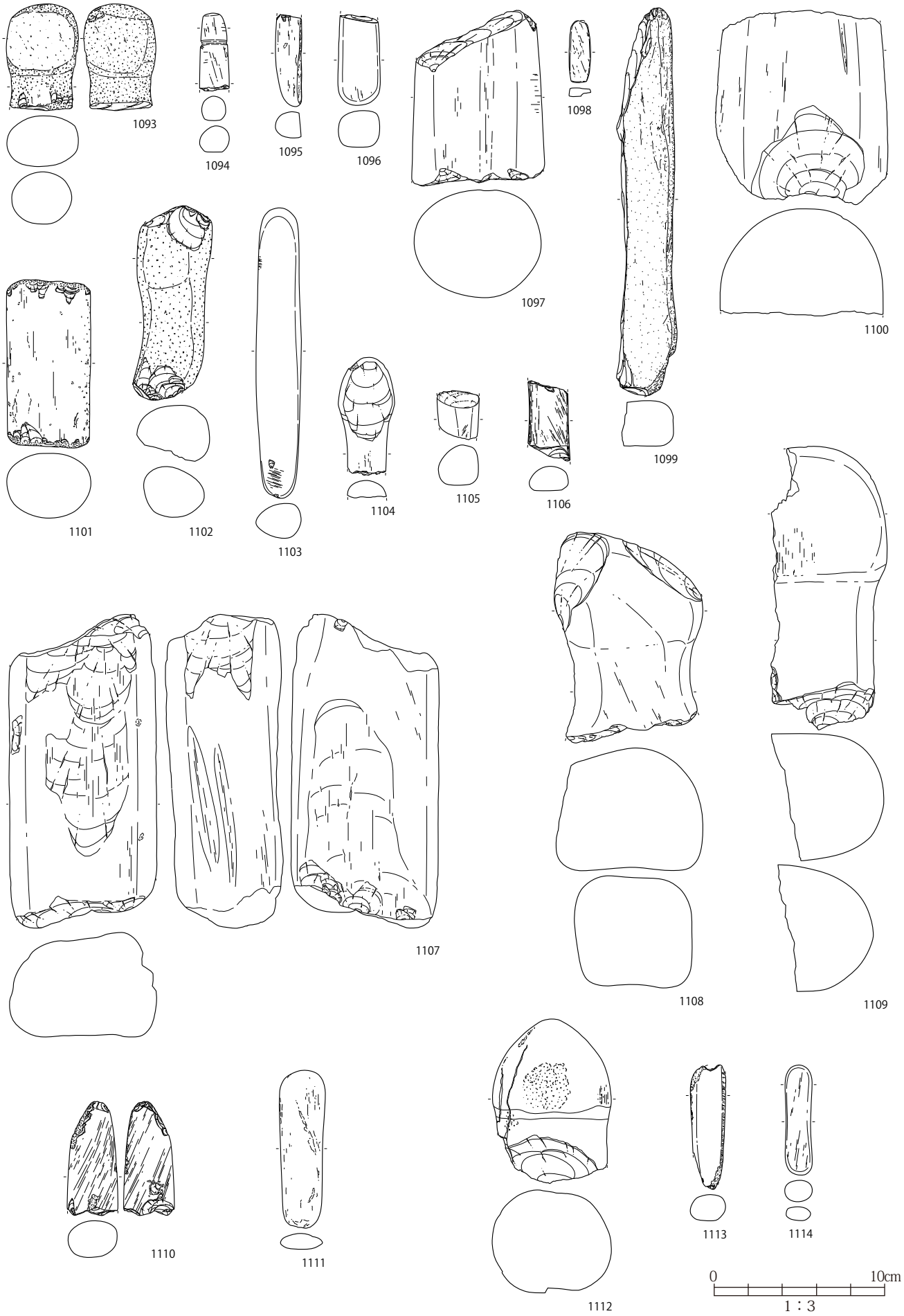


図 156　石器・石製品実測図 (52)

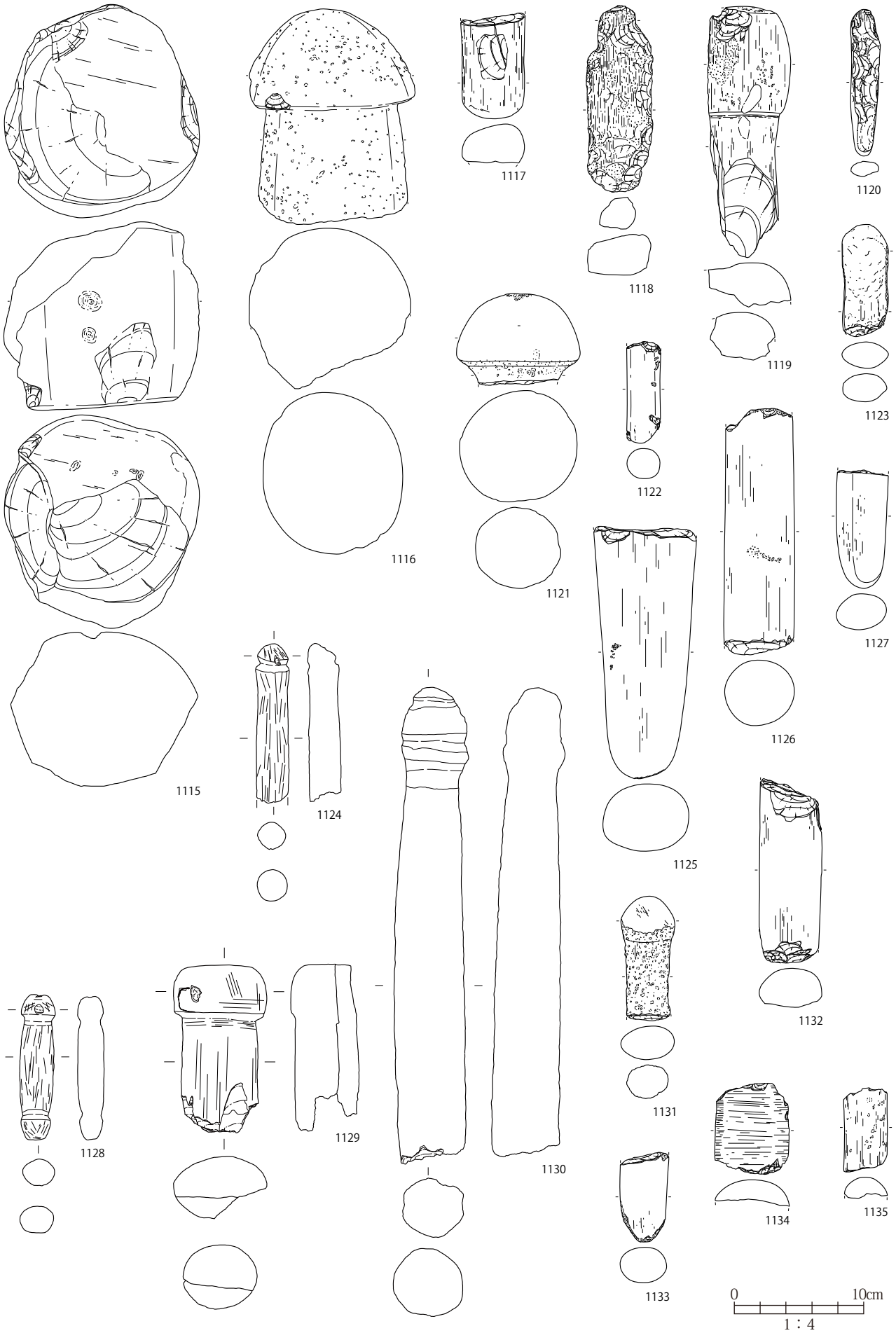


図 157　石器・石製品実測図 (53)

［石剣・刀］

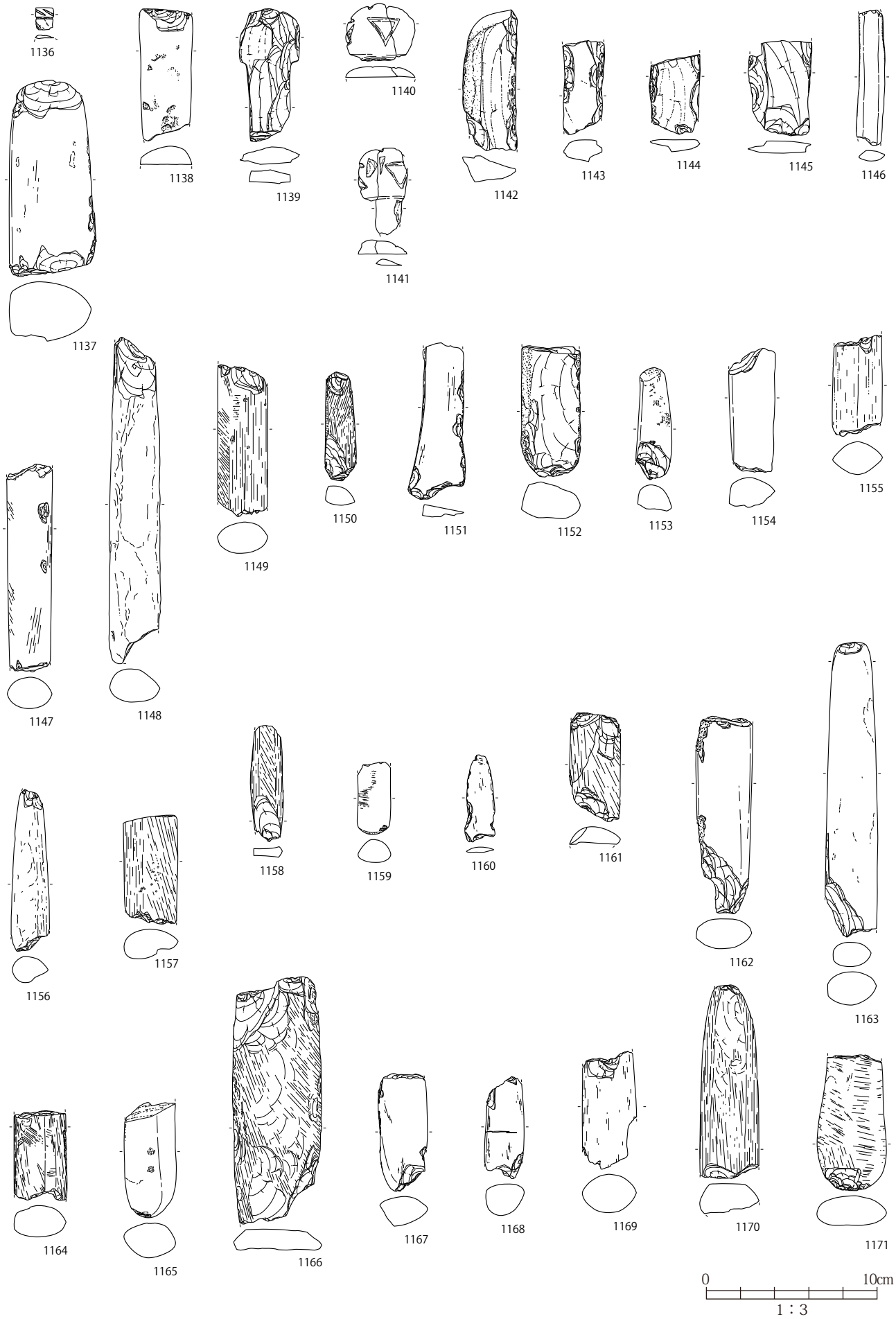


図 158　石器・石製品実測図 (54)

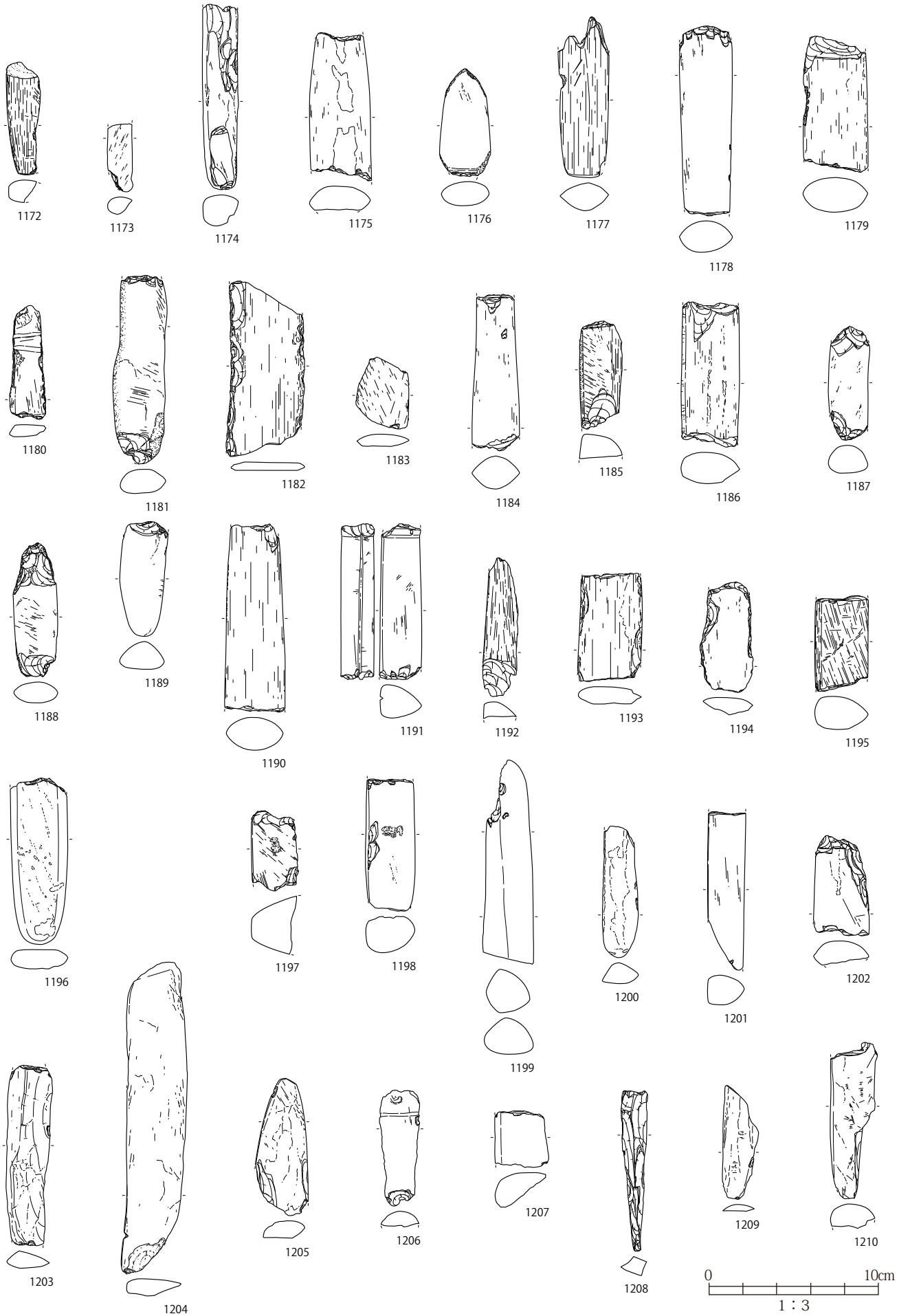


図 159　石器・石製品実測図 (55)

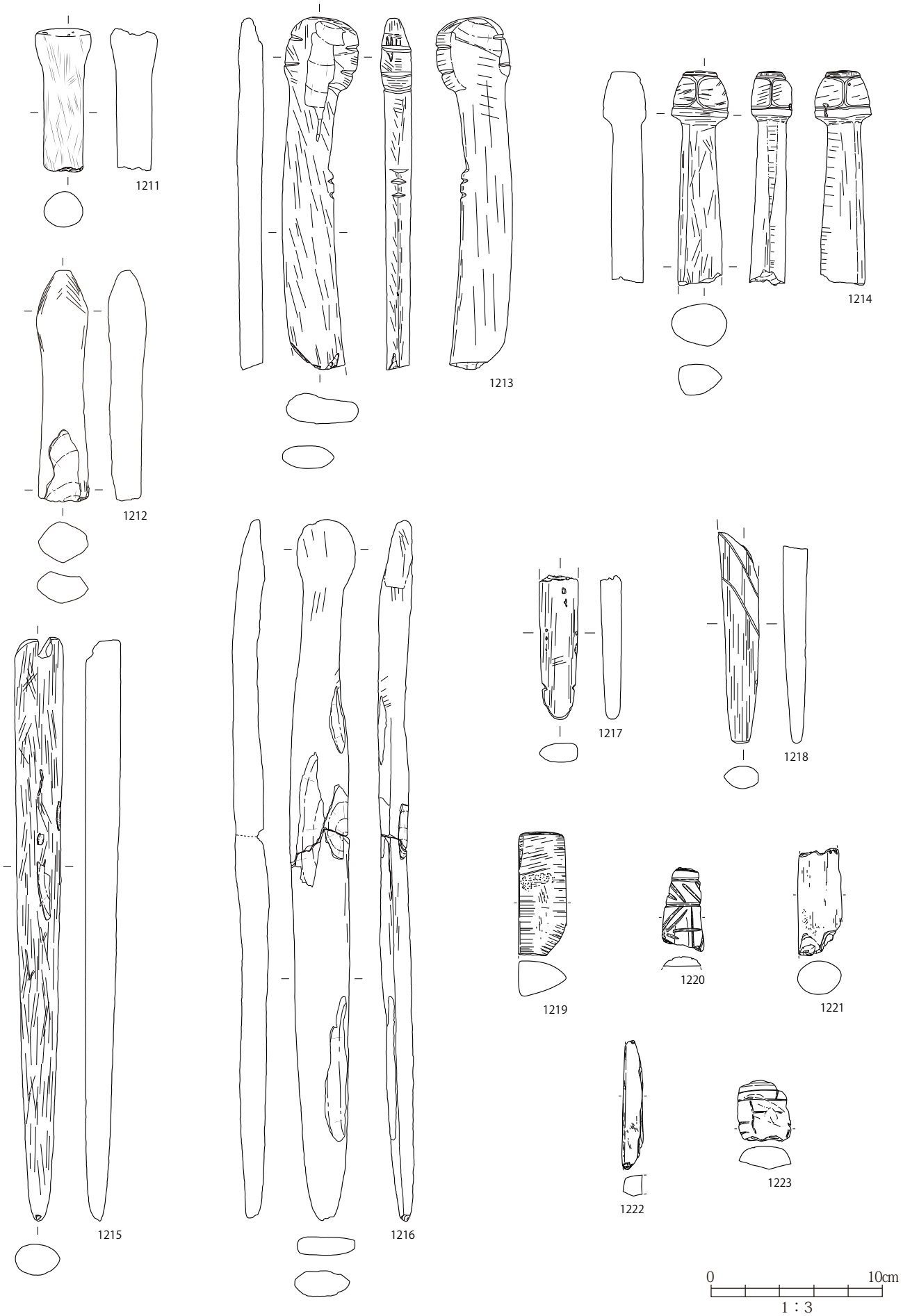


図 160　石器・石製品実測図 (56)

［垂飾類］

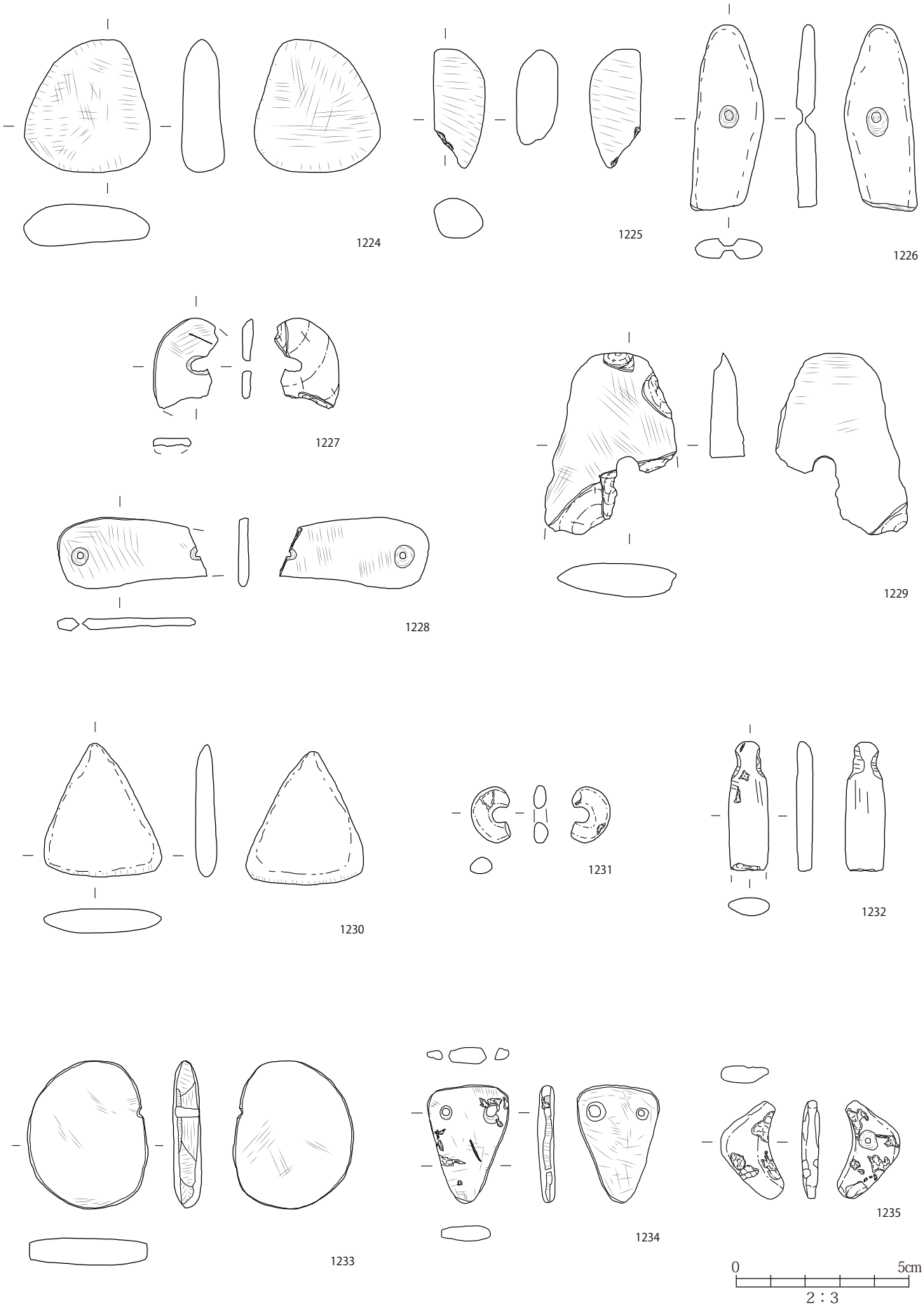


図 161　石器・石製品実測図 (57)

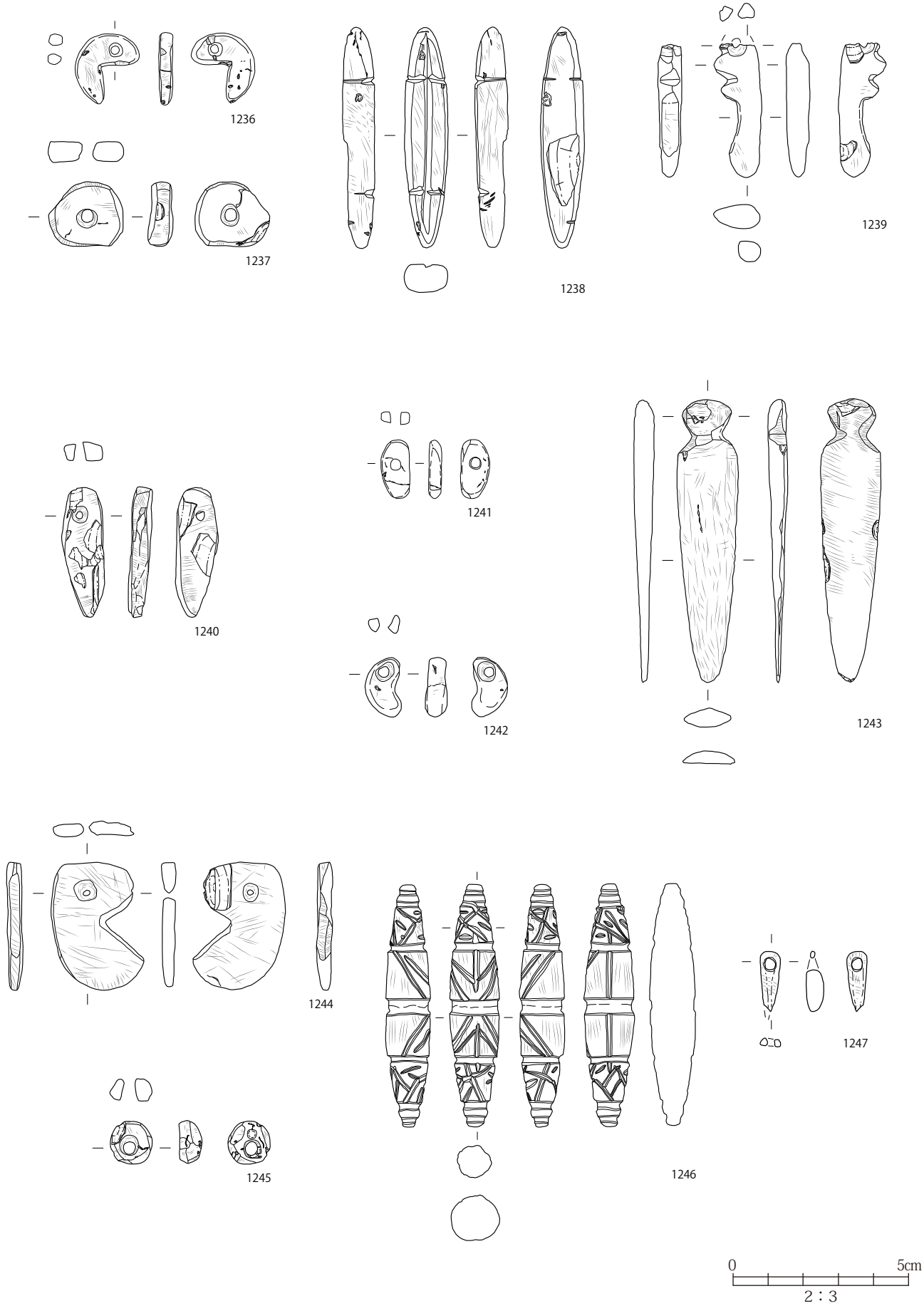
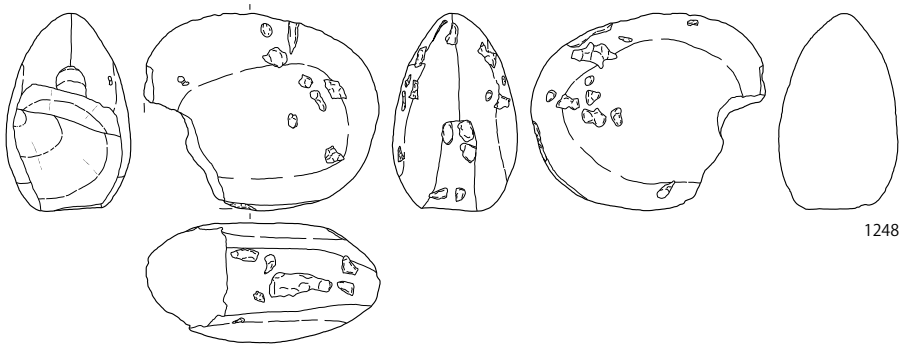
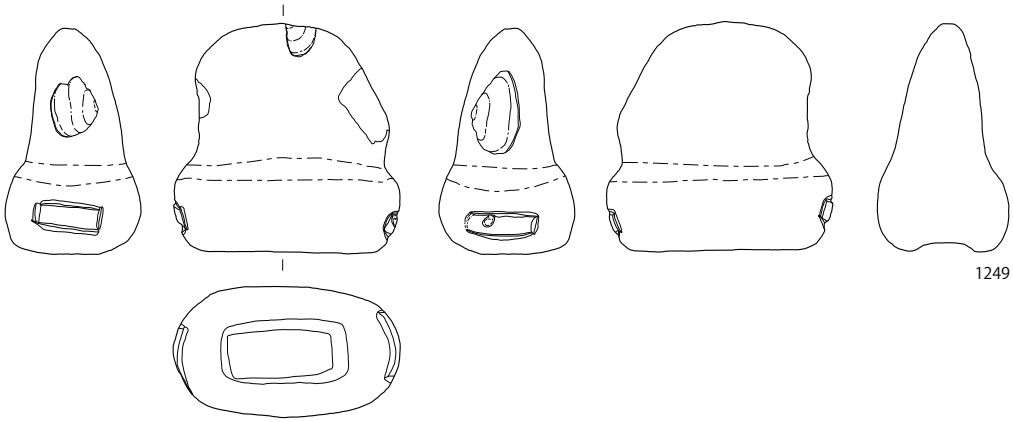
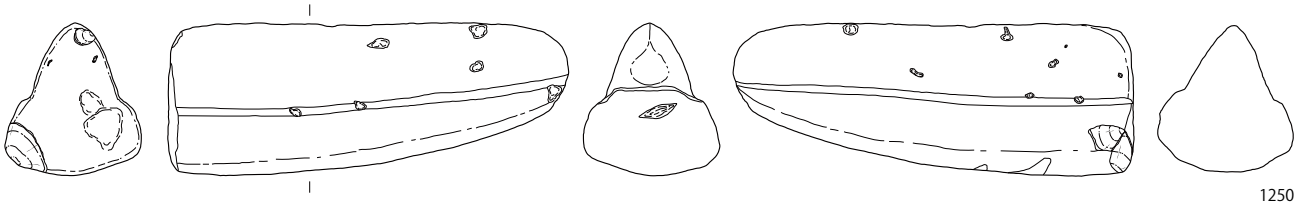


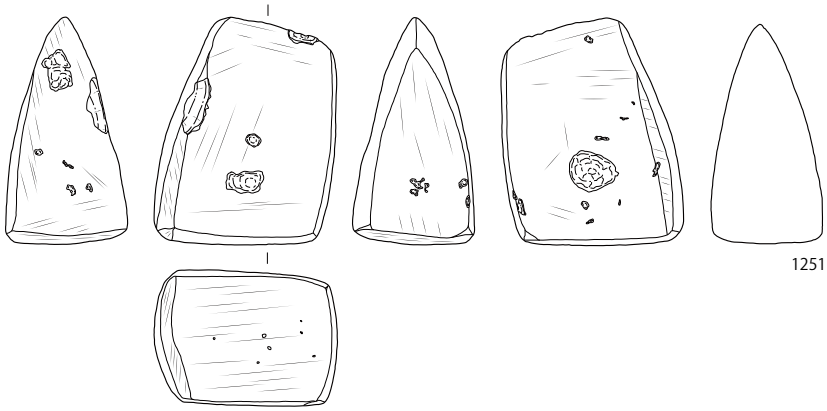
図 162　石器・石製品実測図 (58)

［石冠］









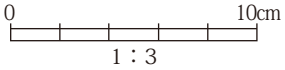


図 163　石器・石製品実測図 (59)

［石核］

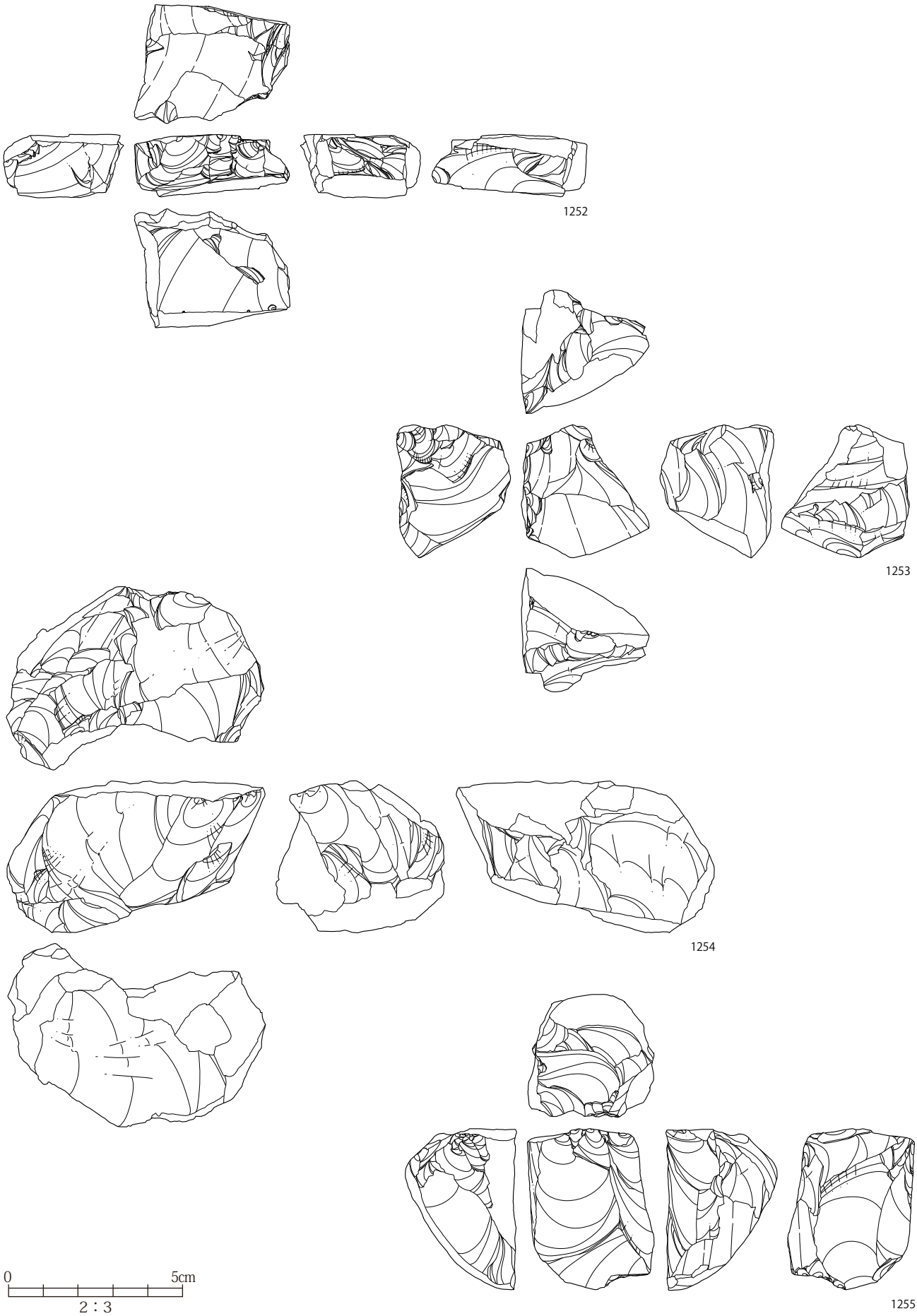


図 164　石器・石製品実測図 (60)

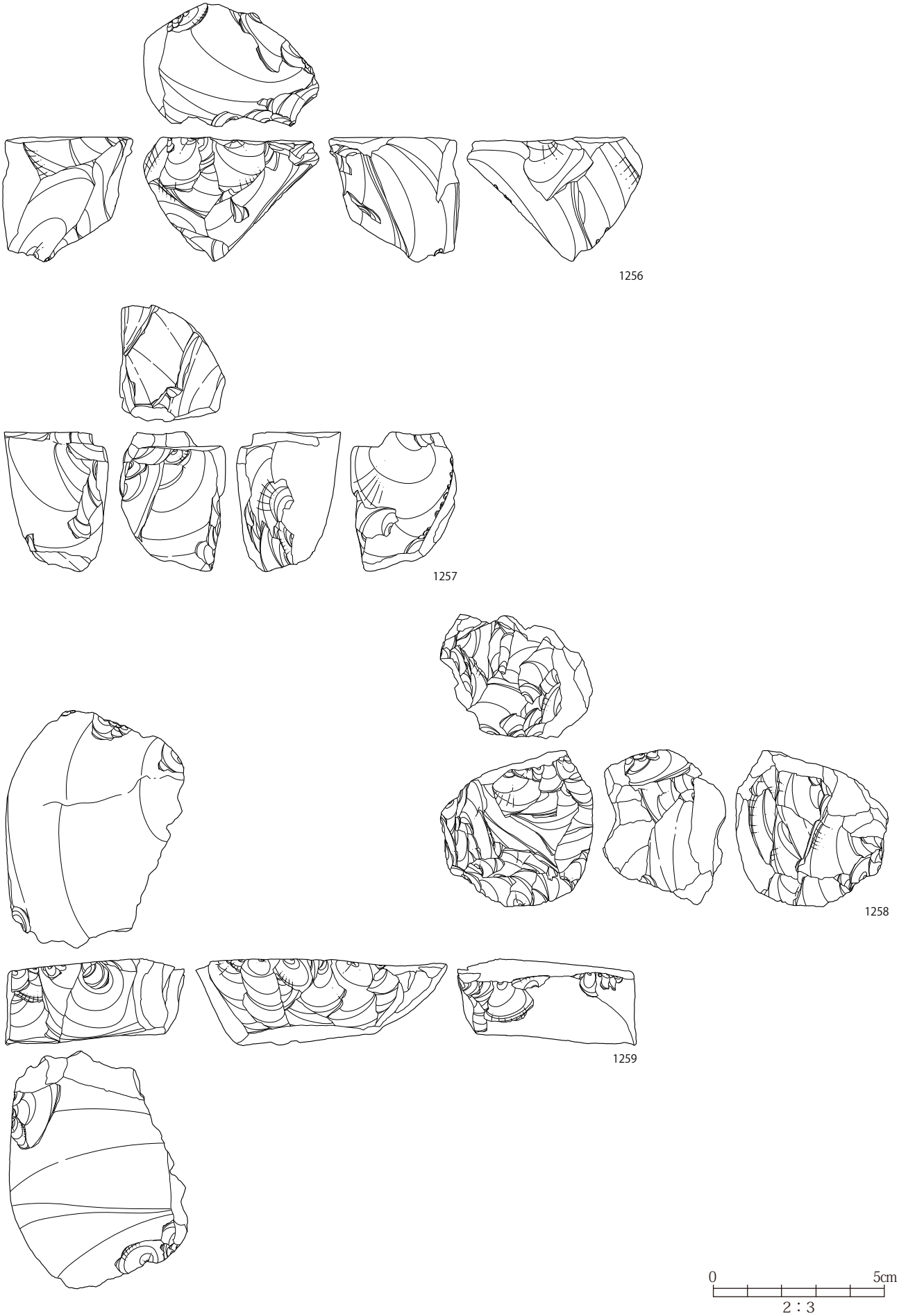


図 165　石器・石製品実測図 (61)

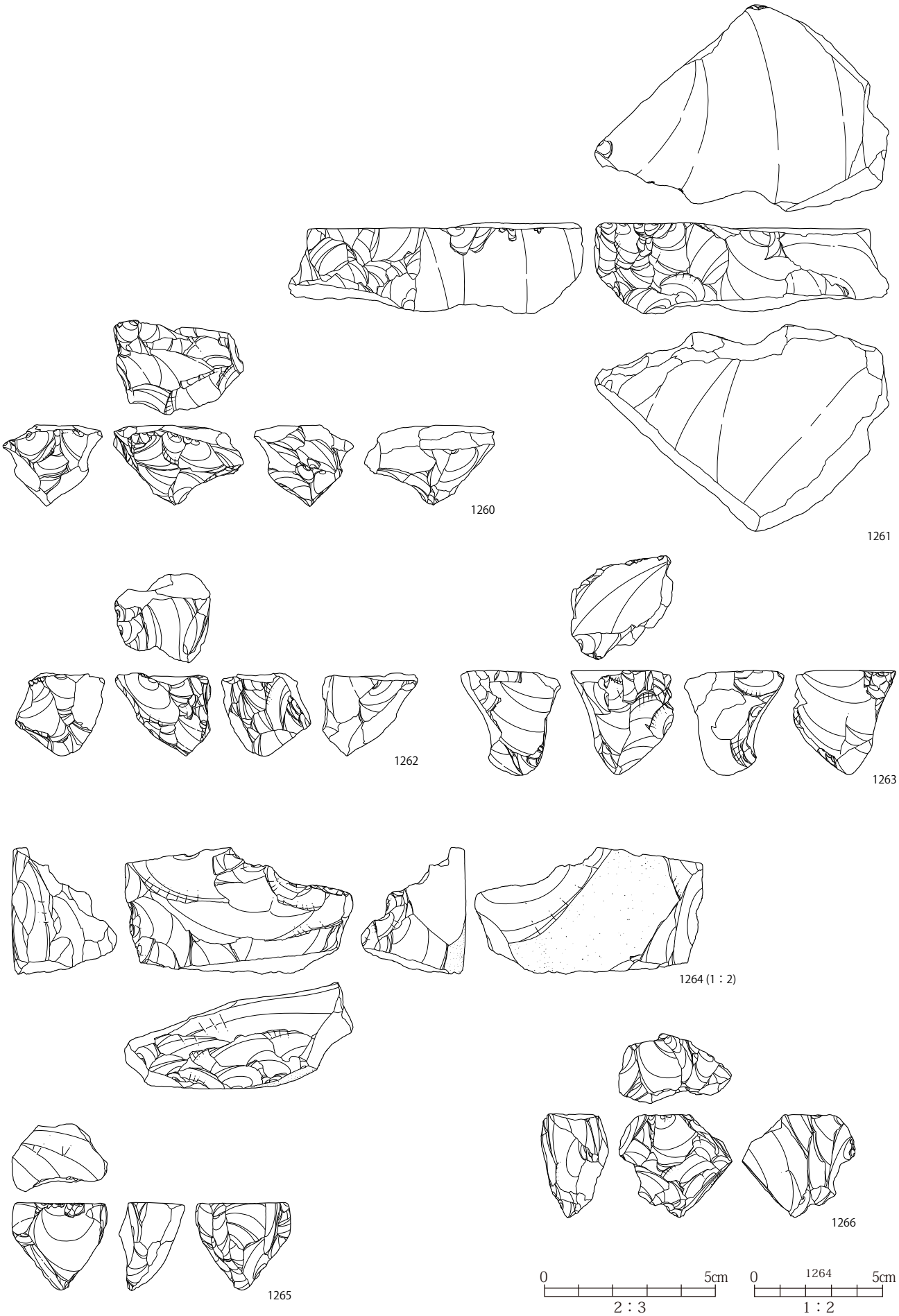


図 166　石器・石製品実測図 (62)

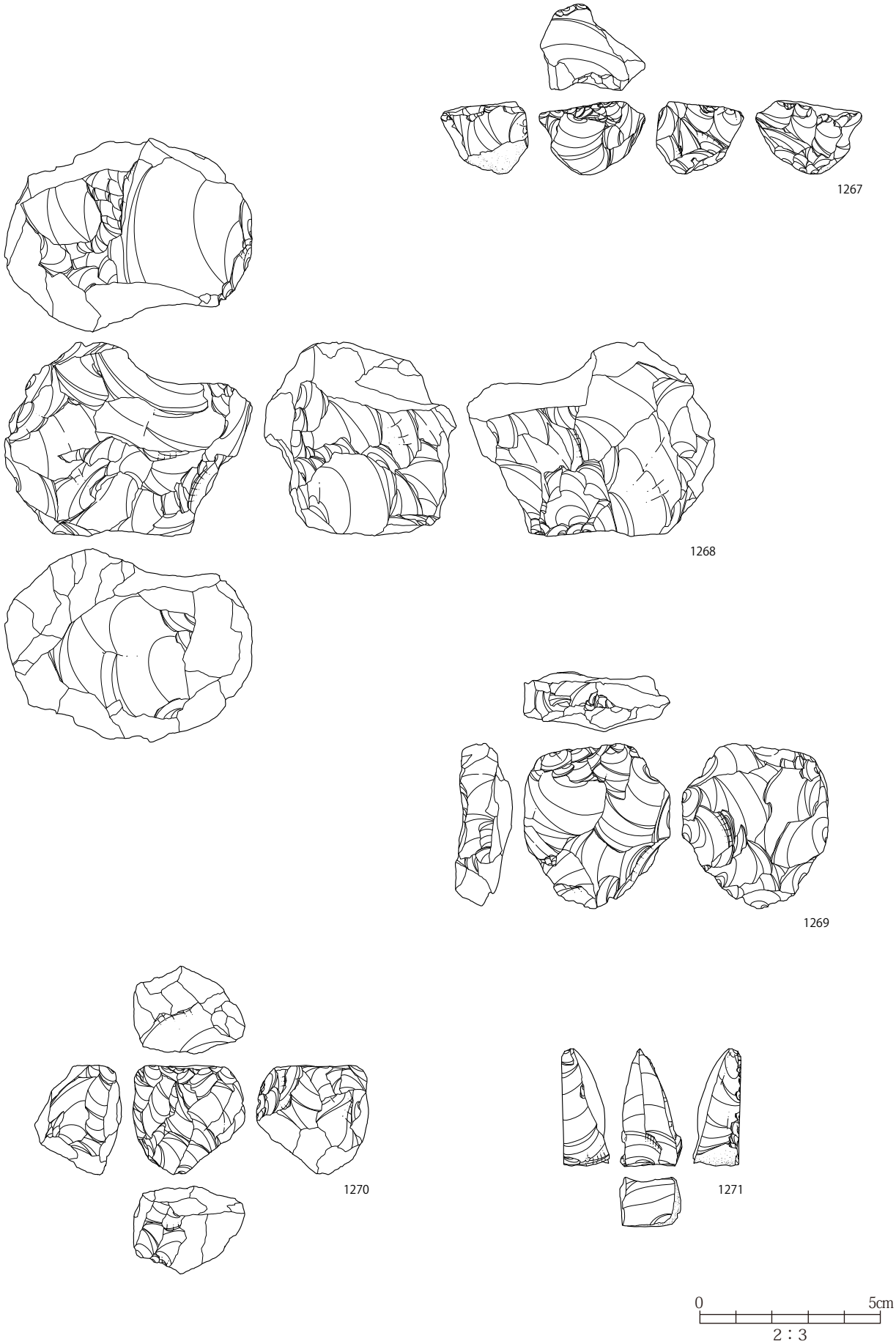


図 167　石器・石製品実測図 (63)

第Ⅶ章　集落構造とその背景

第１節　集落の構造と変遷

１　中期の集落　(図 169)

(1)　中期中葉の集落

圃場整備事業の計画では、エリ穴遺跡Ａ区の東半分については、中期包含層にまで掘削が及ばないことが示された。そこで掘削される後期以降の包含層までは全面調査し、中期包含層については後期以降と重なった遺構のみ調査対象とした。図 169 に網掛けした範囲がそれに該当し、中期遺構の有無についても確認できていない。中期の集落構成を検討するのには、以上のような制約がある。

中期中葉 (長野県史中期中葉Ⅱ期～Ⅵ期) の集落は、Ａ区の南微高地に展開する。中期後葉の可能性もある 16 号住居と、認定に不安を残す３号住居を含めて、７基の竪穴住居が確認できる。２号住居と３号住居を北西端、33 号住居を東端、11 号住居を南端と見れば、住居は環状に配置される。その環の内側に同時期の土坑が分布する。他の時期の土坑は僅かしかないので、この環の内側の土坑の多くは中期中葉の可能性が高い。中期中葉の集落は S21W39 付近を中心とし、直径 40m 程度の小規模な環状集落だと推測できる。

環の中心は施設の空白エリア (広場) ではなく、全面的に土坑が構築されただろう。縄文時代の人骨が多数発見された安曇野市北村遺跡の墓坑の規模は、検出時の径で 106㎝× 59㎝、深さ 32㎝が平均値だという所見が得られている [平林彰 他 1993]。Ａ区南西隅の土坑 167、土坑 170、土坑 172 などがこの値に近く、環の内側に分布する土坑の半分は、墓坑として十分なサイズを持つ。環の中央は墓域であったのだろう。

土偶装飾付土器を毀損させた上で埋納した土坑 115 と、底部を毀損させた土器を埋設した土坑１は、墓坑とは異なる性格を持つ。いずれも通常の廃棄行為以上に厳格な廃棄方法をとっており、埋葬とも共通する強い忌避感の表現ではなかろうか。両者とも土坑分布域の縁辺近くに位置しているが、意識して墓域の中央には置かなかったのだろう。土坑 115 に隣接する S27W51 ～ S27W54 グリッドからは、掲載できなかったが中期中葉の半完形土器が数点出土しており、何らかの意図があったのかどうか。

住居の建替や繰り返される埋葬の結果、環状集落の範囲は最終的に全面伐開され、開地状態は維持され続けただろう。居住者が居なくなった後も、暫くの間は周囲のどこよりも集落を再建しやすい環境が残されたと推測する。中期後葉の集落がほぼ同じ位置に成立するのは自然のことであった。

(2)　中期後葉の集落

中期後葉 (長野県史中期後葉Ⅰ期～Ⅲ期) の集落は、中葉の集落範囲を踏襲しつつ、かなり離れた位置にも住居が展開する。中期中葉の可能性もある 16 号住居と時期不確定の 37 号住居を含めて、６基の竪穴住居がある。このうち谷状低地の対岸 (北岸) に位置する 35 号住居は立地が異なるので、主たる構成員からは外れるだろう。さて、４号、９号、15 号・16 号の４基の住居は、中期中葉の住居の環から若干東に寄って並列する。中葉の環の西北辺が継承されたかのようだが､それより東側は中期包含層未調査の範囲なので、集落形態は確定できない。

南微高地北東端に位置する 37 号住居を重視すれば、直径 70m を越える環状集落の可能性もないとは言えない。だが、時期不確定で遺物もほとんどない 37 号住居に依拠した推測は強引過ぎよう。中期包含層の未調査区域でも、後期以降の遺構は全面調査を行なった。その調査遺構と切り合った土坑 251、土坑 304 は調査したが、その周辺が中期の土坑群分布域であったなら、もっと多くの土坑が検出されたはずであろう。

また、中期後葉の土器は微量に留まり、ある程度まとまって出土したグリッドは２カ所に過ぎない。さらに、特大の深鉢 U10-1 が埋設された屋外施設の埋甕 10、土坑 24 や土坑 73 は住居の環の外側に出てしまう。土坑や埋甕の配置は、環状集落という案には不都合だろう。環状配置を取らず、４号住居や 15 号住居周辺に竪穴住居がまとまり、その周辺に土坑や埋甕が点在するような、小規模な形態となる可能性のほうが高そうだが、その場合は土坑 251、土坑 304 の評価が難しくなる。中期後葉の集落が小規模であったとしても、集落周辺はある程度は伐開され、半ば開地に近い環境になっていたのではなかろうか。

（３） 中期末葉～後期初頭の集落

中期末葉～後期初頭 (長野県史中期後葉Ⅳ期～称名寺式期) の遺構は皆無で、遺物も少量しかない。後期前葉以降の土器について、一定の集中性があると判断する基準を、１グリッドあるいは１遺構あたり、口縁部破片の重量で 500g に置いたが、その基準を超える中期末葉～後期初頭の遺構・グリッドは全くなかった。とはいえ若干ではあるが土器は出土し続けており、中期に成立した開地に対する人間の干渉は、細々ながら継続したと推測できる。季節的・一時的居留地・逗留地、移動途中の経由地・休憩地などといった利用の仕方が考えられる。開地は原生林に戻りきらず、再度の伐開が実施しやすい状態ではなかっただろうか。

２　後期前葉以降の集落 (図 170)

（１） 検討の前提

第１分冊と第２分冊で報告した遺構のうち、本分冊の土器の検討により、帰属時期の判断に変更が生じたものが若干ある。佐野１式後半～佐野２式とした 26 号住居は、主要な土器の時期幅を狭めることができそうで、佐野 1b 式帰属と判断を変更する。佐野 1b 式？とした埋甕４は、佐野 1b 式～佐野 2a 式と時間幅を広げざるをえない。佐野式とした埋甕５と佐野 1b 式？とした埋甕７は、佐野 1b 式～佐野 2a 式に変更する。晩期中葉とした配石２・３は時期幅を若干絞り、佐野 2a 式を中心にその前後とする。佐野 2a 式とした土坑 384 は、少々不安を残すが佐野１式に繰り上げる。佐野 1b 式～佐野 2a 式とした土坑 457 は、佐野 1b 式の範囲にほぼ収まると考え直す。

後期以降の遺構の遺存状況はきわめて悪い。竪穴住居の掘り方は僅かしか残らず、敷石住居も床の石敷きがほとんど残らない。関東地方で類例が増加している環状盛土遺構は、大規模な地面削平を伴うが、エリ穴遺跡でもそれに類する行為があったのか。あるいは、後世の開拓などが原因なのか。配石遺構は小規模なものばかりだが、構築時には金生遺跡の配石のように大規模だったのが、毀損されて失われたに過ぎない可能性もあろう。エリ穴遺跡の土製品や異形土器の質・量はただ事ではない。それに対応する大規模遺構も構築されたと考えるのか、それとも本来遺構は貧弱だったと見るかは、遺跡の評価の根幹に関わる問題である。だが、損壊前の状態を究明する手掛かりはなく、棚上げにするしかない。

図 170 に示すとおり、後期前葉～晩期後葉の間、集落はほぼ断絶なく継続する。諸遺構が配置される範囲は概ね踏襲され、規模も同程度で推移する。小規模ながら安定した集落であり続けたといえるだろう。

諸遺構の多くは中期包含層の未調査区域に分布する。そこが中期後葉に開地とされたか否かは、確定できない。一方、中期中葉の集落範囲は、後期前葉以降はその一部が短期的に利用されるに留まる。後期前葉以降の集落域は、中期に成立した開地の一部を継承しつつも隣接範囲を伐開し、新たなデザインに基づいて形成されたのだろう。後期前葉以降は谷状低地も利用されるが、これは中期にはなかったことである。

後期前葉以降の集落は、Ａ区の南微高の東半分が中心となる。遺構の大半は遺構検出面の等高線 684.3m より東側 (上流側) に分布し、それより西側は疎らである。また発掘範囲の東限付近、等高線 685.2m 付近では密度が薄くなる。集落の東西の限界がそのあたりであろう。集落の北限は谷状低地、南限は現塩沢川

の流路に連なる発掘域南端の地形変換点付近だと推定する。東西 30m 程度、南北 50m 程度の狭い範囲に、長期にわたって集落が営まれ続けたのであろう。ただし、谷状低地縁辺では発掘域より東側に廃棄場が延伸しており、居住域も広がる可能性が高い。そこを「未発掘北東エリア」と呼び、それも含めて集落構成を検討する。

（2） 聖域と居住域 (図 172)

集落を構成するのは竪穴住居 (住居に準ずる竪穴、住居の一部の炉を含む)、墓坑を含む土坑、屋外の埋甕、配石などで、大規模遺構はない。帰属時期が特定できる土坑は少ないが、等高線 684.3m 以東には中期の遺構はごく少ないので、それ以東の土坑の多くは、後期前葉以降に属する可能性が高いだろう。好条件に恵まれた北村遺跡では相応の規模の土坑の多くから人骨が出土しており、それに照らせば、エリ穴遺跡にも多数の墓坑が存在したはずである。だが、人骨が皆無のエリ穴遺跡では、遺体に被せたと推測できる浅鉢が出土した配石 23 くらいしか、根拠のある墓は摘出できない。墓の根拠が示せない土坑がいくら集中しても、そこを「聖域」だと判断するには説得力が足りないだろう。そこで注目したいのが、屋外の埋甕と、配石、意図的に遺物を収めた可能性のある土坑である。

第 1 分冊掲載の後期～晩期の埋甕は 10 基あり、すべて住居外に構築されたと判断した。このうち埋甕 9 は浮線文期の土器棺であろう。それ以外の埋甕は一定の規則性を持って損壊させた土器を埋置した。欠損なり毀損して土器が機能を終えたならば、廃棄儀礼を経て廃棄されるのが標準的な扱い方であろう。廃棄場所は廃屋周辺で、上ノ段式以降は谷状低地に面した廃棄場が主となる。だが、埋甕は特に何らかの意図を込めて、標準よりもはるかに厳重な扱い方で容器としての機能を終了させている。あるいは埋設によって別の機能を与えられ、埋設場所で活き続けるのかもしれない。配石のうち 2 次焼成を受けた礫を配置した配石 2･3 は、廃棄場Wと連動した廃棄儀礼に関わる施設だろう。それ以外の配石で小規模なものは性格付けに不安を残すが、一般的な評価に従って祭祀施設と考える。土坑の中には完形に近い土器や大量の土器片が入る例がある。土坑 200 はその代表で、ほぼ同時期と推測される多量の佐野 2a 式土器が折り重なっており、それらの一括廃棄の為に設けられた遺構だと推測した。一般的な土器廃棄よりも厳重な扱いで、忌避の意識が窺えるのではなかろうか。土坑 234、土坑 400、土坑 509 から出土した完形の環形耳飾は埋納品の可能性があり、墓坑の期待も持てるだろう。これらはいずれも埋葬施設とは限らないが、日常的な起居の施設ではなく、特別な意味が込められていると推測する。土坑の一部、埋甕、配石を「聖域」の確実な構成要素と考える。

確実な聖域構成要素を遺構分布図から拾い上げ、それに後期集落形成期である後期前葉 (堀ノ内式期) ～中葉 (加曽利 B 式期) に属する可能性の高い住居を加えたのが図 172 である。聖域の構成要素の分布は、少数の例外を除いて、検出面の等高線 684.4 ～ 685.1m の幅の中に限定される。遺構全体の分布範囲よりもさらに狭く、せいぜい幅 20m 程度の緩い弧状の帯の中に収まってしまう。この範囲こそ後期前葉以降の「伝統的聖域」ではなかろうか。いったん確立した聖域には断続的に構成要素が追加されるはずで、聖域の意識は長期にわたって継承されたと推測する。

伝統的聖域から外れて例外的位置を占めるのは、後期前葉の埋甕 1 と土坑 101、土坑 339、土坑 388、それに晩期中葉の配石 2 ・ 3 だけである。配石 2 ・ 3 は谷状低地に立地し、晩期中葉限定の廃棄場Wの中心的位置を占める。伝統的聖域とは別の、時期限定の聖域と判断する。残りの遺構は集落構成が確立する前の段階の産で、聖域の範囲も未確立ゆえの例外ではないか。伝統的聖域の範囲は集落成立と同時に意識され始め、後期中葉に確立したと考えてはどうか。その範囲には時期不明の土坑も数多く存在するが、その大半は後期～晩期に属するだろう。配石 23 がある以上、一定のサイズがある土坑は墓坑の可能性が十分あるだろう。

伝統的聖域成立～確立期の可能性の高い住居 12 基のうち、10 基は聖域の範囲に重なって分布する。例

外は２基ある。谷状低地中央に位置する後期前葉の１号住居は立地が全く異なるので、伝統的聖域とは切り離してよいだろう。後期中葉の７号住居は中期集落の居住域と重なり、周囲に同期の遺構はない。例外的配置を取る理由は説明できないが、主流から外れた１基を重視する必要はないだろう。

中期末から後期初頭にかけて、集落は断絶した。再建されたのは後期前葉で、南微高地全体が集落の範囲になるが、等高線 684.4 ～ 685.1m の幅の中に集中する傾向を見せる。後期中葉にはその傾向がいっそう強まり、特に埋甕・配石・特別な土坑などはその範囲に限定されてゆき、伝統的聖域が確立する。住居がまとまる範囲は伝統的聖域の範囲と重なる。この範囲は後期前葉には開地となり、以後晩期後葉に至るまで、伝統的聖域かつ居住域として維持され続ける。

後期前葉以降のエリ穴集落は、居住域と聖域を分離せず、最後まで両者が一体化し続ける。こうしたあり方は、北村遺跡 [平林 他 1993] の遺構配置 (図 168) と共通する。北村遺跡は犀川右岸の河岸段丘上の平坦面～崖錐に立地する。平坦面は居住域で、崖錐末端は長期にわたって墓標たる配石をもつ密集した墓域とされるが、その墓域にも敷石住居が多数構築される。墓坑の上に住居を構築し、廃絶後は住居の床を掘り抜いて新たな墓を構築する例が普遍的に存在する。住居も墓も時期別に見れば群別が可能で、幾つかの支群に区分でき、それが継続するという。だが、住居の支群と墓の支群の位置は重なり、墓坑と住居は相互に切り合う。「聖域」は固定されていても、そこには住居が恒常的に侵入するので、聖域は独立しない。こうした状況は後期初頭 (称名寺式期) に確立し、北村集落が廃絶する後期中葉・加曽利 B1 式期まで続く。

エリ穴遺跡では輪郭が確定できない住居が多く、土坑との切り合いは不明瞭だが、前代の墓や厳重な埋納を示す遺構に隣接して住居が構築される。「聖域」は存在するが、それと居住域の位置は重複する点で、北村遺跡と共通である。後期前葉以降の聖域は住居を排除しない。一方、中期の環状集落は聖域から住居を排除することによって成立する。この相違の背後にある意識の変化には興味深いものがある。

(3)　後期前葉 (堀ノ内式期) ～中葉 (加曽利Ｂ式期) の集落 (図 171)

中期末葉～後期初頭の断絶を経て、集落が再建されるのは後期前葉、堀ノ内１式期である。加曽利Ｂ式期の可能性もある 18 号住居と竪穴３、後期の可能性が高い炉４と炉５を含めると、最大９基の住居が存在する。柄鏡形敷石住居と推定できる 27 号住居と 39 号住居以外は遺存状況が悪く、形態・構造を特定できない。谷状低地の中央に位置する１号住居と、谷状低地縁辺にかかる炉５をもつ住居を除けば、(2) で推定した伝統的聖域の範囲に収まる。住居周辺には埋甕 11 と若干の土坑もあり、住居とは混在状態である。この堀ノ内式期の中心的な遺構分布域をベースにして、伝統的聖域が確立してゆくのだろう。ただ、中心的な遺構分布域に構築される聖域構成要素は埋甕 11 のみで、埋甕１、土坑 101、土坑 388 はかなり離れて存在する。聖域構成要素は分散的で、これが堀ノ内式期の特徴である。聖域は成立過程にあると考えるべきだろう。１号住居は谷状低地の中央という少々異様な位置を占めるが、堀ノ内式期の集落構造は様々な可能性を秘めていた証拠ではあるまいか。試行錯誤の過程を受けて方向が固まるのは、後期中葉である。後期前葉の土器のほとんどは住居からの出土で、廃屋やその周辺に廃棄されたことが明瞭である (図 176)。後期中葉との相違は興味深い。例外は S0W6 グリッド周辺で、未発掘北東エリアに住居等が存在した可能性を窺わせる。

18 号住居、竪穴３、炉４、炉５を含めて、後期中葉には最大９基の住居が存在する。多くは竪穴住居らしいが、19 号住居は壁際に礫が配置されており、方形周石住居 (方形石囲住居) などの敷石住居の系譜を引く住居に類似する。７号住居と炉５を除けば、住居は伝統的聖域の幅の中に収まる。埋甕・配石に加え、当該期の土坑もこの伝統的聖域の範囲内に収まっており、聖域への集中度は高く、後期前葉の散漫さは払拭される。後期中葉の土器は住居だけではなく、その周辺のグリッドから出土する。伝統的聖域の全域に分布するといってよい。後期前葉は構築した住居周辺が伐開され、中葉にはその範囲が拡大し、伝統的聖域全体が

開地となったのではなかろうか。伝統的聖域は確立し、以後の集落の範囲とデザインが固まったといえよう。土器の分布は谷状低地にも及ぶ。N3W6、S0W12、S0W15 など後期後葉以降に廃棄場 E となるグリッドでは、少量ながら中葉の土器が混じる (図 177)。第２分冊では先駆的な廃棄の可能性を指摘した。

図 171 には時期不明の配石も表示した。伝統的聖域の範囲内に９基、それから外れた南微高地西側に５基、谷状低地中央に２基が分布する。住居との切り合いや住居推定範囲との重複を考えると、伝統的聖域内の９基は後期中葉よりも新しい時期の可能性が高い。一方、それより西側の南微高地には後期前葉に限って遺構が構築されるので、そこに位置する配石５基は後期前葉に属する可能性が高いだろう。

（４） 後期後葉 (上ノ段式期) ～末葉 (中ノ沢Ｋ式期) の集落 (図 173)

後期後葉の住居は 17 号住居と 36 号住居の２基、いずれも谷状低地に臨む南微高地北縁に位置する。竪穴住居だが 36 号住居は方形周石住居の系譜も継承するだろう。帰属時期が確実な土坑は、伝統的聖域のほぼ中央に位置する土坑 380 のみである。住居は伝統的聖域の北縁部分に限定され、伝統的聖域はかろうじて継承されるが、それを中心とした開地の利用は低調だと考えざるをえない。

谷状低地の利用は大きく変わる。S0W12 グリッドを中心にした廃棄場 E2 が成立し、遺物の多くは最終的にそこに遺棄された (図 178)。以後、晩期後葉に至るまで、時期によって少々位置を替えつつ、谷状低地南縁は廃棄場として利用され続ける。同時に、17 号住居、36 号住居ともかなりの量の土器が残される。後期中葉以前と同様に、廃屋も最終的な廃棄の場に利用され続けていただろう。この２基の住居は谷状低地に面しており、特に 17 号住居は廃棄場の立地とほとんど変わらない位置にある。低地に臨む廃屋への廃棄を契機にして、谷状低地斜面への最終的廃棄が始まったのかもしれない。廃棄の儀礼がどこで行なわれたのかは不明である。集落の存続期間を通して、晩期中葉の配石２・３周辺以外では、廃棄儀礼の痕跡を見出せない。明瞭な痕跡が残り難い儀礼だったのだろう。廃棄儀礼が最終的な遺棄の場で執行されたのなら、後期中葉以前は伝統的聖域がその儀礼の場だったろう。後期後葉以降はそれが谷状低地斜面に移る。廃棄儀礼の場の変更に伴って、その他の儀礼の場の選択にも変化が生じ、伝統的聖域での儀礼が低調となった、というのが１つの解釈であるが、次に述べる後期末葉の様相を考えると、これだけでは不十分である。なお、南微高地包含層出土遺物は大幅に減少するが、廃棄場成立が原因であるのは言を待たない。後期後葉は上ノ段式土器の成立や独自技法の山形土偶の成立に示されるように、甲信地域の地域色が顕在化する時期である。聖域・居住域と廃棄場からなる独自の集落構造の成立も、地域色顕在化の一環に位置付けられる。

後期末葉の住居は皆無である。切り合い関係から、上ノ段４式以降と判断した炉３を持つ住居と、配石 11、土坑 554 だけが後期末葉の可能性を残すが、いずれも遺物は貧弱で、後期末葉に帰属する積極的な根拠は見出せない。その一方で谷状低地の廃棄場には後期後葉を大きく上回る遺物が残される (図 179)。廃棄場 E2 の出土量は後葉並だが、上流側の廃棄場 E1 にはその倍以上の遺物が遺棄される。大量の遺物はエリ穴集落の住人が遺棄したものと考えざるをえず、集落での生活は後葉以上に活発な状態だったと推測できる。中ノ沢Ｋ式土器やポスト山形系土偶が製作され、顔面付分銅形土偶もこの時期の可能性がある。土製耳飾の大量使用も始まる。遺物から見れば地域色が最も強まり、東海以西の影響も最も強く、活気が感じられる時期である。にもかかわらず、後期末葉の遺構は皆無の可能性がある。

遺構の不在に対する解釈を２つ用意した。集落構成第１案は未発掘北東エリアに遺構を求める案である。図 173 で網掛け表示した、廃棄場 E1 南側の N6E12 ～ S6W3 付近に、包含層が延伸している可能性は極めて高い。聖域構成要素を含む住居なども展開しているとすれば、伝統的聖域にこの時期の遺構が希薄なことも説明できる。この未発掘北東エリアには後期前葉に住居が構築された可能性を既に指摘した。後期後葉の住居の偏在性や聖域の低調さを考えれば、未発掘北東エリアへの展開は後期後葉から始まっており、後期末

葉はそれを継承したと見てはどうか。集落構成第２案は、この時期の遺構が縄文人によって破壊されたとする案である。後期末葉の遺構を狙い撃ちで破壊できるのは、住居等の残骸がまだ残る晩期初頭の住人たちだろう。墓は墓標などの目印を持つ可能性があり、配石もその位置を特定できるから、廃屋とともに破壊しうるだろう。後期末葉に生じた何らかの現象に対して晩期に至って忌避意識が発生し、前代の遺構に対する損壊・破壊行為が発生した。それは伝統的聖域内の後期末葉構築施設全体に及んだ。破壊した構造物や遺物は廃棄場に遺棄され、その場所として上流側に廃棄場 E1 が設定された。この集落構成第２案は、第１案と二者択一的ではなく、２つの案が両立する可能性もある。ただし、第１案は肝心の場所が未発掘なのが大きな弱点であり、第２案は伝統的聖域・居住域の継承性を示せるが、荒唐無稽とのそしりを免れない。

充実した廃棄場と遺物に対して、確実な遺構は皆無という、誠にアンバランスな後期末葉の様相である。試案・仮説の提示以上の説明は困難である。

(5)　晩期前葉 (初頭型式～佐野 1a 式期) ～中葉 (佐野 1b 式～佐野２式期) の集落 (図 174)

晩期前葉から中葉にかけて、伝統的聖域は最も充実するのに加え、谷状低地の利用が進展する。晩期中葉にその傾向は顕著だが、少々留意すべき点がある。中葉に後続する晩期後葉は遺構が僅かで、遺物の分布域も限定的である。集落内での活動が低調ならば、中葉の遺構等を損壊するような行為も限定的だったと推測すべきで、晩期中葉の遺構・遺物の充実は少々割り引いて評価する必要がある。一方、第１分冊の第Ⅲ章で紹介した、1970 年調査の遺構を考慮に加える必要がある。晩期前葉～中葉の住居１基と、後期後葉より新しい配石２基がそれで、それぞれ F1 号住居、配石 F1、配石 F2 と名付けた。晩期後葉の配石遺構は類例が少ないので、２基の配石は晩期前葉～中葉の可能性が高いだろう。なお、晩期前葉～中葉の土器編年は未確定の部分が残っており、遺構の帰属時期の判断には少々不安が残る。

さて、憶測した未発掘北東エリアの集落域が、後期末葉に限定的 (集落構成第 1A 案) だとすれば、晩期前葉には伝統的聖域が復活し、発展したことになる。逆に晩期前葉以降も継続的 (集落構成第 1B 案) だとすれば、伝統的聖域は後期末葉の遺構を消去しつつ継承され、発展したことになる。

晩期前葉の住居は、中葉の可能性もある 13 号住居と F1 号住居、後期前葉の可能性もある竪穴４を含めると、最大で５基確認できる。遺存状態は悪いが、恐らく竪穴住居だったのだろう。住居の位置は二分される。13 号・14 号、F1 号住居の３基は伝統的聖域の西端からややはみ出した位置を占め、土坑や配石は隣接しない。これを西群とする。一方、29 号住居と時期不確実な竪穴４は伝統的聖域の中央に位置し、配石 11 や土坑 429 が隣接する。聖域構成要素に囲まれる伝統的な占地をとっており、これらを南群とする。さらに、集落構成第 1B 案を採用するなら、36 号住居の東側に晩期前葉の住居等が存在した可能性が生じ、それらは北群ということになる。埋甕、配石、土坑などが集まる伝統的聖域の中心は、西群、南群、(北群) の住居に囲まれるようにも見えるが、住居と聖域構成要素との混在は解消されてはいない。人面付土版埋納土坑、完形の環形耳飾保有の土坑などは、晩期前葉限定である。墓坑の可能性が期待できる耳飾保有土坑３基は、南群・西群の住居の北東側に、少々離れてまとまる。人面付土版埋納土坑は 29 号住居の南側に位置し、埋甕２に近接する。集落構成第 1A 案に従うなら、南微高地の様相は伝統的聖域への回帰であり、集落構成の第２案に従えば、こうした状況は後期末葉を継承した様相だとの評価に至る。谷状低地の斜面は廃棄場としての利用が継承され、土器の出土量は最多となる (図 180)。前段階では廃棄場 E1 と E2 の東端が中心だったが、晩期前葉には廃棄場 E2 の西側が最も充実し、廃棄場の中心は次第に下流側に移る。廃棄場 E2 の西端と最も近い F1 号住居は直線距離で 10m 離れており、それなりの間隔を保っている。土坑や配石は谷状低地の中央へも進出する。これは後期末葉以前には見られなかった現象である。谷状低地の乾燥が進展して生活の一部に利用しうる環境に変化したからなのか、伝統的聖域が拡大解釈されたのか。

帰属時期に問題が残るものを含めて、晩期中葉の住居は最大で８基確認できる。やはり竪穴住居だったらしいが、遺存状態は悪い。住居の配置は３つのまとまりを持つかに見える。13 号住居と F1 号住居からなる伝統的聖域西端の群 (西群)、21 号・22 号、26 号、40 号住居と竪穴４からなる伝統的聖域南寄りの群 (南群)、炉１・炉２からなる伝統的聖域北端から谷状低地にかかる群 (北群) の３者である。だが、晩期前葉の可能性もある西群の２基は佐野２式に下がるとは考えにくい。後期の可能性がある竪穴４を除けば、南群や北群の住居は佐野２式期が中心となるので、３つの群は並存するとは限らない。晩期前葉の位置を踏襲した西群は中葉の初めで解消されたかもしれない。晩期中葉の後半には中央に聖域構成要素を挟んで、南群と北群の２つの住居群が対置する配置に変化したのではなかろうか。

４～５基の南群の住居のうち、26 号住居は晩期前葉の人面付土版埋納土坑と重なり、聖域構成要素の上に構築されただろう。22 号住居や 26 号住居より南側には晩期中葉の埋甕 (土坑 256) や土坑も構築される。伝統的聖域の南半分では住居と聖域構成要素の混在が続く。北群の２基の住居は南群や西群とは立地を異にする。炉２を持つ住居は谷状低地を臨む位置にあり、後期後葉の２基の住居と共通の立地である。炉１を持つ住居は遺物が僅かしかない。晩期中葉とする根拠は、その位置が晩期前葉の廃棄場 E2 の一角にあるからで、廃棄行為盛期の廃棄場に住居を構築するのは考え難いだろう。炉１に隣接するグリッドからは晩期中葉の土器が一定量出土しており、第２分冊ではそれらは飽和状態に至った後の廃棄場 E への散漫な廃棄だと推測した。しかし、それらは炉１の住居の廃屋への廃棄物だと考えることもできる。後期後葉には未発掘北東エリアに隣接して 36 号住居が構築されており、北群はそちらに広がっていた可能性が高い。それが後期末葉にも継承されたとすれば (集落構成第 1B 案)、南群と北群の対置は晩期以前に遡る可能性がでてくる。

３群あるいは２群の住居の中間には埋甕・配石・特別な土坑が集中する。その数はどの時期よりも多く、伝統的聖域北半分は充実する。その結果北群の住居は伝統的聖域から少々距離を置いて構築されるようになる。聖域の半分から住居が排除され、聖域のあり方が変質し始めた。伝統的聖域北半には晩期中葉の可能性のある埋甕が４基 (U4 ～ U7)、径 10m に満たない範囲に集中する。埋甕が聖域の中心だった可能性があろう。４基の中央付近は埋甕５が所在する S21W21 グリッドで、ここは佐野 1b 式～ 2a 式を主体とした晩期中葉の土器が集中する。埋甕５との関連に限定する必要はなく、中核的聖域の一角で包含層が良好に遺存したグリッドだったのだろう。土器が集中するからには、ここは廃棄儀礼の場でもあっただろう。

谷状低地は廃棄場として継承される (図 181)。中でも谷状低地の下流側、入り江状谷状低地と呼んだ S9W42 グリッドに位置する配石２・３は、発掘中から注目され、ここが主要な祭祀の場だと考えられてきた。第２分冊で示したとおり、配石２・３を構成する礫は焼成を受けた痕跡があり、配石を中心にして廃棄場Wが成立し、廃棄に伴う儀礼の場という性格を推測した。廃棄場Wの土器は晩期中葉が主体で、前後の時期はほとんどない。佐野 2b 式土器は少量なので、伝統的聖域の埋甕や住居の土器とも整合的である。晩期中葉に突然成立し、短期間の利用の後、放棄された儀礼の場だと推測する。遮光器系土偶の中空の頭部 (d-313[③])や、人面付の異形土器 p-44 ～ p-46 が集中する。廃棄儀礼は伝統的聖域でも行なわれたと推測できるので、廃棄儀礼の場が拡大されたと考える。谷状低地は南微高地上より埋没深度が深く、遺存条件に恵まれたのだろう。廃棄場Wでは埋甕など伝統的施設は発見されなかった。廃棄儀礼に特化した短期間限定の聖域だったと考える。新たな立地や遮光器系土偶などから、伝統的聖域に収めにくい祭祀行為が模索された可能性もあろう。そこには亀ヶ岡式系譜の要素が目立ち、多様性や独自性の衰退が窺われる。廃棄場 E2 出土の晩期中葉の土器が炉１を持つ住居に帰属するのなら、廃棄場 E は晩期中葉には利用を終え、廃棄は廃棄場M (特に M1) と廃棄場Wに限定的になる。飽和状態になった廃棄場を諦め、次第に下流側に場所を移してゆくのがより明瞭になる。一方で南微高地上の住居南群の廃屋にも一定量の遺物が残されており、廃棄場や伝統的聖域中央の S21W21 グリッド付近を中心としつつも、廃屋への廃棄も継続して行われた。ただしこれは晩期

前葉以前も同様で、南微高地上は削平等で包含層が失われやすく、その痕跡が残り難かったのだろう。

（6） 晩期後葉 (浮線文期) の集落 (図 175)

晩期後葉の住居は未発見で、土器の量も激減し、埋甕と土坑が幾つか残されるだけになる。後葉前半の土器は僅かしかなく、埋甕を含めて土器の大半は後葉後半に属する。廃棄場は M1 と M2 の境界付近が中心となり、出土量を減じつつ、晩期中葉より僅かに下流側に中心が移る。甲信地域の晩期後葉の集落は、微高地上には住居や墓、それに隣接した傾斜面には廃棄場という組み合わせが標準的である。住居が明瞭に把握できないことが多く、エリ穴遺跡はごく普通の集落の例だろう。このスタイルが後期後葉まで遡るのが、エリ穴遺跡で初めて把握されたわけである。

晩期後葉の住居は未発見である。遺構の切り合い関係から上ノ段 4 式以降の可能性を考えた炉 3 を持つ住居は、晩期後葉の廃棄場と重なる。周辺には遺物を含んだ土坑が 3 基集中しており、それらを施設とした住居の可能性はありえなくはない。ただ、それだと遺物は廃屋に廃棄された可能性が高くなり、標準的な集落の様相からは外れる。炉 3 自体はほとんど遺物がないので、試案の 1 つに留めておく。

埋甕 2 基は伝統的聖域の南端近くに、土坑のうち 2 基は谷状低地に、7 基は伝統的聖域内に散漫に分布する。埋甕 9 は土器棺墓の可能性が高く、土坑 256 は晩期中葉の埋甕の位置に後葉の埋甕を重ねて埋設した。土坑 469 は遠賀川式壷など半完形土器を含んでいた。埋甕や土坑の多くは伝統的聖域内に収まるので、聖域の意識は継承されたのだろうが、谷状低地に位置する土坑の比率は高まっており、聖域意識の希薄化が窺える。また、廃棄場に残る土器の量は激減し、中核的集落とするには貧弱である。後葉の後半には直線距離で 1,000m ほど離れた赤木山塊に石行遺跡が成立し、そちらが中核的集落となった可能性が高い。日常生活は石行遺跡に中心を移しつつも、聖域に対する意識は捨てきれなかったのであろう。

第 2 節　遺物の廃棄とその背景

1　土器の廃棄と廃棄場の成立

谷状低地の廃棄場の成立は後期中葉以前に遡らず、遺物は廃屋やその周辺に残される。一部を除き住居は伝統的聖域に構築される。土器の廃棄儀礼は伝統的聖域内で執行され、儀礼後はそのまま遺棄された。これが後期中葉までの遺物廃棄のスタイルであろう。後期後葉以降は、谷状低地の廃棄場が加わる。

出土遺物の主体を占めるのは土器と石器で、谷状低地の廃棄場でも、南微高地上の廃屋周辺でも、包含層という形で残される。最終的な廃棄は地表面への放置という形をとる。その中にあって、少数ながら土坑への意図的埋納と判断できる例があり、それは少々性格が異なる廃棄形態だと考えた。時間幅が小さく、半完形品を含む多数の土器が入っていた土坑 200(佐野 2a 式) や土坑 406(加曽利 B1 式前半) が該当する。これらよりは時間幅が少々広かったり、個体数が少ない例も土坑 101、土坑 144、土坑 457、土坑 469、土坑 502 などいくつかあり、それらは土坑 200 などに準ずると思われる。土坑 200 に関しては土器の一括廃棄のために構築された可能性を指摘した。土坑 406 は出土状況の記録が不足して判断を保留したが、土坑 200 と同様の可能性が十分あるだろう。

土坑 200 からは精製土器・粗製土器とも出土し、浅鉢、深鉢もある。精粗の別、器種の別による扱いの差はなく、異形土器は含まれない。その多くはおこげの付着や 2 次的被熱による変色が見られる、日常生活で使い込まれた土器である。土坑 406 や土坑 101 などから出土したものも、日常的使用を経た土器であった。特別な意図を持って製作された特異な土器は含まれない。通常ならば廃棄儀礼後に伝統的聖域か廃棄場のどこかに最終廃棄されるはずである。しかし標準的な方法をとらず、敢えて土坑を構築してその中に収め、

恐らく埋め戻した。通常の廃棄儀礼では事足りず、より丁寧な、あるいはより厳重な扱いがなされたと見る。埋甕とは異なり、本来の形を失い、機能を失った器物を地中に埋納するというのは、強い忌避意識の表現ではなかろうか。構築の場は廃棄場ではなく伝統的聖域の範囲内である。日常使用していた土器ではあるが、使用後は忌避を免れないような目的に使用した結果、地表への放棄には強い忌避観が発生し、土坑への埋納が選択されたのだと推測する。このような土坑は中期にもあり、特に珍しいわけではない。

土坑への意図的埋納の例には、人面付土版埋納土坑がある。意図的毀損と厳重な隔離が窺えるが、埋納対象が特別な性格を持つがゆえのことだろう。中期の土偶装飾付土器を埋納した土坑 115 もその同類であろう。土坑 200 とは埋納理由が少々異なると推測する。

廃棄場の成立は、後期後葉以降のエリ穴集落独自の特徴である。独自の土器型式 (上ノ段式) の成立と軌を一にするのは偶然ではないかもしれない。後期後葉の住居２基は谷状低地に臨む位置を占め、その廃屋への廃棄が廃棄場成立の契機かと推測したが、これは事態の一面しか説明していない。廃棄場成立以前の最終廃棄の場は、伝統的聖域の範囲内であった。伝統的聖域に最終放置する形では廃棄しにくい、忌避観の強い廃棄物が生ずれば、聖域内の土坑へ埋納して対処した。しかし、忌避観の強い遺物が短期間に大量に発生すれば、土坑への埋納では対処しきれなくなる。その結果の妥協案として、伝統的聖域を避けて廃棄場が設定され、後期後葉の廃屋の位置に触発されて、谷状低地への廃棄が始まったとする案はいかがだろうか。その聖域に置けない廃棄物が、短期的かつ大量に発生する可能性を考える上で、鍵を握るのは土製耳飾である。

廃棄場の形成は継続的・持続的である。同一地点に繰り返し廃棄され、満杯になると、順次、隣接地点へ移る。土器の廃棄は順次行なわれたと言えよう。恐らく 500 年以上それが続き、その期間の半分ほどは、土製耳飾が共伴した。土器は与えられた役割を終えたと判断されて、廃棄の手順が開始される。廃棄儀礼を経て儀礼の場に廃棄される。廃棄場Wの状況を見れば、廃棄儀礼の場と最終的な廃棄の場が別々だとは考えにくい。日常的な廃棄物の廃棄場は特別な限定はないだろう。忌避観のある廃棄物は土坑への埋納が選択され、それらが短期に多量に発生して土坑で処理しきれなくなれば、廃棄場への廃棄が選択されたと見たい。

２　土製耳飾の廃棄とその背景

関東地方の大宮台地や下総台地では土製耳飾は低地を囲む集落と重なるように出土すること、その中でも集中地点があることが指摘されている [三浦綾 2016]。エリ穴遺跡の出土状況もこれと共通点を持つ。図 179 には古段階の土製耳飾の分布も、図 180 には新段階の土製耳飾の分布も、それぞれ加えた。土偶の分布と比較すればその相違は明白で、土器と土製耳飾の分布には強い相関関係がある。土製耳飾は廃棄に当たっては土器と同等の扱いを受けたと判断する。ただし、少々の相違もある。土製耳飾は廃棄場の集中度が土器以上に高いように見受ける。土器出土量の多い廃屋やグリッドからは、土製耳飾はさほど出土せず、南微高地上では両者の相関性はやや低い。土器の廃棄は順次行なわれたと推測できるので、土製耳飾も順次廃棄されたのだろう。耳飾の製作・使用が廃れた後にまとめて廃棄された、というような極論は、出土状況からは考えにくい。

土製耳飾はハレの日の装身具であろう。廃棄に当たっても、ハレの日に関わる品という扱いを受けただろう。無文品には少々違う性格があるかも知れないが、出土状況には有文品との相違はなく、グリッド別の出土個体数の多寡は相関する。最終廃棄の際には、ハレに関わる品として同一に扱われたと推測する。墓坑の可能性もある土坑埋納の３点を除き、土製耳飾は最終的に廃棄された状態で出土したと考えるべきだろう。土製耳飾が多量に出土した直接的な理由は、エリ穴遺跡が耳飾の廃棄儀礼の場であったからにほかならない。土製耳飾の製作地であるか否かは、出土量の多寡には直接反映しない。

後期末葉～晩期前葉の甲信地域では、大半の遺跡から土製耳飾が発見される。その多寡をもって耳飾を保

有する遺跡とそうでない遺跡に区分けし、前者を特別な遺跡と見るような見解も見受ける。エリ穴遺跡から９㎞弱の距離にある女鳥羽川遺跡 [原嘉藤・藤沢宗平 他 1972] からは土製耳飾が 15 点出土した。耳飾を僅かしか持たない遺跡の例にあたる。この遺跡は集落の候補たりうるが、発掘調査は部分的に留まって遺構は発見されていない。出土遺物はコンテナで 25 箱程度に過ぎず、エリ穴遺跡の 1/20 程度でしかない。全面調査を行なったエリ穴遺跡出土遺物と量を比較するなら、その数値は 20 倍するべきであろう。エリ穴遺跡並に全面発掘したなら、土製耳飾は 300 点に届くかもしれない。そうした操作を行なっても、なお見劣りはするが、決して軽視できる数値ではない。この時期、この地域における耳飾保有の普遍性を示す例だと考える。とはいえ、エリ穴遺跡の出土量は様々な状況を勘案しても、甲信地域や西関東の耳飾多出遺跡より数倍多く、女鳥羽川遺跡のような遺跡よりは一桁多い。その数の多さの理由を考えねばならない。

土器と同様に、土製耳飾もまた使命を終えたと判断された段階で、廃棄儀礼が執行され、その場に廃棄されたと考える。では、土製耳飾が使命を終えるのはどのような場合なのか。３つのケースを想定してみた。

耳飾着装者の個人的で重大な事情に従って使命を終えるのがケースＡである。その最たるは着装すべき人物の死去で、他にも契機となる事情はあるだろう。装身具は集落などの共有物ではあるまい。とりわけ、耳飾は皮膚に直接触れるものである上、各自の耳朶の孔径と合致しなければ着装不能である。個人の所有物だと想定してよいだろう。その所有者の死は、所有する耳飾の使命終了を意味しよう。ただし、場合によっては形見の品として親族に伝世される可能性はあるかもしれない。所有者の死去に伴う廃棄は個人的事情による廃棄で、廃棄の場所の制約はないのではなかろうか。ただ、埋葬儀礼の一環として廃棄儀礼が行なわれるなら、社会的要請に従うという一面も成り立つ。参集者が着装した耳飾は、持ち帰るのが忌避されてその場で廃棄のサイクルに付されるという想定は可能ではなかろうか。廃棄の場は埋葬の場の周囲で、状況に応じてエリ穴遺跡の伝統的聖域あるいは廃棄場のいずれかが選択された。ケースＡはすべての集落で発生しうる。土製耳飾には多数の系統が存在し、いずれの遺跡からも複数の系統が出土する。多様な系譜の婚入者が存在してこそ集落は成立するのだから、それは当然の現象だろう。女鳥羽川遺跡のような集落からも土製耳飾が一定量出土する理由は、これで説明できる。エリ穴遺跡でも当然発生し、その累積はそれなりの数量を生み出すだろう。しかし、それだけでは他の集落を圧倒するほどの数量を説明できない。

ケースＢは社会的要請のもとで使命を終える場合である。「定例的な儀礼に伴う耳飾の遺棄や廃棄」[金成南海子・宮尾亨 1996] が想定されているが、例えば松本盆地全体から参集者が見込まれる儀礼があったことは想定しうる。定例的な祖先祭や、特に重要な通過儀礼などが該当しそうで、こうした儀礼ならば特別な施設をもたないエリ穴集落でも、十分実施できただろう。松本盆地の他の集落はエリ穴集落以上に貧弱だからである。社会的要請に従ってそれに参加した者は、土製耳飾を着装しただろう。儀礼には飲食がつきもので、その調理にはそれなりの量の土器も使用されただろう。儀礼終了後、使用した土器や着装した土製耳飾などの装身具はまとめて廃棄のサイクルに付された。土器は多量で伝統的聖域の土坑には埋納しきれず、廃棄場が最終廃棄の場とされ、これが定期的に繰り返され、廃棄が累積した。エリ穴遺跡の多系統の土製耳飾は、いずれも変遷段階に従って古相から新相まで時間的に連続して出土する。ケースＢの想定は、耳飾の膨大な量と継続性をうまく説明できる。だが、最大の難点は、定例的儀礼では忌避観が発生しないことで、様々な道具を廃棄する必然性が見出せない。忌避観のない廃棄物を廃棄場へ持ち込む理由も説明できない。

ケースＣも社会的要請に基づくが、より重大な想定である。十年あるいは何十年に一度というような大きな儀礼、例えば飛び抜けた有力者の死去や大規模な集団間抗争の終結など、不定期かつ重大な事態に起因する儀礼 (重大な儀礼) などがあるなら、より広域から大人数が参集するだろう。儀礼に着装した耳飾に対する忌避観も生じうる。葬儀ならば当然だし、抗争の終結なら怨恨を捨て去る為の忌避観がありうるだろう。儀礼に伴う飲食のために多くの土器も使用され、それらも合わせて廃棄場に廃棄されたと考えれば、土器・

耳飾の廃棄における強い相関性も説明できる。エリ穴遺跡からは西関東が本場と目される外周帯外傾系統の耳飾が一定量出土する。それは変遷段階に従い、古相から新相まで時間的に連続している。系統差を地域差に置き換えてよいかは慎重な検討を要するが、広域的な移動の末にエリ穴集落に廃棄されたことは、大いに期待できる。人面付土版・中空動物形土製品・香炉形土器・多孔底土器など、異系統の土製品や異形土器の多量出土も、エリ穴集落での祭祀の広域性の証拠になる。定例的な儀礼の範囲を超えた重大な儀礼も、ありえなくはない。ただ、ケースCの弱点は、さしたる施設を持たないエリ穴集落が重大祭祀の場でありえた理由を、まるで説明できないことである。配石は本来巨大施設だったが、損壊して残骸しか残っていなかったとするのは、都合の良すぎる解釈と言われよう。

様々な問題点を残しつつも、土製耳飾大量出土の理由の説明には、一定レベルの広域的儀礼の存在を否定することはできないだろう。広域から一時的に集まった外来者の着装品を含む耳飾と、祭祀に使用した多量の土器を、最終的には忌避して廃棄する場としては、エリ穴集落の伝統的聖域の地表ははばかられただろう。しかもそれらは一時期に多量に発生する。埋納しきれない場合に、次善の策として、谷状低地の廃棄場が利用されたとすれば、廃棄場は広域的儀礼の成立に付随して成立した可能性がある。一方、集落住人の個人的事情により廃棄することになった耳飾は、伝統的聖域にも廃棄しえただろう。広域的儀礼にはエリ穴集落の住人も参加しただろうし、エリ穴集落の住人の中には他地域出身者も居るだろうから、廃棄場も伝統的聖域も様々な系統の耳飾が廃棄されることになったのではないか。

憶測を重ねたが、土製耳飾着装が普遍化する後期末葉には、広域的儀礼が成立していたと推測する。そして、伝統的聖域に廃棄しにくい廃棄物がまとまって発生したのが廃棄場成立の契機なら、広域的儀礼の成立は後期後葉にまで遡る。後期後葉には土製耳飾は普遍化しておらず、広域的儀礼参加者は土製耳飾を着装していなかった。広域性を示す遺物は新相の釣手土器と顔面付分銅形土偶の一部だが、量的には少ない。儀礼終了時の忌避の対象が何かは特定できない。

エリ穴遺跡出土の土製耳飾の充実は特筆すべきで、広域的な儀礼の累積を想定したが、それに対して集落自体は貧弱と言わざるをえず、相互の乖離は大きい。遺跡の評価を考える上で、最も苦慮する点である。

晩期中葉には少々下流側に移動しつつ廃棄場Mが存続する。加えて廃棄儀礼に特化したと推測した廃棄場Wが、さらに下流側に成立する。伝統的聖域に廃棄しない土器は、相変わらず多いのだから、土製耳飾の着装が廃れた後も広域的儀礼は存続したのか。一方、土製耳飾は西関東では若干後まで着装され続けるのだから、耳飾の廃絶はそれを着装すべき儀礼を行なう組織からの脱落を意味し、広域的儀礼も廃れたのか。本節の 1(5) で延べたとおり、廃棄場Wの成立に示されるように、晩期中葉は廃棄場の様相や祭祀の性格に変化が生じていることを考慮すれば、後者の可能性のほうが高いかと思われる。耳飾の廃絶と中ノ沢B類型の土器の途絶は、ほぼ同時の可能性がある。後続する佐野式土器は独自ではあっても、後期土器に遡る伝統的要素をほとんど継承していない。伝統的要素の喪失は地域集団の独自性の低下を意味し、そこには広域的儀礼を主催する力の衰退と喪失が、暗示されているように思われる。

3　その他の遺物の廃棄

(1)　焼骨の廃棄 (図 171)

171 に示した焼けた動物遺存体 (焼骨) は、第２分冊の付編１で示したように、特定の範囲に集中する。廃棄場 E1 の西半分から M1 にかけてと、南微高地上の配石 19、39 号住居、S42W24 グリッド付近である。該当の廃棄場は後期後葉～晩期後葉まで利用されており、焼骨はその幅の中に位置付けるしかない。南微高地状の集中出土地点は、伝統的聖域の範囲内である。出土焼骨の３割以上が集中する配石 19 は時期の特定が難しいが、晩期の可能性があると推定した。だが、切り合う竪穴３の埋土に由来すると推定される後期前

葉～中葉の土器片が多数を占めるので、焼骨はそれらの土器と同様の由来を持つ可能性が高いだろう。39号住居は堀ノ内２式期と判断され、出土焼骨の多くもその時期だろう。S42W24 グリッドは 25 号住居 (加曽利 B2 式期) の炉が存在し、住居の範囲内であることは確実で、出土土器も加曽利 B2 式が卓越するので、出土焼骨の大半はその時期の産ではなかろうか。こうしてみると、南微高地上から出土した焼骨の多くは後期前葉～中葉の産である可能性が高く、伝統的聖域は焼骨が生じるような儀礼の場でもあったのだろう。廃棄場出土の焼骨はより新しい時期に属する可能性が高いのではなかろうか。儀礼で生じた焼骨は、後期中葉までは儀礼の場の周辺に遺棄され、後期後葉以降は最終的には廃棄場に遺棄されることになったと推測する。焼骨の廃棄は土器の廃棄とほぼ重なるように見受けられ、両者は廃棄パターンを共有した可能性があろう。

（2） 土偶の廃棄 (図 175 ～ 181)

土偶の編年はまだ不完全で、土器との対比も難しい点が残るが、第３分冊の編年観に従って若干幅を持たせて考え、出土状況を検討する。

仮面土偶・ハート形系中実土偶の分布に、後期前葉と後期中葉の土器の分布を重ねて、図 176・177 を作成した。ハート形系土偶等は集中的に出土する地点はなく、広範囲に散漫に分布するうえ、廃棄場成立以前の谷状低地からもある程度出土する。後期前葉の土器の多くは遺構出土だが、ハート形系土偶等の遺構出土例は少ない。後期中葉の土器の出土範囲は広がり、土偶の分布と重なるグリッドも増えるが、そうではないグリッドもあり、判然としない。土偶と土器の分布には強い相関性はないのではなかろうか。山形系土偶と顔面付分銅形土偶の分布に、後期後葉の土器の分布を重ねて図 178 を作成した。後期後葉の土器は住居と S0W12 グリッドに集中するが、土偶の集中度は弱い。土器は廃棄場のほうが多く、土偶は南微高地のグリッド出土のほうが多い。両者の分布の相関性は弱い。古段階のポスト山形系土偶と顔面付分銅形土偶の分布に後期末葉の土器の分布を重ねて図 179 を作成した。土偶の個体数が少ないので傾向は捉えにくいが、やはり両者の相関性は弱い。同図には耳飾の分布も加えたが、土器と耳飾の強い相関性とは明らかな相違がある。新段階のポスト山形系土偶の分布に晩期前葉の土器の分布を重ねて図 180 を作成した。耳飾の分布も含め、後期末葉とほぼ同様な様相を示す。遮光器系土偶とそれに同期しそうな土偶の分布に晩期中葉の土器の分布を重ねて図 181 を作成した。両者の相関性の弱さは変わりがない。図 175 には浮線文期の土器と土偶の分布を重ねた。土偶の個体数が少なすぎるが、両者の分布は全く重ならない。

土偶の分布と土器の分布の相関性は一貫して弱い。耳飾と土器との関係と比較すれば、その相違は明白である。ただし、土製耳飾と同期するのが確実なポスト山形系土偶だけを取り出した第２分冊図 154 を見ると、土製耳飾の分布に近いように思える。図 178 等は資料の組み合わせ方が不適切なのかもしれない。土製耳飾の存続期間だけは、推測した広域的儀礼に巻き込まれて、土器と同様の廃棄状況が生じたかもしれない。とはいえそれ以外の時期の土偶の分布の様相は、既述のとおりである。土偶は土器とは異なる廃棄方法を持つのではないか。使用目的が異なるので、廃棄のタイミングや廃棄儀礼の方法にも違いがあると推測する。

もう１つ注意すべきなのは、続く (3) で述べるように、関東～東北方面から導入した土版や中空動物形土製品には、土坑への埋納が推測され、廃棄に当たっての厳重な扱いが窺われる例が含まれるのに対して、土偶にはそれが皆無なことである。遮光器系土偶 d-313 の中空の頭部は、壊れないような何らかの扱いがなされた可能性を示唆するが、土坑への埋納等は把握できなかった。仮に埋納されたにしても、異系譜の祭祀用具に対する扱いだと理解することができる。国宝の中ツ原土偶など大形で精度の高い仮面土偶には、厳重に埋納される例があるが、それは標準とは異なる価値をもつ土偶なるがゆえのことではなかろうか。

（3） その他の土製品・異形土器の廃棄（第３分冊図 161）

晩期前葉以降の産と推測される土版と中空動物形土製品の分布を、第３分冊図 161 に掲載した。両者とも東北～関東が起源と思われ、甲信地域にとっては異系譜である。廃棄場Ｅの比率が高く、土製耳飾の分布に似ている。中空動物形土製品の掲載漏れが２点あるが、いずれも廃棄場 E2 出土である。また、中空土偶か中空動物形土製品かが判別できない土製品の掲載漏れも４点あるが、出土場所は廃棄場 E1 が２点、廃棄場Ｅより北東側の谷状低地が１点、南微高地が１点である。これらを加えても傾向は変わらない。明瞭な根拠を示しきれないまま、出土土版の中で最古は c-1[③]、中空動物形土製品は c-14[③] と考えた。c-1 は土坑に埋納され、完形に近い c-14 も埋納の可能性がある。いずれも伝統的聖域の範囲内で、厳重な扱いを受けた。それ以外は断片的資料だが、c-1 や c-14 に後続し、晩期中葉に下る可能性もあると考えた。土版には廃棄場 M1、廃棄場W出土が１点ずつあり、それらは晩期中葉の可能性も残る。中空動物形土製品は廃棄場Ｅへの集中度が高いので、素直に見れば晩期前葉の幅の中に収まるのではなかろうか。甲信地域外から導入した土版と中空動物形土製品は、最初のうちは廃棄には厳重な扱いが必要とされたが、定着後は土器や耳飾と同様の扱いで廃棄場に廃棄されたと整理することができそうである。

第３分冊で報告した手燭形土製品は、関東で異形台付土器から派生した。土版同様、甲信地域にとって異系譜である。土版などのような厳重な扱いを受けた例はない。そのうち、最古の c-24[③] は後期末葉に遡る。根拠は不十分だが c-25[③]・c-26[③] は晩期前葉の可能性があり、c-26 に後続するものもありそうだと考えた。c-26 以前を古相、それに後続するものを新相とするが、古相も新相も土版のような厳重な扱いを受けた例はない。古相は廃棄場Ｅなど谷状低地が、新相は伝統的聖域が多いものの、その差は僅かで、明瞭な傾向があるとは言いにくい。手燭形土製品は土版などより厳重さがないものの、導入期には廃棄場を中心に廃棄され、定着後にはその規制がなくなってしまったと理解してよいかどうか。

釣手土器は加曽利 B2 式～上ノ段３式の幅の中に収まりそうである。加曽利 B2 式に対応する古相の分布は南微高地にほぼ限定され、上ノ段３式に対応する新相は廃棄場 E1 や 17 号住居に集中する。時間幅のある中相が大多数を占めるが、廃棄場Ｅにも南微高地の聖域にも分布する。このように見れば、土器廃棄と合致した傾向を示すといえるだろう。釣手土器は廃棄場確立以前がピークの可能性があり、廃棄場の成立と積極的に関わるとは言いにくい。釣手土器は異形であっても異系統だとは意識されなかったのかもしれない。

香炉形土器は後期末葉～晩期中葉、多孔底土器は後期中葉～晩期前葉の時間幅が想定される。伝統的聖域からも、廃棄場からも出土し、厳重な扱いは受けていない。断片的資料が主体なので、何らかの傾向を読み取るのは難しい。

小部屋付楕円浅鉢６点の内、最古の可能性がある D502-52[②] は伝統的聖域中央に位置する晩期中葉の土坑 502 出土、En-10 は廃棄場Mに隣接する廃棄場 E2 の西端出土、J22･G259[①] は晩期中葉の 22 号住居の範囲内と推定されるグリッド出土、残りの３点は晩期中葉を主体とする廃棄場M出土である。この器種の帰属時期が晩期中葉であることを裏付ける分布である。出土数は僅かだが、伝統的聖域の包含層からは出土しない。成立初期には廃棄には厳重な扱いが必要とされ、定着後も伝統的聖域を避けて廃棄場に廃棄すべき土器だったと理解してはどうか。

なお、石器の廃棄と土器等の廃棄との対比に関しては、検討が及ばなかった。相互の整合性はあるが、器種によっては相違点もあり、今後の課題である。

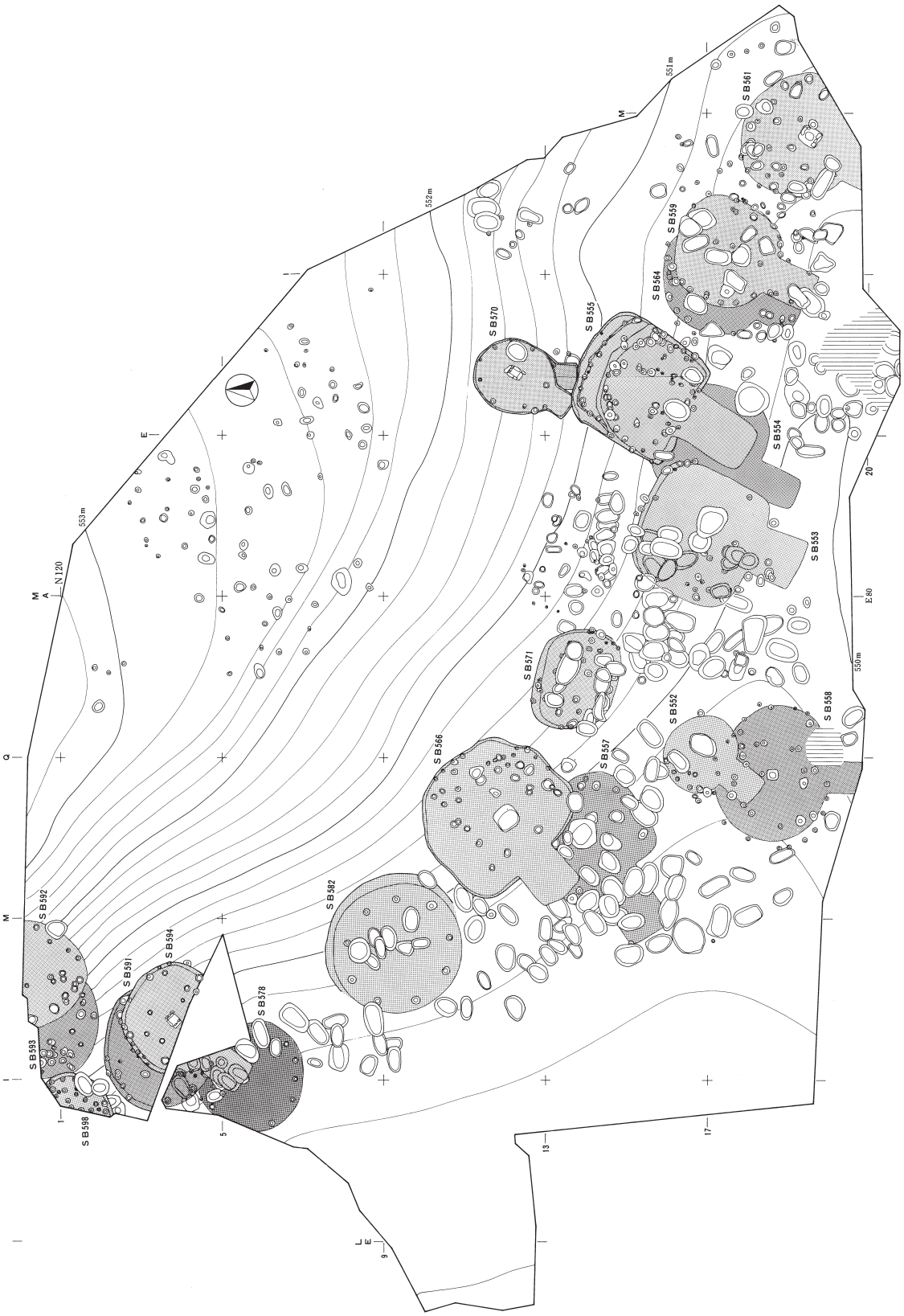


図 168　北村遺跡Ｅ区第 2 検出面の遺構配置
（『北村遺跡 図版編』図版 8 の縮尺を改変）

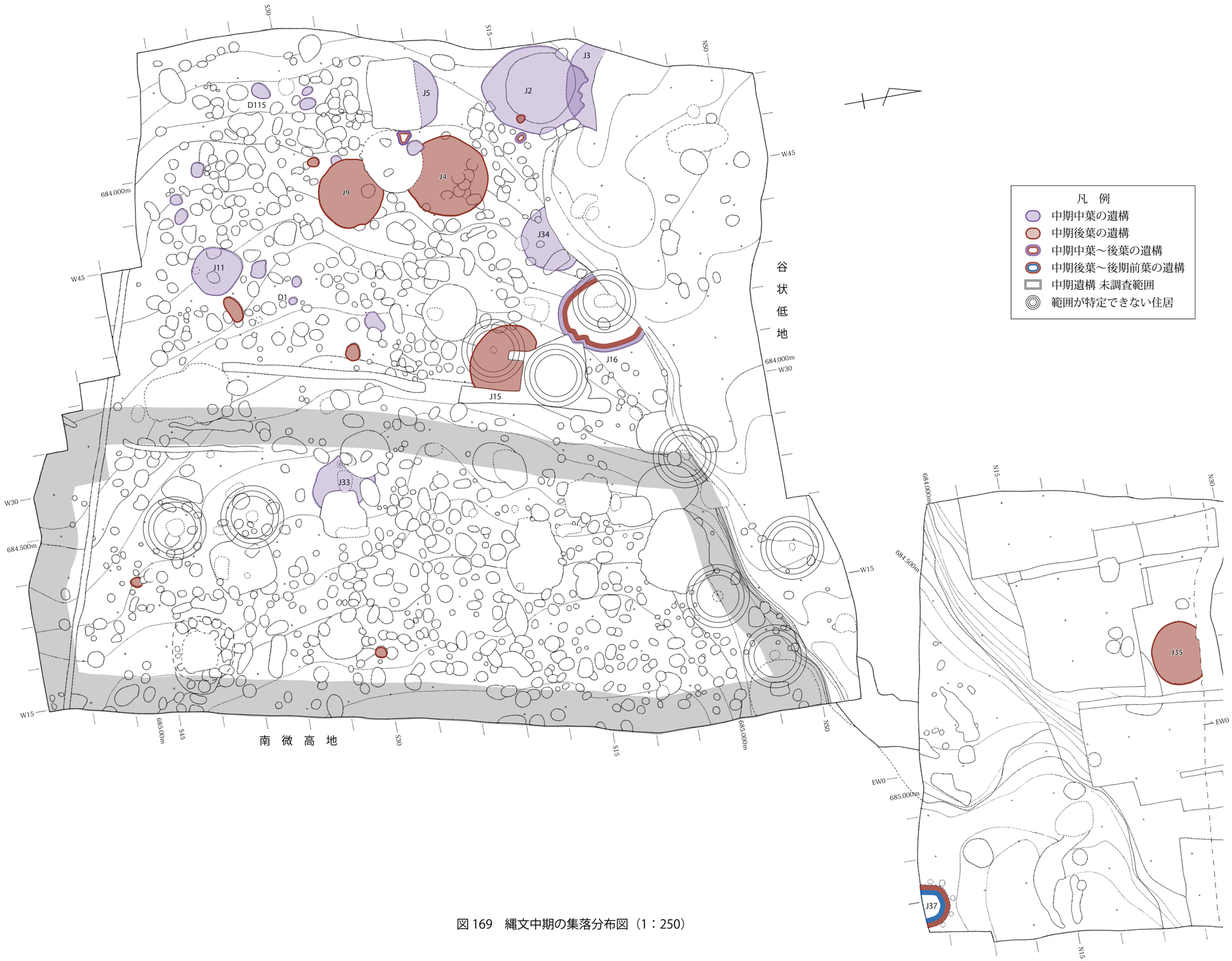


図 169　縄文中期の集落分布図（1：250）

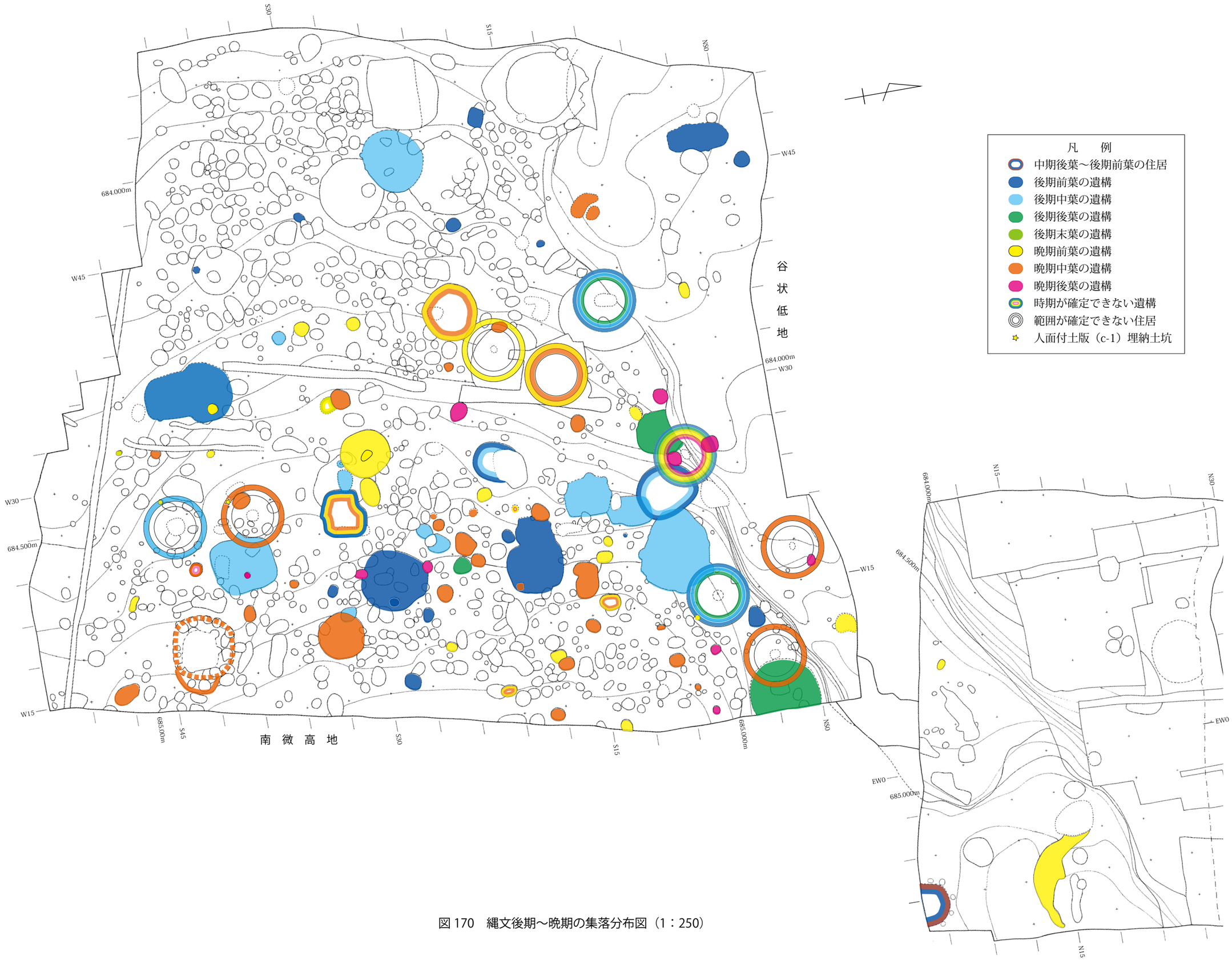


図 170　縄文後期～晩期の集落分布図（1：250）

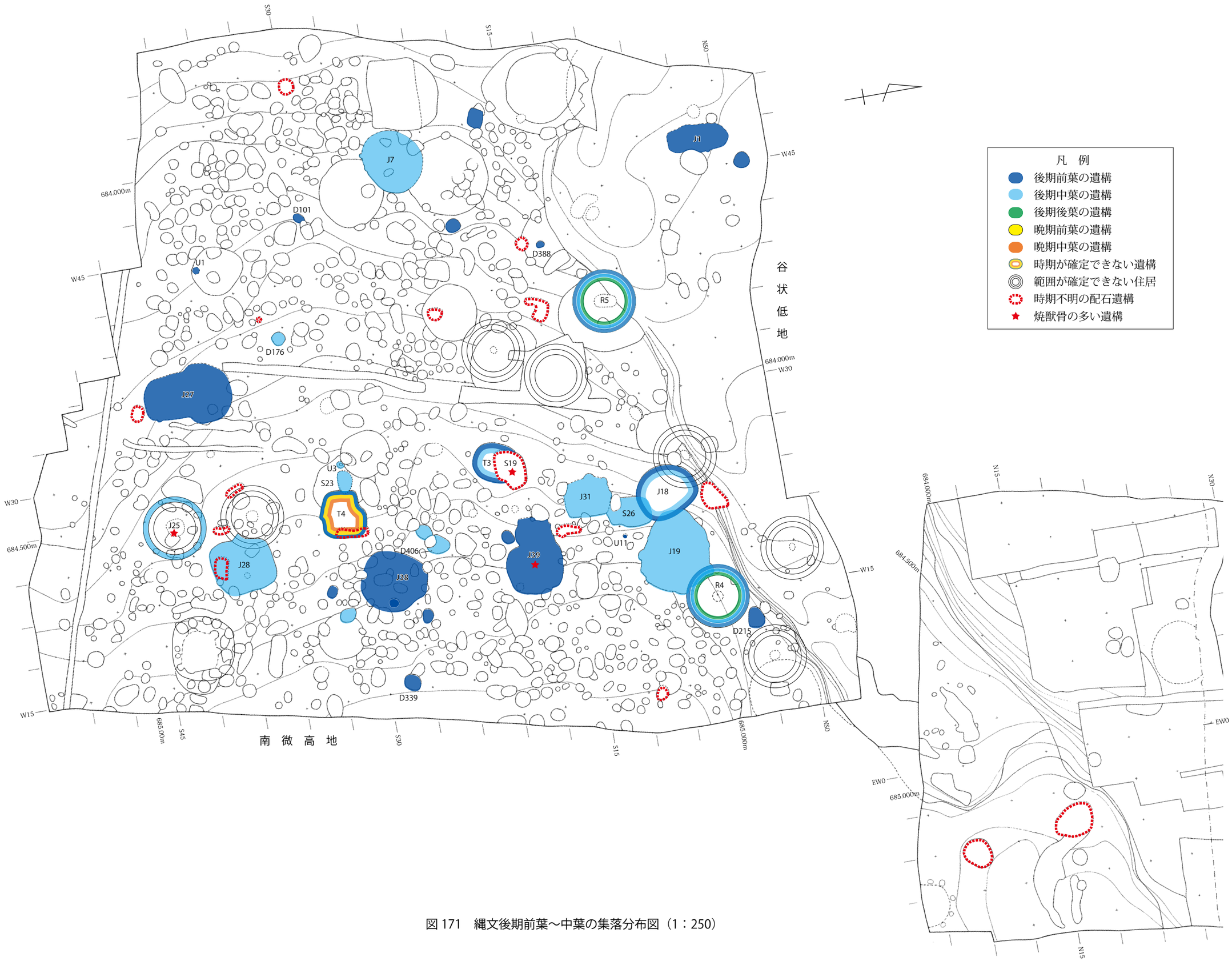


図 171　縄文後期前葉～中葉の集落分布図（1：250）

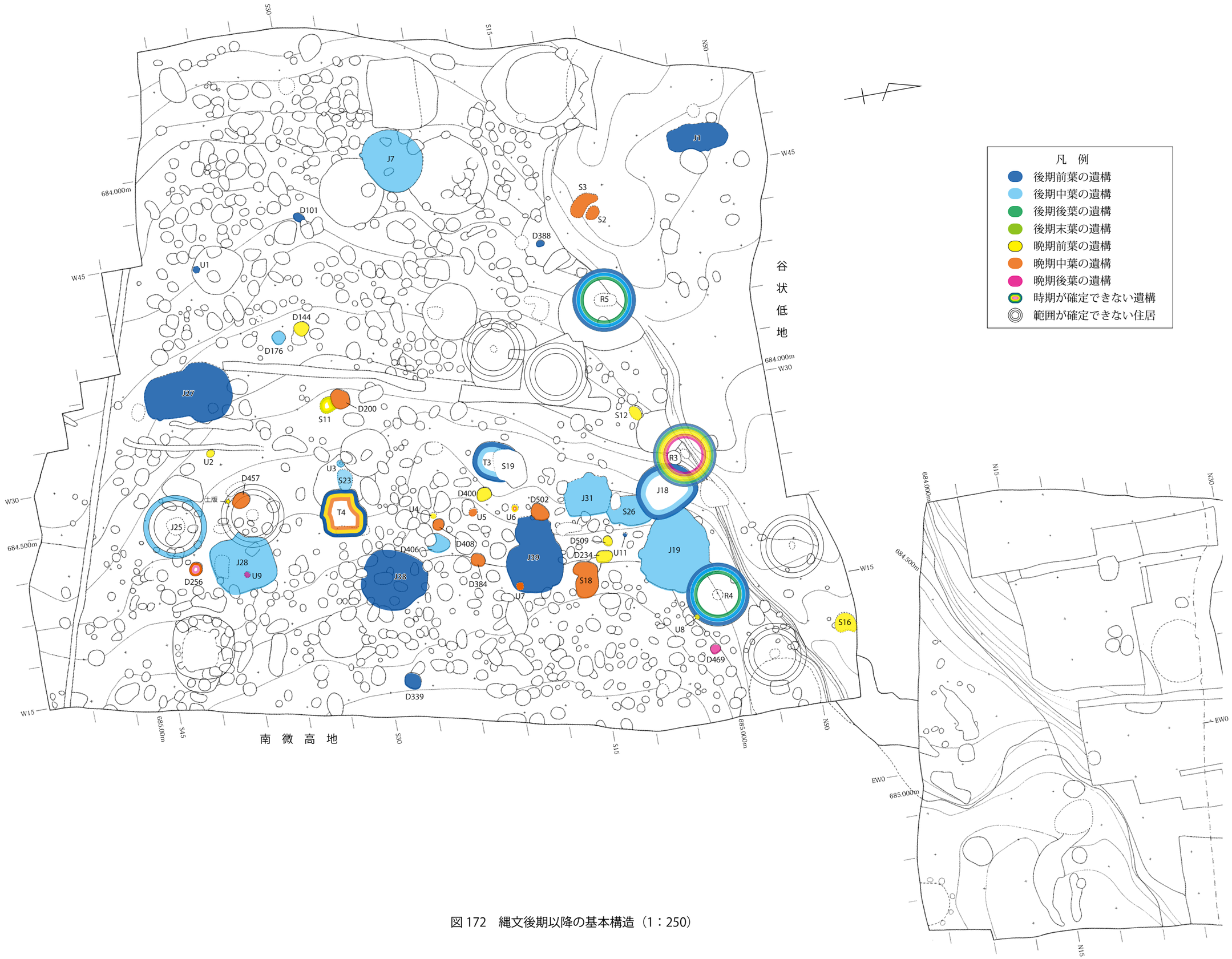


図 172　縄文後期以降の基本構造（1：250）

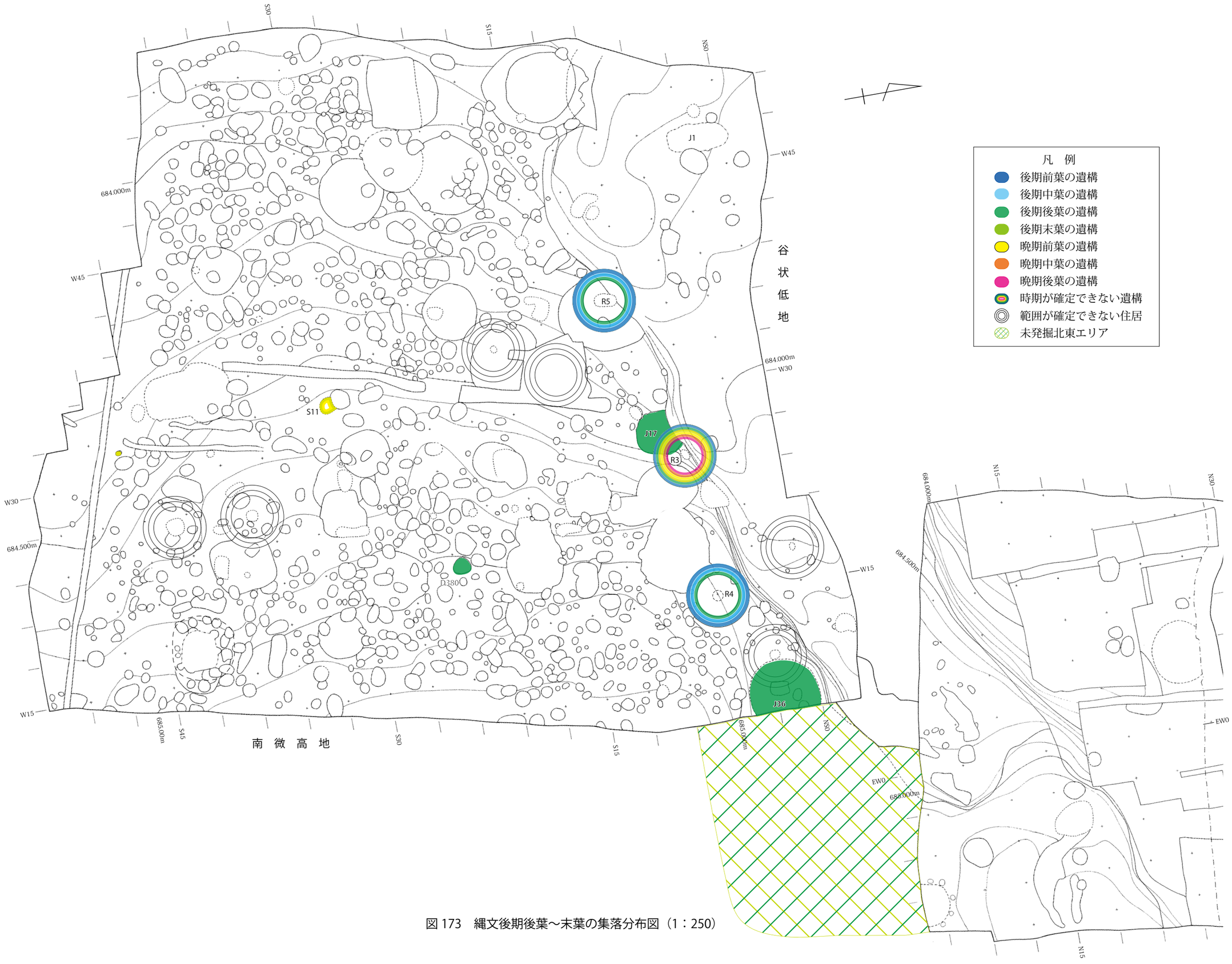


図 173　縄文後期後葉～末葉の集落分布図（1：250）

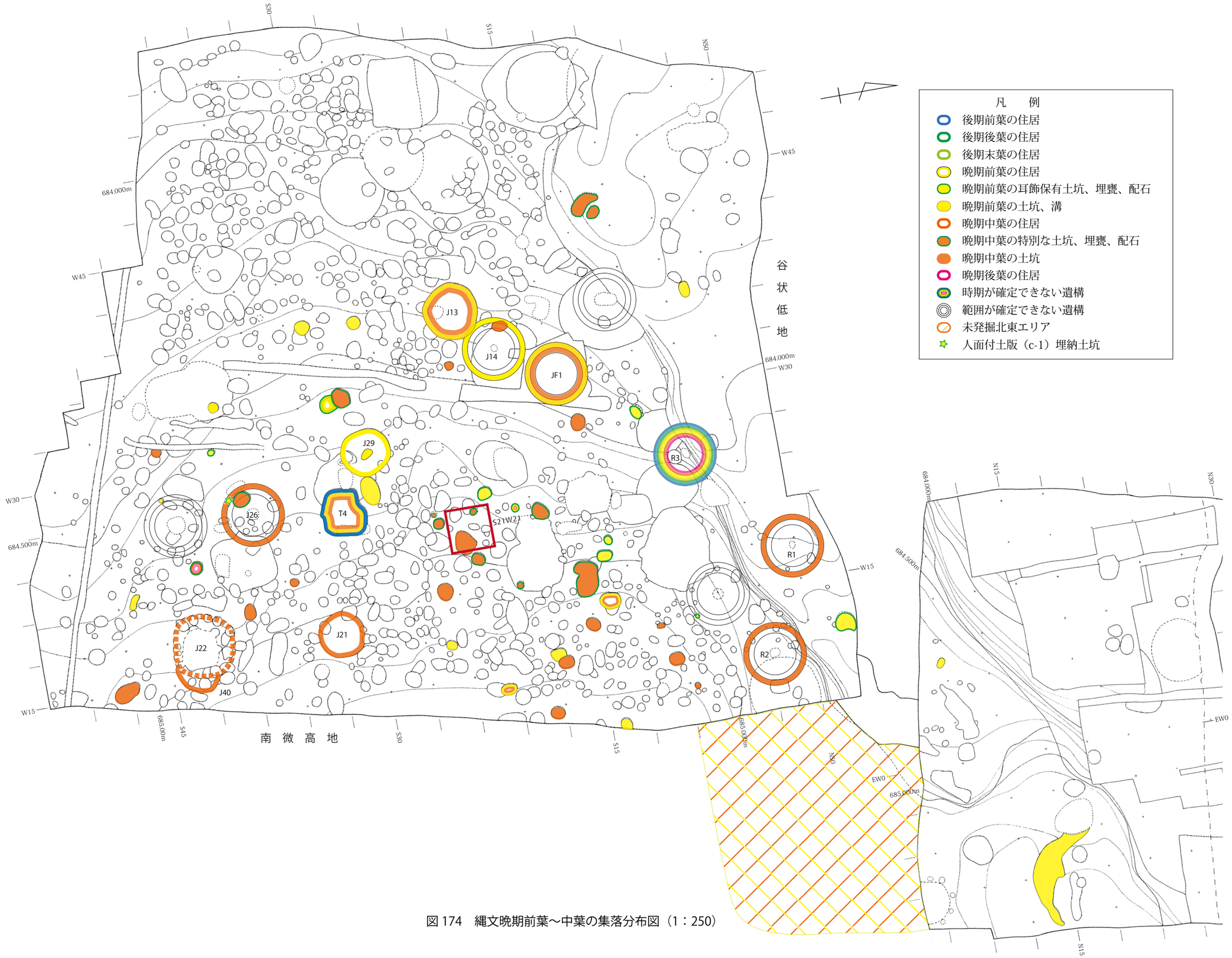


図 174　縄文晩期前葉～中葉の集落分布図（1：250）

図 175　縄文晩期後葉の集落・遺物分布図（1：250）

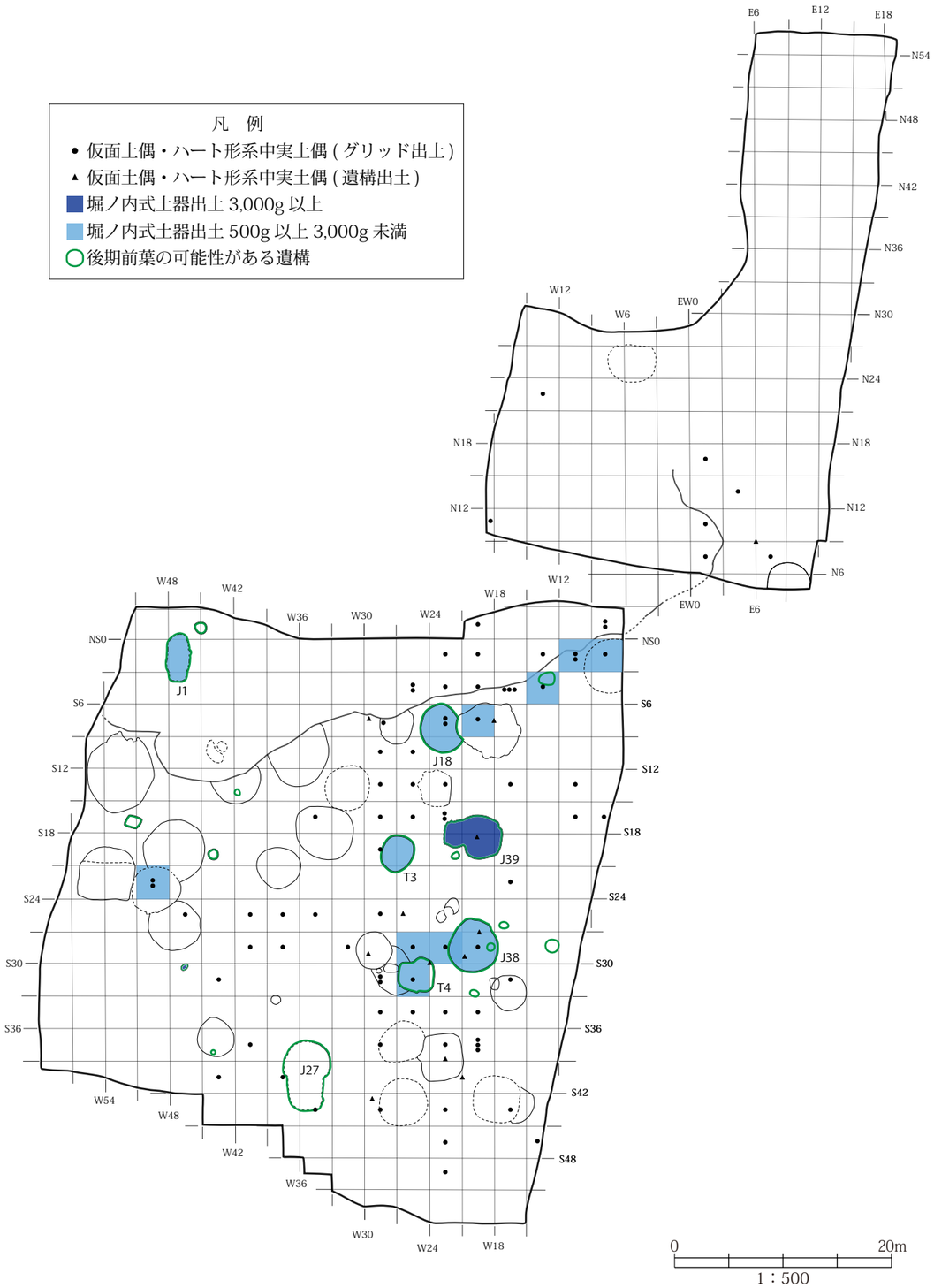


図 176　縄文後期前葉の土器と土偶の分布

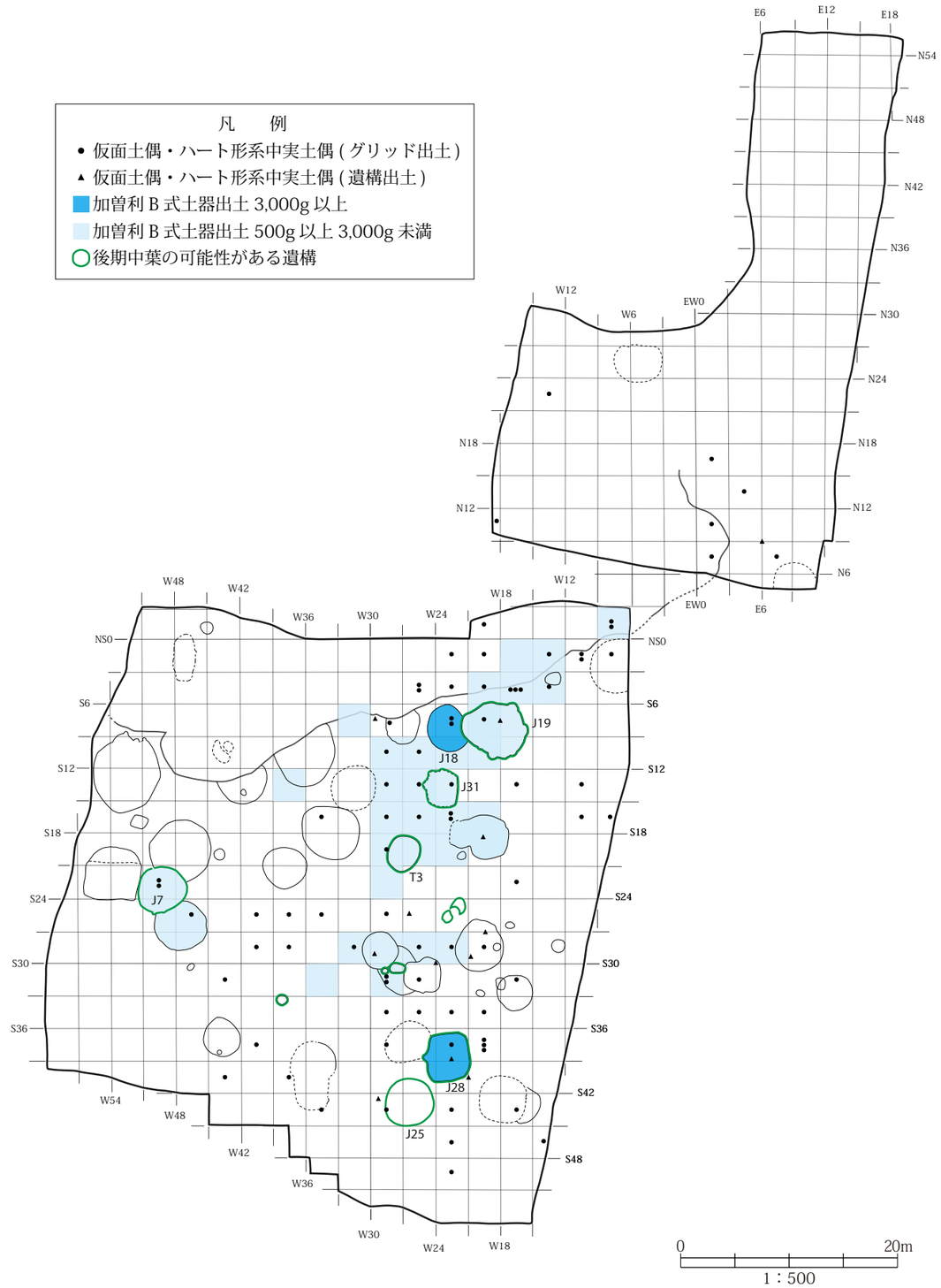


図 177　縄文後期中葉の土器と土偶の分布

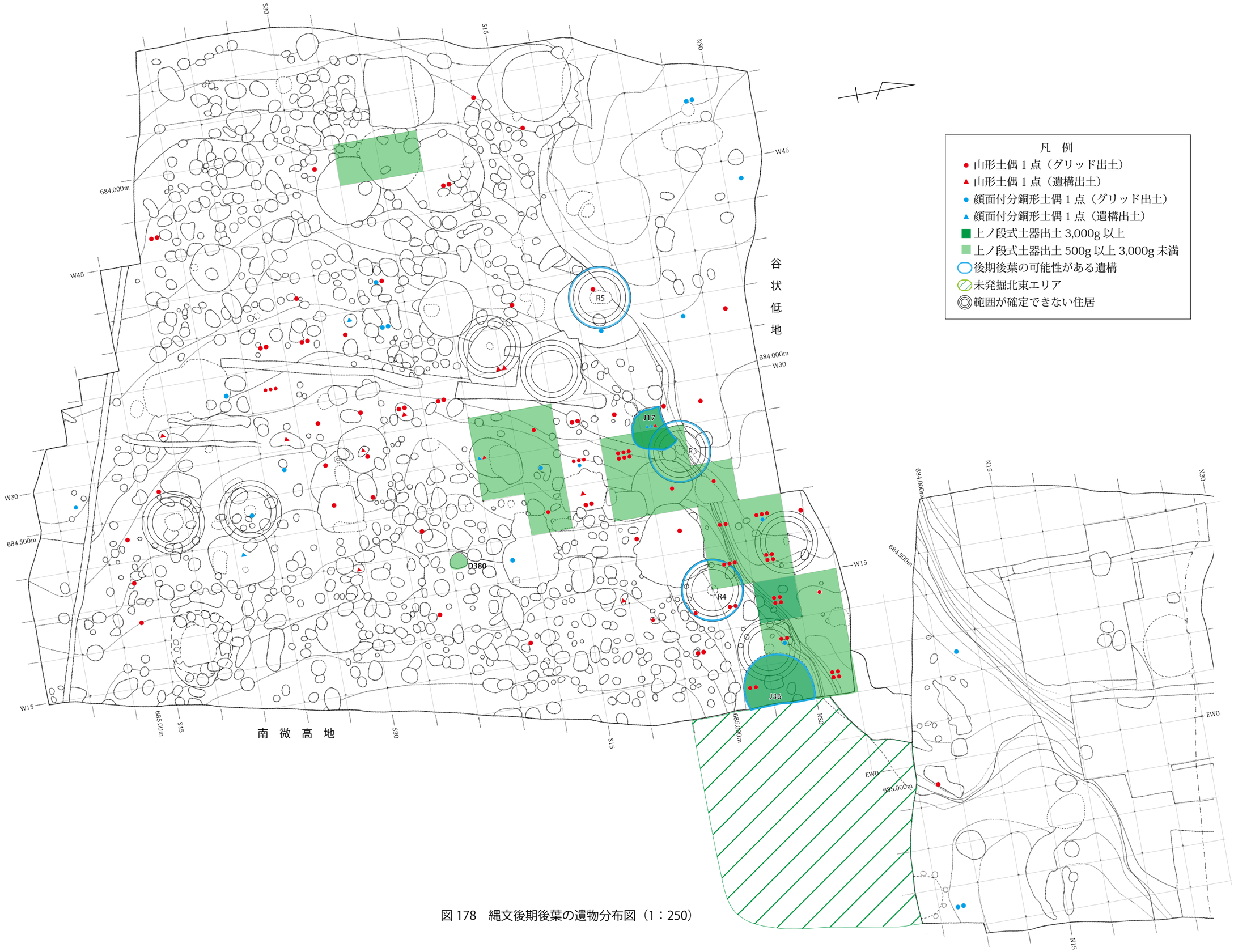


図 178　縄文後期後葉の遺物分布図（1：250）

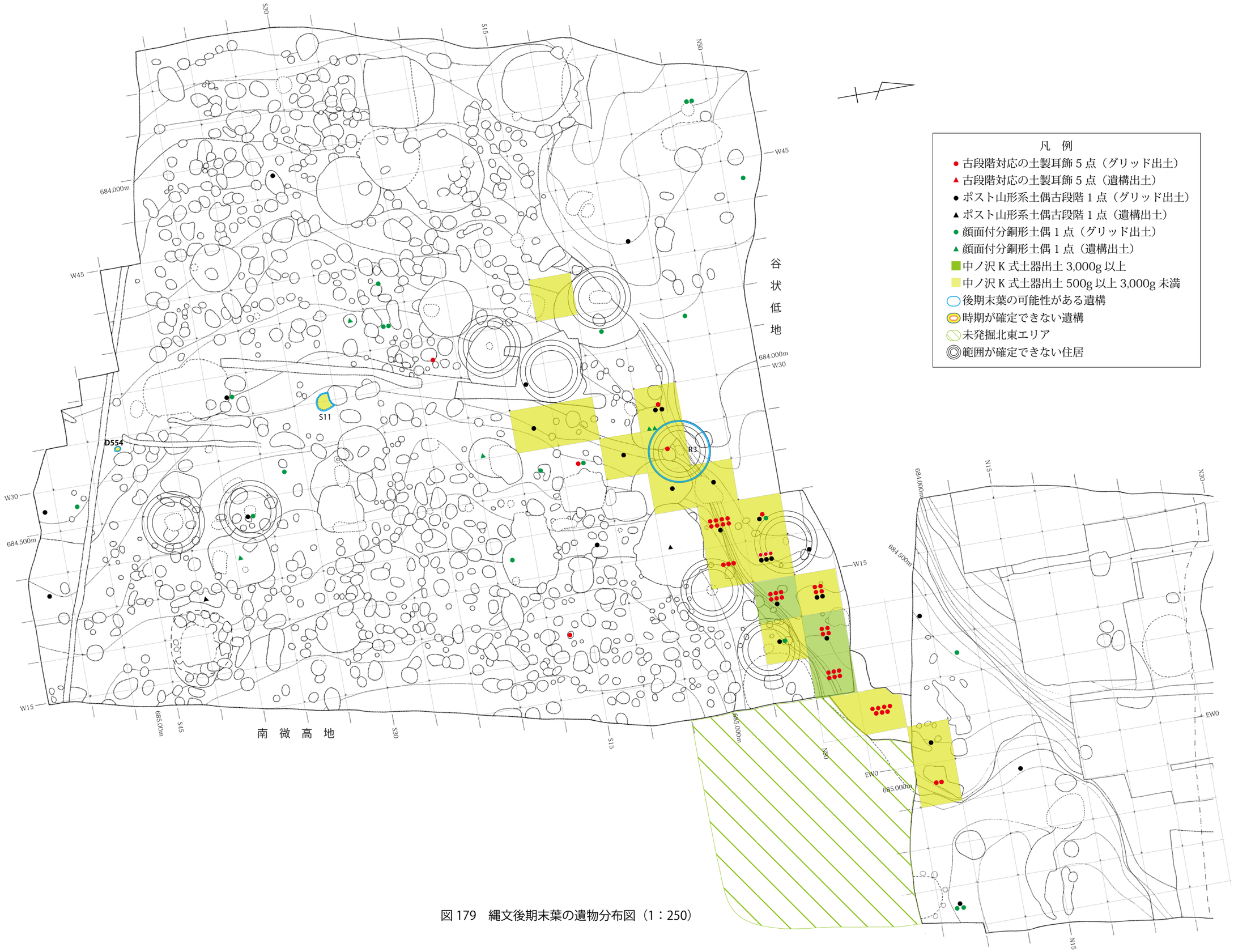


図 179　縄文後期末葉の遺物分布図（1：250）

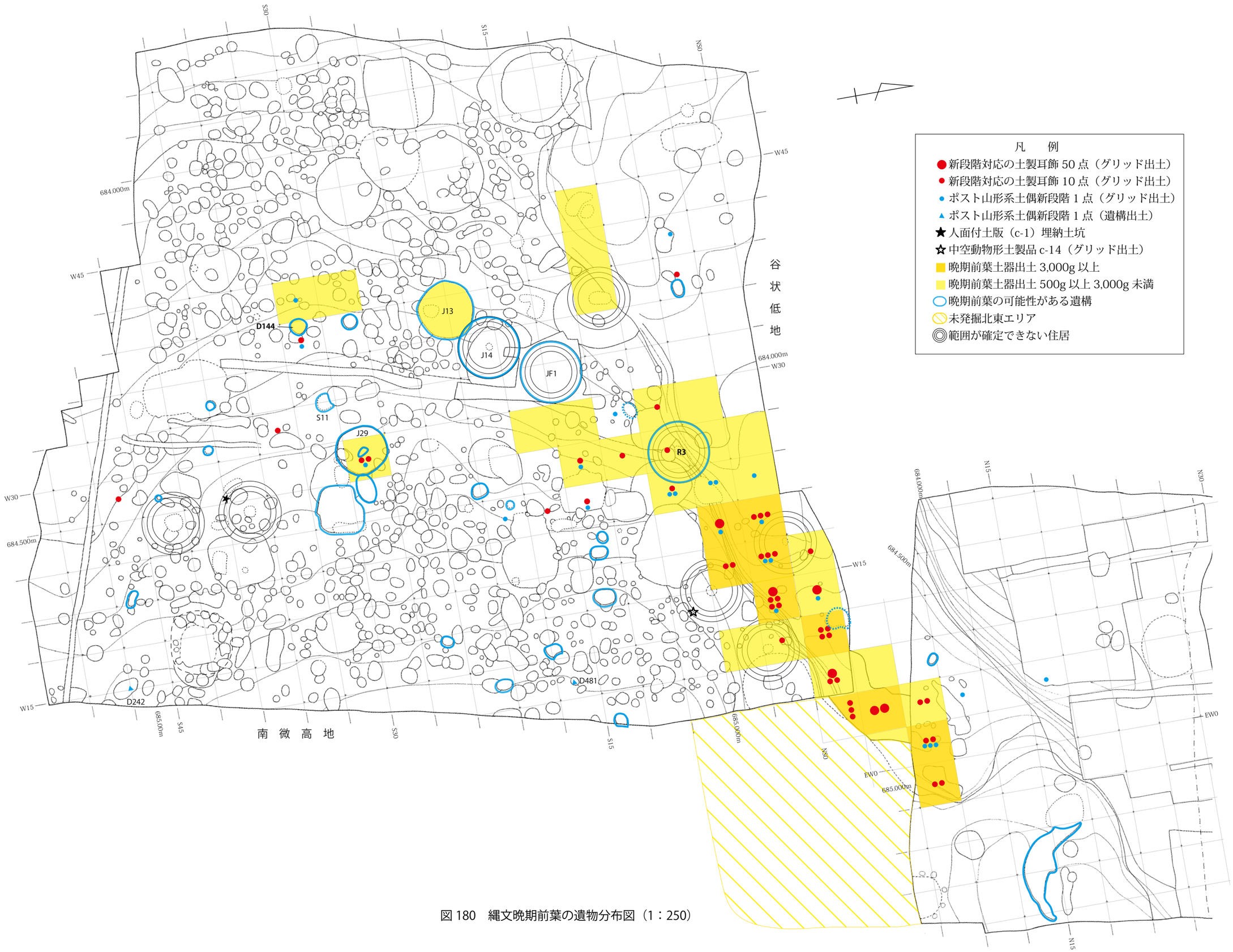


図 180　縄文晩期前葉の遺物分布図（1：250）

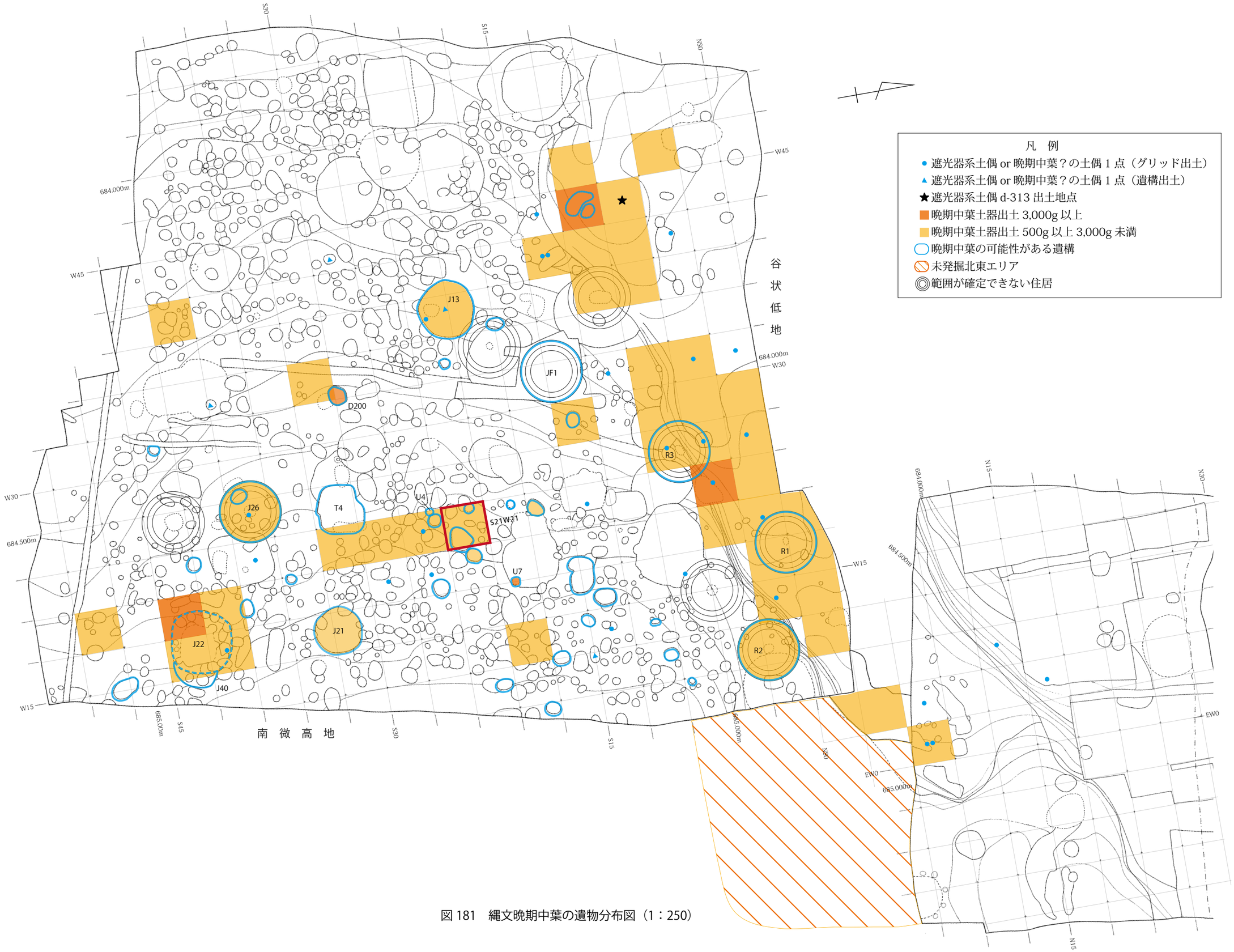


図 181　縄文晩期中葉の遺物分布図（1：250）

第Ⅷ章　総括

１　遺物整理・報告書刊行事業の経過と目的

エリ穴遺跡は、縄文時代中期中葉から晩期後葉にわたって断続して営まれた拠点的な集落である。後期後葉から晩期中葉にかけて遺跡が著しく減少する甲信地域の中で、途絶えることなく継続した希有な集落といえる。

本書は平成７年度の発掘調査の成果報告である。調査時に速報された人面付土版の出土状況や全国最多数の土製耳飾の出土は全国的に注目され、研究者からは早期の報告書刊行が求められた［竹原 1995］。ところが膨大な出土遺物の整理に係る費用、作業スペース、人員などが確保できずに、概要報告書［松本市教育員会 1997］の刊行に留まっていた。長らく整理作業を実施する機会が得られなかったが、数年間を要する整理作業の実施環境が整い、平成 25 年度からエリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業を開始した。平成 26 年度からは国庫補助事業として実施し、平成 28 年度に遺構編１・第１分冊、平成 29 年度に遺構編２・第２分冊と遺物編１・第３分冊、平成 30 年度に遺構編２・第４分冊を刊行し、調査成果を公表することができた。

本章では、エリ穴遺跡の特色を示す縄文時代後期後葉から晩期中葉に絞り、整理調査の成果、エリ穴遺跡の評価、今後の研究課題を挙げ、総括としたい。

２　整理調査の成果

（1）　遺構

エリ穴遺跡では、後期後葉から末葉にかけて谷状の地形を利用した廃棄場が成立する。その後、この廃棄場は継続して晩期後葉まで継続するが、時期別に居住域の遺構と廃棄場の位置が変化している。時期ごとに各種遺物の分布を把握し、集落の変遷に迫ることができた。注目されるのは、埋甕、墓坑、意図的な遺物埋納土坑、配石などの祭祀に関わる可能性の高い施設の配置である。これらは居住域に配置され、晩期後葉まで分離しない。これは安曇野市北村遺跡で示された居住域と墓域が分離せずに両者が混在する集落形態と共通しており、縄文集落の典型例とされる環状集落とは全く異なる形態で構成されていた。遺物は聖域・居住域にも廃棄されるが、量的には廃棄場が大半を占めている。

（2）　遺物

遺物には土製耳飾、土偶、土版、中空動物形土製品、その他の土製品、土器、石器・石製品などがある。

土製耳飾は縄文時代後期末葉から晩期にかけて、関東地方を中心に東日本の各地で出土する。エリ穴遺跡の出土点数は際立ったものであり、しかもその全ての出土状態が明らかな点など、一括出土が持つ意義は大きい。

土製耳飾の形態は、臼形、環形を主に、彫りが施されたものから無文のものまで精粗さまざまあり、朱で塗られたものも多く出土している。それらは、17 以上の系統に分けることができる。さらに、それぞれの系統の成立から衰退まで、製作技法や装飾の変化を明らかにすることができる。このように土製耳飾の変化を追うことができる資料は、他に類をみない。

土偶等の土製品は、東海から関西の「分銅形土偶」をベースに関東の「山形土偶」等の要素が加わった本遺跡独自の「顔面付分銅形土偶」のほか、東北の「遮光器土偶」の影響を受けたものも認められる。このほか、石棒や石刀、石冠等も存在し、出土品からは当時の人々の精神性や生活の様子を読み取ることができる。

また、土器についても甲信地域の後期上ノ段式等のほか、関東の晩期安行式や東北の晩期亀ヶ岡式の影響を受けたものがみられる。

3　エリ穴遺跡の評価

甲信地域では、縄文時代後期後葉から晩期中葉は、集落・人口の著しい減少が進む。エリ穴遺跡の土製耳飾をはじめとした出土品は、その厳しい生活環境のなかで生き抜いた人々の精神世界を解明する手がかりとして重要である。加えて、甲信地域の縄文時代後・晩期文化は、日本列島のさまざまな他文化との交流の上にできあがったことがうかがえ、当時の儀礼や交易及び社会の結びつきを究明する上で貴重であり、学術的価値は非常に高い。

4　今後の研究課題

残された課題は多いが、それは今回の整理作業により新たに見出されたより深い課題である。石器の分析結果を取り込んだ遺跡のあり方の検討は未着手である。東日本では後期から晩期にかけて石鏃をはじめとして狩猟用具が激増する。エリ穴遺跡も例外ではないが、その石鏃は廃棄場に捨てられる傾向が強く、これは土器や土製耳飾と共通する。しかも完形品の率が高い。広域的祭祀が成立していたとして、それは狩猟祭祀に関わる性格も持つのか、それとも相互の関連性はないのか、検討は容易ではない。また、付図 1 に示した縄文晩期精製土器変遷試案では、器種を確立しきれず、文様の変遷を示すに留まった部分がある。この時期の精製土器は遺跡ごとの個性が強く、エリ穴遺跡の様相が甲信地域に共通するとは限らない。晩期初頭の土器型式の設定にはまだ課題が残り、佐野式の再検討が避けられない。

エリ穴遺跡の集落の特色には、後期後葉から晩期後葉の廃棄場の成立と展開、後期末葉から晩期前葉の土製耳飾の爆発的増加、後期後葉から晩期中葉の他地域起源の祭祀具や異形土器の豊富さが挙げられる。このような現象がなぜエリ穴遺跡で生じたのか。これらの現象の背景には地域社会の維持や広域的祭祀の成立があるのではないだろうか。

5　結語

本報告書の刊行により、エリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業は完了する。得られた膨大なデータは縄文時代後・晩期における甲信地域の集落のあり方や変遷、祭祀、土製耳飾や土器などの研究の進展に貢献できると確信している。

本事業の最終年度の平成 31 年 1 月、エリ穴遺跡の特色を示し、学術的・美術工芸的に価値の高い資料 484 点 (表 27) が、松本市の重要文化財の指定を受けた。今後は重要文化財の指定資料を中心として、エリ穴遺跡の歴史的な価値や整理調査の成果を広く市民に知ってもらい､活用していくことも大きな課題である。

発掘調査から 24 年が経過した。発掘調査から本事業の完了まで、多くの方々のご尽力があって、今日に至ることができた。報告書の刊行と成果の公表にあたり、尽力いただいた皆様に深い敬意と感謝を表して、結びとしたい。

表 27　市重要文化財指定遺物一覧

(1)　土製耳飾

番号	種別	分冊	個体番号	図	写真図版	通番
1	内開弧ブリッジ系統	3	e- 1	2	5	1
2	内開弧ブリッジ系統	3	e- 2	2	5	2
3	内開弧ブリッジ系統	3	e- 3	2	5	3
4	内開弧ブリッジ系統	3	e- 6	2	5	4
5	内開弧ブリッジ系統	3	e- 7	2	5	5
6	内開弧ブリッジ系統	3	e- 8	2	5	6
7	内開弧ブリッジ系統	3	e- 9	2	5	7
8	内開弧ブリッジ系統	3	e- 11	2	5	8
9	内開弧ブリッジ系統	3	e- 12	2	5	9
10	内開弧ブリッジ系統	3	e- 13	2	5	10
11	内開弧ブリッジ系統	3	e- 15	2	5	11
12	内開弧ブリッジ系統	3	e- 16	2	5	12
13	内開弧ブリッジ系統	3	e- 17	2	5	13
14	内開弧ブリッジ系統	3	e- 18	2	5	14
15	内開弧ブリッジ系統	3	e- 19	2	5	15
16	内開弧ブリッジ系統	3	e- 20	2	5	16
17	内開弧ブリッジ系統	3	e- 22	3	5	17
18	内開弧ブリッジ系統	3	e- 23	3	5	18
19	内開弧ブリッジ系統	3	e- 26	3	5	19
20	内開弧ブリッジ系統	3	e- 28	3	5	20
21	内開弧ブリッジ系統	3	e- 29	3	5	21
22	内開弧ブリッジ系統	3	e- 30	3	5	22
23	内開弧ブリッジ系統	3	e- 31	3	5	23
24	内開弧ブリッジ系統	3	e- 32	3	6	24
25	内開弧ブリッジ系統	3	e- 33	3	6	25
26	内開弧ブリッジ系統	3	e- 34	3	6	26
27	内開弧ブリッジ系統	3	e- 35	3	6	27
28	内開弧ブリッジ系統	3	e- 36	3	6	28
29	内開弧ブリッジ系統	3	e- 37	3	6	29
30	内開弧ブリッジ系統	3	e- 38	3	6	30
31	内開弧ブリッジ系統	3	e- 39	3	6	31
32	外周帯外傾系統	3	e- 62	5	6	32
33	外周帯外傾系統	3	e- 63	5	6	33
34	外周帯外傾系統	3	e- 64	5	6	34
35	外周帯外傾系統	3	e- 65	5	6	35
36	外周帯外傾系統	3	e- 67	5	6	36
37	外周帯外傾系統	3	e- 68	5	6	37
38	外周帯外傾系統	3	e- 69	5	6	38
39	外周帯外傾系統	3	e- 70	5	6	39
40	外周帯外傾系統	3	e- 71	5	6	40
41	外周帯外傾系統	3	e- 75	5	6	41
42	外周帯外傾系統	3	e- 78	5	6	42
43	内周帯巴文系統	3	e- 93	6	7	43
44	内周帯巴文系統	3	e- 94	6	7	44
45	内周帯巴文系統	3	e- 95	6	7	45
46	内周帯巴文系統	3	e- 96	6	7	46
47	内周帯巴文系統	3	e- 97	6	7	47
48	内周帯巴文系統	3	e- 98	6	7	48
49	内周帯巴文系統	3	e- 99	6	7	49
50	内周帯巴文系統	3	e- 100	6	7	50
51	内周帯巴文系統	3	e- 101	6	7	51
52	内周帯巴文系統	3	e- 102	6	7	52
53	内周帯巴文系統	3	e- 103	6	7	53
54	内周帯巴文系統	3	e- 104	6	7	54
55	内周帯巴文系統	3	e- 105	6	7	55
56	内周帯巴文系統	3	e- 106	6	7	56
57	内周帯巴文系統	3	e- 107	6	7	57
58	渦巻文系統	3	e- 109	6	7	58
59	渦巻文系統	3	e- 112	7	7	59
60	渦巻文系統	3	e- 113	7	7	60
61	渦巻文系統	3	e- 114	7	7	61
62	渦巻文系統	3	e- 115	7	7	62
63	渦巻文系統	3	e- 116	7	7	63
64	同心円文系統	3	e- 119	7	7	64
65	同心円文系統	3	e- 121	7	7	65
66	同心円文系統	3	e- 123	7	7	66
67	同心円文系統	3	e- 124	7	7	67
68	同心円文系統	3	e- 125	7	8	68
69	同心円文系統	3	e- 126	7	8	69
70	同心円文系統	3	e- 128	7	8	70
71	同心円文系統	3	e- 129	7	8	71
72	同心円文系統	3	e- 130	7	8	72
73	同心円文系統	3	e- 131	7	8	73
74	同心円文系統	3	e- 133	7	8	74
75	同心円文系統	3	e- 134	7	8	75
76	同心円文系統	3	e- 135	7	8	76
77	同心円文系統	3	e- 136	8	8	77
78	同心円文系統	3	e- 137	8	8	78
79	同心円文系統	3	e- 138	8	8	79
80	同心円文系統	3	e- 139	8	8	80
81	同心円文系統	3	e- 142	8	8	81
82	同心円文系統	3	e- 143	8	8	82
83	同心円文系統	3	e- 144	8	8	83
84	同心円文系統	3	e- 145	8	8	84
85	同心円文系統	3	e- 146	8	8	85
86	同心円文系統	3	e- 148	8	8	86
87	同心円文系統	3	e- 149	8	8	87
88	同心円文系統	3	e- 150	8	8	88
89	同心円文系統	3	e- 151	8	8	89
90	同心円文系統	3	e- 153	8	-	90
91	同心円文系統	3	e- 154	8	8	91
92	同心円文系統	3	e- 155	8	8	92
93	同心円文系統	3	e- 156	8	8	93
94	同心円文系統	3	e- 158	8	8	94
95	キザミ界線系統	3	e- 161	8	9	95
96	キザミ界線系統	3	e- 162	8	9	96
97	キザミ界線系統	3	e- 163	9	9	97
98	キザミ界線系統	3	e- 165	9	9	98
99	キザミ界線系統	3	e- 167	9	9	99
100	キザミ界線系統	3	e- 169	9	9	100
101	キザミ界線系統	3	e- 171	9	9	101
102	キザミ界線系統	3	e- 172	9	9	102
103	キザミ界線系統	3	e- 173	9	9	103
104	キザミ界線系統	3	e- 174	9	9	104
105	キザミ界線系統	3	e- 176	9	9	105
106	キザミ界線系統	3	e- 179	9	9	106
107	キザミ界線系統	3	e- 180	9	9	107
108	キザミ界線系統	3	e- 181	9	9	108
109	キザミ界線系統	3	e- 183	9	9	109
110	キザミ界線系統	3	e- 184	9	9	110
111	キザミ界線系統	3	e- 185	9	9	111
112	キザミ界線系統	3	e- 186	9	9	112
113	キザミ界線系統	3	e- 187	10	9	113
114	キザミ界線系統	3	e- 192	10	10	114
115	キザミ界線系統	3	e- 194	10	10	115
116	キザミ界線系統	3	e- 195	10	10	116
117	キザミ界線系統	3	e- 196	10	10	117
118	キザミ界線系統	3	e- 199	10	10	118
119	キザミ界線系統	3	e- 202	10	10	119
120	キザミ界線系統	3	e- 218	11	10	120
121	キザミ界線系統	3	e- 219	11	10	121
122	キザミ界線系統	3	e- 220	11	10	122
123	キザミ界線系統	3	e- 223	11	10	123
124	キザミ界線系統	3	e- 244	12	10	124
125	キザミ界線系統	3	e- 245	12	10	125
126	キザミ界線系統	3	e- 246	12	10	126
127	キザミ界線系統	3	e- 260	13	10	127
128	キザミ界線系統	3	e- 263	13	11	128
129	キザミ界線系統	3	e- 264	13	11	129
130	キザミ界線系統	3	e- 267	13	11	130
131	キザミ界線系統	3	e- 268	13	11	131
132	キザミ界線系統	3	e- 270	14	11	132
133	キザミ界線系統	3	e- 271	14	11	133
134	キザミ界線系統	3	e- 273	14	11	134
135	キザミ界線系統	3	e- 275	14	11	135
136	キザミ界線系統	3	e- 276	14	11	136
137	キザミ界線系統	3	e- 279	14	11	137
138	キザミ界線系統	3	e- 280	14	11	138
139	キザミ界線系統	3	e- 281	14	11	139
140	キザミ界線系統	3	e- 282	14	11	140
141	キザミ界線系統	3	e- 283	14	-	141
142	キザミ界線系統	3	e- 284	14	11	142
143	キザミ界線系統	3	e- 298	15	11	143
144	キザミ界線系統	3	e- 299	15	11	144
145	キザミ界線系統	3	e- 305	15	11	145
146	キザミ界線系統	3	e- 306	15	11	146
147	キザミ界線系統	3	e- 310	16	-	147
148	キザミ界線系統	3	e- 311	16	-	148
149	キザミ界線系統	3	e- 320	16	-	149
150	丸瘤文系統	3	e- 323	16	12	150
151	丸瘤文系統	3	e- 324	16	12	151
152	丸瘤文系統	3	e- 325	16	12	152
153	丸瘤文系統	3	e- 326	16	12	153
154	丸瘤文系統	3	e- 327	16	12	154
155	丸瘤文系統	3	e- 328	17	12	155
156	丸瘤文系統	3	e- 329	17	12	156
157	外開弧の系統	3	e- 330	17	12	157
158	円・長円の系統	3	e- 333	17	12	158
159	円・長円の系統	3	e- 334	17	12	159
160	円・長円の系統	3	e- 335	17	12	160
161	鼓形の系統	3	e- 337	17	12	161
162	鼓形の系統	3	e- 338	17	12	162
163	鼓形の系統	3	e- 339	17	12	163
164	鼓形の系統	3	e- 347	18	12	164

番号	種別	分冊	個体番号	図	写真図版	通番
165	鼓形の系統	3	e-348	18	12	165
166	その他の系統	3	e-352	18	13	166
167	その他の系統	3	e-353	18	13	167
168	その他の系統	3	e-354	18	13	168
169	その他の系統	3	e-355	18	13	169
170	その他の系統	3	e-356	18	-	170
171	その他の系統	3	e-358	18	13	171
172	その他の系統	3	e-359	18	13	172
173	放物線状断面系統	3	e-364	18	13	173
174	放物線状断面系統	3	e-365	18	13	174
175	放物線状断面系統	3	e-368	19	13	175
176	放物線状断面系統	3	e-369	19	13	176
177	放物線状断面系統	3	e-370	19	13	177
178	放物線状断面系統	3	e-372	19	13	178
179	放物線状断面系統	3	e-374	19	13	179
180	放物線状断面系統	3	e-375	19	13	180
181	放物線状断面系統	3	e-385	19	-	181
182	放物線状断面系統	3	e-387	19	13	182
183	無文臼形	3	e-395	20	14	183
184	無文臼形	3	e-398	20	14	184
185	無文臼形	3	e-402	20	-	185
186	無文臼形	3	e-415	20	-	186
187	無文臼形	3	e-426	21	-	187
188	無文臼形	3	e-427	21	-	188
189	無文臼形	3	e-434	21	-	189
190	無文臼形	3	e-438	21	-	190
191	無文臼形	3	e-439	21	-	191
192	無文臼形	3	e-444	21	-	192
193	無文臼形	3	e-447	21	-	193
194	無文臼形	3	e-476	23	-	194
195	無文臼形	3	e-481	23	15	195
196	無文臼形	3	e-499	24	15	196
197	無文臼形	3	e-503	24	15	197
198	無文臼形	3	e-505	24	15	198
199	無文臼形	3	e-507	24	-	199
200	無文臼形	3	e-509	24	-	200
201	無文臼形	3	e-525	25	15	201
202	貼瘤直線文系統	3	e-617	26	16	202
203	貼瘤直線文系統	3	e-644	28	16	203
204	貼瘤直線文系統	3	e-684	30	16	204
205	貼瘤直線文系統	3	e-688	31	-	205
206	貼瘤直線文系統	3	e-709	32	17	206
207	貼瘤直線文系統	3	e-712	32	17	207
208	貼瘤直線文系統	3	e-714	32	17	208
209	貼瘤直線文系統	3	e-722	33	17	209
210	貼瘤直線文系統	3	e-723	33	17	210
211	貼瘤直線文系統	3	e-724	33	17	211
212	貼瘤直線文系統	3	e-725	33	17	212
213	貼瘤直線文系統	3	e-726	33	17	213
214	貼瘤弧線文系統	3	e-727	33	17	214
215	貼瘤弧線文系統	3	e-728	33	17	215
216	貼瘤弧線文系統	3	e-738	33	17	216
217	貼瘤単位文系統	3	e-748	34	17	217
218	貼瘤単位文系統	3	e-757	35	18	218
219	無文・板状環形	3	e-769	36	18	219
220	無文・板状環形	3	e-778	36	18	220
221	無文・板状環形	3	e-784	36	18	221
222	無文・板状環形	3	e-785	36	18	222
223	無文・板状環形	3	e-793	37	18	223
224	無文・板状環形	3	e-799	37	18	224
225	無文・板状環形	3	e-821	38	18	225
226	巴玉抱三叉文系統	3	e-906	41	19	226
227	巴玉抱三叉文系統	3	e-913	42	19	227
228	巴玉抱三叉文系統	3	e-932	43	19	228
229	巴玉抱三叉文系統	3	e-937	43	19	229
230	巴玉抱三叉文系統	3	e-942	43	20	230
231	巴玉抱三叉文系統	3	e-945	44	20	231
232	巴玉抱三叉文系統	3	e-948	44	20	232
233	巴玉抱三叉文系統	3	e-954	44	20	233
234	巴玉抱三叉文系統	3	e-968	45	20	234
235	巴玉抱三叉文系統	3	e-969	45	20	235
236	巴玉抱三叉文系統	3	e-971	45	21	236
237	巴玉抱三叉文系統	3	e-973	45	21	237
238	連弧三叉文系統	3	e-1062	51	21	238
239	連弧三叉文系統	3	e-1063	51	21	239
240	連弧三叉文系統	3	e-1090	54	22	240
241	連弧三叉文系統	3	e-1111	55	22	241
242	連弧三叉文系統	3	e-1161	59	22	242
243	連弧三叉文系統	3	e-1171	60	22	243
244	連弧三叉文系統	3	e-1182	61	22	244
245	連弧三叉文系統	3	e-1186	61	23	245
246	連弧三叉文系統	3	e-1223	64	23	246
247	入組三叉文系統	3	e-1301	66	24	247
248	入組三叉文系統	3	e-1306	66	24	248

番号	種別	分冊	個体番号	図	写真図版	通番
249	入組三叉文系統	3	e-1312	66	24	249
250	入組三叉文系統	3	e-1325	67	24	250
251	入組三叉文系統	3	e-1334	68	24	251
252	入組三叉文系統	3	e-1335	68	24	252
253	入組三叉文系統	3	e-1336	68	24	253
254	入組三叉文系統	3	e-1341	68	24	254
255	入組三叉文系統	3	e-1349	68	25	255
256	入組三叉文系統	3	e-1350	68	25	256
257	短線玉抱三叉文系統	3	e-1394	71	25	257
258	短線玉抱三叉文系統	3	e-1407	72	25	258
259	短線玉抱三叉文系統	3	e-1423	73	25	259
260	短線玉抱三叉文系統	3	e-1424	74	25	260
261	短線玉抱三叉文系統	3	e-1429	74	25	261
262	鼻状三叉文系統	3	e-1456	76	26	262
263	鼻状三叉文系統	3	e-1457	76	26	263
264	鼻状三叉文系統	3	e-1473	77	26	264
265	鼻状三叉文系統	3	e-1477	77	26	265
266	無文・内傾斜面環形	3	e-1508	78	27	266
267	無文・内傾斜面環形	3	e-1544	80	27	267
268	無文・内傾斜面環形	3	e-1556	81	-	268
269	無文・内傾斜面環形	3	e-1578	83	-	269
270	無文・内傾斜面環形	3	e-1584	83	27	270
271	無文・内傾斜面環形	3	e-1592	83	27	271
272	無文・内傾斜面環形	3	e-1593	84	-	272
273	無文・内傾斜面環形	3	e-1594	84	-	273
274	無文・内傾斜面環形	3	e-1596	84	-	274
275	無文・内傾斜面環形	3	e-1618	84	-	275
276	無文・内傾斜面環形	3	e-1619	84	-	276
277	無文・内傾斜面環形	3	e-1624	85	27	277
278	無文・内傾斜面環形	3	e-1634	85	-	278
279	無文・内傾斜面環形	3	e-1660	86	-	279
280	無文・内傾斜面環形	3	e-1671	87	27	280
281	無文・内傾斜面環形	3	e-1672	87	-	281
282	無文・内傾斜面環形	3	e-1676	87	27	282
283	同心円文系統	4	e-4005	81	(3)8	283
284	同心円文系統	4	e-4006	81	(3)8	284
285	同心円文系統	4	e-4007	81	(3)8	285
286	同心円文系統	4	e-4009	81	(3)8	286
287	同心円文系統	4	e-4010	81	(3)8	287
288	同心円文系統	4	e-4011	81	(3)8	288
289	キザミ界線系統	4	e-4015	81	(3)10	289
290	鼓形の系統	4	e-4022	81	-	290
291	鼓形の系統	4	e-4025	81	(3)12	291
292	放物線状断面系統	4	e-4026	81	(3)13	292
293	放物線状断面系統	4	e-4028	82	(3)13	293
294	放物線状断面系統	4	e-4029	82	(3)13	294
295	放物線状断面系統	4	e-4033	82	(3)13	295
296	放物線状断面系統	4	e-4034	82	(3)13	296
297	無文臼形	4	e-4046	82	(3)14	297
298	無文臼形	4	e-4047	82	(3)14	298
299	無文臼形	4	e-4053	82	(3)14	299
300	無文臼形	4	e-4058	82	-	300
301	無文臼形	4	e-4064	83	-	301
302	無文臼形	4	e-4065	83	-	302
303	無文臼形	4	e-4079	83	-	303
304	無文臼形	4	e-4086	83	-	304
305	無文臼形	4	e-4088	83	-	305
306	無文臼形	4	e-4091	84	-	306
307	無文臼形	4	e-4092	84	-	307
308	無文臼形	4	e-4094	84	-	308
309	無文臼形	4	e-4096	84	-	309
310	無文臼形	4	e-4102	84	(3)15	310
311	無文臼形	4	e-4105	84	(3)15	311
312	無文臼形	4	e-4106	84	-	312
313	貼瘤直線文系統	4	e-4125	85	(3)16	313
314	貼瘤直線文系統	4	e-4127	85	(3)16	314
315	貼瘤直線文系統	4	e-4132	85	(3)17	315
316	貼瘤単位文系統	4	e-4137	86	(3)17	316
317	無文・板状環形	4	e-4151	86	(3)18	317
318	巴玉抱三叉文系統	4	e-4152	86	(3)19	318
319	巴玉抱三叉文系統	4	e-4153	86	(3)19	319
320	巴玉抱三叉文系統	4	e-4154	87	(3)19	320
321	巴玉抱三叉文系統	4	e-4155	87	(3)19	321
322	巴玉抱三叉文系統	4	e-4157	87	(3)19	322
323	巴玉抱三叉文系統	4	e-4159	87	(3)20	323
324	巴玉抱三叉文系統	4	e-4161	87	(3)20	324
325	巴玉抱三叉文系統	4	e-4162	87	(3)20	325
326	巴玉抱三叉文系統	4	e-4164	87	(3)20	326
327	巴玉抱三叉文系統	4	e-4165	87	(3)20	327
328	連弧三叉文系統	4	e-4171	88	(3)22	328
329	連弧三叉文系統	4	e-4172	88	(3)22	329
330	連弧三叉文系統	4	e-4175	88	(3)22	330
331	連弧三叉文系統	4	e-4180	88	(3)22	331
332	連弧三叉文系統	4	e-4188	89	(3)23	332

番号	種別	分冊	個体番号	図	写真図版	通番
333	連弧三叉文系統	4	e-4189	89	(3)23	333
334	入組三叉文系統	4	e-4198	89	(3)24	334
335	入組三叉文系統	4	e-4203	89	(3)25	335
336	短線玉抱三叉文系統	4	e-4206	90	(3)25	336
337	短線玉抱三叉文系統	4	e-4213	90	(3)26	337
338	対連弧三叉文系統	4	e-4215	90	(3)26	338
339	鼻状三叉文系統	4	e-4218	91	(3)26	339
340	無文・内傾斜面環形	4	e-4221	91	-	340
341	無文・内傾斜面環形	4	e-4222	91	-	341
342	無文・内傾斜面環形	4	e-4226	91	(3)27	342
343	無文・内傾斜面環形	4	e-4227	91	-	343
344	無文・内傾斜面環形	4	e-4233	91	(3)27	344
345	無文・内傾斜面環形	4	e-4234	91	-	345
346	無文・内傾斜面環形	4	e-4235	92	-	346
347	無文・内傾斜面環形	4	e-4239	92	-	347
348	無文・内傾斜面環形	4	e-4245	92	(3)27	348

（2） 土偶、土版・中空動物形土製品、その他の土製品

番号	種別	分冊	個体番号	図	写真図版	通番
1	東北系山形土偶	3	d-100	110	31	349
2	山形土偶	3	d-103	110	32	350
3	山形土偶	3	d-105	110	32	351
4	山形土偶	3	d-108	111	32	352
5	山形土偶	3	d-112	111	32	353
6	山形土偶	3	d-114	112	32	354
7	山形土偶	3	d-117	112	33	355
8	山形土偶	3	d-119	112	33	356
9	山形土偶	3	d-121	113	33	357
10	山形土偶	3	d-123	113	33	358
11	山形土偶	3	d-129	114	33	359
12	山形土偶	3	d-130	114	31	360
13	山形土偶	3	d-133	114	31	361
14	山形土偶	3	d-134	115	34	362
15	山形土偶	3	d-160	119	34	363
16	ポスト山形系土偶	3	d-214	124	36	364
17	ポスト山形系土偶	3	d-215	124	36	365
18	ポスト山形系土偶	3	d-217	124	36	366
19	ポスト山形系土偶	3	d-220	125	36	367
20	ポスト山形系土偶	3	d-224	125	36	368
21	ポスト山形系土偶	3	d-251	129	37	369
22	ポスト山形系土偶	3	d-252	129	37	370
23	ポスト山形系土偶	3	d-258	129	37	371
24	顔面付分銅形土偶	3	d-285	133	38	372
25	顔面付分銅形土偶	3	d-287	133	39	373
26	顔面付分銅形土偶	3	d-289	134	39	374
27	顔面付分銅形土偶	3	d-292	134	39	375
28	顔面付分銅形土偶	3	d-299	135	39	376
29	顔面付分銅形土偶	3	d-300	135	39	377
30	顔面付分銅形土偶	3	d-307	136	39	378
31	顔面付分銅形土偶	3	d-309	136	39	379
32	遮光器系土偶	3	d-313	137	40	380
33	遮光器系土偶	3	d-322	139	40	381
34	中空動物形土製品と関わる土偶	3	d-344	142	41	382
35	人面付土版	3	c- 1	158	45	383
36	人面付土版人面部	3	c- 2	158	45	384
37	人面付土版人面部	3	c- 4	158	45	385
38	中空動物形土製品	3	c- 14	159	46	386
39	中空動物形土製品	3	c- 15	160	46	387
40	手燭形土製品	3	c- 24	162	47	388
41	手燭形土製品	3	c- 25	162	47	389
42	手燭形土製品	3	c- 26	162	47	390
43	手燭形土製品	3	c- 30	162	47	391
44	手燭形土製品	3	c- 36	163	47	392
45	スタンプ形の土製品	3	c- 50	164	48	393
46	スタンプ形の土製品	3	c- 51	164	48	394
47	スタンプ形の土製品	3	c- 52	164	48	395
48	スタンプ形の土製品	3	c- 53	164	48	396
49	スタンプ形の土製品	3	c- 54	164	48	397
50	スタンプ形の土製品	3	c- 55	164	48	398
51	スタンプ形の土製品	3	c- 56	164	48	399
52	スタンプ形の土製品	3	c- 57	164	48	400
53	茸形の土製品	3	c- 58	165	48	401
54	茸形の土製品	3	c- 60	165	48	402
55	玉状の土製品	3	c- 71	165	48	403
56	玉状の土製品	3	c- 72	165	48	404
57	玉状の土製品	3	c- 73	165	48	405
58	玉状の土製品	3	c- 74	165	48	406
59	玉状の土製品	3	c- 75	165	48	407
60	二孔付の柱状土製品	3	c- 76	165	48	408
61	二孔付の柱状土製品	3	c- 77	165	48	409
62	ボタン状あるいは円形土製品	3	c- 78	165	48	410
63	ボタン状あるいは円形土製品	3	c- 79	165	48	411
64	ボタン状あるいは円形土製品	3	c- 80	165	48	412
65	管状の土製品	3	c- 81	166	48	413
66	管状の土製品	3	c- 82	166	48	414
67	ミニチュアあるいは小形土器	3	c-126	168	50	415
68	ミニチュア土器	3	c-157	169	-	416
69	ミニチュア土器	3	c-159	169	-	417
70	ミニチュア土器	3	c-162	169	51	418
71	ミニチュア土器	3	c-164	169	50	419
72	ミニチュア土器	3	c-165	169	50	420
73	ミニチュア土器	3	c-167	169	-	421
74	ミニチュア土器	3	c-190	170	-	422
75	有孔球状土製品	3	c-203	170	51	423
76	有孔球状土製品	3	c-212	171	51	424
77	有孔球状土製品	3	c-214	171	51	425

（3） 土器

番号	種別	分冊	個体番号	図	写真図版	通番
1	浅鉢形土器	1	J13-1	71	41	426
2	深鉢形土器	1	J17-1	87	43	427
3	浅鉢形土器	1	J17-4	87	43	428
4	浅鉢形土器	1	J17-5	87	43	429
5	釣手形土器	1	J17-34	89	42	430
6	蓋形土器	1	J17-135	92	-	431
7	深鉢形土器	1	U5-1	187	50	432
8	深鉢形土器	2	S2-1	4	13	433
9	浅鉢形土器	2	S2-G59	6	13	434
10	浅鉢形土器	2	S2-G60	6	13	435
11	浅鉢形土器	2	S2-G61	7	(4)20	436
12	浅鉢形土器	2	Wa-5	10	14	437
13	浅鉢形土器	2	Wa-17	10	-	438
14	浅鉢形土器	2	Wb-18	12	15	439
15	浅鉢形土器	2	Wf-52	19	18	440
16	浅鉢形土器	2	Wg-11	22	18	441
17	浅鉢形土器	2	Wg-32	22	18	442
18	浅鉢形土器	2	Wi-10	25	18	443
19	壷形土器	2	Wi-21	25	(4)20	444
20	深鉢形土器	2	D144-7	53	20	445
21	浅鉢形土器	2	D200・G3	59	22	446
22	浅鉢形土器	2	D384-20	83	23	447
23	壷形土器	4	Nl-16	74	18	448
24	浅鉢形土器	4	Ea-56	3	1	449
25	浅鉢形土器	4	Eb-101	9	2	450
26	浅鉢形土器	4	Ee-80	15	3	451
27	深鉢形土器	4	Em-7	30	7	452
28	深鉢形土器	4	Eq-56	47	10	453
29	壷形土器	4	Mb-9	56	12	454
30	浅鉢形土器	4	Nl-9	74	18	455
31	浅鉢形土器	4	Me-13	61	15	456
32	深鉢形土器	4	Mh-13	65	16	457
33	浅鉢形土器	4	Mh-3	65	16	458
34	浅鉢形土器	4	Mh-7	65	16	459
35	深鉢形土器	4	Mh-18	66	15	460
36	壷形土器	4	p-52	78	20	461
37	深鉢形土器	4	Ei-45	25	6	462
38	深鉢形土器	4	Eq-27	45	10	463
39	浅鉢形土器	4	Nl-13	74	18	464
40	深鉢形土器	4	Md-29	59	13	465
41	深鉢形土器	4	Md-40	59	15	466
42	壷形土器	2	Wb-20	13	14	467
43	仮称小部屋付楕円浅鉢	2	D502-52	105	24	468
44	仮称小部屋付楕円浅鉢	4	Md-53	60	14	469
45	仮称小部屋付楕円浅鉢	4	Mi-47	68	16	470
46	仮称小部屋付楕円浅鉢	4	Me-68	63	15	471
47	人面付で香炉形土器もしくは把手付土器	4	Eb-129	10	3	472
48	人面付で香炉形土器もしくは把手付土器	4	p-44	78	20	473

（4） 石製品

番号	種別	分冊	個体番号	図	写真図版	通番
1	石棒	4	1124	157	35	474
2	石棒	4	1128	157	35	475
3	石棒	4	1130	157	35	476
4	石刀	4	1212	160	37	477
5	石刀	4	1214	160	37	478
6	石刀	4	1215	160	37	479
7	石刀	4	1213	160	37	480
8	石刀	4	1216	160	37	481
9	石冠	4	1249	163	37	482
10	石冠	4	1250	163	37	483
11	石冠	4	1251	163	37	484

※写真図版欄が「 - 」のものは写真掲載なし
※土器・土製耳飾のうち、図と写真の掲載分冊が異なるものについては、
図の掲載分冊を分冊欄に記載、写真掲載分冊は写真図版の欄に()で表記

【引用参考文献】

阿部芳郎 2007「山形土偶の型式と地域社会」『縄文時代』18 縄文時代文化研究会

阿部芳郎 2011「顔面付土版と土偶」『考古学集刊』7 明治大学考古学研究室

阿部芳郎 2012「土版の出現と関東東部の晩期社会」『土偶と縄文社会』雄山閣

新屋雅明他 2007『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

石黒立人 2011「東海・中部高地南部」『日本の考古学講座 5 弥生時代 (上)』青木書店

市原壽文他 1960『清水天王山遺跡　第1次―第3次発掘報告』清水市郷土研究会

伊藤正人 2007「省略形土偶」『縄文時代の考古学』11 同成社

伊深 智　1991『川原田B遺跡』山口村教育委員会

上野修一 1989,1991「関東地方の後・晩期土偶の変遷について」上、下『栃木県立博物館研究紀要』6,8
栃木県立博物館

上野修一 1995「「大畑系列」土製耳飾少考」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論文集刊行会

上野修一 2012「関東地方における山形土偶の出現」『土偶と縄文社会』雄山閣

内田儀久 1978「異形台付土器論 (Ⅰ)」『奈和』16 奈和同人会

内田儀久 1984「異形台付土器論 (Ⅱ)」『なわ　15周年記念論文集』奈和同人会

小野正文 1989「山梨県に於ける土製耳飾の予見的考察」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会

小野美代子 1999「遮光器土偶の受容と遮光器系土偶」『土偶研究の地平3』勉誠出版

金子昭彦 2001『遮光器土偶と縄文社会』同成社

金子昭彦 2010「北日本・縄文晩期のボタン状製品」『岩手考古学』21 岩手考古学会

金子昭彦 2017『遮光器土偶の世界』岩手県立博物館

金成南海子・宮尾亨 1996「土製耳飾の直径」『國學院大學考古資料館紀要』12 國學院大學考古学資料館

上條信彦編 2016『第1分科会　津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』日本考古学協会

川添和暁 2008「部分磨製石鏃研究からみた縄文時代遺物研究の現状と課題」『南山考人』36

櫛原功一 1996「山梨県の中期土偶」『中部高地を取りまく中期の土偶　ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ発表要旨』
信毎書籍出版センター

小池 孝　2002『中越遺跡』宮田村教育委員会

小島俊彰 1983「有孔球状土製品」『縄文文化の研究9』雄山閣出版

小杉 康　1986「千葉県江原台遺跡及び岩手県雨滝遺跡出土の亀形土製品」『明治大学考古学博物館館報』2

小平和夫 1990「第5節　古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』
(財) 長野県埋蔵文化財センター

後藤信祐 1986,1987「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究 (上, 下)」『考古学研究』33-3,4 考古学研究会

小松 学　2008「松本平の人面装飾付土器」『平出博物館紀要』25 塩尻市立平出博物館

酒井重洋 2007「桜町遺跡の縄文後期末から晩期の土器変遷について」
『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文時代総括編』小矢部市教育委員会

酒井重洋 2008「中屋式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

酒井重洋 2008「下野式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

塩入秀敏・児玉卓文他 1979『深町遺跡』丸子町教育委員会

重久淳一 他 1984『なすな原遺跡』なすな原遺跡調査会

設楽博巳 1983「土製耳飾」『縄文文化の研究』9　雄山閣

信濃資料刊行会 1956『信濃資料　第一巻上　考古資料篇』信濃資料刊行会

島田哲男・設楽博巳 他 1990『一津』大町市教育委員会
新谷和孝 1996「松本平の中期後葉土偶」『中部高地を取りまく中期の土偶　ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ発表要旨』
信毎書籍出版センター
鈴木道之助 1995「石鏃」『縄文文化の研究』7 雄山閣
関沢 聡　1990『長野県松本市県町遺跡緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
瀬口眞司 2013「土偶とは何か」『紀要』26 滋賀県文化財保護協会
大工原豊 2008「縄文石器研究序論」六一書房
高橋龍三郎 1981「亀ヶ岡式土器の研究」『北奥古代文化』12 北奥古代文化研究会
高柳圭一 1988「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代』85
早稲田大学考古学会
滝沢規朗 2008「多孔底土器」『総覧　縄文土器』総覧縄文土器刊行会
竹原 学　1995「全身表現のみられる人面付土版 ―長野県エリ穴遺跡出土土版をめぐって ―」
『日本考古学』2 日本考古学協会
竹原 学 他 1997『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
竹原 学　1997『エリ穴遺跡―掘り出された縄文後晩期のムラ―』松本市教育委員会
田中 琢・佐原 真 2011『日本考古学事典』三省堂
手塚達弥 2001「藤岡神社遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告』197 (財) とちぎ生涯学習文化財団
寺内隆夫・野村一寿・三上徹也 1988「縄文中期の土器」『長野県史考古資料編全一巻 (四)』長野県史刊行会
土肥 孝　2006「さいたま市東北原遺跡出土の動物形土製品について」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会
中川成夫 他 1967『葎生遺跡』立教大学博物館学講座
中沢道彦 2004「佐野式土器研究の現状と課題」『第 17 回縄文セミナー晩期中葉の再検討』
縄文セミナーの会
中沢道彦 2008「佐野式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
中島栄一 1995「石冠・土版」『縄文文化の研究』9 雄山閣
長野県教育委員会 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市その 5―』
長野県史刊行会 1983『長野県史考古資料編全一巻 (三) 主要遺跡 (中信)』
永峯光一 他 1967『佐野』長野県考古学会
中村 豊　1997「浮線文土器の成立過程」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学研究室
中山真治 2000「顔面把手付土器小考」『東京考古』18 東京考古談話会
中山真治 2015「顔面把手付土器小考２」『東京考古』33 東京考古談話会
新津 健　1992「縄文晩期集落の構成と動態―八ヶ岳南麓・金生遺跡を中心に―」『縄文時代』3
縄文時代文化研究会
西野秀和 2008「御経塚式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
西脇対名夫 2007「石冠とその類品」『縄文時代の考古学』同成社
蜂屋孝之 2004「縄文時代後期の釣手土器」『先史考古学研究』9 阿佐ヶ谷先史学研究会
蜂屋孝之 2005「千葉県における縄文後期の釣手土器について」『研究紀要』24 千葉県文化財センター
蜂屋孝之 2006「手燭形土製品考」『先史考古学研究』10 阿佐ヶ谷先史学研究会
蜂屋孝之 2012「補遺　手燭形土製品について」『千葉縄文研究』5 千葉縄文研究会
蜂屋孝之 2013「後期の釣手土器の検討」『縄文時代異形土器集成図譜』Ⅰ　國學院大學文学部考古学研究室
蜂屋孝之 2016「縄文時代後期釣手土器における新たな形態の発見」『千葉縄文研究』6 千葉縄文研究会

馬場保之・百瀬長秀 他 2011『中村中平遺跡遺物編』飯田市教育委員会
原 嘉藤・藤沢宗平 他 1972『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
平林 彰 他 1993『北村遺跡』(財) 長野県埋蔵文化財センター
藤沢宗平 1966「長野県松本市横山城遺跡」『信濃』18-7 信濃史学会
藤沢宗平 1967a「松本市北内田 - エリ穴第 2 地点遺跡 (一)」『信濃』19-9 信濃史学会
藤沢宗平 1967b「松本市北内田 - エリ穴第 2 地点遺跡 (二)」『信濃』19-11 信濃史学会
藤沢宗平・小松虔 1970「長野県塩尻市片丘地区南熊井犬原遺跡調査概報」『信濃』22-4 信濃史学会
藤沢宗平 1973「第一篇原始第二章縄文時代」『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌第二巻歴史上』
東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会
藤田富士夫 1971「耳栓の起源について」『信濃』23-4 信濃史学会
藤沼邦彦 1989「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』小学館
前田清彦 1988「縄文晩期終末期における土偶の変容」『三河考古』創刊号 三河考古学談話会
増田 修　1990「縄文時代の耳飾」『月刊文化財』326 第一法規出版
益富寿之助 1965『原色岩石図鑑』保育社
町田勝則 1995「石器の研究法―報告文作成に伴う観察・記録法②―」『長野県埋蔵文化財センター紀要』4
(財) 長野県埋蔵文化財センター
町田勝則 1996「石器の研究法―報告文作成に伴う観察・記録法①―」『長野県の考古学』1
(財) 長野県埋蔵文化財センター
三浦 綾　2016「土製耳飾から見る縄文時代後～晩期の社会」『考古学集刊』12
明治大学文学部考古学研究室
三上徹也 2012「新町泉水・後田・中ツ原　仮面土偶の系譜と意義」
『茅野市尖石縄文考古館開館十周年記念論文集』茅野市尖石縄文考古館
村田章人 1993「大洞 B 式と安行 3a 式の関係についての予察」『埼玉考古』30 埼玉考古学会
茂木努・古郡正志 2002『中栗須滝川Ⅱ遺跡　縄文時代集落編』藤岡市教育委員会
百瀬長秀 1983「エリ穴遺跡」『長野県史考古資料編全一巻 (三) 主要遺跡 (中信)』長野県史刊行会
百瀬長秀 他 1988「八窪遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2
(財) 長野県埋蔵文化財センター
百瀬長秀 1998「細密条痕小考」『氷遺跡発掘調査資料図譜』氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
百瀬長秀 2002「磨消縄文系突起」『紀要』9 (財) 長野県埋蔵文化財センター
森嶋稔・原田政信 1990『円光房遺跡』戸倉町教育委員会
八木勝枝 2003「新潟県の多孔底土器について」『三面川流域の考古学』2 奥三面を考える会
山形洋一 他 1985『東北原遺跡―第 6 次調査―』大宮市遺跡調査会
山本暉久 1995「石棒」『縄文文化の研究』9 雄山閣
山本暉久 2014「中部山地における柄鏡形敷石住居の終焉」『神奈川考古』50 神奈川考古同人会
吉岡卓真 2010「関東地方における縄文時代後期後葉土製耳飾りの研究」『千葉縄文研究』4 千葉縄文研究会
吉岡卓真 2015「縄文時代後晩期ミミズク土偶の変遷」『考古学集刊』11 明治大学文学部考古学研究室
吉田泰幸 2004「土製栓状耳飾の地理的分布と通婚圏」『長野県考古学会誌』105 長野県考古学会
吉田泰幸 2006「玦状耳飾の装着方法」『日本考古学』22 日本考古学協会
立命館大学文学部学芸員課程 1995『長野市宮崎遺跡発掘調査概報』
渡邊朋和 他 2000『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ』新潟県中郷村教育委員会

写真図版

廃棄場 E1 出土土器

写真図版 2

Eb-6

Eb-100

Eb-108

Eb-22

Eb-101

Eb-50

Eb-63

Eb-79

廃棄場 E1 出土土器

Eb-38

Eb-81

Eb-59

Ee-77

Ee-80

Eb-129
(約 1/1)

Ee-92

廃棄場 E1 出土土器

廃棄場 E1 出土土器

Eg-26

Eh-26

Ei-66
(約 1/2)

Ej-18

廃棄場 E1 出土土器

Ei-45

Ej-11

Ej-14

廃棄場 E1 出土土器

Ej-26

Ei-34
(約 1/1)

Ek-32

Ek-37
(約 1/1)

Em-7

En-4

Em-8

En-10
(約 1/2)

廃棄場 E1・E2 出土土器

Eo-8

Eo-41

Eo-39

Eo-118

Ep-42

Ep-24

廃棄場 E2 出土土器

Ep-66

Ep-93

Ep-64

Ep-69

廃棄場 E2 出土土器

Eq-34

Eq-42a

Eq-35

Eq-42b

Eq-46

Eq-27

Eq-56

廃棄場 E2 出土土器

Eq-37

Eq-33

Eq-60

Eq-74

Er-48

Es-45

Es-16

廃棄場 E2 出土土器

Es-9

Es-48

Es-50

Ma-14

Ma-10

Ma-13

Mb-5

Mb-9

Mc-1

Md-26

廃棄場 E2・M1 出土土器

廃棄場 M1 出土土器

Md-24

Md-16

Md-35

Md-53a
(約 1/2)

Md-53b
(約 1/2)

Md-40

Me-2

Me-13

Me-5

Me-16

Me-68
(約 1/2)

Mg-8

Mh-18

廃棄場 M1・M2 出土土器

Mh-3

Mh-13

Mh-5

Mh-6

Mh-7

Mi-47
(約 1/2)

廃棄場 M2 出土土器

Mj-9

Mj-23

Mj-24

Mj-20

Mk-2

Nl-3

廃棄場 M2、谷状低地出土土器

谷状低地、南微高地出土土器

中期釣手付深鉢
(約 2/3)

谷状低地出土土器、異形土器 (縄文中期)

p-44
(約 1/1)

p-25
(約 1/2)

p-52a
(約 1/2)

第 2 分冊 Wi-21
(約 1/2)

p-52b
(約 1/2)

第 2 分冊
S2-G61a

Wa-35

第 2 分冊
S2-G61b

異形土器 (縄文後・晩期)、補遺

石鏃 No.1 ～ 100(左上から)

石鏃 No.101 ～ 200(左上から)

石鏃 No.201 ～ 300(左上から)

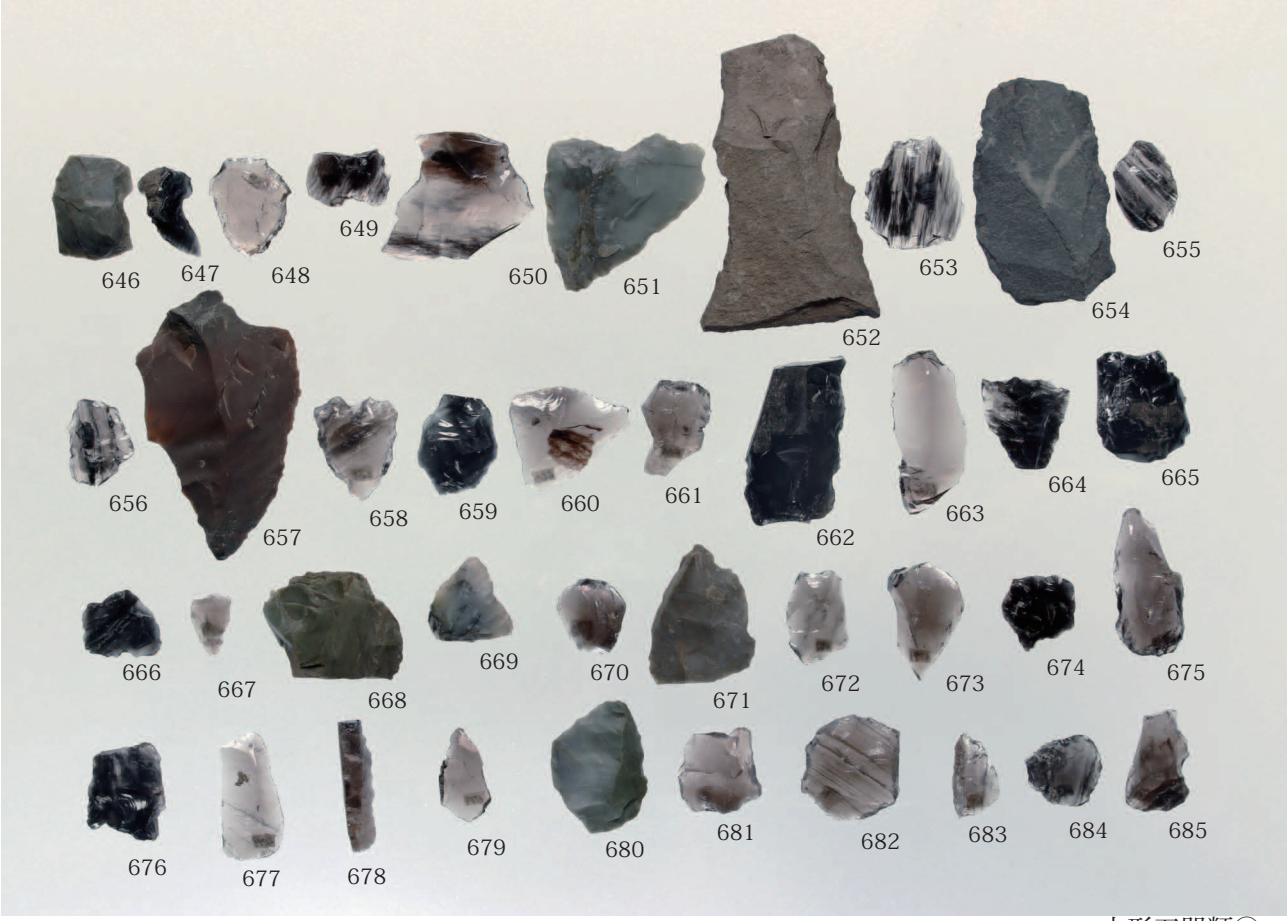
石鏃 No.301 ～ 400(左上から)

石鏃 No.401 ～ 500(左上から)

石鏃 No.501 ～ 590(左上から)

592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645

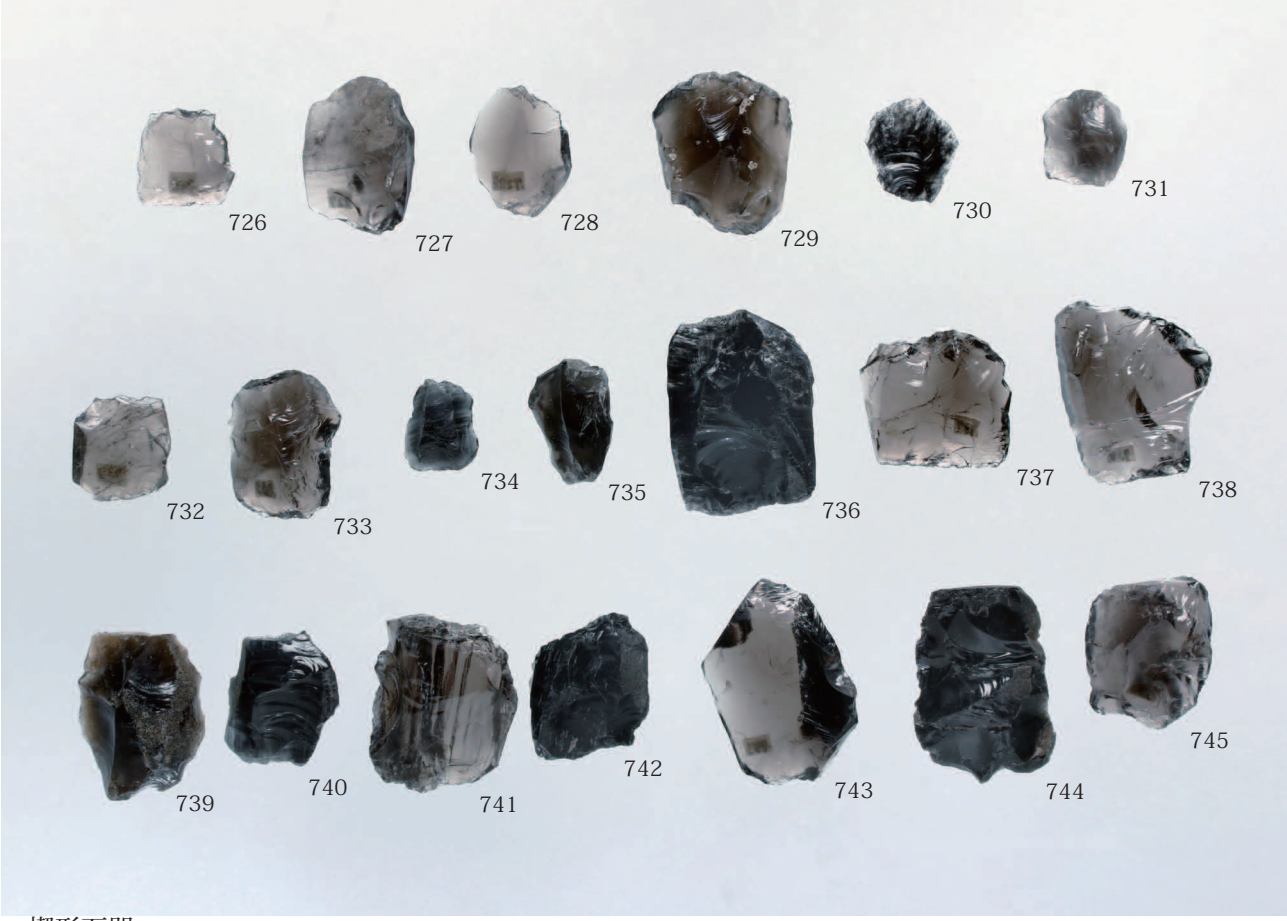
石錐


646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685

小形刃器類①

686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725

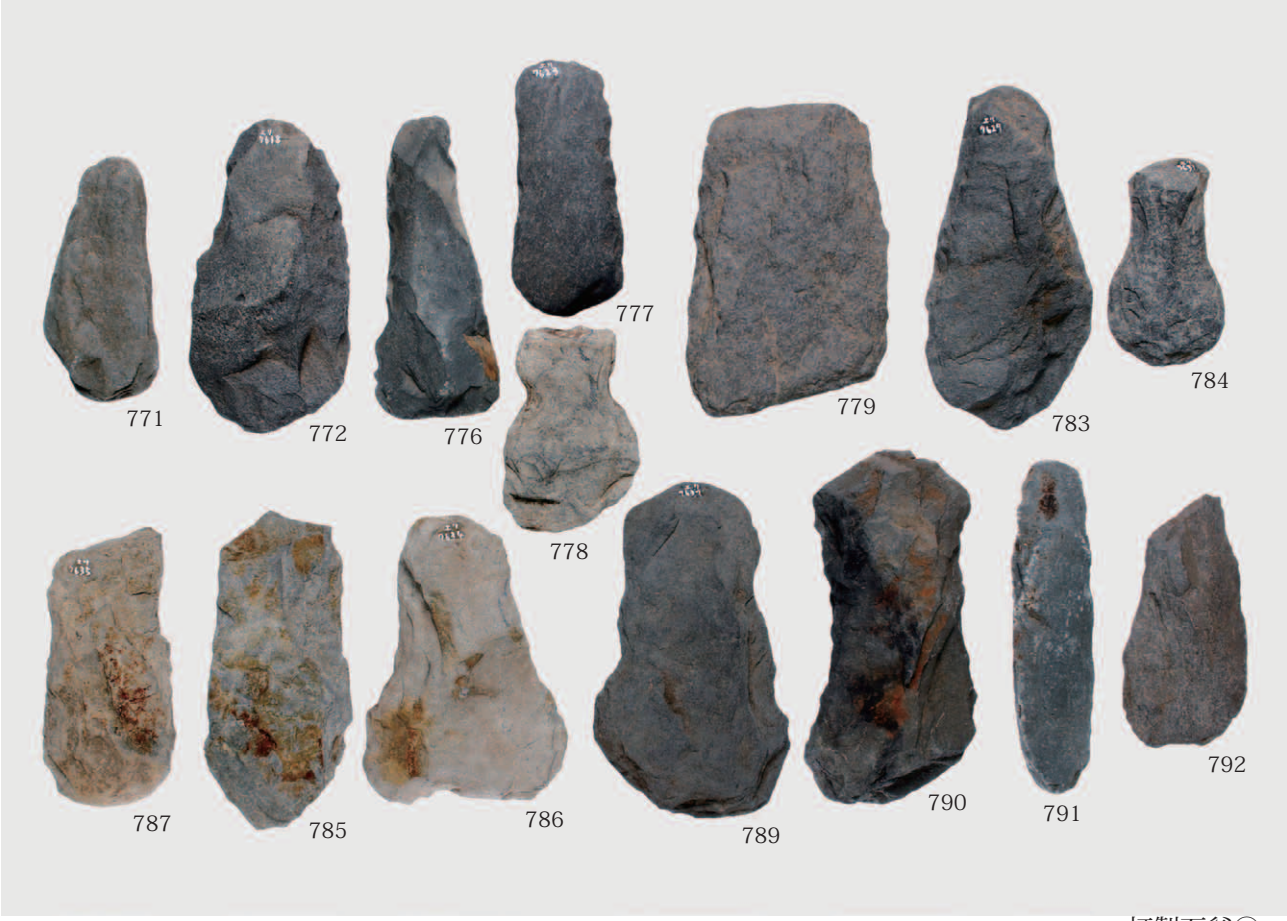
小形刃器類②


726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745

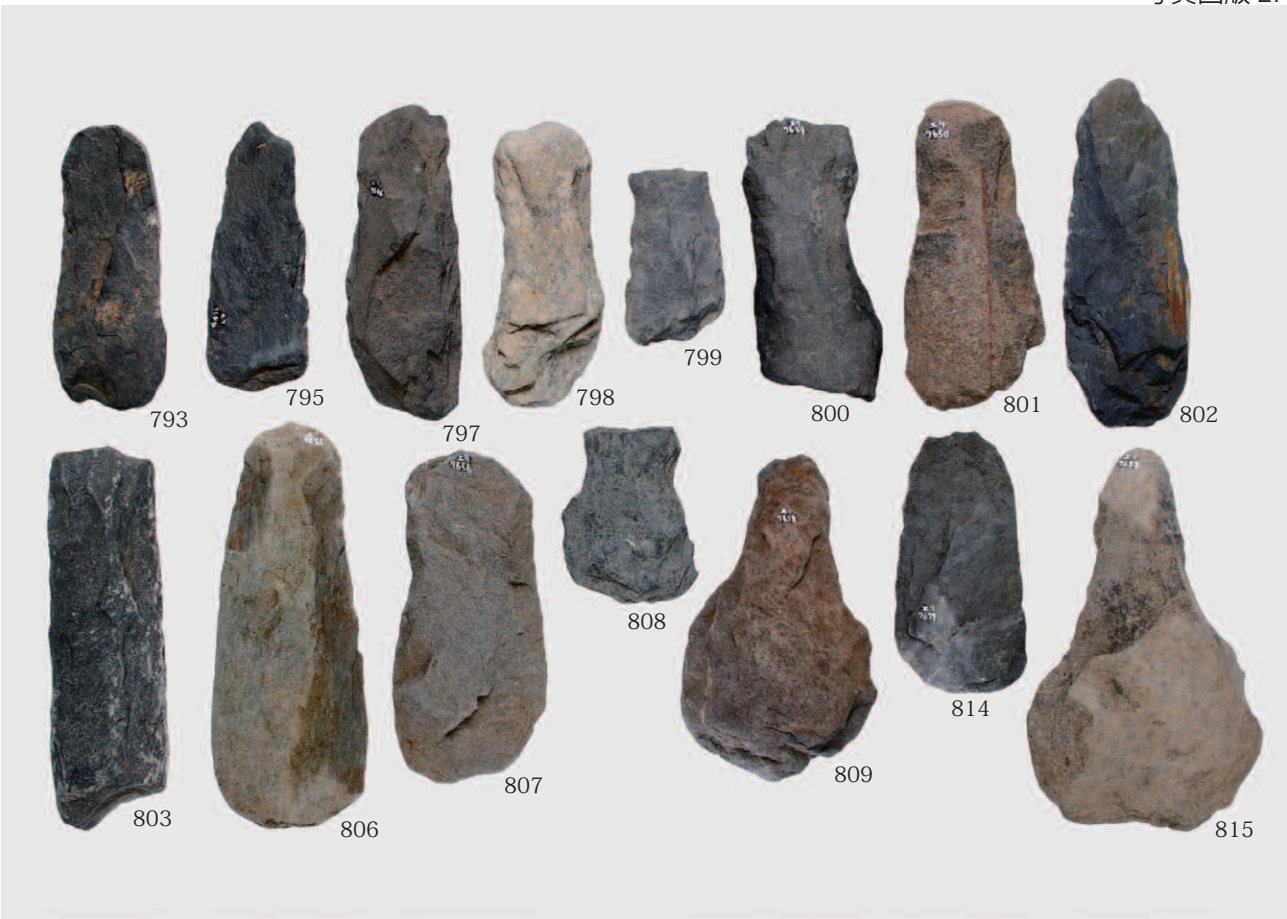
楔形石器

746
747
748
749
750
751
752
753
755
756
761
762
760
767
765

打製石斧①


771
772
776
777
778
779
783
784
787
785
786
789
790
791
792

打製石斧②

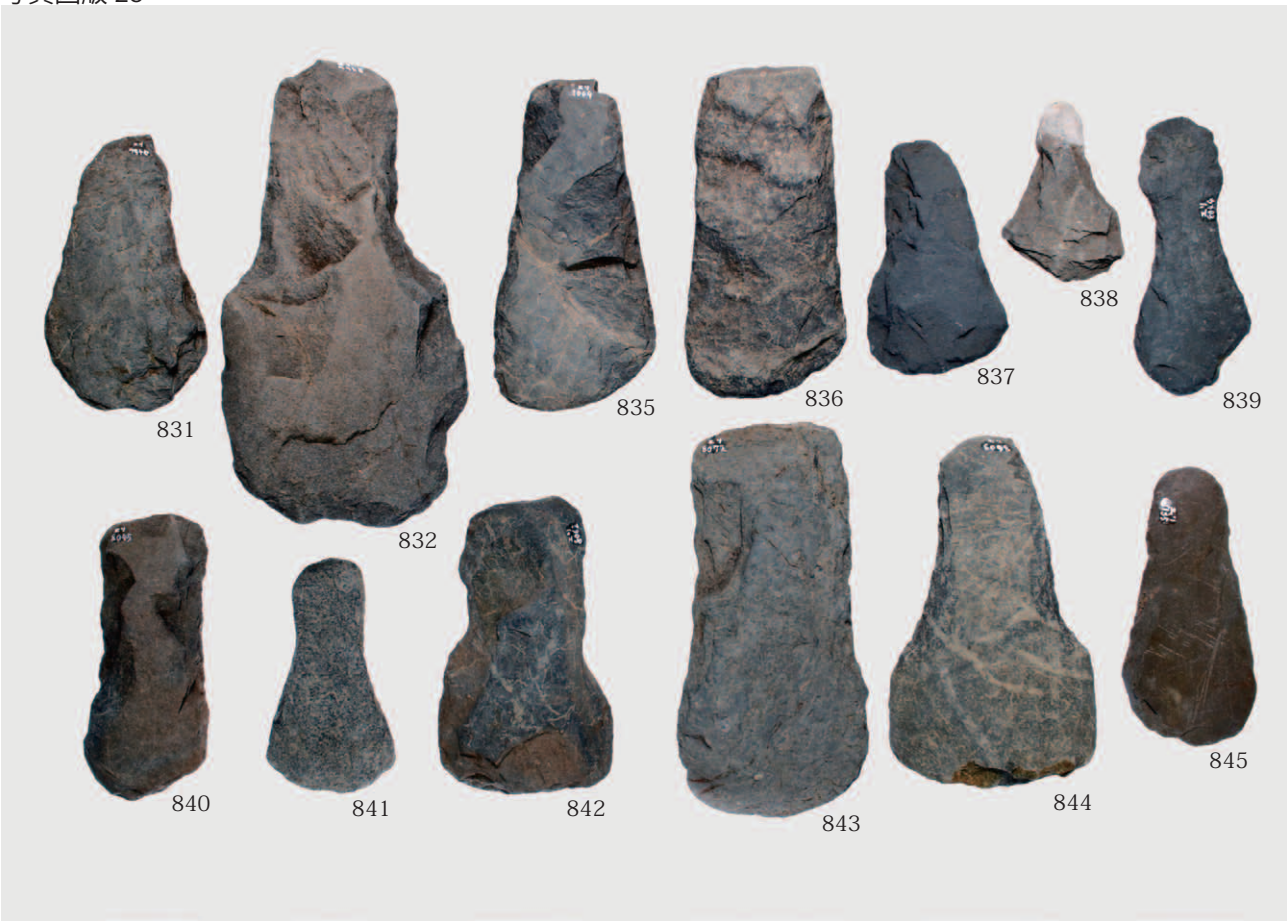

793
795
797
798
799
800
801
802
803
806
807
808
809
814
815

打製石斧③

816
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
829
830

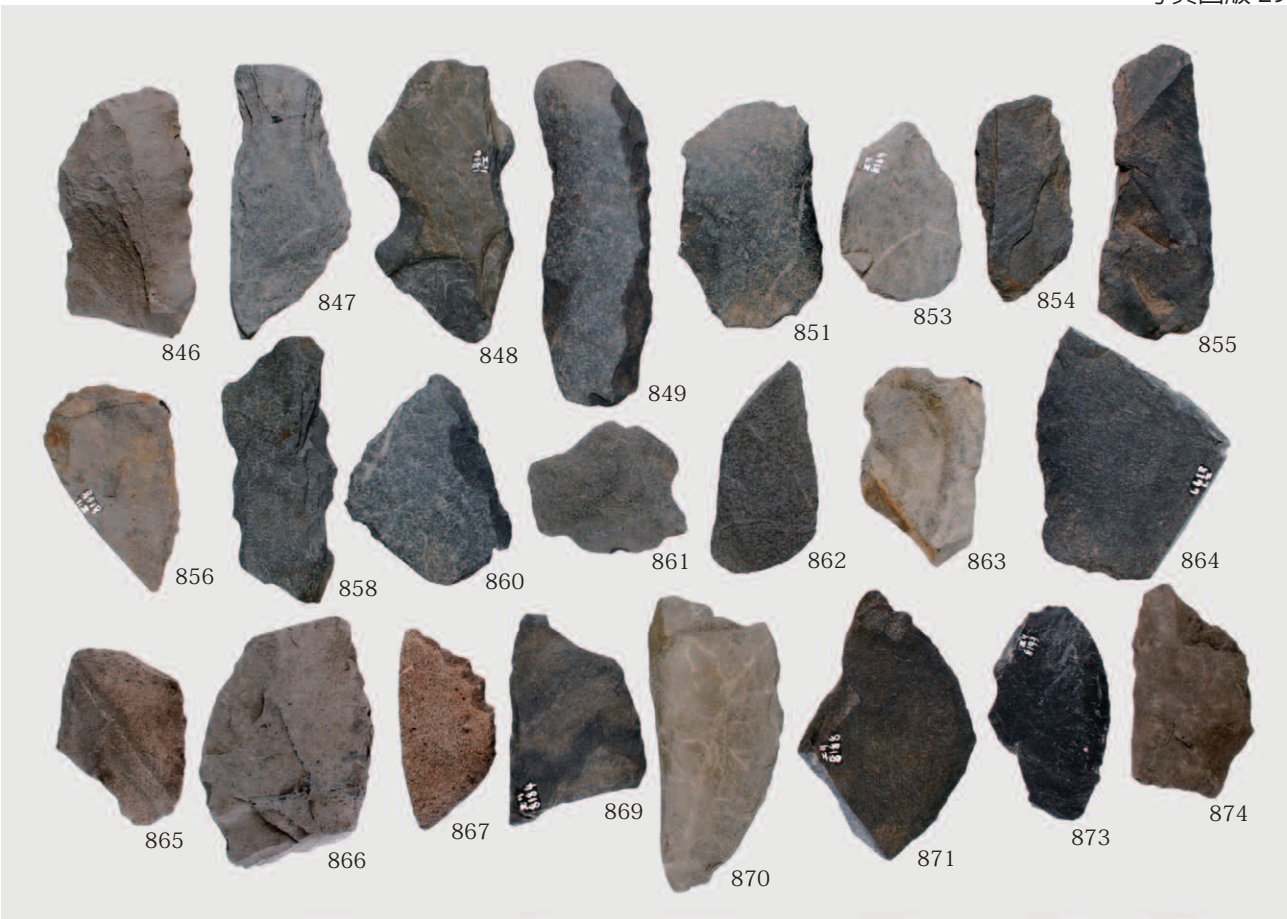
打製石斧④

写真図版 28

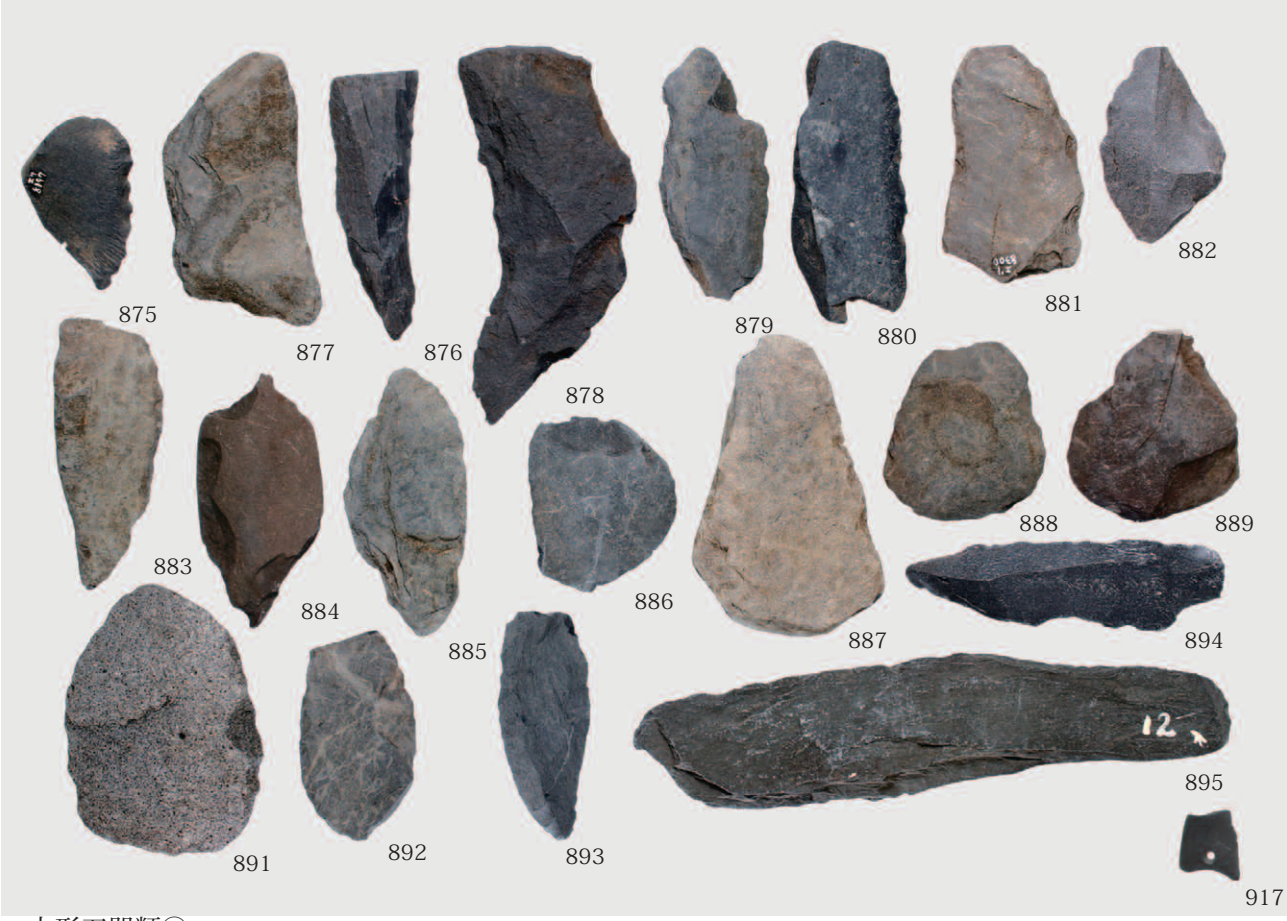


打製石斧⑤

石匙



大形刃器類①



大形刃器類②

918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937

磨製石斧①

938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957

磨製石斧②

磨石類①

磨石類②

磨石類③

磨石類④

1011
1013
1014
1020
1022
1025
1034
1031
1035
1041

砥石①

1008
1010
1012

砥石②

1039
1042
1043
1047
1054
1051
1055
1053
1057
1045
1048

砥石③

1016
1018
1037
1024
1015
1050

砥石④

石錘

石皿

1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1082
1083
1084
1086
1087
1088
1089
1090
1093
1094
1095
1096
1098
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1110

石棒①

1111
1113
1114
1117
1118
1119
1120
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135

石棒②

1080
1108
1109
1112
1121
1116

石棒③

1136
1140
1137
1138
1141
1142
1144
1146
1149
1147
1148
1139
1155
1154
1151
1152
1143
1145
1158
1150
1153
1156
1159
1161
1162
1157
1164
1163
1167
1165
1168
1166
1169
1160

石剣・刀①

1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
1186
1187
1188
1189
1190
1191
1192
1193
1194
1195
1196
1197
1198
1199
1200

石剣・刀②

1201
1202
1203
1204
1205
1206
1207
1208
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1220
1221
1222
1223

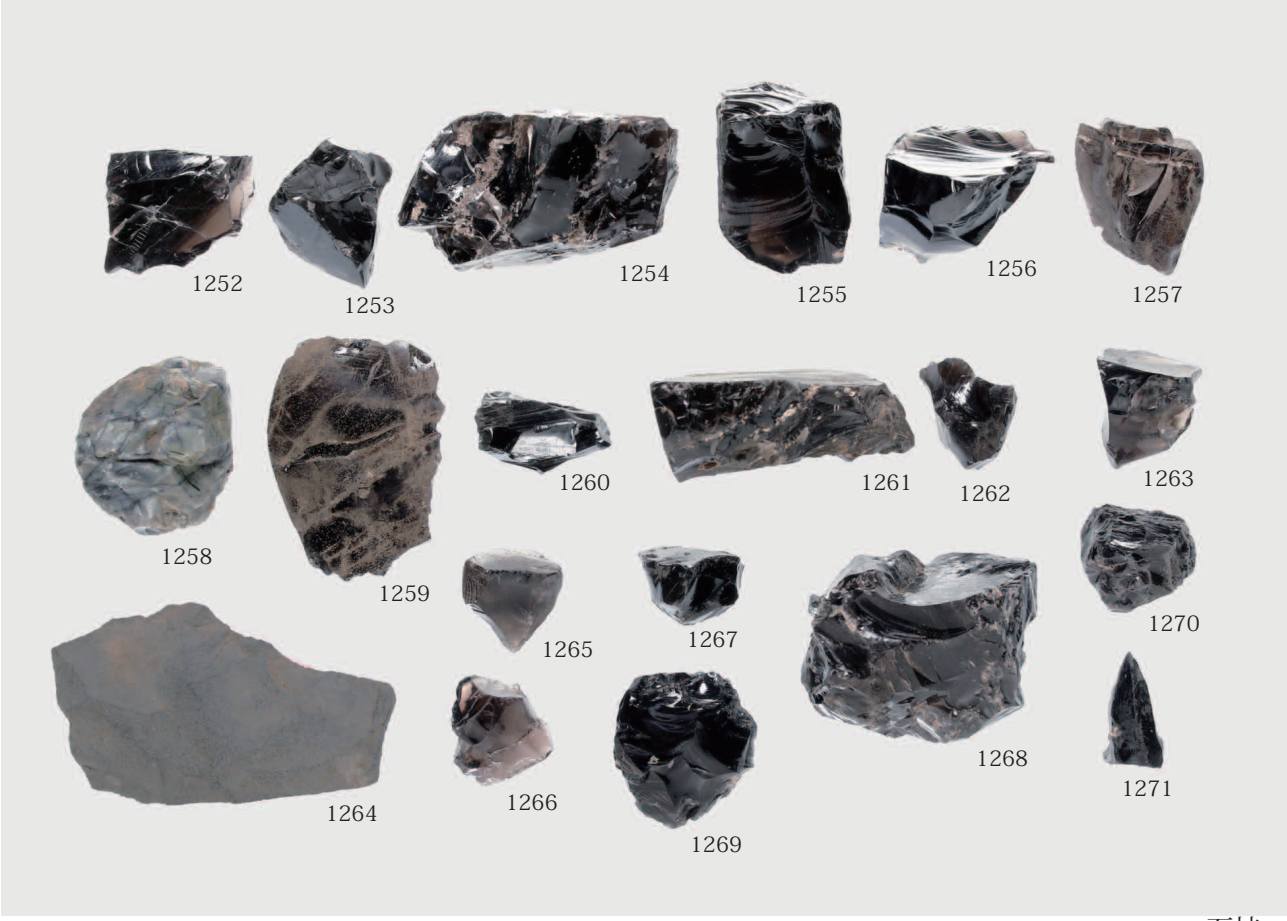
石剣・刀③

1248
1249
1250
1251

石冠

写真図版 38

垂飾類



石核

全４分冊の構成

第１分冊
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第１節　調査経過 …… 1
第２節　調査体制 …… 2
第３節　調査方法 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の概況 …… 7
第１節　位置・地形・地質 …… 7
第２節　土層 …… 10
第３節　地域史の中のエリ穴遺跡 …… 17
第Ⅲ章　これまでの調査・研究 …… 21
第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物出土状況 …… 57
第１節　概観 …… 57
第２節　礫群 …… 57
第３節　遺構 …… 58
写真図版
第２分冊
第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物出土状況（続き）…… 1
第３節　遺構（続き）…… 1
第Ⅴ章　平安時代以降の遺構と遺物 …… 189
第１節　A 区の遺構と遺物 …… 189
第２節　B 区の遺構 …… 189
第３節　C 区の遺構と遺物 …… 189
付編　自然遺物と理化学分析 …… 197
写真図版
第３分冊
第Ⅵ章　縄文時代の遺物 …… 1
第１節　土製品 …… 1
写真図版
第４分冊
第Ⅵ章　縄文時代の遺物（続き）…… 1
第２節　土器 …… 1
第３節　石器・石製品 …… 126
第Ⅶ章　集落の構造とその背景 …… 223
第１節　集落の構造と変遷 …… 223
第２節　遺物の廃棄とその背景 …… 230
第Ⅷ章　総括 …… 249
引用参考文献一覧 …… 254
写真図版

付録 CD 収録内容

1　土坑・ピット一覧表
2　遺構出土土器の時期別個体数一覧表
3　グリッド出土土器の時期別個体数一覧表
4　土製耳飾一覧表
5a 土偶一覧表
5b～j 土偶以外の土製品一覧表
6　異形土器一覧表
7a～f 小形打製石器一覧表
7g～j 大形打製石器一覧表
7k～l 磨製石器一覧表
7m～r 礫石器一覧表
7s～y 石製品・石器その他一覧表
8　金属製品一覧表

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし　えりあないせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市　エリ穴遺跡　発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№228
編著者名	三村竜一、百瀬長秀、原田健司
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620　松本市丸の内3番7号　TEL 0263-34-3000（代） （記録・資料保管：松本市立考古博物館　松本市中山3738番地1　TEL 0263-86-4710）
発行年月日	2017（平成29）年3月31日（平成28年度）：遺構編1・第1分冊
	2018（平成30）年3月31日（平成29年度）：遺構編2・第2分冊及び遺物編1・第3分冊
	2019（平成31）年3月31日（平成30年度）：遺物編2・第4分冊

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
エリ穴（あな）	ながのけんまつもとし長野県松本市 おおあざうちだ大字内田 301ばんち番地 ほか	20202	463	36度9分50秒	137度59分00秒	1995年4月21日 ～ 1995年10月31日	5,538㎡	内田地区団体営 土地改良総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
エリ穴	集落跡	縄文 ～ 近世	縄文時代 住居：31基 竪穴：2基 炉　：5基 埋甕：11基 配石：22基 溝　：2基 土坑：716基 ピット：206基 遺物集中地点 ：2カ所 廃棄場：3カ所 古代～近世 竪穴住居：1基 礎石建物：1基 竪穴：2基 溝　：6基 土坑：28基 ピット：99基	[縄文時代] 土器：中期中葉～晩期後葉の深鉢浅鉢、注口土器、など 異形土器：釣手土器40点、多孔底土器7点、異形台付土器9点、香炉形土器62点、人面付香炉形土器4点、小部屋付楕円浅鉢6点、など 石器：石鏃5520点、石錐、磨製石斧、打製石斧、磨石類、 土製品：土製耳飾2643点、土偶454点、土版13点、中空動物形土製品14点、手燭形土製品15点、有孔球状土製品、など 石製品：石棒、石剣、石刀など [弥生～古墳時代] 土器：遠賀川式壺など [古代～近世] 土器：土師器、灰釉陶器、内耳土器、近世陶器など 金属器：刀子、銭貨など	・縄文時代中期では、2号住居から中期中葉Ⅲ期の一括資料を得た。また、土坑115から土偶装飾付土器が出土した。 ・縄文時代後期では、土坑406から加曽利B1式の、17号・36号住居から上ノ段式の、一括資料を得た。 ・縄文時代晩期では、22号・26号住居、土坑200、廃棄場MとWから、晩期中葉の良好な資料を得た。また、土坑469からは遠賀川式壺と氷式甕が共伴した。 ・土製耳飾は後期末葉～晩期前葉に形成された廃棄場Eに集中する傾向があった。 ・晩期前葉～中葉の土器の編年試案、後期～晩期の無文粗製土器の編年試案を提示した。 ・土製耳飾、土偶については、系統区分と変遷試案に基づいた資料報告を行った。

要約	扇状地微高地上に立地する、縄文時代中期中葉～後葉の集落、及び、後期前葉～晩期後葉の集落遺跡である。特に、甲信地域では類例の少ない後期後葉～晩期中葉の中核集落で、その構造は居住域と祭祀域が分離せずに一体化するのが特徴である。同時期に営まれる住居は数基に留まり、屋外埋甕や配石も小規模で、大規模施設はない。遺物は廃屋にも廃棄されるが、居住域から分離した微高地縁辺の低地にかかる斜面に主要な廃棄場が形成され、時期ごとに廃棄地点が少しずつ移動する。土製耳飾、土偶、各種土製品、各種異形土器の質・量は尋常ではなく、他地域起源の器種も少なくない。広域的な祭祀の場であった可能性が考えられるが、祭祀遺物の充実に対して、遺構は貧弱で、そのアンバランスをどう理解するかが今後の課題であろう。

松本市文化財調査報告　No.228
長野県松本市

エリ穴遺跡

- 発掘調査報告書 -
（遺物編２・第４分冊）

平成 31 年 3 月 31 日
発行者　　松本市教育委員会
〒 390-8620
長野県松本市丸の内３番７号
印　刷　　精美堂印刷株式会社